語り継ぐ 10

阪神・淡路大震災が発生したとき、

私たちはまだ生まれていなかった。

家族や近所の人が、助け合って生き抜いたという。

そんな「語り」を聞き、それを「継ぐ」ことが、

震災を知らない世代にできることだと思う。

兵庫県立舞子高等学校

環境防災科３年

語り継ぐ

秋山　希恵

1. 震災の朝

(1)　阪神・淡路大震災　発生

地下の遠くの方でドーという低い音が聞こえてきた。当時、地下鉄も何も地下に通っていない垂水に住んでいた。何事かと思い起きようとした瞬間、激しい揺れに襲われる。5時台ということもあり暗く揺れで身動きがとりにくい中、隣に寝ていた妊娠中の妻の上に覆いかぶさる。揺れがおさまる間、テレビ、机、椅子といった家具が自分の頭を越えて部屋中を飛び回る。台所で食器が落ちて割れる音も聞こえる。当時住んでいた家が古かったのもあり、家が軋む音も聞こえた。冗談ではなく、富士山が噴火したのか、もしくは地球が滅亡したと思った。だから、神戸でこんな状況なら東京はもっと大変だと感じた。そのとき、自分たちが寝ている隣にあったタンスが背中に倒れてきた。背中に激しい痛みを感じた。しかし、自分の下には妊娠中の妻が居てどくわけにはいかなかった。何か大変なことが起きているのはわかるが、何が起きているのか全く分からない。今考えると揺れが大きすぎて冷静に考えることができなかったのかもしれない。だが、考えられない頭の中で夢であってほしいと願った。揺れがおさまるまで耐えて、耐えて耐え続けた。揺れは実際の時間よりも長く感じられた。

(2)　揺れが終わったあと

あの揺れが終わって妻の上からどいた。部屋の中は昨日とは全く違って荒れていた。大きい家具は普通ではありえないところに飛んでいて、妻が気に入っていた食器は床に割れてほとんど落ちていた。そんな部屋の様子を見て、さっきの揺れは夢じゃないことに気付かされた。はじめのころは、身近に起こったことだと理解できなかった。正しい時間は覚えていないが、部屋で何も考えず気が抜けて、荒れた部屋を見ながら床に座り込んだ。隣で黙っていた妻もきっと私と同じ気持ちだったのだろう。外から女性の叫び声が聞こえて我に返った。外に出ると、声が出なくなった。周りに立っていたビルや家が崩れていて、道路が割れえていた。また、その上に大きい電柱が割れて倒れていたのである。

そのとき私は思い出した。私が高校生だったときの話だ。地元では有名な進学校に通っていたのだが、大学には進学せず父親の影響もあって美容師になりたいと思っていた。学校の先生からはかなり反対された。しかし、その反対を押し切って神戸で修業することになったのである。高校の卒業式で、当時私の就職に反対していた先生が話しかけてきた。いろんな話をした。先生と別れて友達のところに行くとき、さっきの先生に呼び止められた。言い忘れたことがあったみたいだ。さっきまでとは違った真剣な顔で「神戸には必ず大きい地震が起こる。忘れるな！気をつけろ！」と言われたのである。何年か経った今、この荒れたまちを見て、これがあの地震だったのかと思った。

自分たちの家はもう住める状態ではなくなっていた。妻が「心配…」とつぶやく。妻には姉と妹がいる。姉の家族と妹の家族のことを言っているのだとすぐにわかった。姉は少し離れている高台に住んでいたので、先に近所に住んでいる妹の安否確認のため、妻と一緒に妹の家に行った。幸い、妹も妹の家族も無事であった。住んでいたマンションも無事であったので、落ち着くまでそこに住むことになった。荷物を取りに行くため、一度自分たちの家に戻ることにした。

いざ家を目の前にすると足が自然に止まる。古かったが初めて2人で決めて生活してきた家だ。あの時間でこんなに変わってしまった家を見ると、心が痛む。たぶん、自分が思っている以上にショックが大きかったのだろう。そんな私の気持ちを知ってか知らずか、妻はただただ寄り添ってくれた。新しい家族と一緒に。気持ちが落ち着いて、家に入ろうとした。妻に何かあってはいけないと思い、いるものを聞いて一人で中に入る。冷蔵庫を開けることができたので、入っていた飲み物や食べ物を袋に詰めた。前の日、たまたまお風呂のお湯をぬいていなかったので、何本かペットボトルに入れ水を確保した。一通りの荷物を持って家を出る。

外で待っていた妻から、同じマンションに住んでいた人は全員無事だったことを聞いた。マンションの管理人から聞いたらしい。お世話になった人の顔、仲良くしていた夫婦の顔、いたずらをよくしてきた子どもたちの顔の元気な顔が浮かんで安心した。妻と一緒にマンションに向かう途中も周りはゴタゴタしている。近所の人が走り回っている。倒壊した家屋のにおいか、どこのにおいかわからないが砂ぼ

こりのにおいがしていた。安心していた私の気持ちをこのにおいが焦らせた。少しも安心することなんてできないのだと思った。

2. 地震発生から数日後

(1) 阪神・淡路大震災

地震が発生してから数日が経った。知り合いの安否が心配になり、妻は妹に任せて会いに行くことにした。知り合いは長田に住んでいた。車で行こうとしたのだが、駐車場の周りにがれきがあり車を出すことができなかった。遠いが仕方ないと思って長田まで歩いて行くことにした。半分くらい歩いたところで疲れが出てきて、自然に目線が下がっていく。たまたま、倒壊した家屋の方に目線がいった。ほんの小さい隙間から人の顔のようなものが見えたような気がして、その家屋に近寄った。中を覗いてみると人がいた。60 代後半くらいの男性だと思われる。「大丈夫か？」「聞こえますか？」と声をかけるが返事がない。周りで作業をしている人が私に声をかけてきた。何も知らない私に言われた言葉は「この人はもう無理やで」の一言だった。そのとき、私は初めてこの男性が亡くなっていたことがわかった。たしかに考えてみれば､2 日間も何も水分を取ることも食べることもしなかったら体力が無くなるだろう。また、暗い中身動きが取れず、不安で精神的に苦しめられる。若くて体力があれば乗り切ることができたかもしれない。しかし、60 代後半の男性は違う。そう私が考えているうちに、作業していた人はあっさり私のもとから離れ、自分たちの作業に戻っていく。私は何分かそこにいたが、あの男性が動くことはなかった。私はあの男性のことを何も知らないが、あの家屋の前で「ごめんなさい」とつぶやいた。

家屋の前から去って少し歩いた。足が止まる。せっかく長い時間をかけて半分まで来たが、知り合いに会いに行くのをやめようと思った。それは、体力が限界だからとかではない。もし、さっきの男性のような状況に知り合いがなっていたらと考えたら、私は耐えることができないと思ったからである。今日の死は、私にとっておもりのように感じた。このことは、時間が経って私自身が落ち着くまでは誰にも話さないようにしようと思いながら家に帰った。家に着いて妻や妹に知り合いのことを当然聞かれる。私は「会えなかったけど、たぶん大丈夫だと思う」と曖昧な返事しかできなかった。今日の出来事を、妻にも妹にも時間が経つまでは話すつもりがなかったからである。それから、私は震災から 16 年が経つまで誰にもあの話はしなかった。何日か経って知り合いの安否が確認できたので、それだけが当時の私には救いだった。

(2) 阪神・淡路大震災　避難所

それからまた日が経ち、私たちと妹家族の生活も落ち着いた。近くの小学校が避難所になっていたらしい。そのことを知り、私は動くことができたので、友人と避難所の運営を手伝いに行くことにした。私たちが行くと避難所には、もうたくさんの人がいた。教室にも人がいた。体育館に行くと人が多すぎて、玄関で寝ている人もいる。こんな寒い季節に、冷たい床に毛布 1 枚でいる人の姿、1 個のおにぎりを 5 人の家族で分ける姿を目にした。その家族の親は、自分たちは食べずに子どもたちに分けている。子どもたちは、3 個に分けられたおにぎりを、親の顔色を気にしながら食べている。自分たちもおなかが空いているはずだ。しかし、自分たちよりも子どもたちを優先にしている。そのことに子どもたちも気付いているから、罪悪感を持っているのだろう。私は自分たちの家ではないが、温かい部屋でご飯も食べていることができている。気を使うこともあるが、笑っていることができた。しかし、辺りを見渡せば、陣地について争う人たち。子どもたちが走り回って、親に文句を言っている人。熱が出て倒れている人。独り言をずっと言っているお年寄り。この避難所には笑顔なんてひとつもなかった。それなのに、たまに辛いと思う自分が情けなく、罪悪感が湧いてきた。

避難所では、物資を配ったり、掃除をしたりという作業を主にした。掃除はあまり苦にならなかったが、物資を配ることが大変だった。特に食料はいつ届くかわからない。また、量がたりないことがよくある。避難所内で争いが起こらないように、アイディアを考えるのだが、私たちも疲れが出てきた時期で、考えがなかなか浮かばなかった。なるべく多くの人にいきわたるようにしたいから、おにぎりならば 3 人に 1 個ずつ配った。また、いつ届くかわからないので、腐らないものであれば、何日かに分けて配るようにした。その間、運営している私たちは何も食べていない。しかし、被災者からは「全部配らんのは、おまえらが隠れて食べとるからや!!!」とよく怒鳴られるようになった。私たちは、怒鳴り返すことはしなかった。被災者も限界であることを知っていたからだ。だが、私たちの 1 人が「俺らも被

災者やけど……」と小さい声でつぶやいた。そこで私は、避難所を運営している側が病んではいけないと思った。だから、体育館の裏で愚痴や自分たちが感じたことなど、何でも話をしてストレスを解消するようにしていた。それからも被災者から文句を言われるが、私たちはなんとか頑張ることができた。

日にちが経つと、避難所の運営も慣れてきた。また、物資が定期的に届くようになり、食料を頻繁に配れた。被災者から文句がなくなり、自分たちも落ち着くことができた。だから、私は周りを見るようになっていた。そこで、気付いたことがある。前から物資を配っても、取りに来ようとしない人がいた。気になって声を掛けてみたが、無視をされてしまう。そこで、この人が聴覚障害者であることがわかった。耳が聞こえないので、口で物資が届いたと言われてもわからなかったのだろう。私の母も聾唖者なので、その人と会話をした。1 人で不安だっただろうと思い、避難所を一緒に回り、被災者にこの人の紹介をした。それから、たくさんの人が気にかけてくれた。たまに、見かけると子どもたちに囲まれて、手話を教えていた。避難所に光がさしたような気持ちになった。

3. 身近な人から聞いた被災体験　私が感じたこと

私は、阪神・淡路大震災を体験していない。私たちが生まれる 1995 年に、阪神・淡路大震災が発生し、まちに大きな被害が出た。私が通っていた小学校では、1 月 17 日になると集会が行われて、そして下校時には集団下校が行われていた。また、震災の被災体験をテレビドラマやニュースでよく見かけた。私の家では、1 月 17 日の晩ごはんはおかゆを食べている。これは、父が決めたことで、私が生まれてから行っている。おかゆを食べるのは、阪神・淡路大震災で被災した当時、満足にごはんを食べることができなかった。被災したときのことを忘れず、今平凡に暮らせていることをありがたく思うためである。それを毎日することはできないから、1 月 17 日にしてきた。父から話を聞いて、私は今まで気付かなかったが父はこの 18 年間、震災を語り継いでいたことに気付いた。

環境防災科に入って、たくさんの災害を学んできた。その中には、阪神・淡路大震災もあった。人と防災未来センターに行って震災のことを学び、野島断層を見て被害の大きさも知った。その他にも、たくさんの語り部の話を聞いた。周りの生徒は、それを聴いて涙を流していた。しかし、私は涙を流すことはできなかった。私が涙を流すことができなかったのは、悲しくないからではない。震災を体験していない私が泣いてはいけないと思っていたからだ。だから、1 度も泣くことはなかった。また、泣いているクラスの子を見て、「被災者の方が私たちよりもきっと泣きたいのに…」と思ったことがあった。実際に東北ボランティアで現地に行って活動させてもらったとき、避難所にいた被災したおじさんに話を聞く機会があった。そのとき、話を聞いて泣いている子たちに、おじさんは「自分らは体験してないから、泣く必要なんてどこにもない!」と言っていた。その言葉を聞いて、より一層泣くことがいけないことだと思うようになっていた。

しかし、父の被災体験を聞き終えてから考え方が変わった。父の話を聞いているとき、その光景と父の姿が浮かんだ。そのとき、私は心が痛くなった。泣く、泣かないなんて関係ないのではないかと思った。泣く人は被災者の立場に近づいて悲しむことで、被災者と気持ちを共有している。泣かないなら話を冷静に聞いてそこから、これからの災害に対する対策を考えればいい。そして、最後にみんなで意見を出して、被災者が中心の対策を考えればいいと思えた。

また、それだけではなく他のヒントも得ることができた。もし、自分たちが被災したとする。高校生ができることであれば、避難所の運営を手伝うことだろう。父の話にもあったが避難所には障害者もいると思う。私の祖父母は聾唖者である。だから、少しくらいなら手話で会話ができる。また、小さい頃から自閉症や知的障害の子どもたちとふれあってきた。専門家ではないから細かいことはできないかもしれない。だか、障害をもった人々が過ごしやすい避難所づくりをしたい。そのためには、学校なら二部屋くらいは障害者専用にしたい。それは、地域の人の協力や理解が必要だ。地域の人にも障害を受け入れてほしい。受け入れてもらうには、私自身が何かで地域と関わり、防災と障害をそこから広げていきたいと思う。まずは、日頃の授業を聞き環境防災科の専門科目を勉強していきたいと思う。

親から子へ　家族の被災体験

秋山　秀星

Ⅰ.はじめに

1995 年以降に生まれた子供たちに阪神淡路大震災が起きた当時の記憶は無い。私も震災当時はまだ母親のお腹の中にいた。だから、自分の被災体験を語ることはできない。しかし、被災体験を持つ周囲の人たちから聞いた被災体験を語り継ぐことはできる。多くの人が悲しみと絶望を味わった悲惨な震災を忘れないためにも、震災を知らない次の世代に語り継ぐことが大切である。以下の文は実際に震災を体験した自分の父親から聞いた被災体験である。

(1)　阪神淡路大震災発生

1995 年 1 月 17 日に起きた阪神淡路大震災（兵庫県南部地震）で神戸市の長田区は甚大な被害を受けた。私の父親はその長田区に実家があり、震災が起きた時は、当時住んでいた大阪にいた。大阪にも揺れは届き、震源から距離があるとはいえ、恐怖を感じるほどの揺れであったという。実家には父親の母親（私の祖母）が暮らしていた。電話も通じないのでその時点では祖母の安否を確認することはできなかった。

(2)　震災直後の船の活躍

地震が起きて間もない頃は被害の影響で神戸に出入りしている公共交通機関は完全にマヒしており、瓦礫で道路が塞がれ自家用車で神戸に行くことも難しかったという。地震が起きてから 3 日後、大阪から神戸港へ行く船が出た。陸の交通網が完全に閉ざされている中で、水上の交通手段が大いに活躍したそうだ。神戸港も被害を受けてはいたが、臨時で船が停泊出来る場所を造り、そこで船を発着させた。そこでやっと父は神戸に行くことができた。船は 3 時間掛けて神戸に着いた。さらにそこからは、車にも乗れないので徒歩で 2 時間かけようやく長田にたどり着いた。

その際に臨時の船を運航した業者には感謝状が贈られたという。

(3)　被災地の惨状

長田に着いた父はそこで初めて被災地の惨状を目の当たりにした。

町は瓦礫の山だらけでどこにどんな建物があったのかほとんど分からない。国道の真上を通っている阪神高速も橋脚ごと倒れている。この阪神高速が倒れている写真は阪神淡路大震災を語る際によく使用されるので、見たことがある人も多いであろう。それを父は自分の目で実際に目の当たりにしたのである。

(4)　テレビでは伝わらない被災地の実情

瓦礫の山や至る場所で発生した火災などはテレビカメラを通して見ることができた。

しかし、それだけでは伝わらないことがあった。それは「匂い」である。2011 年に起きた東日本大震災で津波の被害を受けた地域はヘドロの異臭がした。現地で支援活動のしたことのある私は実際にその匂いを体感した。阪神淡路大震災では津波による大きな被害は無かったにも関わらず、ヘドロのような異臭がしたという。おそらく瓦礫の埃やガス漏れなどによる匂いであろう。

その時の異臭は今でも忘れられないほど強烈であったという。

(5)　安否確認

父が実家に着いたとき、祖母は近所の小学校に避難していたが、家の様子を見にちょうど戻ってきたところだった。そこで祖母の無事は確認できた。そして祖母は配給を貰いに行くためにまた小学校に戻った。父はその夜は実家に一泊だけ寝泊まりすることにした。

(6)　下町であるが故に

父の実家は長田の下町に位置している。そのため住宅が密集しており、建物同士が密着した状態で立っている家が多い。父の実家も同じように隣接する建物との隙間はほとんど無い。

父の実家は半壊したものの、全壊せずに建っていられたのはそのおかげである。実家は木造であったにも関わらず、両隣の建物が店であり、頑丈なコンクリート造りであったため、その建物に支えられたおかげで地震の揺れに耐えることができたという。このような環境ではなかった近くの家は完全に跡形もなく崩れてしまっていたという。

(7)　ご近所付き合いの大切さ

父が実家に寝泊まりしたその日、昔から知り合いであった近所の人が父を訪ねて、ビールやおかしを分けてくれたという。食べ物や飲み物がほとんど無いときに差し入れを頂けたのはとてもありがたかったし、何より大変な状況の中で顔見知りと会話をできたということはお互いに安心感を得られたであろう。このとき父は、普段からの近所付き合いが本当に大切だということを実感したという。

(8)　被災地の夜

その日の夜中、父が寝ようとしていると外で何やら「ガチャガチャ」と物音がしたという。

おそらく、地震で住人が避難して混乱しているところを狙って空き巣に入る火事場泥棒がいたのであろう。人々が生き延びようと必死にもがいている中でこのような悪事を働く心無い者もいたということである。

(9)　復旧の兆し

地震発生から 4 日後、各地域に本格的に配給が行われるようになり、大きな道路も少しずつ瓦礫が撤去され開通しだした。少しずつではあるが被災地が復旧に向けて動き出していた。

そして父は加東市にあるもう一つの実家に行くことにした。

加東市も被害の大きかった地域ではあったが、そこの家ではなんとか水道、ガスなども通っていた。そこで、やっとまともな風呂に入れたという。

その翌日に大阪に戻ることにした。しかし、交通の大動脈が密集している神戸の交通機関はまだ復旧していなかったので、一旦、京都の方まで迂回してから南へ下り、大阪へと戻ったという。

以上が私の父の阪神淡路大震災の被災体験である。

(10)　父の聞いた話

これは父の知り合いの人から聞いた、その人が阪神淡路大震災を被災した中で起こった出来事である。阪神淡路大震災の要因となった兵庫県南部地震が起きたのは午前 5 時 46 分、まだ多くの人が寝ている時間であった。彼もその時間には布団の中で寝ていた。地震が起きて、近くにあったテレビが枕元まで倒れてきた。それだけでも命の危険に晒されたが、さらに天井が崩れて落ちてきた。

だが枕元まで倒れてきたテレビに支えられ、崩れてきた天井に体が押しつぶされることは無かったという。皮肉にも、倒れてきた家具によって命を救われたのである。

兵庫県南部地震では倒れてきた家具に押しつぶされて亡くなった方が多くいるが、上記の他にもテーブルや暖房器具などによって奇跡的に生まれたわずかな空間のおかげで助かった人も少なからずいるという。

Ⅱ. 感想

震災の体験を聞いて、自分は日常の中で生活できていることの大切さを実感した。

でも、あの日の朝の神戸に日常がやってくることは無かった。多くの人が一瞬にして命、家族、大切なものを奪われた。大切な人を失って泣いた人がいた、現実を受け止めきれずに泣いた人がいた、残さ

れた家族を守るために泣くことすらできない人もいた。
　でも、みんな生きようと必死に頑張った。生き残った自分たちだけでも精一杯頑張ろうと。周りにはそれを応援する人もたくさんいた。言葉では表せないほどの努力をして悲しみを乗り越え、長い時間を掛けて今の神戸には日常が戻ってきている。
　朝起きて学校に行く準備をして親から弁当を受け取り「いってきます」と言って家を出発する。朝の通勤・通学ラッシュ時には電車・バスは混み合っていてイヤだなあ。なんて思いながら何の気無しに交通機関を利用している。窓から見える景色も毎日同じ。
　学校に着けば友達と「おはよう」と挨拶を交わし、その日の気分によって様々な話題の会話をする。
　授業を受けてしんどいなと冗談交じりの弱音を吐きながらも一生懸命に勉強する。
　放課後になれば部活動で仲間と一緒に一生懸命に練習する。
　家に帰って親に「おかえり」と言ってもらい、夕食を食べ、授業の復習をしたり宿題をしたり、風呂に入り、今日も疲れたなあなんて思いながら寝る。
　そしてまた翌朝には昨日と何ら変化の無い日常がやってくる。
　震災を体験していない自分たちにとってはそれがずっと続いてきた日常で、そんな日常がこれからもずっと続いていくだろうと当たり前のように思いながら生活している。
　震災の体験を聞いてその日常がどれだけ幸せだということを初めて考えた。
　普段は日常の大切さなんて考えたりもしないし、ましてやその大切さを実感することなんてもっと難しい。でも、震災では日常を奪われ絶望の淵に立たされた人がたくさんいた。それどころか命を失い生きることすら出来なくなった人もたくさんいた。そして震災から 18 年が経った今でも心の傷が癒えないままの人もいる。
　その人たちの気持ちを考えると、初めて自分たちが普通に生活していることの大切さを実感でき、日常に甘えて人生での限られた時間を無駄にしないために亡くなった方の分も一生懸命に生きていこうと思える。辛い思いをしないためにもまた同じ被害が起きないように普段から備えようとする意識も芽生えてくる。
　阪神淡路大震災を風化させないためにも震災での大きな被害や教訓を、自分たちのような震災の後に生まれてきた子たちにも伝えていかなければ、いつかまた同じような災害が起きたときに後悔することになる。
　東日本大震災が起きた 2011 年 3 月 11 日は、自分たちの中学の卒業式の日だった。家に帰ってテレビをつけるとどのチャンネルも緊急のニュースが放送されていて、東北で大きな地震があり大津波警報が発令されていることを知った。心配しながらテレビを見続けていると目を疑う光景がテレビを通して目に入った。大きな津波が海岸に迫り、勢いを弱めることなく集落に襲い掛かり家や車を飲み込んでいく。あの様な状況であったのだからメディアが情報を改変する余裕も無かったであろう。テレビに映っていたのは全て、その瞬間に日本で起きている現実だった。尊い命が次々と失われていく瞬間を人生で初めて画面を通してではあるが目撃しショックを受けた。「何も悪いことをしていない人たちがなぜあんな目に遭わないといけないのか」と思ったし、自分には何もできないという無力感も持った。でも環境防災科に入って、震災の後で自分たちにもできることがたくさんあるということが分かった。被災地で復旧支援活動をしたり避難所にいる人たちと交流したりした。自分たちの地元でも募金活動やメッセージを送ったりした。今でもその活動は続いている。
　阪神淡路大震災だけでなく東日本大震災についてもその教訓を語り継いでいかなければならない。
　災害は過去に起こった出来事でしかないという考え方ではなく、もっと規模の大きい災害がまたいつ起こるか分らないという考え方をしなくてはならない。
　このような機会を与えてもらった自分たちがこれからも語り継ぐことの大切さを噛みしめながらその活動を続けていこうと思う。

それぞれの震災

粟田　麻伽

１．祖父と曾祖母

（１）地震の日の前日

阪神淡路大震災が起きた１月１７日、祖父は淡路島の尾崎にある祖父の母の家(私にとっては曾祖母)にいた。前日は家族が集まって祖父の父(私にとっては曾祖父)の法事が行われていた。法事が終わり次の日は平日であったためみんなそれぞれの家に帰った。しかし、祖父だけはみんなが帰ったら淋しくなるのではないかと曾祖母に気を遣いその日は曾祖母の家に泊まった。地震はその次の日の早朝に起きた。

（２）地震当日　午前５時４６分

縦揺れだったため、父は初め地震だとは思わなかった。鉄人 28 号くらいの大きさの巨人が大きな金槌で家をたたいているのかと思った。大きな水屋は上下に激しく揺れ、たくさんの食器が大きな音をたてて割れた。少し時間が経ってから曾祖母が「地震や！！」と言った。その一言で祖父は地震だとわかり、とりあえず外に出ようと急いだ。揺れがまだ続いているなか、祖父は曾祖母の手を引いて必死に逃げた。部屋を仕切っている障子が開かず、とっさに手で障子を破った。ガラスが散らばっているところを素足で走り、物が落ちてくるところを何も頭に乗せず逃げた。それくらい二人は慌てていた。不幸中の幸いか、二人とも分厚い靴下を履いていたためガラスの破片は刺さらず、頭にも何も当たらなかった。

（３）揺れの後

外に出たら近所の人がみんな家の前に出てきていた。曾祖母の家は 2、3 分で海に着くくらい海から近いところにある。家の前には土手があり、津波の心配を近所の方としていた。そのとき神戸に住んでいる私の父（祖父にとっては息子）から電話があった。そのとき家族の無事と神戸も家が倒れていることを祖父は知った。神戸市灘区の家に先に戻っていた祖母からも電話があった。祖母も無事だった。淡路の家では、家具はあまり倒れず、電話も繋がった。田舎だったこともあり、避難物資が一切届かなかった。その晩祖父と曾祖母は何も食べず、近くの体育館で寝た。

（４）地震の日の翌日から

体育館から家に戻った。早く直さないと政府からお金が出ないのですぐに家の片づけを始めた。家は危ないので車の中で寝ていた。もちろん 80 歳にもなる曾祖母も一緒に車で寝ていた。しばらくしてから心配した私の父が自転車で神戸から淡路にやって来た。心配してやってきたのに祖父と曾祖母はのんびりお風呂を焚いており、父はそれを見て笑って怒ったという。フェリーが再開されるとともに祖父と曾祖母は私の家族が住んでいた神戸市垂水区の家に来た。その後、二人は私の家や親戚の家でしばらくの間寝泊りをした。何日かすると灘区の自宅で震災にあった祖母も私の家に避難してきた。明石から神戸港までフェリーが運航するようになると祖父母は、全壊した自宅が気になるので、すぐ近くの西灘小学校で寝泊りするつもりで灘区に帰った。しかし、避難所になっていた西灘小学校はすでに人が溢れていて、寝泊りすることができなかった。仕方なくまたフェリーに乗ってまた垂水区の私の家まで戻ってきた。

それでも自宅が気になるので夫婦二人で垂水区から灘区までフェリーに乗って何度も通った。

２．祖母

(１)地震の日の前日

祖母は法事の後、次の日に仕事があったため祖父と別れて一人で神戸市灘区の西灘にある家に帰った。家に着いてしばらくした 8 時頃、祖母はドンッと揺れを感じた。しかし、テレビをつけても何も放送さ

れていなかったため気のせいかなと思った。そして、祖母は午前 0 時頃に就寝した。

（2）地震当日　午前 5 時 46 分

1 階で寝ていた祖母は激しい地震の揺れとともに目が覚めた。西灘は地震の揺れが大きかったが家も潰れず、家具も倒れて来なかった。だが外に出ようとしても 4 メートル前にある向かいの家が倒れてきて玄関の扉が開かない。家もその影響で押されて後ろに傾いていた。祖母は外に出ることができず、“もうこのまま死んでもいい”と布団を被っていた。すると、近所の人が声をかけに来てくれた。その近所の人の力を借りて一階の裏窓の窓枠をドライバーで外して外に出た。

（3）揺れの後

それから祖母は近くの体育館に行った。まだ開いていなくてたくさんの人が避難するため並んでいた。なぜか傘を差している夫婦がいた。祖母はそれくらい慌てていたのかと改めて地震の脅威を感じた。祖母は並ばなかった。それよりも淡路にいる家族（祖父と曾祖母）が心配だった。近くのコンビニで電話をした。そこにもたくさんの人が並んでいた。コンビニで働いていた知り合いが小銭を貸してくれた。しばらくすると私の父の兄が心配してやってきた。そうしていると学校の体育館が開いた。途中で知り合いのパン屋さんが「お腹空いたやろ？持って行きー！」とパンを分けてくれた。学校に行ったものの人がいっぱいだったため一旦家に戻ることにした。荷物や金庫も心配だった。近所の人が「うちに来いや！」と言ってくれたがよそに迷惑をかけるわけにもいかないと何日か傾いた家に寝ていた。しばらくして近くの団地に住んでいる親戚の家に泊まらせてもらうようになった。

（4）地震からしばらくして

親戚の家で生活するのは気を遣ってしまう。また、淡路にいた祖父と曾祖母も私の家に避難してきていたこともあり、父が何時間もかけて車で祖母を迎えにいった。私の家に着き玄関で母と対面した祖母は、「怖かったよー。ほんまに怖かったよー。」と母と抱き合って泣いた。

電気が使えるだけで水道もガスも通っておらず不便だったが、家族みんなが揃って過ごせるのは安心だったし、何より心強かった。

水を極力使わなくていいように紙皿にラップを敷いて使い、トイレは風呂場にためた水を汲んで流すようにした。風呂は、神戸市西区の親戚の家で入らせてもらった。

３．二つの家

曾祖母の住んでいた淡路の家は大きな家だったが、全壊と判断され母屋は取り壊した。小さな離れだけは大丈夫だった。母屋は明治より前に建てられた家だったため地震に弱かったのも事実だろう。

曾祖母は 2 年間ほど自宅近くに建てられた仮設住宅で生活をしたが、仮設住宅がなくなるのを機に、残った離れに引っ付けて一間の家を建てて、94 歳で亡くなるまで、その家で、一人で暮らした。

祖父母の住んでいた西灘の家は向かいの家が倒れてきて押された影響で大きく傾き、排水管も潰された。家は半壊ではなく全壊。家を潰すことを余儀なくされた。更地になった土地の上に 6 畳一間ほどのコンテナボックスを置き、そこで生活をした。簡易トイレはあったが、風呂はないので銭湯にいった。半年ほどすると、神戸市北区の有野台の仮設住宅が当たったが、祖母の職場に遠いので平日はコンテナボックスで生活し、週末は仮設住宅で過ごし、二つの家を行き来した。私の 1 歳の誕生日もコンテナボックスで祝ってもらった。記憶にはないが、大きなお餅を背中にしょって祖父母と嬉しそうに笑っている写真がある。

～感想～

地震の日になると必ず両親が地震の日の話をしてくれる。1995 年 1 月 17 日、あの日私は、母のお腹の中にいた。揺れが起こった瞬間、当時 1 歳半だった兄の上に母が覆いかぶさり、その上に父が布団と一緒に被さったそうだ。その後も、妊娠 5 か月だったため母はもちろん、父も母に気を遣って一人で苦労したことも多かっただろう。父は震災後すぐに安否を気遣って一人で淡路の曾祖母の家に自転車で行

ったり、灘区にある祖父母の家にバイクを飛ばしていったりした。灘区の倒壊しかけた家の前で祖母と会って無事で良かったと泣いたそうだ。また、「怖かったよ。」と言って抱き合った。いつも笑顔の祖母が泣くなんて想像がつかない。そんな祖母がそれほど怖い思いをしたのかと改めて震災の怖ろしさを感じた。

また、私と同じようにお腹の中に赤ちゃんがいた女性が震災で亡くなった記事を新聞で読んだとき、お腹の赤ちゃんは生きていたら私と同じ年なのに・・・とショックだった。そして、阪神淡路大震災は本当の意味で私たちと関係があると思った。私たちの学年はよく阪神淡路大震災を経験していない学年と言われる。でも、確かにお腹の中には命があった。小さくても命は命である。この赤ちゃんのように亡くなった子もいた。そのことを私たちはもっと伝えていかなければならない。同じ年に命を授かった者として私は使命を感じる。その亡くなった子のためにも私は伝えたい。

祖父母の家も地域の繋がりも奪った震災だったが、命が無事で本当によかったと思う。祖父の向かいの家のご夫婦は家が倒れて潰されたため亡くなった。もし、道路がなかったら、もしくはもっと 4 メートルの道幅が狭かったら…と考えるとヒヤッとする。そういうことがこれからないようにもっと防災について学び、対策していかないといけない。たくさんの人に防災の大切さについて知ってもらわないといけない。私は人々が阪神淡路大震災で学んだこと、思ったことを伝え、もう二度とあの人々の苦しみを他の人に味あわせないためにできることは全力でしたい。

この「語り継ぐ」の授業で阪神淡路大震災のときの話を聞きたいと両親に言うと「そしたらおじいちゃんとおばあちゃんに聞いたらいいやん。」と言ってくれた。環境防災科に入りたいと祖父に言ったときも震災のときの話をしてくれた。だいたいは話の内容はわかっていたつもりだった。しかし、実際に詳しくあの日の話を聞くとまだまだ私には知らないことが多かった。そして、防災について学び、東北で実際の被災地を見た私は、祖父から震災の話を聞いて更に考えさせられた。

祖父が話をしてくれているとき、祖父と祖母は震災のときの状況を写真を使って説明してくれた。震災前の家の写真を眺めていた祖父はどこかしら、淋しそうな顔をしているような気がした。そりゃそうだ。祖父は二つの家を阪神淡路大震災でなくした。一つは小さい頃から住んでいた淡路の実家、もう一つは 10 年前、やっとの思いで手にしたマイホーム。その淋しそうな顔をしている祖父を見て私は胸が苦しくなった。そのとき私は思い出した。私が小学生高学年の頃、祖父が泣きながら震災の話をしていたのを。でもそのときの私はまだ少し幼くてどういう感情で祖父が泣いているのかわからなかった。

祖父は神戸の家がなくなってから孫の私の家や祖父の妹の家に泊まらせもらっていた。その後は仮設住宅に住んだ。山の中に建てられた仮設住宅はとても不便だったそうだ。仮設住宅を出ないといけなくなった後は、以前の家の近くにあるマンションを借りた。でもそのマンションは最上階で足の悪い祖父はそれもまた苦痛だっただろう。それでも祖父がそのマンションを選んだのは前の家に愛着があり、地域の人との繋がりだけは失いたくなかったからだろう。しかし、家賃が高く足の状態も悪化したため、もっと快適な家を探し続けていた。一昨年に祖父は私の家の近くの新しくできた賃貸マンションに引っ越してきた。あの地震が神戸で起こらなかったら祖父と祖母はこんなに苦しんでいなかっただろう。祖父母のように震災によって今もなお多くの人が苦しんでいることを知っておかなければならないと思う。神戸の街はあの震災を忘れさせるほどの復興をすることができた。でもあの震災は忘れてはいけないし伝え続ける必要が大きくある。心のケアには終わりがないと思う。

私が環境防災科に入ろうと思った理由は祖父母を苦しませたあの阪神淡路大震災のことを素直に知りたいと思ったからである。そして、祖父のように震災で苦しんだ人がいることを多くの人に知ってもらいたかった。だから、環境防災科に入り、防災について学んで、ボランティア活動を通して人々に防災の大切さを伝え、これから起こりうる東海・東南海・南海地震や大きな災害のために少しでも被害を少なくさせたいという思いがある。

私が環境防災科に入る直前の 3 月 11 日、東日本大震災が起きた。私は高校 1 年の 5 月と 2 年の 8 月にそれぞれ約 1 週間ずつ、宮城県や岩手県でのボランティア活動に参加させていただいた。初めて見た被災地には言葉が出なかった。普通ならあるはずがないような住宅街に大きな漁船があり、たくさんの家があったところは全て更地になり、遠くのほうまで見わたせるくらいだった。その情景を見て、私は祖父から聞いた阪神淡路大震災が思い出された。想像することでしかなかった被災地が目の前にあった。ヘドロ掻きをしていると、子どものおもちゃや家族写真などが出てきた。どれも思い出を感じさせるものだ。東日本大震災もまた、阪神淡路大震災と同じように思い出が一瞬にして奪われたのだなとそのとき感じた。

岩手県気仙沼市の神社の神主さんに 3 月 11 日の話を聞かせていただいたことがあった。神主さんは津波に流された。だが、神主さんは神主さんの祖母にずっと聞かされていた話を思い出して助かった。

その話とは神主さんの祖母が明治三陸地震の津波で同じように津波に流されたが、近くにあった流木につかまり命が助かったという話である。神主さんはずっとこの話を聞かされていたため、忘れることなく、神主さんも流れてあった畳につかまりそして助かった。神主さんの祖母から渡された命のたすきが大きな力を発揮した瞬間であった。そんな語り継ぐことの大切さがわかる話をしてくださった神主さんであったが、実は津波で奥さんを亡くされた。そんななか貴重な話を神主さんは私たちに話してくれた。それは神主さんが語り継ぐことの大切さを、身をもって知ったからこそなのかと思った。本当に神主さんには感謝している。そして、今回、『語り継ぐ』を書くにあたって、阪神淡路大震災の震災体験を話してくれた祖父と祖母、父と母にももちろん感謝をしている。私はこの『語り継ぐ』ことが大切な命を守る防災への第一歩だと思う。この命のたすきをこれからも広くたくさんの人に渡していきたい。

震災～語り継ぐ～

井上　裕香

（1）　１月１７日午前５時４６分

私の祖母は地震発生時、青木の高速道路の上を走るバスの中にいた。揺れがおさまった後、外は真っ暗で何も見えなかったためバスは一時停止した。神戸の街はどんな状況なのかを知るために、バスの中にあるテレビをつけたが、「地震が起こった模様です。」としか報道されていなかった。ニュースで神戸の街の状況が映ることがなく、情報が入って来るのが遅かった。当時、携帯を持っていなかった祖母は、家族の安否確認が出来ず不安でいっぱいだった。

（2）　街の様子

バスは外が明るくなってから、バックで登り口から高速道路を出た。明るくなるなった街のあちこちから煙が上がっていた。三宮にあるたくさんの建物のほとんどが崩壊し、地震が起きる前の姿のまま残っているところはほとんどなかった。長田まで来たときには長田の街は火の手が上がっていたが、消火活動が困難だったため火を消すことが出来ていなかった。バスが長田の街をすり抜けるだけで、バスの窓が熱く感じられた。地震発生から 3 日間、須磨の山を越えて長田の街から、黒いすすが垂水の方まで来ていた。

1 月 17 日に地震が発生してから、大きな余震が何度も起きた。

（3）　垂水の街

須磨でバスを降りた祖母は、電車が動かないため歩いて垂水にある自宅に帰ろうとしていた。帰宅する途中で垂水に住んでいる友人に出会った。祖母が「垂水の方はどんな状況ですか？」とたずねると「垂水は被害が少なかったから、大丈夫ですよ。」と返事が返って来た。この時にやっと祖母は、家族の安否を確認できた。その返事を聞いて祖母は、いま必要なのは食べ物や飲み物だと思い、須磨からの帰り道に開店しているお店に入って、たくさんの買い物をして帰った。

（4）　家の被害状況

祖母の家は玄関にある下駄箱が倒れていた。その他には、瓦は落ちていなかったが、瓦を支える土台が壊れて屋根の上で瓦がぐちゃぐちゃになっていた。それが原因で、雨漏りがひどかった。屋根を直そうにも、すぐに修理に来てくれる業者がいなかったためブルシートを屋根に被せて雨漏りを防いでいた。そして何日か経って、私の父の会社が屋根を直しに来てくれた。

（5）　生活

震災直後はガスや水道が使えなかった。祖母はやかんや鍋を持って星陵高校へ水をもらいに行っていた。それでも水が足らなかったため、2 日に 1 回、祖父の姫路の会社から衣装ケースにつめた水をもらって生活していた。銭湯に行ってお風呂に入ろうにもシャワーが出ず、足首程度しかお湯がたまらないところばかりだった。そんな祖母の家族は、祖父がコーチを務めていた野球のクラブチームの監督さんにいろんな銭湯に連れていってもらっていた。

（6）　阪神・淡路大震災を教訓に

震災当時、祖母は携帯を持っていなかった。電話も繋がらず、家族の安否確認をすることが出来なかった。家族の安否が知りたくても、出来ないと心配しなって、いてもたってもいられなくなる。そうならないためにも、地震などの災害が起こる前に家族全員が集まって、災害時にはどこに避難するのか、連絡の取り方はどうするのかを話し合う必要がある。その他にも、防災訓練や防災に関わる行事に積極的に参加して、自分が得た知識を家族や友達に伝えて、次に起こる災害に備えるべきである。

地震などの災害はいつ起こるか分からない。忘れた頃にはまた、阪神・淡路大震災のような大きな揺れの地震や、他の災害が起きてしまう。だから、自分たちが経験した災害も、他の地域で起こった災害も忘れてはいけない。災害時に落ち着いて行動することや、自分の命や少しでも多くの人の命を救うためにも、まず自分が防災に興味を持って関わっていくことが大切だ。

（7）　祖母の思い

① 阪神・淡路大震災

阪神・淡路大震災ではたくさんの人たちに助けられて生活をしていた。近所の人たちや家族に「大丈夫だった？」と声をかけてもらうだけで、心がほっとした。ガスも水道も使えない生活を送っているだけでも苦労したが、地震の揺れや火事で家をなくした人たちはもっと苦労していたはずだ。そう考えると祖父の会社の方や野球のクラブチームの監督さんなど、自分たちの生活を助けてくれる人たちが周りにいること、とても幸せなことだと思った。そして、人と人とが支え合い協力して生きていくことの大切さを改めて感じた。人は一人では生きていけない。人は自分の周りにいる人たちと協力するからこそ生きていける。そのことを忘れてはいけない。

阪神・淡路大震災で失ったものはたくさんあったが、得たものもたくさんあった。失ったものが得たものにとって代わることは絶対にありえない。しかし、失ったものばかりにとらわれすぎてはいけない。失ったもののことを忘れないで、新しく得たものに感謝し、次に起きる災害から大切なものを守っていくことが大切だ。

今回のように震災当時のことを孫に話したように、自分の周りの人たちとあの頃のことを思い出して話す機会を作っていき、阪神・淡路大震災のことを忘れないようにしていこうと思う。

② 東日本大震災

阪神・淡路大震災が起きてから、神戸の街の復旧・復興は早かった。しかし、東北では神戸のように復旧・復興していくことは難しい。地震だけでなく津波で自分たちの大切な物や大切な人たちを失ったあの時の悲しみは言葉で表現することは出来ないだろう。しかし、悲しみや苦しみを自分一人で抱え込んではいけない。あなたの心の声を一生懸命聴いてくれる人、あなたの心の声を聴いて共に涙を流してくれる人、あなたの傍にはたくさんの人たちがいる。その人たちがそっとあなたの傍に寄り添ってくれる。そんな人たちに少しずつ気持ちを打ち明けていけば、少しずつ楽になれる。震災が起きる前の東北を、自分たちのペースで少しずつ取り戻していってほしい。疲れた時には無理をせず、一度休んで元気になった時には、明るい未来に向かって歩き出してほしい。毎日を大切に過ごしてほしい。今ではニュースで東北の様子が映されることが少なくなったが、東日本大震災での出来事を忘れない。これからも小さなことしかできないが、東北の復旧・復興に携わっていきたいと思う。

～私に出来ること～

私は震災当時、まだ母のお腹の中だった。震度 7 の揺れのおそろしさや、大切な人を失う悲しみを味わったことがない。今まで生きてきた中で一番強い揺れを経験したのは震度 4 の揺れだ。震度 4 の揺れでも「怖い」と感じた。震度 4 の揺れを経験してから、「もしあの時よりももっと大きな揺れがきたら・・・。」、「もし家族や友達を失ってしまったら・・・。」、「もし自分が死んでしまったら・・・。」と、考えるようになった。

私はこの震度 4 の揺れを経験してから、地震が起きて避難する時のために非常持ち出し袋を用意した。防災訓練などの活動で地域の方々に、非常持ち出し袋はとても必要な物だと伝えていた側だったにも関わらず、震度 4 の揺れを経験してから準備するのは行動が遅いと思った。防災のことを伝えるのなら、自分が大切だと思うことや必要なことを、まず自分が取り組まなければならないと感じた。

この震度 4 の揺れが原因で阪神・淡路大震災を経験した人の中で、当時のことを思い出して怖くなった人もいるだろう。いつ地震が起きるのか分からず、怖くなって眠れない夜を過ごしている人もいるだろう。そんな人たちに周りの人たちが寄り添うことが大切だと思う。周りの人たちと協力して信頼関係を築き、一緒に生活することで、次に災害が起きた時に協力出来るようになるだろう。

阪神・淡路大震災が起きて、避難所で支援物資を配布していた時にある騒動が起きた。支援物資を

もらうために列をつくっていると、数人の大人が食料欲しさに列を乱して、子供や高齢者を押しのけたのだった。避難所で生活している人たちが協力しているのに、数人の大人が協力しないということがあっていいのだろうか？自分勝手な行動一つで、周りにいる誰かがケガをするかもしれない。普段の生活で人と協力して生活していれば、こんなことも起きないだろう。震災を経験してから人と人とが協力して生きていくことが、大切だと気付くことは遅すぎる。

私をふくめ平成７年以降に生まれた子供たちや阪神・淡路大震災を経験したことのない人たちに、これから起きると言われている地震から身を守るために、私が今までに学んできたことや今回の祖母の話をたくさんの人達に伝えたい。私自身が震災を経験していなくても、学んだことや聞いたことを活かすことは出来る。地域で防災訓練を行ったり、地域の学校の先生や生徒と交流をはかったりと、伝える場はたくさんある。ボランティアに参加できない人でも、その日に聞いた話を家族の誰かに伝えるだけで防災は広がる。自分たちが伝えることによって、聞き手が伝える側になればもっと防災が広がるだろう。しかし、自分が聞いたことを周りの人たちに伝えただけで満足してはならない。聞いたことを伝えることも大切だが実際に行動に移すことも大切だ。そして自分が聞いたこと伝えたことは決して忘れてはいけない。

私たち環境防災科では、自分たちの学んだことを活かす場の一つである防災訓練に参加させてもらっている。防災訓練ではたくさんの人たちに参加してもらう必要がある。なぜなら一つの場でたくさんの人たちに伝わり、地域の人たちがたくさんの人たちと、コミュニケーションをとることが出来るからだ。地域で行う行事にたくさんの人たちに参加してもらえれば、災害時に、お互いに声をかけやすくなり、協力して生活することが出来ると思う。防災訓練をするに当たって、大人には伝わるが子供には伝わりにくいことがたくさんある。また、訓練の内容が薄いものだと子供たちは飽きてしまう。子供たちに楽しく分かりやすい防災訓練をするためには、子供たちの興味を引く内容を考えなければならない。自分や周りの人たちの意見を出し合うことによって知識が身に付き、今までに持っていなかった視点でものごとを考えることが出来る。その他にも高齢者の方が経験したことを子供たちに伝えることによって、子供たちの知識も増え、高齢者の方は当時のことを思い出して次に備えようと思えるだろう。そして、私たち自身がその日の防災訓練で、自分たちの良かった点を見つけ、悪かった点を見つめなおすことが出来る。これらのことから、人はいろんな人たちと一緒に成長し続けていくのだと改めて感じた。

私たち環境防災科は、東日本大震災が起きてから２ヶ月が経って、実際に被災地へ行ってボランティアをさせていただくことが出来た。被災地の方のお宅に訪問して、掃除や片づけを１週間取り組んだ。初めは戸惑うことがたくさんあったが、作業していくうちに自分で考えて行動することが出来るようになった。私たち高校生が出来ることはほんの小さなことしか出来ず、環境防災科のメンバーの中に「被災地の方々の役に立てなかった。」と、感じる人もいた。しかし、どんなに小さなことでも継続すれば、復旧・復興の手助けをすることが出来る。何度も被災地へ行ってボランティアが出来なくても、自分たちの地域で募金活動などに取り組んでいくことで、少しでも早く復旧・復興していけるのではないだろうか。清掃活動や募金活動などのボランティアだけでなく、交流して知り合った被災地の方々と連絡をとり続けることも大切である。被災者の方々にいま自分が取り組んでいる活動のことや、その日あった楽しい話をすることによって、自分と被災地の方々との間に信頼関係を築くことが出来る。

私たちは被災地が１日も早く復旧・復興出来るように、小さなことでも継続し協力し合って生きていくことが大切だ。そして、東北へ行って感じたことや自分たちが取り組んだ活動を、地域の人たちに伝えることが私たち環境防災科の役目である。

阪神・淡路大震災では、たくさんの人たちが「関西では地震は起きない。」と思っていた。そして、揺れが始まる前の「ゴーッ。」という音が鳴った時に「飛行機が落ちた。」、「トラックが突っ込んできた。」と思っていた。そして、揺れている最中に地震だと気付いた。このことを知って、災害は忘れたころにやってくると改めて感じた。

誰もが災害はいつ起こるか分からないということを、自覚してもらうのに私が出来ることは、学んだことを活かし、しっかりと伝えることだ。私が伝えたことによって、災害について関心がなかった人たちに関心をもってもらいたい。大きな災害を経験していない人たちに、災害のおそろしさを知ってもらいたい。災害が起きた時、少しでも多くの命が助かってほしい。この気持ちを忘れず、これからの防災をたくさんの人たちに伝えて、防災を広げていきたい。そして、たくさんの人たちに防災やこれから起きると言われている地震や、その他の災害について興味を持ってもらうと同時に、「伝える」ということの大切さを知ってもらいたい。

「生まれる前の大震災」

井上　陸

・―はじめに―・

1995 年 1 月 17 日（火）午前 5 時 46 分阪神淡路大震災発生。
そのとき私は生まれてすらいなかった。つまり震災を経験していない。震災について知らない自分たちは、身近な人の被災体験を聞いたり、実際に数字として残ったデータを調べたり、当時の映像を見たりなど、誰かの記憶や記録を通してでしか震災を知ることはできない。しかし震災の記憶を風化させてはいけない。自分たちが被災された方々の思いを後世に伝えていかなければいけない。やはり私たちにできるのは、身近な人たちから聞いた当時の様子、またその時どんな思いであったかを多くの人から聞き、語り継いでいくことである。私は自分の母親から聞いたことについて記そうと思う。

・―震災の朝―・

地震が起こる数秒前、ゴゴゴゴゴ・・・と何かが近づいてくる音がして目が覚めた。
次の瞬間、突然の地震が来た。揺れている間はすぐには状況を理解することができず、とにかく息子（当時一歳の私の兄）を守らないといけないと思い、激しい揺れの中、息子に覆いかぶさった。家具は倒れて食器も割れていた。母の叫び声を聞き、父もその上から覆いかぶさった。地震が終わるまで 3 人は団子のようにくるまっていた。建物がグルグル回っている感じがして団地がぱたんと倒れてしまうと思った。揺れている時間はとても長く感じられたという。

・―地震発生後―・

近所はとても静かだった。大変なことが起きたのにこの静けさはなんなのだろう。きっとみんな何をどうしていいかわからないので、ぐちゃぐちゃになった家の中で呆然としていたのだろう、と母は思った。地震直後はまだ電話が通じていたため、両方の親の安否確認をすることができた。
しかし、すぐに電話も通じなくなった。当時は携帯電話もあまり普及していなかったため、なかなか情報が入らなくてとても不安だったという。
玄関を開けて外の様子を伺ってみると、長田地区の火事の煙で空が真っ黒になっていた。車にも灰が積もっていた。ガス臭かったため子供を抱いて車に避難した。カーラジオをつけても今みたいに速報もほとんど出ないため、ラジオからは DJ が呑気におしゃべりしているだけだった。情報が欲しくてもラジオは何の役にも立たなかった。父が祖父の家に原付で行こうとしたが、途中で道が割れていて通ることができなかったため、止むを得ずひき返した。地震後は街中大渋滞になった。自家用車や自衛隊の車であふれていた。緊急避難場所に指定されていた小学校に行っても、門は閉まって中には入れない状況だった。
地震後は常に緊張状態で食欲やお風呂に入りたいというような欲は全くなかった。余震も続いた。余震が何回も起きたため、寝ている暇などほとんどなく、寝不足の状態が続いた。母の住む地域は被害が少なく、夕方には電気が復旧したためテレビを見た。そこで初めて長田の火災や高速道路が倒れたことについて知ったそうだ。
空が明るくなって部屋に散らかったガラスなどを掃除してから、父の実家のある北区に避難した。北区の六甲山の裏に住む祖父の家は被害が少なく、ライフラインも通っていたので避難させてもらった。

・―地震後の生活―・

10 日程で両親は自宅に戻った。地震から数日後、日本全国から自衛隊が救援に入ってくださった。比較的被害の少なかった母の住む地域にも沖縄のナンバープレートを付けた自衛隊の給水車が来てくれた。近所にいつも自衛隊の姿を見かけた。自衛隊が守ってくれている安心感、未曾有の災害がいつ起こるかわからない日本には自衛隊の存在は必要だと感じた。
区役所からガスコンロをいただいて食事を作った。久しぶりに温かい食事を食べることが出来た。食事のほとんどはおかゆだった。当時、大阪に職場があった父は JR やバスを乗り継ぎながら 3 時間かけ

て出勤した。職場に遅刻していくと職場の人か「お前なに遅刻しとうねん！」と言われたそうだ。大阪の人にはわかってもらえなかった。神戸の現状を分かってもらえない現実。それからどれくらい経って全国にニュースが届いたかはわからないが、何もかもが遅かった。だれもが経験したことがなかったことで仕方がなかったが、全国にニュースが届いても、実際に地震を経験していない人に震災を理解してもらえないのがもどかしかった。いたるところに瓦礫の山があり、日に日に大きくはなるが、全くなくなる気配はなく、普通の生活がいつになったら戻るのかという不安が積もっていった。

救援物資も避難所に行かなければ届かない。唯一、親の友人から実家に届いた救援物資をおすそ分けしてもらうくらいだった。たまたま家は半壊で生活するには不自由がなかったため避難所にはいかなかったが、小さな子供がいると避難所に行くことも躊躇してしまう。母は生活できる場所があった自分達はまだ良かった方だと言っていた。ガソリンスタンドやお風呂屋は常に行列ができていた。お店には品物もあまりなく、地域の公園で炊き出しがあったので分けてもらった。大阪の人が 12 時間くらいかけて救援物資を届けてくれたり、四国の下着メーカーからたくさんの下着をいただいたりした。しかし下着をいただいたのはいいが、明らかに必要のないものやお店にあった余りもののように思われるものも多く、少し嫌な気持ちになった。スーパーは、品物がないので値上がりをして、牛乳は 500 円くらいしていた小売店もあって「なんであんな地震があってみんな明日どうなるかわからないのにそんな人たちからお金を取るの？」と、少し腹が立ったという。

また火葬場に行ったとき、遺体の焼却があまりにも事務的だった。亡くなられた方の遺族に対する配慮が一切なかったように見えた。ただひたすらモクモクと上がる煙が怖かった――。

・ ―母から震災を経験していない人へ―・

学校ではよく地震が来たら机の下に隠れなさいと教えられる。しかし何の前触れもなく阪神淡路大震災のような地震が来たらどうだろうか。地震が来てすぐに机の下に隠れることが出来るだろうか。答えは「否」だ。私は地震が起きたとき、何が起きたのかさえすぐには理解できず、ただしがみついてじっとしていることしか出来なかった。何とか這いつくばって一歳になる息子に覆いかぶさったものの、それが精一杯で机の下に隠れたり、頭を守ったりすることなど出来なかった。

皆さんがこれから生きていく中で必ず地震は起こる。私たち大人が皆さんに伝えたいのは日頃していないようなことは地震が起きたときには出来ないということだ。私自身、阪神淡路大震災を経験するまで防災には全くの無関心だった。

昔から「地震、雷、火事、親父」なんて言われているが、地震を経験していなかった私は一番怖いものは雷だと思っていた。しかしあのような地震を実際に経験してみると、地震というものがどれだけ恐ろしいか知った。地震を経験してやっと避難経路の確認や小学校の防災訓練というものが大切なんだなとわかった。防災を少しでも意識しているか、していないかで、いざという時に出来ることは変わってくると思う。地震はいつ起きても不思議ではないので、地震が来たとき、自分はどうすればいいのかイメージしておくことが大切だ。

もし自分が地震にあうのではなく、別の地域で地震が起こったとして、もしあなたが支援をするのなら、被災者にとって今なにが必要なのかということを良く考えてから行動に移して欲しい。使い古した服や賞味期限の近いような食品を送られても無駄にスペースをとるものになってしまう。そういったことまで考えた支援をして欲しい。

・―感想―・

今回改めて私の母の震災体験と向き合って語り継ぐことの大切さを知った。母は、あの頃はどんな風に生活していたか詳しくは覚えていないが、ボランティアしてくれた方々がいなかったら素早い復旧には結びつかなかったのではないかと言っていた。

今私は環境防災科で防災を学んでいる。過去の災害教訓から学び、また学んだことを語り継ぐ活動をしている。地域の防災訓練のお手伝いのボランティアもさせていただいていて、地域との交流も大切にしている。

東日本大震災の被災地でもボランティア活動をさせていただいた。私は 2011 年の 5 月と 8 月に訪問をした。5 月はまだ私たちの学年が入学して、2 か月も経っていない時期だった。つまり防災に関するような知識がほとんどない中での活動だった。行く前までは自分に何ができるのだろうという不安や恐怖心があった。被災地の様子はテレビや新聞で目にしたことはあったが、実際に自分の目で見て唖然と

した。畑には２ｔトラックや津波によって流されてきた家具や瓦礫が山のようにあった。元の状態に戻るのにどれくらい時間がかかるのだろうと思った。数年？数十年？―――。

高校生になりたての自分たちに何ができるのだろう。私はとにかく自分にできる精一杯のことをしよう、自分にできることは小さなことでも被災者の方を思って行動しようという思いで活動した。

私たちは宮城県松島町にある廃校になった小学校の体育館を借りて活動していた。松島町の副市長さんが阪神淡路大震災の時に神戸でボランティアをしてくださったこともあり、神戸の高校生が来てくれるなら、とこの施設を借りることができた。一人畳２畳分ぐらいのスペースがあり、1m ほどの高さの段ボールの仕切りもあった。同じ学校で避難生活をされている方たちは校舎の中に移って私たちのために体育館を空けてくださった。よそから来た高校生ボランティアに避難所の方々は優しくしてくださった。活動は主に住宅の床下の泥かきや公園での泥かきだった。全員が目の前のヘドロに立ち向かった。作業が終わると、作業させていただいたお家の主人が僕たちに差し入れをしてくれた。ボランティアは無償性であるため、ボランティア側が被災された方からものをもらうのはいけないことだと考えられているが、せっかくの被災者の方のご好意を無駄にするのはもっといけないのでいただいた。普段食べているものも作業の疲れと感謝の気持ちで本当においしく感じた。一週間の活動期間はあっという間だった。継続的な支援を続けていこうと思った。

８月も東松島で活動した。主にお寺とその前の広場での泥かきだった。重機で泥が広場の真ん中に集められていて、その泥の山を土のう袋に詰めていった。作業をしていく中で、泥の中からは茶碗や CD などが出てきて、それを使っていた人たちが今無事でいるのかとても心配になった。夏場の炎天下での活動であったため長時間の活動はできなかった。さらにヘドロが直接肌についてはいけないため、長そで長ズボンでの作業であった。そのため１時間ごとに 15 分程度の休憩をとった。まだ作業したいという人もいたが、無理に作業をして熱中症になったらほかの人の手を止めてしまうことにもなりかねないため、このサイクルはしっかり守った。震災から約５か月がたっていたため、あたりには虫が大量に発生していた。長そで長ズボンで活動していてもいたるところを虫に刺されていた。一人一人に２リットルの水が配られ水分補給も欠かさず行った。５月に活動した時とはかなり違っていた。

活動終了後、５月にボランティアをさせていただいた農家の方のお宅を訪問させていただいた。自分たちが作業させていただいたビニールハウスでは、土を肥やしている段階で「これから野菜を育てていくんだ」とおっしゃっていた。別の場所ではもう出荷できるほどまで野菜が育っていた。それを見て、自分たちにできたことは小さかったかもしれないが、被災者の方の力になることができたとうれしく思った。

被災地というものを自分で実際に目にする前と後では、今回母から聞いた震災体験のとらえ方は変わっていたかもしれない。町中が壊れ人々が混乱していた中で、両親はすごく苦しい日々を過ごしていただろう。あの惨事の一年後に私は生まれた。それは両親が震災にも負けずに立ち向かったからだと思う。母は私に震災体験を教えてくれた。きっと思い出したくなかったことや言いたくなかったこともあっただろう。母は悲しいことに震災でお金儲けをしようとした人も少なくなかったと言っていた。震災後、早く家を建て直しお風呂に入ってゆっくりしたいという人に、高い値段で風呂の桶を売りつける人や食料品を高い値段で売る商店もあったという。私はこの事がとても印象的だった。東日本大震災が起こったときにも、住民が避難した家に入り金品を盗んでいった人もいた。震災は人々の生活だけでなく、心にも大きな影響をもたらしてしまうということだ。

私のように実際に震災を経験していない世代には、自分が聞いた震災体験を後世に伝え、また二度と同じようなことが起こらないように、未来の災害を向き合い備えていく責任があると思う。私は母親から聞いた震災体験や母が震災を経験していない世代に伝えたいことを伝えていこうと思う。

守られた命

井脇　夏季

1. 地震発生

5 時 46 分、寝室で寝ていた父と母は「ゴォォォォォ」という音とともに大きな揺れに襲われた。何が起きたのかわからない。父は母とお腹の中の私を守るために母の上に覆いかぶさった。マンションの 4 階はとにかく揺れた。「うおぉぉぉ!!」と父は言葉にならない声をあげた。母は天井で揺れる電灯をじっと眺めていた。死を覚悟した。揺れが収まったあと父は余震の心配があるからと母を連れてトイレに逃げ込もうと部屋をでた。台所の食器棚は倒れ、廊下にあった大きな姿見も倒れていた。お風呂場をのぞくと天井が落ちている。初めて見る光景にあ然とした２人だったがなんとかトイレに逃げ込めた。トイレに逃げ込んだのも「トイレは柱が多くあるから地震に強い」とどこかで聞いたうろ覚えの情報が残っていたからだ。しばらくして、親戚の安否が気になり連絡をとることにした。母方の祖父母の家に電話するとつながった。祖父は額を落ちてきた時計の針で切ったが、命に別状はなかった。祖母は地震発生時仕事に向かおうと電車に乗っていたが、幸い何事もなく垂水駅で下車でき歩いて帰宅したと知り安心する。次に父方の祖母に電話するが回線が切れてしまったのか、もうつながらない。自分の足で安否確認に行くしかないと思い立つ。

2. 安否確認への道のり

(1) 霞ヶ丘から五色山

母を一人家に残すわけにもいかないので、連絡がとれた母方の祖父母の家まで行くことにした。外に出るといつもの街じゃないことに違和感を覚えた。ブロック塀は倒れているし、屋根の上にあったはずの煙突も折れて道に転がっていた。吹き付ける冷たい風がよりいっそう冷たく感じられた。

(2) 五色山から滝の茶屋

母を預けたあと父は父方の祖母がいる滝の茶屋に行こう駅に向かった。駅に着いたが電車は動いていなかった。「あぁそうか。地震があったから電車は動いていないのか。」と父はその時初めて気が付いた。それだけ焦っていたのだ。仕方がないので歩いて滝の茶屋まで向かうことにした。垂水小学校の前を通った時、校庭にあった時計を見てみると 5 時 46 分で止まっていた。驚きながらも先へと進んだ。祖母は幸い怪我ひとつなく無事だった。

(3) 滝の茶屋から塩屋

祖母の無事が確認でき安心しながらも、次は板宿に住む叔父のところへ向かう。国道 2 号線を歩いて行った。塩屋あたりで初めて消防車と出くわした。「ガス漏れをしているので、煙草は絶対に吸わないでください!!」と必死に大声で叫んでいる消防士。「これはやばいな」と初めて思い足早にそこを立ち去った。

(4) 塩谷から須磨

やっと須磨までたどり着く。国道沿いの家は全て倒れていた。あちらこちらで火の手もあがっている。「とんでもないことが起こったのだ」と改めて実感した。住宅街に入ると生き埋めになっている人とそれを助け出そうとしている人に出会った。その横を通り過ぎていくのは罪悪感があったが、自分の兄も生き埋めになっているのではないかと想像し足を速めた。そんな状況に出くわしてから母のことが心配になり連絡を取ろうと公衆電話を探した。公衆電話が見つかり電話しようとすると、公衆電話の傍らに箱が置いてあることに気が付く。中をのぞいて見るとそこには 10 円玉が山のように入ってあった。誰かが電話を使う人のためにと置いたのだろう。電話はつながらなかったが、人の優しさに触れ胸が熱くなった。

(5) 須磨から板宿

板宿に着く。近くでガス爆発の音がした。辺りを見回してみると家の倒壊、火災も起こっていた。「地獄だ」本当にそう思った。身の危険を感じた。叔父の家のある高取山のふもとへ行くと、神戸の街が見渡せた。いつもは自慢できる綺麗な景色が、今日は煙や炎しか見えなかった。神戸の街が燃えていた。「神戸は終わった」そう思った。幸い叔父は無事だった。小学生の従妹は「今日学校あるんかな？」とまだ自分の身に何が起こったのか把握できていないようだった。日常が日常でなくなった日だった。父はまた母のところへ帰るため、もと来た道を歩いて帰っていった。

今考えるとよくそんなことが出来たなと思う。しかし、その時は疲れも無茶だということも何も感じなかった。ただ一生懸命だった。確認して安心したかったのだと思う。この長い道のりの中でたくさんの人に出会った。ぼう然とする人。逃げ惑う人。誰かを助けようとする人。自分のことを優先する人。思いやりを忘れない人。自分はどのように他人の目に映ったのだろうとこの頃よく考える。どれが正しいなんて言えないが、誰かを思いやれる人になりたいと思うきっかけになったと父は話す。高取山から見た神戸の街を父はまだ覚えている。

3. 靴屋の状況

父は垂水にある職場の様子を見に行った。店舗のなかは倉庫も含め売り場の商品が散乱し、手も付けられないほどの状態だった。社長もかけつけて、2 人で片付けに入った。きっと街の様子から考えると、靴を必要としている人はたくさんいるはずだから、店を早く開けて靴を提供できるようにしようと思った。その日のうちに運動靴を店の前でタダとはいかなかったが安く販売した。思った以上によく売れた。自分にできることはこれだとその時気づく。こんな大変な状況で周りの人に何ができるだろうと考えていたが、自分も被災している状態では何もできないのではないかと思っていた。しかし、靴屋としてみなさんに靴を提供することができた。自分にできることをしたらいいのだと思った。それから父は友達や親戚などに靴を届けた。家がなくなってしまった人や避難所生活の人にとても喜ばれた。父は自分にできることを続けていこうと思った。それが神戸を立て直すために必要なのだから。

4. 震災と暮らし

水と食料の確保に走る日が続いた。水の入った重たいタンクを、階段を使って 4 階まで運ぶのは大変だった。お腹の中に私のいる母にとっては相当な負担となった。しかし、そんなとき周りの人が気遣ってくださった。「赤ちゃんおるのに無理したらアカンで!」と水や荷物を持ってあがってくれる人。「元気な赤ちゃん産まなね!」と食材をわけてくれる人。そのおかげで母も私も病気ひとつしなかった。母は「みなさんだって大変だったはずなのに私たちを気遣ってくれたことに感激し感謝したい。」と言う。「相手のことを思いやる」よく聞く言葉ではあるが、この状況に出くわすことは実はあまり多くない。震災がその状況を強く引き出す要因となっていたのだ。確かに自分勝手な人だっていた。物資の配給が待てずに怒鳴り散らす人。家族で 1 台だと言われていたガスコンロを 4 台も持っていった人。自分が良ければそれでいいと思ってしまう人。しかしその一方で、自分の家で作ったおにぎりを近所の人に配って歩く人。自分の家のお風呂を貸してあげる人がいた。震災というある意味特別な状況だからこそできた思いやりだったのだろう。相手を思いやることで絆はできるとそのとき感じた。

少し日が経って、だんだんと色んな情報が入るようになった。地震の大きさや規模、そして知り合いの安否情報。亡くなっていた人だっていた。パン屋をやっていた父の同級生は朝の仕込みの最中に地震に襲われ、業務用冷蔵庫の下敷きになって亡くなった。悲しかった、悔しかった。「ただ生きてさえいてくれれば」と思った。やりきれない思いに襲われることはよくあったという。戦後のような神戸の街で言葉にできない想いを抱えながらも、少しずつ前を向いて生きていった。そんな生活が数か月つづく。そこで立ち直る人もいれば、避難所で弱っていく人もいた。どうしてあげればいいのかわからなかった。応援も大切だが自覚も必要なのだと感じた。自分の置かれている立場から自分には何ができるのかを考えること。それが父にとって震災から立ち直るきっかけになった。

5. 感想

(1) 私が環境防災科に入ったわけ

今回「語り継ぐ」を通して改めて父の震災体験を聞いた。私が環境防災科に入学するきっかけとなったのもやはり父の言葉からだった。この機会に自分がなぜ環境防災科を選んだのか思い返してみたいと思う。

私は震災があった 1995 年の 7 月に生まれた。だから震災と直接関わっているわけでは決してない。物心ついたときにはもう神戸の街は綺麗だったし、私が震災を連想させるものなどなかった。しかし、震災のことは小さいころからよく知っていた。なぜなら父が震災のことをよく話してくれていたからだ。「こんな風に地震が起きて、家のなかがグチャグチャになった。」「神戸の街がオレンジ色に燃えていた。」表現の仕方は小さい子がわかるような優しいものだったが、震災を知らない私にとっては衝撃的なことばかりだった。私が少し大きくなるごとに少し難しい震災の話をしてくれた。「神戸には地震がこないと言われて油断していた。」「下敷きになったまま火災に巻き込まれた人もいた。」生々しい表現に耳を塞ぎたくなることだってあった。震災当時の映像がテレビで流れただけで怖くなってしまうこともあった。この壊れた建物のなかに人が残されているかもしれない。この倒れた高速道路を走っていた車はどうなったのだろう。そう考えると怖くて仕方なかった。

家だけでなく学校でも何度も震災の話を聞かされた。避難訓練をしたあとに阪神淡路大震災の話になり、「命は大切だ。」と締めくくられる。ではなぜそんな大事な命が震災で奪われてしまったのか、どうすればその命は守ることができたのか。そのことについては学校で詳しく教えてもらうことはなかった。どんどんと私のなかの疑問が膨らんでいった。本当に阪神淡路大震災はこの神戸の街で起こったのか。実際に生まれていない私にとってはどの話も少し現実離れしているところがあり、わかっているつもりでわかっていなかった。信じられなかった。

そんな私に父はこんな話もしてくれた。「神戸は戦後のように何も無くなった。悲しい、悔しい思いを抱えて生きてきた人がたくさんいる。そんななかで赤ちゃんが生まれた。お前が希望となった。だから命を大切にしてほしい。」少し恥ずかしいような内容を真面目に話す父が印象的だった。自分が誰かの希望となっていたことを知り、不思議な気持ちになった。何も知らない私が生まれただけで誰かの希望となったのかと。それだけ命は尊いものなのかと。父が私の事を希望だと言ってくれたように、私も家族が大切なのだと気づいた。

なぜ父は小さい頃から震災体験を話してくれていたのだろう。それはきっと尊い命が失われたことを私に伝えることで忘れないようにするため。そして将来私がもし震災に巻き込まれたとき命を守れるようにするためなのだろう。それだけ私は大切にしてこられたのだ。体を張って震災から守ってもらった命なのだ。たくさんの人に支えられて生まれてきた命なのだ。震災の裏側に隠れていた大きな愛情に胸が熱くなった。それと同時に私も誰かを守れるような人になりたい。守ってもらえた命を次は誰かを守るために使いたい。これが私の環境防災科入学への初めの一歩となった。

しかし、まだこの時点では環境防災科の存在を私は知らなかった。中学３年生になり進路を決める時期に差し掛かったとき、担任の先生に「環境防災科を受けてみないか？」と声をかけてもらった。「普通科を受けるよりもこっちのほうがきっとあなたにはあっているから」と。私は家に帰って環境防災科を調べてみた。私はこの学科を知っていた。以前駅前で募金活動をする姿を見たことがあったからだ。高校生が大きな声で被災地の現状を語り「温かいご支援をよろしくお願いします。」と深々と頭を下げる姿が印象的だった。それがわかった私は父に相談してみることにした。「環境防災科を受けたいねんけど・・・」と言うと父は「うれしい」と言ってくれた。自分の震災に対する辛い経験や言葉にならない想いが私に伝わったと。誰かのためになれる人になってほしいと。私はこうして父の思いも受け継いで環境防災科に入学することになったのだ。

私は今環境防災科に入学して良かったなと思っている。阪神淡路大震災をしっかりと勉強できることができた。自分の小さいころの感じていた疑問が解決されていった。そして私が一番に願っていた誰かを守ること。私が環境防災科で学んだことを誰かに伝えていくことで防災というものが広がっていく。誰かが誰かに伝えそれがまた誰かに伝わる。そんな連鎖のきっかけに少しはなれているだろう。まだまだ勉強不足なところも多くある私だが、父の想い、家族の想い、支えてくれた人の想いも背負って一生懸命努力していきたいと思う。将来防災を専門にする仕事に就くかどうかはまだわからないが、どこかで防災を学び続け、大切な人を守れるようにすることが今の私の夢だ。

(2) 父の震災体験を聞いて

今回改めて父の震災体験を聞いた。上記のとおり私は父から震災体験を聞く機会が多くあった。しかし、こんなにも細かく聞いたのは初めてだった。いつもなら「うん、うん」と聞いていた話が「その時

の状況は？どんな気持ちだった？」と多少強引に質問しながら聞いた。父が親戚の安否確認に歩いて行ったとは知っていたが、こんなにも長い道のりだったとは知らなかった。そしてそのときの様子を事細かに覚えていることに驚いた。もう 18 年も前の話だ。それだけ壮絶なものだったのだと想像できた。

自分の近くでガス爆発の音がする、火の手があがっている。そんな状況が現実にあったなんてやはり信じられない。もし自分がそんなところに立たされていたならどうするだろうか。その横を通りぬけていくことはできるだろうか。想像の時点で答えは NO だ。そんな現実離れした状況のなかを父は通り抜けて行ったのだからすごいと思う。ただ親戚の安否を確認するためだけに自分の体を張って出かけたのだから。「少しあたりが落ち着いてからでも良かったのではないか？」と尋ねると、「それでも良かったのだろうけど、じっと連絡を待って不安を募らせるよりも、多少危険に遭ってでも確認して安心したかった。」のだと言う。とんでもないことが起こっているとわかっているなかで、いつくるかわからない連絡を待つのはどれだけ不安なことなのだろう。もしかしたら、家屋の下敷きになっているかもしれない。火の手が迫ってきているかもしれない。今なら自分が助けてあげられるかもしれない。そんな想いが父を突き動かしたのだろう。いつもは行動力がないと言われる父が必死になって確認しに行った、助けに行ったことを誇りに思う。

私は未だ大きな災害に遭ったことがない。だからその時の様子を想像することしかできない。父の心の奥底にある気持ちを汲み取れているのかわからない。でも一生懸命話してくれている姿に「もうこんなことあってはならない」というメッセージが感じ取れた。私は高校 1 年の 5 月、東日本大震災の被災地にボランティアに行った。災害を経験していない私にとっては初めての被災地だった。瓦礫が山のように積み上げられている現状に言葉を失った。これが誰かの家で誰かの大切にしていたものだったかもしれないと思うと苦しくなった。テレビで見ていたことと、被災地で見たことが必ずしも同じではないことに気が付いた。ヘドロの生臭い臭い、果てしなく続く瓦礫、田んぼに転がる船の大きさ。それは被災地に行ってみなければわからないことだった。テレビを見ただけで被災地をわかったつもりでいた自分に嫌気がさした。でも被災地に行けない人にとってはテレビ、新聞がすべてなのだろうと気づいた。だからこそ、たまたま機会があって被災地に行かせていただけた私たちが伝えていかなくてはならないのだろうと思う。これが「語り継ぐ」ということなのだろう。語り継ぐことで被災地の現状が伝わり、気持ちが伝わる。悲しい気持ち、悔しい気持ち、どこにぶつければ良いのかわからない気持ち、被災者だけが抱え込むことになる気持ち、想いを同じ日本に住む人たちに共有することが被災者の心のケアに、被災地外の防災力向上につながるのではないだろうか。話し手の気持ちと聞き手の気持ちが通じることが語り継がれるということだと父の話、東北に行った経験から感じ取れた。

父の話をこんなにも真剣に聞いたことは久しぶりだったかもしれない。自分や家族を、体を張って守ってくれた父に改めて感謝したいと思う。そしてもう少し大切にしたいと思う。今度は環境防災科で学んだことを活かして、私が家族を周りの人を守れるように頑張りたい。自分のこれからや家族の大切さ、命の大切さを考え直すきっかけをくれた「語り継ぐ」に感謝したい。

語り継ぐ

岩橋　実佳子

はじめに

私は、阪神淡路大震災が起こったときはまだ母のお腹の中にいたため、当時の記憶は全くないが、母の話から阪神淡路大震災を綴ろうと思う。

１．震災前

地震が起こる一週間程前、当時両親が住んでいた三田市には、カラスやハトが大量発生するというようなことが起こっていた。不気味だな、と思っていたそうだ。震災前日、夕日の色がすごく気持ち悪かったそうだ。今でも、夕日の色が変だと不安に思うそうだ。

２．震災当日

1995 年 1 月 17 日 5 時 46 分よりも少し前、私がお腹を何度も蹴ったため母は目を覚ました。その 1、2 分後、ドドドドドという音が聞こえ激しく揺れた。食器棚の食器はすべて割れた。母は、額に傷を負った。とても驚いた。お腹の私を心配したそうだ。少しして、テレビをつけて見て初めて神戸で地震があったと知った。神戸には、父方の祖父母が住んでいる。急いで神戸に車で向かったそうだ。神戸へ向かう途中、自動車がものすごく混雑していたそうだ。母は、車内から被災地の様子の動画を撮ったそうだが見せてくれない。

３．神戸へ引っ越してきて

私が４歳のころ、私たち一家は神戸市垂水区に引っ越してきた。父の強い希望である。父は、神戸で生まれ育ち、震災が起こる前 2 年前から震災 3 年後までの約 5 年間の間だけ三田に住んでいた。震災の時だけ、神戸にいなかった、自分だけが被災しなかったことが父のこころの病につながっていたからである。その頃には、2 歳になる妹も生まれていた。私自身が神戸に来たときに震災の爪痕を感じることは特になかった。幼稚園を卒業して、小学校に入学した。毎年 1 月 17 日が近付くと防災教育の一環で阪神淡路大震災のことについて学習した。避難訓練や参観日などが行われた。参観日の授業では、“しあわせ運ぼう”という教科書に沿って学習した。教科書を音読したり、内容について考えて発表したり、参観に来た保護者の方々ひとりひとりに震災の体験について話を聞いたりした。震災当時、神戸に住んでいた保護者の方が多い中、私の母はいつも「私は阪神淡路大震災の時は三田に住んでいたので…」と話し出し、多くを語らなかった。まるでどこか遠くで起こったことのような言い方をしていた。3 年生から母は毎年「1 月の参観日行かんくてもいい？」というようになった。母は、人前で話すのが苦手なので、それが嫌なのかなと思ったが、私は「無理！来て！」と駄々をこねた。しかし、高校生になり震災について今まで以上に考えるようになって、母は単に人前で話すのが嫌だったのではなく、実際に神戸で被災している他の保護者の方々の前で、神戸から少し離れた三田市での被災体験を語ることを、被災程度の小ささから申し訳ないと思ったのではないかと思うようになった。母自身、自分は被災者ではないと思っているようだ。しかし、母も恐怖を感じていたはずだ。その上、妊婦という立場であり、身体的にも弱くとても苦労したと思う。心にかかる負担も大きかったのではないか。その反面私は、４歳から神戸にいたので生まれてはいなかったものの、当事者意識というものがあったように思う。母と私とでは 180 度意識が違った。

４．祖父母の家

当時、父方の祖父母の家は灘区にあり、祖父母は被災した。停電や断水、ガスが止まるなど実際に大きな被害を被った。発災当日、父と母は三田から神戸へ車で向かったそうだ。ものすごく混雑していたそうだ。よく、父方の祖父母の家に行っていたので、被災前の神戸にはなじみがあったが、窓から見る

長田などの神戸の風景は不適切な表現かもしれないが本当におそろしかったそうだ。戦争の風景を思い浮かべるほどだったという。実は、父は三田に引っ越す前は神戸に住んでおり、この震災で友人を何人か亡くした。三田に引っ越したのは、ほんの二年前であり、自分だけが被害を被っていなくていいのか、と葛藤し、一時期、こころの病にかかっていた。母は、妊婦でありこの光景を見ること自体がこころに負担がかかったそうだ。しかし、横で衝撃を受け、落ち込んでいる父の姿を見ると、弱音をはくことさえできなかったそうだ。数日後、祖父母が三田のマンションにきた。祖父母にとってはひさびさのお風呂、温かいご飯、温かい部屋などとても、普段の生活にありがたみを感じたと聞く。しばらくたち、祖父母の家は震災でガスや電気、水道などが動き出すようになり、自分たちの家で生活できるようになり、家に帰ったそうだ。そのあとしばらくはその家で生活したが、新開地にうつったのち、万一、災害が起こったとき、急病が発生した時のため、私の家のすぐ近くである滝の茶屋を終の棲家としている。

５． 環境防災科に入学して

実をいうと、私が環境防災科を受験すると決めたとき、母は良い顔はしなかった。その時も「被災者ではないから」ということが理由だった。申し訳ないという気持ちがあったんだと思う。しかし、晴れて合格することができた。直後に、東日本大震災が起こった。あらためて、母に「阪神淡路大震災のときはどうだった？」と尋ねた。そのとき、母は、「被災した中心の人はもちろんつらい、こころに大きな影響を受ける、でも、その周りにいる人もつらいんだということもこころの隅においておきなさい」と話してくれた。そのときは正直よくわからなかった。しかし、その時の母の泣き出しそうな顔だけは覚えているのでいま、この“語り継ぐ”をかいているとき思い出すことができた。わたしは、あのときの母の言葉は、周りへの申し訳ないという気持ちで言い出すことができなかった、母のはじめての本音だったように思った。大きな災害が起こると、大きな被害がでているばかりに目が行きがちである。しかし、大きな災害である、近隣にも大きな影響が出ていることに違いない、そんなところまで目を向けるようなことをできるようになりたいと思った。

６． 環境防災科での活動と母

私は環境防災科に入学する前からボランティア活動などにとても興味を持っていたので、たくさん活動をすることを入学前から決めていた。そのため、実際にもかなり多くのボランティア活動に参加したと思われる。阪神・淡路大震災に関連するボランティア活動、東日本大震災に関連するボランティア活動、災害時要援護者の方々との交流、地域のつながりを向上させる、防災力をあげるためのボランティア活動、またときには、環境防災科の活動内容、東日本大震災の活動報告、地域の交流についての発表、防災訓練の必要性などの発表をさせてもらうきっかけを学校から与えていただいた。自分で言うのも、おかしな話だが、そんなボランティア活動を行うにつれて私自身が成長することができた。またそれに加えて母もまた、震災(阪神・淡路大震災、東日本大震災)の話を私にしてくれるようになった。災害や災害時の人々の気持ちを勉強したわたしを信頼してくれていたのかもしれない。わたしの活動、特に発表の活動によく顔を出してくれるようになった。私が小学生だったころの母からは想像もつかないことだ。垂水駅付近に住んでいるので、募金活動があるときはよく募金もしてくれた。母からの、被災地支援である。母は、私に協力をすることでこころが安らぐのではないかと思うようになった。持たなくてもいい“罪悪感”を持ってしまった母。垂水区という比較的被災程度が小さい地域でもあったが、被災3年後の神戸に他人(母なりの自分の定義)として入ってきて、またそこで生活するということは神経を使いっぱなしだったのではないか。しかも、引っ越し当時から 4年間、父は単身赴任で東京へ行ってしまった。人見知りの母には相談する相手もあまりいなかったように思う。孤独だっただろう。地域で震災の話をすることがどれだけ負担になっていたのか。小学校で毎年行われる炊き出し。 2、3年生のとき、母はPTA代表をしていたので、豚汁を作っていた。どんな思いで作ったのか。実際に当時豚汁を食べられなかった人が食べる豚汁とはどんな味なのか。そんな話をたくさん聞いた。たくさんの被災者の中に隠れていた母という一被災者。妊婦でもあったそんな小さな被災者の声に耳を傾けることができるような人になることを母は望んでいる。また私は、そんな母なりに大変だった時代をつらい思いをしながらも私と妹を守って生き、育ててくれたことに心から感謝しないといけないんだなと思い、自然と感謝の気持ちがわいてきた。特に、当時はお腹の中にいた私をしっかり守ってくれたからこそわたしが今元気に生活できているわけである。被災者である母はつよい。そんな風に思えた。また、母の中に生まれてしまった“罪の意識”は大きい。まだ、こころの中から消えたわけではないかもしれない。それは

母にしかわからないこと、もしくは、母にさえわからないことかもしれないが。

７． 感想

この“語り継ぐ”を書いていくうえで、横につらそうな人がいたら、自分はつらくても吐き出すことが難しくなる、ということもあるということが分かった。母で言うとそれは父のことだった。違う種類の“つらい”を抱えている人とどう接するか。その課題も阪神・淡路大震災を被災した母から受け取った大切なものである。“つらい”ということをちゃんと表現できる人がいる。半面で、“つらい”ということのできない人もいる。その双方の“つらい”を受け止めることは難しいことなのかもしれない。いや、難しいことなのだろう。そのとき、わたしはどうするか。すべてを受け止めることは今の私には不可能だ。

ならば、話を聞きつつ、傍らで見守りつつ、すべてを受け入れるわけではなく、一個人の自分として母をそして父を受け止めてまた、わたしはわたしとして生きていきたい。阪神・淡路大震災をはじめとする災害が引き起こす影響は大きい。そして幅広い人に 18 年たったいまでも傷跡を残す。よく“もう〇〇年？、それともまだ〇〇年？”といった言葉を聞くが、また一概には言えないが、被災者にとってはまだ〇〇年なのだろう。18 年といえば、ちょうど私たちが高校三年生になるのと同じ期間である。また、時期も一緒である。言い換えると、神戸に住む私たちは、阪神・淡路大震災とともに成長してきた、といえるのかもしれない。赤ちゃんだった私たちが、見た目はほぼ大人(まだこころは子どもなところが残っているかもしれないが)に近付くほどの年月である。被災者であった母をはじめとする方々は、この私たちにとっては長い歳月をどんな感覚でとらえているのだろう。私たち神戸に住む高校三年生はこれからも阪神・淡路大震災とともに、そして東日本大震災とともに、また、起こらないほうがいいが、起こるだろうといわれる未来に起こる災害とともに生きていかないとならない、いきていくべきなのだと実感した。また私自身、そう生きていきたい。これからもたくさんの災害が起こるだろう、一年生のときに外部講師の先生にお越しいただいて聞いた阪神・淡路大震災のときの様子、感情、東日本大震災で直接聞かせていただいた、涙ながらのお話、学校の諏訪先生の授業で聞いた、阪神・淡路大震災、東日本大震災、また中国での地震の話、そして母からの話を聞き、できるだけ受け入れて、吸収し、未来に起こるであろう災害に備えようと思う。またいつか生まれるであろうわたしの子どもにも語り継いでいきたい。そして、真に語り継ぐためには、気持ちだけではきっとだめなのだろうと思う。1 年生、2 年生で学習した、環境と科学、自然環境と防災などの物理、地学、気象をしっかり理解し、説明できることが、本当に誰かに伝わる“語り継ぐ”になるのだと思う。わたしはまだまだ未熟である。勉強しないといけないこと、考えるべきこともたくさんある。道徳的に間違っていることもあるかもしれない。しかし、母や、たくさんの方々が話してくれた話を吸収し阪神・淡路大震災とともに、成長していきたい。被災体験やその周辺だけの話ではない。人生として経験したすべてのことを含めた総合的な“語り継ぐ”ができるようになりたい。遠回りであるかのように思えるが、実際はそうでないかもしれない。とにかく、ひとつしか見ることのできない人間ではなく、いろんな根拠の中から、わかりやすく説明できるような人間になりたい。母と私はこれからも、母のこころの傷を癒しながら成長していきたいと思う。

記憶を語り継ぐ

太田　直

１．5 時 46 分

震災 3 日前の 1995 年 1 月 17 日に長女（姉）を出産したばかりで、当日の朝も病院で眠っていた。地震発生時はやはりかなり揺れたが、キャスター付きの棚が少し動いたくらいで、被害はなかった。初めはとにかく驚いて呆然としていたが、たくさんの人が起き、声が聞こえてくるにつれて、赤ちゃんのことが心配になった。急いで赤ちゃんのもとへ向かったが、こちらも大した被害はなく、そのあとすぐに病院を出ることになった。

２．1 月 17 日

病院の外に出ると、普段との変わりように驚いた。家に着くまでは、崩れた道路をたくさんの車が通っていたことや、余震が続いていたこともあり、いつもの倍以上（分）かかった。また、当時家にいた長男（当時 9 歳）の無事を、早く帰って確認したかったため、帰り道がいつもの倍どころか 5 倍 10 倍ほどに感じた。

家に着くと食器が少し割れていたが、幸い長男にけがはなかった。とりあえず食器を片づけなければいけないが、長女から目を離せないため思うように作業ができない。これからも、兄の時と比べると満足に育てられるかわからない。「なんでこんな時に産んだんやろう、もっと後に産んであげられたらよかったのに・・・」片づけや長女の世話があり、兄にも満足にかまってあげられない。二人の子供に「申し訳ない」と思った。

その日は家に多少の食料があったため外に出ず過ごした。

３．その後

大きな被害はなくとも、やはりライフラインは止まっており、次の日（1 月 18 日）に近所の公園へ水をもらいに行った。家はいつもとほとんど変わってはいなかった。しかしこの場所（公園）は以前長男と遊びに来た場所だとは思えないくらい、たくさんの人が集まっており、初めて「あぁ、大変なことなんや」と実感した。

ボランティアからもらった水は衛生面的に大丈夫なのかと不安になり何度も確かめた。新生児がいたこともあるが、今思い出してみるとボランティアの方にはかわいそうなことをしたと思う。この時のことで一番印象に残っていることが、水をもらうときにいつもは話すことのない地域の方が先を譲ってくれたこと。逆に平気で抜かして何度も並ぶ人もいて、良くも悪くも普段は見えない部分を多く見た。この日から仲良くなり今も付き合いが続いている友人もいる。被害が少なかったから言えることだと思うけれど、一概に震災がなければよかったとは思わない。

電気や水道は 1 週間ほどで復旧した。ただ、しばらくは行きつけのスーパーなどが締まっており、配給をもらいに行くことになった。家では大した被害はなかったし、普通に生活できる。なのに配給をもらいに行くことに最悪感を感じた。自分一人だけだったらもらいに行けなかったと思う。でも子供がいたから行こうという気になった。子供の力って大きいと思う。

生活が落ち着き、知り合いから長田などの被害について聞いた。大きな災害だということは理解していたつもりだったが、改めて聞くと同じ兵庫県内でのことだとは信じられず、正直実感もわかなかった。けれど子育てなどに必死だったため、何か支援などはしなかった。周りもそんな感じで、今思うと一応同じ被災地でもすごく温度差があったと思う。

震災が起こってから復旧復興と進んでいくうちに街の景色は変わった。うちは団地のためそれほど変わらないけれど、駅に出てみると昔の場所がわからないようなところもある。

４．現在

震災の話をしていて毎回思うのが、あの時もっと大きな被害が出ていたらどうなっていたのだろうということだ。大した被害がなかったからこそ、こうして話すことができる。子供が環境防災科に入るこ

とや、被災地に行くことも反対はしなかった。でも、もしも 18 年前に周りの誰かが怪我でもしていたら、絶対に反対していたと思う。もしも子供が同じ目にあったらと思うと怖くて仕方がない。震災があったからこそ・・・なんて前向きな考えも到底できないと思う。そう考えると、今の子供はすごい。特に東日本のニュースなんかを見ていると、震災を風化させないようにとがんばっている子をたくさん見る（報道されていないだけで他にもたくさん頑張っている大人や子供もいるだろうけど)。うちの子もそういう人になってほしい。

大きな被害がなくとも、今になって後悔することもある。あのときには正直自分の周りに何もなかったため安心し大きな被災地へ目を向けることができなかった。もっと余裕があったなら何かしらできる支援はいくらでもあったと思う。だからこそ東日本大震災への支援活動には積極的に参加している。もう絶対にあんな後悔をしないように。けれど今の自分が東日本やこの神戸にできることは少ない。時間も限られているし何より家庭がある。もしかしたら募金活動をしたりボランティアをしたりと娘のほうができることはたくさんあるのではないかとも思う。なので子供を応援し震災について話すことで被災地の力になれたらと思っている。

被災地支援と学校だったら当然学校のことが優先だと思う。だから娘の活動に反対することもある。それでけんかになることも。だけど支援について反対しているわけではなく応援しているということをわかっていてほしい。

このまえの震度 4〜5 くらいの地震の時に自分は 18 年前の震災と比べたらと思ってしまい、特に何もしなかった。けれど子供のほうが机の下に隠れニュースを確認したり、心配して電話をくれたりときちんと行動していた。その様子を見て、今の震災を知らない子供だからこそ動けているのかなと思った。また震災を経験している自分がこれではだめだと強く感じた。

５．これから

これから、阪神・淡路大震災についてできることについては考えていきたいと思う。正直子供が高校に入りやっと震災について考えるようになった。だからまだ始めたばかりという感じ。備えに関しては震災があってから、上のほうに物を置かないだとか、食器が落ちないように滑り止めを敷くとかは当たり前になっている。けれど、非常持ち出し袋などは急いで準備しようと思っている。

６．阪神・淡路大震災とは

阪神・淡路大震災は、私が生まれる 1 年ほど前に起こった。そのため私に震災経験はない。生まれた時からずっと神戸に住んできたが、震災を思い出す機会も 1 年に 1 度ほどしかなかった。そんな私が防災に興味を持つきっかけとなったのは東日本大震災が発生し、舞子高校に入ったことだ。入学当時は防災や東日本についてそれほど意識していなかったが、高校で学んでいくにつれて阪神・淡路大震災について話を聞く機会も増えていった。その中でも 1 番よく話を聞いたのが母だ。そして今回も母に当時の様子について話を聞いた。もうたくさん聞いてきたし、今までのような話なのかなと思っていたが、この授業では現在の震災に対しての思いなど、いつもと違った話を聞くこととなった。そうして話を聞いて考えたことが、阪神・淡路大震災とはなんなんだろうということだ。漠然としていて自分でもよくわからない。けれど、母が 18 年たった今でも震災のことについて考え、それを東日本へつなげていることを知り、18 年前の大災害ではなく 18 年前からまだ今も続いている、これからもずっと続いていく災害なのではないかなと思った。そして母が言っていた「一概になければよかったとは思わない。けれどもしも誰かが怪我でもしていたら、そうは思えなかった。」という話を聞いて、被害がなかった人あった人、何かしら傷ついた人、一人一人の震災があると感じた。

今回一番聞いてよかったと思ったことは母の今の気持ちが聞けたことだ。こんなに応援してくれていたことを初めて知り、震災の話を聞くことで改めて母と向き合うことができたと思う。

７．体験と記憶

語り継ぐことの意味は、と授業で勉強したことがある。被災者のほうからは気持ちを整理する。聞く側からはそれを伝え、教訓としていかしていく。そんな話をした。今回母の話を聞いて語り継ぐことにはまだ意味があるのではないかと考えた。それは被災者の体験を風化させないということだ。

震災は母の体験から「記憶」になっていた。母は今回の話のなかで、「震災から 10 年くらいまでは体

験として話しとったけど、今はもう記憶として思い出しながら話しとる。」「あんたに話しとって思い出すことも多い。」と、笑いながら言っていた。そして「震災で大きな被害を受けた人、風化させないために頑張っている人からしたら、被災地外の人はもちろん被災地の人間がこんなんやったら悲しいかもな。」とも話していた

ある防災の会議に参加させていただいたときに現地の中学生からこんな話が出た。「被災地に地震で焼けてしまった小学校がある。その周辺に住んでいる人の中には取り壊してほしいという人がいる。あなたなら取り壊しますか。」その話に対して、現地の高校生が「通学路などにそういった建物を残すことで毎日見て景色になってしまうんじゃないか。そんなのは嫌。」と涙ながらに言っていた。この話を聞いて私は取り壊すほうがいいのかなと思っていた。けれど母の話を聞くと、現地の人が震災を記憶にしてしまうよりは残しておくべきなのかとも思う。現地の人でないとわからないことがたくさんあると思うので、安易にいえることではないのかもしれないけれど。

今回体験から記憶になっていることを聞いて、阪神淡路大震災について被災地外に伝えることは大事だと思うけれど、被災地内の次の世代に語り継いでいくことが大切なんだと改めて感じた。誰かに語り継ぐことで震災を思い出し風化させないことにつながると思う。私も将来この話を記憶として思い出しながら誰かに話し、少しでも忘れないようにしたい。

～後の世代へ～

大塚　昂汰

１．　震災当日（1995 年 1 月 17 日）

当時、私の母は西宮の門戸厄神のとあるハイツに住んでいた。三宮にある会社に通勤するためにいつも 5 時半に起きていたそうだ。しかし、その日に限って 2 日ほど前から引いていた風邪のせいで 5 時半を過ぎても布団の上で座っていたそうだ。すると、午前 5 時 46 分になり突然揺れだした。

最初はトラックがぶつかったのかと思ったそうだ。あまりにも長くすごい揺れが続いたのでこれは地震だと思い、布団をかぶった。揺れが収まって布団の周りを見ていると、布団には何も落ちていなかったが、もし着替えていれば命を落としていたというほど、タンスは倒れ、家具は飛んできており、布団の周りは家具が散乱していたそうだ。台所に行ってみると、食器の棚は倒れ、すべての食器が割れていた。冷蔵庫は倒れ、その上に置いてあったホットプレートはありえないところまで飛んでいたそうだ。もし、2 日前に風邪をひいていなければ死んでいたと私の母は言った。

外に出てみると、隣にあった文化住宅は潰れていて、その潰れた場所からおばさんが這い出していたそうだ。そして、残りの人々を周りの人が助け出していた。

家族が心配になった母は、母（私の祖母）に連絡を取ろうとしたがつながらず、東京の親せきに電話をし、連絡を取り合ってもらったそうだ。無事だということが確認できた母は、会社への交通網がすべて止まっており、出勤することが困難なので休ませてもらい、家の片づけを始めたそうだ。幸い、ご飯はお弁当のために炊いてあり、おにぎりにして同じハイツの人にも配ったそうだ。水も、地震の大きな揺れのせいで少なくなってしまったがお風呂の水が残っており、トイレの水はまかなえたそうだ。こうして当日を過ごした。その日の月は赤く大きな月だったそうだ。

２．　震災から 2 日後（1995 年 1 月 19 日）

会社へ通勤することになった母は通勤ルートにある国道 171 号線の高架橋が落ちているのを目の当たりにしたそうだ。西宮から三宮までの電車が運行していなかったため、代行バスで 2～3 時間かけて通勤した。西宮はそこまで被害が大きくなく、火事などはなかったので神戸について長田の大火事や高速道路が倒れているのを見て被害の大きさに驚いたそうだ。

会社のビルに行くと、立ち入り禁止になっており、特別にヘルメットをかぶって大切な資料だけを取りに行った。ビルの中は天井がはがれ、秘書室の監視用の液晶が落ちていた。

３．　ライフラインが復旧するまで

水道や電気は約 1 カ月、2 カ月ほどしてガスが復旧した。水が一番困り、自衛隊の給水に何度も並んだと聞いた。1 月だったのでとても寒かったが、夏だったら水の消費が激しくもっと大変だっただろうといっていた。お風呂が使えず、友人の家で貸してもらったお風呂はとても温かく心にしみたそうだ。

４．　今思うこと

「自分は生かされたと思った」母はそう言った。もし 10 分早く起きて家事をしていたら、死んでいた。あの時の小さな行動ひとつで、自分の生死が変わっていた。

母は私と妹を生むためにあの場で生かされたのだろうといっていた。不幸にも失われてしまった人のためにも自分の命を大切にしようと思っていると話してくれた。

地震が起きた時、自分を守るので精一杯で他人を守ることができない。だが、防災のことを知っていれば大丈夫なこともあったはず。学習しなければ、と思ったそうだ。人は死ぬときは死ぬ、でも亡くなられた人の教訓は活かす、できる大人が教える、する、と母は言っていた。

2011 年 3 月 11 日、東日本大震災が起きた。母はテレビからその様子を見ていただけだったが、東北の映像を見ると自分のことのように感じたらしい。阪神淡路大震災の時の記憶がよみがえると言っていた。阪神・淡路大震災の時には津波は来なかったが、母は津波の映像を見ると自分が体験したか

のように思ったそうだ。

私の思うこと

私は急に起きた地震に対して自分はどのような対応をとれるのだろうかと思った。地震が発生すると、収まるのをただひたすらに待つことしかできないのではないだろう。地震が起きているときに何かをするのではなく、起きる前に危険から遠ざけて置くことが必要なのだ。たとえば、寝るときは頭の上に物を置かないようにしたり、タンスや食器棚を金具で止めて倒れないようにしたりと、普段から少し気を配ったり片付けさえしていれば、それだけで危険を遠ざけることができる。寝るときは必ずカーテンを閉めておくだけでもガラスが割れた時に部屋に入ってこなかったり、自分の部屋や近くに懐中電灯を一つ置いたりするだけでも、地震が収まった後に行動しやすく避難しやすい。

最近にも地震が起こった。私の友人はツイッターで「この地震の 3 日後に大きな地震が来る」と聞いたそうだ。夜が怖くて眠れないといっていた。私は、地震はいつ来るものかなんてわからないし、根拠のない情報で人を惑わせてはいけないと思う。たまたま今まで大きな地震がなかっただけで、今までに起きていなかったことのほうが不思議なのだ。睡眠中に地震が来るのが怖くて眠るのが怖いという気持ちはわかる。しかし、情報に惑わされた怖がりではなく、ものが体の近くや危険な場所に落ちてきて怖かったなら、この機会に防災を学んでほしい。

地震がいつ起こるかを予想することはできない。しかし、起きた時に自分の身を守ることはできる。防災の知識を持っていれば冷静に対応できるのではないだろうか。地震が起きたから根拠のない偽の情報で怖がり、備えるのではなく、起きた時に対応できるように備えておくことが大切なのだ。

また、地震のことを知らないと噂に流されやすい。本当かウソか判断できない情報を、体験した恐怖で信じてしまう。偽の情報に惑わされないためにも地震などの災害について知る必要がある。

母の会社のある三宮は、ほとんどのビルが倒壊していたそうだ。建物が古かったという理由もあるかもしれないが、地震の激しさを物語っている。いくら自分の身を建物の中で守っても、建物が崩れてしまえば意味がない。だが、実際に揺れている最中、ビルやマンションから外へ出ることは困難だ。耐震工事をして地震に負けない建物にするしかない。近年、耐震の技術は発展してきており、新しい家などは耐震を設計に入れて建てられている。昔に比べて耐震基準なども変わり、建物は強くなってきた。だから今度は私たちが災害を知り、備えるべきだ。そうすればいずれ来る災害にも対応して被害がとても少なくなるだろう。

まずは自分のことだけでいい。自分のことだけでも備えることが大切なのだ。そして、それから広めていってほしい。防災に対する意識が薄れてきたと思ったら、災害の映像を見て思い出してほしい。辛くて映像を見ることができない人だって大勢いる。いずれは克服していかなければならないことだが、防災に対する意識は薄れることはない。経験していない人はその分学ぶことしかできない。だが、学ぶことでは本当の恐ろしさはわからないだろう。

ではどうすればいいのか、私は映像を見て、実際に現地を訪れ、自分の目で見ることをすればいいと思う。簡単にできることではないだろう。費用や時間だってない人はいる。だけど、もし行くことができるなら、自分の体で感じてほしい。どのような被害を受けていまどのように復旧・復興しているのかを見てほしい。

震災の時、自分の身を守ることの次に大切なのは人と人との繋がりだと思う。もちろん、食料や寝床も必要だが、それを確保するためにもつながりは大事なのだ。阪神淡路大震災の時には多くの人が近隣の人に助け出してもらったそうだ。私の母も友人にお風呂を貸してもらった。そのようにいざという時に助け合える仲間が必要なのだ。この仲間は友人や友人でない人もいる。すべての知り合いと親友になれと言われても不可能だろう。人には個性があり、好き嫌いがある。だが、震災の時は協力し、乗り越えていくしかないのだ。知らない人と協力し、何かを成し遂げなければならない場面に遭遇するかもしれない。そこで必要なのが人をまとめ上げるリーダーの存在だ。誰かが統率をとることでチームとしての活動力が上がる。

では、どのような人がリーダーに向いているのだろうか、となる。私は人の意見を聞いて、受け止めて考えることができれば、誰にでもリーダーはできると思う。意見を聞くために必要なのはコミュニケーション能力だ。たとえ、リーダーに知識がなくても、集まった人から知識を聞けば得ることができる。つまり、コミュニケーション能力を生かし、人々の仲介役になれる人こそがリーダーなのだ。

リーダーができるとそのリーダーを中心にグループの仲も深まっていくだろう。そこでの繋がりは一生のものとなる。また集まるような出来事が起こってしまっても、大きな力を発揮することができ

るだろう。人と人とのつながり方には偶然もあるが、つながり続けることに偶然はない。出会いを大切にして多くの人とつながりを持つことはとても大切な事だ。

消防の組織力の向上も必要だと思った。人員を増やし、装備を新しくすれば組織力は向上していく。しかし、それには多くの資金が必要なのも事実だ。そんなことのためにお金を使うなという人もいるだろう。阪神淡路大震災から消防の組織はより大きなものになってきた。各地に特別高度救助隊も配置され、地震にも対応する水道管もできてきた。だが、いまでも阪神淡路大震災の時のような火災が起きれば、消火活動は間に合わないだろう。このようなことを市民に知らせ、協力してもらうことでしか、反対の意見を取り除くことはできない。組織力を上げるためにも、消防の実態をもっと市民の方々に知ってもらうことが大切だ。そして少しでも早く、より大規模火災・災害に対応できる組織力にしていくべきだと思った。

人の命とは尊く一瞬で失われてしまうものだと思った。人は何年もかけて成長していく。長い年月をかけて学校を卒業し、社会に出て、家庭を持って暮らしていく。しかし、その命が災害によって一瞬で失われてしまう。

私はその尊い命を救うことのできる消防士になりたい。地震が起きているときに助けに行くことはできない。だが、失われようとしている命を助けることはできる。そして助けた人が家族と笑っている顔が見たい。

阪神淡路大震災では多くの人が亡くなった。消防の技術が進歩してきている今、救命率は上がってきている。あとは、どれだけ消防が現場に早く到着し、救助するかだ。阪神淡路大震災の時のように、燃えている街を見てただ立ち尽くすことはない。阪神淡路大震災当時に比べると、水道管は柔軟性を持ち、消防車両の性能も格段に向上してきた。

私はその技術を生かし、生きたいと願っている人の命を助けたい。たとえ、命が失われてしまっていても、その身体を家族のもとへ帰らせてあげたい。私が消防士になったら、多くの生死の場面に遭遇するだろう。辛いことや悲しいこともたくさん経験する。その時には、仲間に支えてもらいながら前へ進んでいこうと思う。そして、自分の経験してきたことを私の母から聞いたように後の世代へ伝えていきたい。

災害体験　　～両親から僕へ～

大橋　拓哉

＜両親の体験＞

１９９５年1月１７日。
父と母は鷹取の２号線沿いの自宅で被災したそうだ。
もちろん早朝なので、眠っていたそうだが突然ベッドが突き上げられ、テレビが倒れ、照明が落ち、玄関まで行くのに倒れた食器棚や散乱した本棚が邪魔をし、割れた食器で足の裏を切っていたそうだ。しかしパニックでそれさえ後になって気づいたらしい。
当時住んでいたのは鉄筋の建物だったそうで、崩れはしなかったそうだが非常ベルが鳴り響き、ガスの匂いがしていたので二人でなんとか外に出たところ、エレベーターが停止していたので階段でたくさんの人と会った。しかし比較的若い世代の住むそのマンションでは、ゴミ当番や掃除なども業者に委託し、皆、日頃からの付き合いなど全くなく、どこに何人の家族が住んでいるのかどころか、顔すらわからなかったそうだ。
お互い声を掛け合うこともなく外に出ると、電柱は横たわり信号の消えた道路はあちこちに破損物や壊れた車がそのまま放置されており、駐車場から車を出しても安全に走れる状況ではなかった。陥没した道路に破損した水道管の水が溜まり、放置された車が沈んでいたり、大きな銀行が斜めに崩れ落ちたり､割れた窓から垂れ下がるブラインドが風になびく姿は､まるで映画でみるCGのようだったらしい。そして鷹取から長田まで行くと、どんどん空が煙で暗くなり、辺りは火に包まれ出した。
親族との唯一の連絡手段であった公衆電話を探しまわるが、見つけても長蛇の列で、やっと順番が回ってきても十円硬貨が満杯に詰まり使えない等で、下駄箱も倒れ靴が見つからず裸足で出てきていた母達は、もちろん財布やカバンもあるわけがなく、車にあったわずかな小銭も繋がらない公衆電話に飲まれてしまい途方に暮れていたそうだ。
その頃、垂水に住む祖父が両親を心配し、地震後すぐに鷹取に向かっていた。
祖父は地震発生時、多聞東小学校前の下り坂で車を停車させていたらしいが、坂道がグニャグニャと波打ったと言う。また鷹取まで向かう道中２号線沿いを走っていると、須磨の海上に白い線のようなものが淡路島の方へつながっているのを見たらしい。
その後、余震の続く中、両親は鷹取中学校の避難所で祖父と合流でき、まだ被害の少なかった垂水の祖父の家でしばらく過ごすことになった。その後、垂水では比較的早く電気がついた。
インスタントの食料や、体を拭くウエットティッシュに懐中電灯やラジオの乾電池を探し回ったり、大きなゴミ箱にビニールを敷き、水道局の方が配給してくれる水を溜めたりと、まるで家の中でサバイバルキャンプをしているかのようだったと言う。
ある日、役所の前でカセットコンロを配っていると聞き、母達は駆けつけたが、もう終了していた。そこでは、同じ人がカセットコンロを何個もたくさん持っていたりするのを見て理不尽に感じたらしいが、そんな中でも並んで得た自分のカセットコンロを後ろの貰えなかった老夫婦に渡す男性の姿もあったらしい。そこでは、他にもたくさんの譲り合いや、気配り、思いやりなどを感じ、疲れ果てた日々の中でカセットコンロよりも大事なものを得たのだと話してくれた。
また､日々の生活ではトイレや洗濯､風呂に食事､全てにおいて使われる水の有難さを知ったと言う。日頃は洗い物や歯磨きの最中に出しっ放しで気にしていなかったのを悔いたのだと。割れずに残った食器には、ラップやアルミホイルをはり、隣近所で冷蔵庫の中身を持ち寄り、具がたくさん入った味噌汁を作っていた。また、冷凍庫の凍った肉等はクーラーボックスに移し保冷剤代わりに使用し、溶けてくればまた味噌汁の具にしていたとも聞いた。
しかし、避難所に居る人達にはオニギリ等の配給が貰えたそうだが、家族の事情がある方や犬や猫を飼っている人達の中には周りに気遣い避難所にも行けず、ペットと共に家に残り食料の調達に困っている人もいたという。
スーパーやコンビニでは、残った商品を無料で配る店もあれば、何倍もの値段にして売る店や、軽トラックにたくさんのポリタンクを積んで１つを４千円で売る人もいたと聞く。悲しいかな、それが現実ということなのだろう。
しばらくして、父達が鷹取の自宅に戻ると、あちらこちらに父達と同じように戻ってきたマンションの住民が片付けを始めていたのだが、どちらからともなく声を掛け合い、今までなかった交流の中で、

こちらでもお互いに気を配り、譲り合う生活があったそうだ。日頃は頑丈に閉じられていたはずのオートロックの門が開けたままになっているのや、各部屋の開いたドアを見て、セキュリティが近所付き合いの難しさの原因だったのかもしれないとも考えたらしい。

また、亡くなった方の遺族や大怪我をされた方への気持ちのやり場にも胸を悼めたそうだ。

あの震災で祖父の可愛がっていた犬が死んだ。祖父にとっては家族であった。しかし、周りにはたくさんの身内を亡くされた遺族があり、話す時には気を遣い言えなかったそうだ。けれども愛すべきものを失う気持ちは同じだったであろう。

あの時、こうしていれば亡くならずにすんだ命かもしれないと自分を責め続けている人やどうしても震災メモリアルに参加できない人達は、きっとそんな想いを思い出し、テレビなどで震災を連呼する度に胸が張り裂け、やり場のない痛みに耐えているのだろうと母は言う。決して、忘れ去れることではない。けれども乗り越えていかなければ残った者は前に進めないのかもしれないと。

＜僕の感想＞

今年１月 17 日に僕は東遊園地で毎年行われる震災メモリアル 1･17 に参加した。

東北ボランティアで一緒に活動した東京と石巻の高校生も神戸まで足を運び黙祷や竹に火を灯してくれた。日頃はのどかな東遊園地も、この日は震災の教訓を全国に報道するテレビ局や、震災を経験した人々でいっぱいだった。僕たちの参加した 1･17 をテレビで見ていた母は、遺族の人たちの気持ちが心配だと言っていた。自分の大切な人の命を奪った震災の日 1･17 を毎年このイベントの時期が近くなると思い出し、残された遺族の悲しみをえぐり返すことにもなり、母自身がその立場なら、1･17 のイベントは無くなって欲しいと思うかもしれないとも言っていた。僕はこの話を聞いて、母の気持ちもわかるような気もした。けれども、母には「今の若い世代の人たちに震災の教訓を伝えて、防災に興味を持ってもらう機会や遺族の人たちが当時を思い出し、悲しみを乗り越えて、亡くなった人たちの分まで生きることを伝えるものなのだ」と話した。しかし、それは、あくまで震災を経験してない僕の言い分であって、その立場にならないと分からないのかもしれないとも思う。震災メモリアル 1･17 の捉え方は、人それぞれであると思うが、それは亡くなった人たちが現代を生きる僕たち全員に、自分たちの生き方はどうかということを語りかけているものであると思う。今、生き残った者同士で思いやりを持って生活しているか、身内の有難さを忘れていないか、今の社会に感謝しているか・・・現在、僕たちに何ができるのかを気づかせてくれるものであると僕は思っている。

また、昨年から僕は三木市の防災センターに半年通い試験を受け、兵庫防災リーダーの資格を獲得した。防災リーダーとは、阪神淡路大震災を機にできた、防災・減災を図るために積極的に地域の訓練や活動に参加をしたり、災害時に公的支援が来るまで住民に避難の指示を行い消火活動や救出活動、ボランティアと協力して避難者支援を行う団体である。両親の体験した阪神淡路大震災では、防災士が存在せず消防などが遅れたりして多くの人々が亡くなった。その震災で学んだことは、国民一人ひとりが自らの防災を学び、「いのちや、家族、財産」を自分で守っていくことにあった。公的支援がなくても地域との‘協助‘や自分や家族で‘自助‘をし合いながら、災害時の対応ができるようにする。その架け橋となり、住民をサポートしていくのが防災士の努めなのである。しかし、防災やボランティアがまだ世の中に浸透していない時に起こった未曾有の災害にもかかわらず、両親や鷹取の住民は自分なりにできる人の助け合い‘協助‘ができていた。母達が隣近所で食料を集めて、みんなで味噌汁を食べたりや、ガスコンロを後ろの老夫婦に譲った人、住民で声を掛け合い、お互い譲り合いながら生活していたなど、普通今まで起きたことがない最大の地震で、自分が食いつなぎ、生き残るための術で精一杯なはずである。しかし 18 年前の阪神淡路大震災を経験した人たちは、助け合いをする精神を知っていたのである。防災の‘協助‘や災害ボランティアというのは、公的なマニュアル化した支援ではなく、相手を助けたいと思う人間本来の道徳的精神からなのだと両親の体験から学んだ。

防災リーダーを受講しようと思ったきかっけは、環境防災科で学んだことを生かして、地域住民の役に立つ人材になり、様々な場面でも防災を展開し、人々に安全を与えられるようにするためである。当時の両親の家には家具倒壊防止の整備や避難バックの準備が行われておらず、日頃から深い近所付き合いも行われていなかった。防災士というのは、災害時だけに力を発揮するのではなく普段から住民と関係を築き、地域の取り組みも考えなくてはならない。今まで、色々な講義で災害について大学の教授や専門職の人から災害の本質や発生時に身を守るためのノウハウを教えて貰った。僕は災害対策として知識を持っておき、災害が起きた時にうまく対応が出来たらそれでいいと思っていた。が、いざという時に頼れる人材というのは、前もって予防ができており、いつでも大丈夫な様に備えておくことのできる

者である。人の役に立ちたいと思うのであれば、両親の震災時にできなかったことを改善して、次の災害に備えて家庭でもできる最大の防災をすることにあると思った。また、講義などで得た防災のノウハウも自分だけの知識だけに止めておかず、周りの人に知ってもらうことに意義があるのだと思えるようになった。

震災で傷ついた建物は建て直し、また新たに、より安全に使いやすくなっている。それによって、普通の生活に戻り、段々とあの日の事を忘れていく。母達は心の中で「あんな大きな地震があった神戸だから、しばらくはもう大丈夫」と思っているような気がする。

確かに、今自分がこの歳であの震災に遭っていれば、復興し何年も経てば同じ様に思うかもしれない。しかし、これは‘正常性バイアス（自分はきっと災害・事件に遭うことはない思う心理）‘という災害時の敵になるのだと母に説明した。舞子高校の環境防災科で知識を学び、東北で震災後の被災地も廻ったが、いくら復興を願い活動をしても実際には恐怖も悲しみも何も体験していないのだ。それは、想像したり考えたり想いを馳せたり・・・そんな事では到底理解できることではないと知っている。だからこそ僕は「もう大丈夫」とは思えないのだ。知識を学べば学ぶほど怖い。今年４月には淡路島で震度６の地震が起こり、僕もあのような揺れを感じたのは初めてだったのでとても怖かった。父も母も起きていたので、突然のことにびっくりしていた。母は、震災の時を思い出して、少し手が震えていた。最近では東北も復興に近づき、気持ちは少し地震から遠ざかっていたはずだ。こうして僕たちが震災を忘れようとした時に起こるのだ。僕の生まれた平成 7 年は阪神淡路大震災、平成 23 年中学の卒業式当日は東日本大震災。このことから、僕は自分の人生の節目節目に地震があるのではないかと思ってしまう。次には、僕のどの人生の節目に地震がやってくるのか怖くなる。‘正常性バイアス‘とは、災害を忘れた時に陥りやすくなるのだと４月末の地震で感じた。

きっと今、東南海地震に怯えている人達もいるだろう。今・・・まだ何も起こっていない今、僕たちは何を考え、何に備えるべきか。

「もう大丈夫」と思えない僕だからこそ出来ることがあるはずである。水が好きなだけ出る毎日、必要なものが揃っている毎日。そんな時に災害時の防災が始まっているのではないかと思う。今までどんな時も両親は僕を守ってくれてきた。防災を学んだ僕は、これから助けられる身から助ける身になりたい。

阪神・淡路大震災の話

大松　博夢

１．震災直前

震災前は長屋と言って隣同士ひっついた家が並ぶ路地の中にある家に住んでいた。その家を震災一か月前に新築に立て直したところに震災が起きた。家にはお母さん、お父さん、おじいちゃん、おばあちゃん、お兄ちゃん、おねえちゃん、の６人で住んでいた。地震が起きた時僕の家族は全員寝ていた。

２、地震直撃

家はかなり揺れ家具やテレビなどは倒れたりしたが家は建て直したおかげでどうもなかった。家族のみんな怪我なくよろこんでいた。ところが外に出てみると周りの家が、がれきの山の状態になってそこから自力で脱出してきた人がいて、靴もなくはだしの人がいっぱいだった。家から靴やスリッパ、毛布などをとりだし近所の人に配った。

外はガス管や水道が破裂している状態だった。家の裏に駐車場があり車を止めていたが、隣の家の２階部分が崩れて車の上に乗っている状態で車をだすことができなかった。

３、避難

おかあさんは、おばあちゃんと、5歳の兄と、1歳の姉をつれて千歳小学校に避難した。学校の校庭がひび割れしていて、体育館はガラスが割れ、中は人であふれていた。体育館には入れない状態だったので、校庭のすみで持ってきた毛布一枚で４人でくるまっていた。

４、救助

家のほうでは、おじいさんとお父さんが、前の家のお孫さんが、がれきに埋もれていて救助していた。がれきを手でのけていったり、ジッキでがれきを動かしたりしてもなかなか助けることが困難だったそうだ。その女の子を助けることができたのは午後２時ごろだった。女の子はかなり衰弱していたそうだが命が助かってよかった。女の子の親戚が来てどこか病院に連れていくことができた。そんな中救助にも参加せず、自分の家から荷物を出す自分勝手な人もいた。

５、地震後

うちは家に住むことは可能だったが、親戚が六甲から何時間もかけて来てくれた。一日分の着替えを持ってかぎを閉めて行くことにしました。

家には２匹犬がいて一日だけだから家の中において行こうとしたら親戚が連れてきてもいいと言ってくれたので、犬も連れて行くことにした。

うちは長田区のすぐとなりの須磨区だったので、すぐ近くで火災も起きていた。でも、夕方４時頃には九州やあちこちから消防車が何台もきていて、大丈夫だと安心して、家を出た。６時間ぐらいかかって六甲にやっとついた。その途中、神戸、元町、三宮の高いビルなどが、倒壊していて、まるで映画の中の世界のようだった。六甲は水道、ガスはとまっていたが、電気だけはだけはついていた。

６、火災

10時ごろテレビのニュースを見てびっくりだった。家の近所が燃えている映像だった。まさか？でも今からもどることは不可能だ。

次の朝すぐ家をみに帰ると全焼だった。周りは焼け野原状態だ。なぜ？あれだけ消防自動車がいたのに・・・水が出なかったそうだ。そんな情報がわかっていたら、家から大事なものをだせたのに・・・って後悔だった。

お金で買えるものならばともかく家族の思い出、写真やビデオがなくなってしまった。全壊と全焼を同じあつかいをされたが焼けてしまうと何も残らない。そのことは国や市は考え直して欲しいと思った
家の近くで美容師をしていたビルも焼けた。1日にして家、店、車をなくしても、もうその日から収入もなくなった。

７、救援物資

その日から六月に店を再開するまでに間は、六甲の親戚の家でお世話になっていた。六甲は被害の少ない域なので、救援物資などがんかった。その時一番こまったのが一才四か月の姉のミルクとおむつだ。近くの学校に行って事情を話しても学校に避難してない人にはあげれません！って断られたりたった5枚のおむつをもらっただけだった。
後で須磨に帰ってきたときに聞いた話だが、こっちではおむつにミルクなど、日用品が箱単位で配られていたそうだ。

８、仕事

お父さん、お母さんは、学校でじーっとして救援物資や弁当をもらうより早くお店を再開するため毎日、あちこちに相談にいっていたそうだ。
美容室も全焼しているため、お客様のカルテなどもやけてしまいない。連絡ができない。だからなんとか元のお店の近くで再開できるよう、借金して借地を買ってお店を六月にオープンしたそうだ。

９、区画整理

でも、家もお店も区画整理といって自分の土地でありながら本建築がたてられなかった。だからいずれ壊すことを前提に仮設を立てたそうだ。お金もないし、大工さんもいない状態だったので、店も家もお父さんと知り合いの人たちでたてたそうだ。
しかし区画整理は約10年もかかった。区画整理とは自分たちの土地の何パーセントとかを道路に無性で提供するのだがそしてあなたの土地はここですよと言われ自分で家建て直さないといけない。
もともと、高齢者が多い地域だったので、建てられないひとは神戸市に土地を買い上げてもらっていた。なぜなら高齢者は借金ができないからだ。そういうところに国が考えてくれたらいいのいと思った。

１０、お母さんたちが思ったこと

・救援物資
被害が小さいからってすくなくていいっていうのはおかしい。救援物資がかたよっていて余っているところもある。その分をもっとほかに回してほしい。
・支援金
一世帯一人と5人家族では、違うのだから、人一人に対して支援金を支給すべきだと思う。
・地震だけじゃなくて火災の怖さ
焼けてしまったら何も残らない。一番つらかったのは家族の思い出の写真がやけたこと。思い出の大切さを実感した。

その体験を聞いての感想

もともと小さい時から阪神大震災の時の話を聞かされていた。けど、小さいときは、何が何だかまったくわからなかった。
小学校に入学して阪神大震災の話を聞いたり勉強してみたりしてやっと地震がどんなものなのかってことがわかってきたレベルだった。
まともにちゃんと地震の時の話を聞いたのは中学生になってからだ。中学校にも1.17のメモリアル行事があった。体育館に全校生徒をあつめて話をしたり黙とうをしたりするものだ。そのあとに教室に帰ってホームルームで感想をかいたりするのだ。だがしかし、大半の生徒が興味を示さずいいかげんに考えていたのだ。私は両親から地震の時の大変さを聞いていたので、とても、そんな風には思えなかっ

た。中には自分の家族が被災しているのにもかかわらず、まじめに話を聞かない人もいた。その人は地震の時の話を親からきいてないそうだ。それを聞いて本当に語り継いでいくことが大切だなと思った。それと同時に語り継いでいくことは難しいとも思った。私は家族の話だし自分にも関係があるから知りたいと思った。しかし、もし赤の他人の話だとしたら聞けるだろうか。僕はなかなか聞けないと思った。

阪神淡路大震災の怖さ

大村　優輝

１．地震直後

（１） 恐怖の朝

僕の親の震災体験を話していきたいと思う。朝、5 時 46 分には僕の母は起きていなかった。大きな揺れで目が覚め、揺れが強いので身動きがとれないまま布団の中でじっとしていた。揺れの影響で、食器が床に落ちて割れ、物が飛び交い、家の中はぐちゃぐちゃになっていた。割れた物が地面に転がっていて、水槽も落ちて割れてしまった。揺れが収まってもあまりの恐怖に茫然としていた。地面には割れてしまったガラスや、食器が散乱しており、誤って踏んでしまって、足にけがをした。近くにスリッパがあったので、それをはきながらガラスの上を歩いて祖母の近くに行った。地震が起きたその日は、たまたまお腹の中の赤ちゃんの状態が悪く、病院に行って、祖母の家に泊まっていた。実家にいたので、祖母の安否確認は早くできた。まだ母と父は同居していなかったので、二人とも実家にいて、祖母の安全がわかったので安心だった。

２．地震のあと

（１） 使えないライフライン

僕の家は水道、電気、ガスがとまった。水が使えないとトイレに行っても流れないし、風呂にもはいれない。水がでないので、洗濯をすることもできない。でも、水は給水の車が来てくれて水を分けてくれるので、水には困らなかった。僕の家族は家が壊れていなかったので、避難所にはいかなくて済んだ。家には食べ物もいっぱいあり、困ったことは、ライフラインが止まったことだけだった。ライフラインが止まってしまうと、普通に家でやっていたことができない。それに、阪神淡路大震災は冬に起こったので、ガスストーブや電気ストーブが使えない。冬に電気が使えないととても不便だった。でも、電気はすぐに復旧した。電気だけでも使えるようになったおかげでだいぶ助かった。僕の家には電気ストーブがあったため、寒さはしのげた。母の家では水道が復旧するのには時間がかかったが、父の家ではすぐに回復した。水道がでなかった母は、給水の車に水を取りに行っていた。何気なく普段水道から出てくる水がなかったらとても不便なのだと思い、水のありがたみが分かった。でも僕の親の家は、復旧が遅い地域ではなかったので、比較的早くライフラインを使うことができた。

（２） 動かない車

父はとりあえず母に会いに行こうと、車を動かした。でも、周りの人は考えることは同じで、車が渋滞していた。それだけならまだいいのだが、道路が壊れているところが通れないので、周り道をしなければならない。そこも渋滞していて、とても大変な思いをした。母は仕事に呼ばれて、バスで行っていたのだが、それもまた渋滞で、動かなくてすごく時間がかかった。高速道路が使えなくなっていて、普通の道から行かないといけないのだが、渋滞していなくても、普通の道を使うと時間がかかるのに、渋滞していたので、時間がかかる。渋滞しすぎて周り道をしたのだが、周り道をすると余計に時間がかかった。道路が壊れると、大変だと思った。正直、車を使うよりも歩きのほうが早かった。地震が起きて、皆焦って、渋滞が起きて進まなかったので、皆がイライラしていた。僕の親もとてもイライラしたらしい。電話が使えなかったので、父と母の安否確認ができていなかったので、もしかしたらと不安だった。でも、時間がかかって祖母の家に着いて、母がいたときには、ほっとしたらしい。家族や親戚が無事で本当に良かったといっていた。

（３） 仕事

僕の父は、自営業をしている。飲食店で働いているのだが、地震が起きたことによって、ライフラインが使えなくなり、仕事ができなかった。しかし、働かないとお金が入らないので、水と電気が復

旧した時点で、どうにか店を再開させないといけないので、ガスコンロとガスボンベを買ってきて、店を再開した。客が来てくれて、常連の客の安否確認ができた時はうれしかった。でも、その客の中には、家族を失った人もいた。その人の妻を亡くされていた。その人は長田にすんでいて、隣の家が火事になって、火が燃え移ってきた。でも、妻は下敷きになってしまっていて、身動きがとれなかった。必至になって、上に乗っているものをどけようとしたが、まったく動かなかった。火が近づいてきたら、その人は「私のことはいいから、あなただけでも逃げて」といっていた。店に来た客は、泣きながらこの話をしてくれた。父も涙が出たといっていたけれど、その人は、泣き終わったあとに「話せてすっきりした。ありがとう」と言っていた。

僕の母は、当時は販売店の仕事をしており、電話が復旧してから電話がかかってきた。すぐに店に来いという電話だった。母は、祖母が精神的な病気持ちなので、少し待ってほしいといったのだが、店長は、怒って「店がつぶれてもいいのか」と怒鳴ったらしい。母は自分の家族が心配なのにと思っていたらしく祖母を落ち着かせるために、少し一緒にいた。落ち着いたら母は、バスに乗って、販売店に行った。でも、地震のあとなので、人はあまり入ってこず、全然売り上げがあがらない。店長は地震が起きてから、ずっと落ち着かない感じだった。店長は、地震が起きたことによって母を失っていた。後からこの話を聞いた僕の母は、申し訳なかったと思っていたらしい。店長も、地震が起きて母を失って、普通の状態ではなかったらしいので、僕の母は店に仕事に行った。

（4） 復旧後

僕の親は復旧後本当に地震の怖さがわかったといっていた。幸いにも、親戚で亡くなった人はいなかったが、ライフラインが使えなくなったり、仕事ができなかったりと地震によって、大変なことがたくさんあった。でも僕の親は周りの人に比べたらましだった。ほかの人は家がなくなり、避難所での生活をしている人だっているといっていた。阪神淡路大震災は、生きてきた中で一番大きな地震だった。次は来てほしくないと思っている。

一度大きな災害を体験したことによって、ライフラインの大切さ、食べ物の大切さなどがわかった。いままでは、駅の前で募金活動している人を見かけても、あまり気にしなかったが、今では、積極的に少しのお金でも、募金している。恐怖を覚えて、大変だった阪神淡路大震災だけれど、得た物も多いと話していた。今住んでいる家は、1 度震災の被害を受けていて、ひびがはいっている。次の地震に備えて、耐震補強をしておきたいといっていた。もう地震はきてほしくないと話していた。

（5） 親が大事だと思ったこと

僕の親が大事だと思ったこと

・ 地震が起きたら、落ち着いて家族の人の近くにいる。

自分自身も落ち着くし、子供がいた場合怖がっているので、皆を落ち着かせることが大事だといっていた。

・ 近所の人が、困っていたら助け合う。

あまりしゃべったことがない人でも、困っていたら助け合うことが大事。お年寄りの方は、給水車から水を持ってくるだけでもしんどいと思うので手伝ってあげたりする。

・ 自分の親が、別の場所にいたら、安否確認のためにすぐに会いに行く。

病気を持っている人から優先的に安否確認をする。電話がつながれば一番いいのだが、電話が繋がらなかった場合、車などを使って家に行く。でも、車で行く場合道が混雑しているので渋滞して時間がかかる。

・ 友達などとあって、気持ちを落ち着かせる

一人だと、怖くて変なことを考えてしまうので、とりあえず知り合いにあって会話をして気持ちを落ち着かせる。

話を聞いて僕が考えたこと

震災の怖さをあらためて知ったと思う。親の被災体験を聞く機会などあまりないので、震災の時の状態や気持ちなどを身近な人から教えてもらい勉強になった。聞いただけで怖いと思ったけれど、僕は聞いただけなので、実際は計り知れないほど怖い体験だと思う。

震災の朝、5 時 46 分に地震が発生し。普通はまだ寝ている時間だと思う。寝ているときに地震が来て、地震の揺れで起きたら、本当にパニックになると思う。僕はつい最近、朝寝ているときに、震度 4 の揺れを体験した。携帯電話の緊急地震速報におこされて、すぐに地震が来た。まったく体を動かせず、早く地震が終わってくれという気持ちだった。僕の体感では、とても長いような感じがしていたが、後になって親に聞いてみると、とても短い地震だったそうだ。地震がおさまると、親が部屋に見に来てくれ、弟と妹はおびえていた。僕は震度 4 の揺れが、今までの一番大きな地震の体験だ。親は阪神淡路大震災を体験しているので、震度 4 の地震が来ても布団に入っとけとか、閉じ込められたらあかんからドアあけとけよとか冷静に物事を考えていたので、すごいと思った。阪神淡路大震災を体験しているから冷静に動けていて、経験が大事だと思った。

僕は学校で地震の勉強をしている。避難の仕方とか地震が起きたら机の下に隠れたり布団の中にもぐったりしなければならないのに、地震が咄嗟に起こると、茫然としていて、布団の中にもぐらずに天井をずっと見て、「やばいやばい」とかしか言ってなかった。震度 4 で、あれだけ恐怖を覚えたのに、もっと大きな地震が来たときに冷静に動けるか不安になる。でも、今回体験できたことによって、得られたものは多いと思う。地震が起きたら茫然としてしまうことは分かった。だから次は茫然とせずに、自分の身を守るようにできると思う。揺れが収まったら、親に大丈夫かといわれたけれど、次は僕が動けるようになろうと思った。寝ているときに地震が来る恐怖はすごいものだと思った。

僕の家は、地震による倒壊はなかった。身近な人で倒壊をしている人がいなかったのでよかったと思う。もしかして、寝ているときに家の天井が落ちてきたことを考えると、ゾッとする。僕なら死を覚悟するのではないだろうか。地震が起きた時に、朝ごはんの支度で、火を扱っていて、地震がきたら火が燃え移ると大変なことになる。朝早くから仕事に行く人などは、阪神淡路大震災の時はすでに起きていたと思う。でも 5 時 46 分なんて、起きてない人が大半だと思う。実際僕の家族は誰も起きてなかった。僕は、震度 7 の直下型地震は体験してないけど、体験した人の話を聞くと、下から突き上げられて一瞬なにが起きたのかわからないといっていた。

僕が体験した地震は、目が覚めたときに緊急地震速報とともに地震が来て、地震だとはすぐに気付いた。でも 1995 年には、まだ携帯電話を持っていない人もいたと思う。緊急地震速報がなかったかもしれない。今は緊急地震速報があるので、すぐ地震だと気づく。携帯電話の普及はすごいものだと思った。でも。緊急地震速報とほぼ同時に地震がきたので、これじゃあ全く意味がないと思う。地震が来る前に少しでも備えるように、もっと予知できるようにしてほしいと思う。予知をもっと早くからできるようになると、地震が起きる前に安全な場所を探してその場所で待機していれば安心だし、被害がほとんどなくなると思う。そうなれば、地震なんて怖くないだろうし、耐震対策をしていれば、失うものは少ないと思う。しかし、その予知ができないのが現状だ。南海地震は、30 年以内に起きるのが 60%と言われている。まだ、そんなおおざっぱな予知しかできない。もっと予知の範囲を狭めることができれば、対策しやすいのではないだろうか。将来には、予知ができるようになってほしい。

地震が起きて、ライフラインが使えなくなったけれど、僕の家はすぐに使えるようになってよかったと思う。電気はすぐに通ったので、そんなに大変ではなかったそうだ。でも、ガスが遅かった。僕は、ライフラインが使えなくなったことが一度もないけれど、普段の生活ができなくなってしまうのはつらいと思う。僕の家は、すぐに復旧して食べるものも普通にあったので、そこまで困らなかったけれど、被災者の中にはぜんぜん復旧していないところもある。僕の家は、つぶれなかったけれど、家がなくなった人だっている。家がなくなってしまったら、学校の体育館などの避難所で生活しなければならない。普通にそんなひとがいるのに、僕の家は幸福だと思う。避難所で生活している人は、食べるものも、支給されたものしかなく、お腹がすいていたと思う。風呂に入れたのもそんなに早く入れなかったと思うし、自衛隊の人が風呂を作ってくれなかったら、風呂に入れないと思う。体育館で、大勢の人が寝泊まりしていて、静かにしないと周りの迷惑になる中で、生活するのは本当に大変だと思う。

僕は高校 1 年生の時に、東北のボランティアにいった。東日本大震災の津波の影響で、泥やヘドロが家や庭などに上がり、それを取るのを手伝った。僕たちは、高校生で体力があるけれど、正直ヘドロや泥をとって土嚢袋にいれるのはすごく力がいるし、泥を入れた土嚢袋は重い。お年寄りの人は難しいと思うし、一つの家を掃除するのに一日もかかった。高校生が大勢で泥を取っても、全然進まない。自分の家が、泥だらけになっていて泥を取り除こうとしても、一人ではものすごく時間と体力を使うだろう。津波は、生き残った家までも被害がある怖い災害だと思った。

僕は東北のボランティアで、体育館を貸してもらって寝泊りをした。体育館の中には、ダンボールで仕切りがされていてひとつの部屋見たいになっていた。下には発泡スチロールが敷かれていて、毛

布や寝袋などがあったのだが、とても寝心地が悪く、全然眠れなくて、何度も目が覚めた。トイレに行くときに、少しでも足音を立てると、体育館なのでとても響くので、とても気を使って生活しなければならなかった。僕はまだ高校に入ったばかりとはいえ、クラスメイトで、友達もいたので多少は、気を遣わなくてもすんだのだが、本当の避難所では、知らない人もたくさんいると思うし、小さな子どもや赤ちゃんなど、少し騒がしくしてしまう人がいると思う。それに、地震で大変な思いをした人もいて、気も立っていると思う。足音で怒られてもおかしくない状況だと思う。僕は高校生なので、静かに行動するときはできるのだが、赤ちゃんは、お腹がすいたとか、おむつを替えないとすぐに泣いてしまう。普段ならすぐにミルクを飲まして、おむつを替えればすむのだが、避難所には支給品が届かなければないと思う。うるさかったら、皆イライラしているとおもうので、嫌な顔されると思うし、その親も申し訳ないと思う。

障害者が避難所に入るのを拒否しているところもあるらしい。障害者を避難所に入れないようにすると、障害者はどこに避難したらいいのかわからない。それに知的障害者の人はいつもと住んでいる環境が違うので、パニックになったりするので絶対付き添いの人が必要だ。確かに、僕が避難所で生活しているとして、寝ようとしているときに、うるさくされていたらちょっと腹が立ってしまうと思う。でも腹は立つけれど、避難所からでていけとは思わないと思う。同じ被災者で、住むところがなくなってしまっているのに、助け合わないのはいけないと思う。自分の家族がもしかして障害者と考えたら、避難所に入れないという考えを持つ人はいなくなるのではないだろうか。

僕の親は、震災を経験してから、募金活動をしている人がいると積極的にお金を入れに行っている。自分が体験するまではお金を入れなったらしいが、自分が阪神淡路大震災のときに支援で助けてもらったので、募金活動は大切だということが分かったといっていた。少しのお金でも、たくさんの人が入れると、莫大なお金になる。募金をしてくれている人は被災者の人の助けになれるようにとお金を入れてくれていると思う。その集まったお金はすごい金額だ。日本中の人から集めた募金で、被災地が復旧していく。日本中の被災地が復旧してほしいという気持ちがなければ、元に戻るまでは相当な時間がかかると思う。

被災地にボランティアしに行くのは、なかなかできないことだ。僕は、学校側から機会を与えてもらえて、クラスで行けたのだが、普通はお金を払って、自分で行かないといけない。でも、実際に被災地に行かなくても、被災者の役に立つことはできる。自分の家の近くの駅で募金活動をしたり、被災地に物資を送ったりできると思う。少しでも今、自分ができることをやるべきだと思う。

将来には、南海地震や東南海地震が起き、被災者が増え、困ることもたくさんある。僕も、地震にあって大変な思いもするかもしれない。自然災害が起きても、人が協力したら被害は収まるだろう。地震が起きないのが一番いいのだが、自然災害なのでしかたがないと思う。人と人との協力で、今後も自然災害の被害を減らせるようにしたいと思う。そのためには、身近な人や友達などに防災について伝えていき、防災がそこから広がって、みんなが助け合えるような社会になったらいいと僕は思う。

語り継ぐ - 母の震災体験

大森　美里

１．震災前日

1995 年 1 月 16 日　夕方　地震速報　神津島　震度 3
「こうづじま…って読むのかな？」そんなことを思った。自分たちの住むところに地震が起こるとは思いもしなかった。
翌日　1995 年 1 月 17 日　5 時 46 分　地震発生

２．発生時

ゴォーー…ドンッ！
それは今までに経験したことのない衝撃だった。横を向いて寝ていた母は、枕の下から聞こえる地鳴りの音に違和感を覚えると、次の瞬間には下から突き上げられていたという。とっさに隣で寝ていた 1 歳 5 か月の娘にかぶさると、背後から聞こえた「ううっ」という父の声。大人の腰ほどの高さがあるタンスの上から、ワープロが父の背中に落ちていた。
揺れがおさまり顔を上げると、すぐそばに見えるはずの公園の外灯が点いていない。停電だとすぐに分かった。部屋に置いてあったのはタンスふたつと娘のおもちゃ。揺れの方向に反した置き方をしていたためか、タンスが倒れてくることはなかった。一番大変だったのが台所。食器棚から飛び出した皿やお茶碗が散乱していた。飛び出したのはほとんど手前か上に置いてあった食器。下のほうのもの、奥に置いてあったものは棚に敷いてあったシートで何とか止められていた。
窓やガラス戸などは割れておらず、倒れたものもない。部屋の中だけなら、父の背中に落ちたワープロくらいしか落ちてきたものもなかった。

３．発生後

「家におったらやばいんちゃうか。」何が、ともわからないけれど、とにかく危ないと思った。何が起きたのか分かっていない、泣くことさえしていない娘を毛布にくるみ、必要最低限の荷物だけを持ち家を出た。娘が一泊できるくらいの用意は常に鞄にまとめておいてあった。おむつや着替え、割れた食器類とは違うところに置いていたため無事だった哺乳瓶、タオルなどを数日分だけ準備した。母乳で育てていたから、お湯に困ったり粉ミルクがなくなったりする心配はなかった。自分たちの物は、何を考えて持っていくものを決めたのか、はっきりとは覚えていない。
部屋から玄関に行くには、割れた食器が散乱している台所を通らなければならなかった。娘は抱っこで、母と父はスリッパをはいて、なるべく破片を踏まないように注意して歩いた。
地震発生から 20 分ほどで準備を終え家を出る。両隣の部屋の人の無事だけ確認して、車に乗って向かうのは北区にある祖父母の家。信号は機能していない。出発が早かったためか、混雑はしていなかった。信号が機能してなくてもまだ混乱はしていなかった。

４．避難

到着した北区では、地震の被害はそれほど大きくなかった。ガス、水、電気は止まっていたものの、数時間後には電気が復旧し、テレビのニュースをみることができた。映るのは地元神戸の燃えたり崩れたりという悲惨な姿ばかり。情報は、そのテレビと、ラジオから手に入れていた。
もし、ライフラインの復旧が遅かったら、加古川に住むいとこの家に世話になるつもりでいた。「一番近くて安全」で「同じくらいの年の子供がいた」からだ。北区についてすぐに、公衆電話からそのいとこに、もしかするとお世話になるかもしれないことを連絡した。北区は被害は少なかったとはいえ、普通に生活できるわけはなかったが、ガスもその日中に復旧したため、そのまま実家で過ごすことも公衆電話から連絡。母が電話を使ったのはその二回だけで、時間が早かったからか、並ぶことはなかったそうだ。
近所のスーパーには買い物客が殺到していた。避難所には入っていなかったけれど、小学校で救援物

資が配られると聞いて父と伯父がならびに行った。もらった食料は、菓子パン、牛乳、おにぎりなど。母はおなかに私がいたので、なるべく負担をかけないようにと家から出ることは少なかった。水道は復旧までに数日かかったため、食料と同じようにならびに行ってもらった。

５．自宅へ

家の電話がつながるようになり、祖父母の家には、父の友達から連絡が来るようになった。その友達が垂水まで駆け付けて、家の片づけを手伝ってくれた。母が家に戻ったのは地震から５日ほどたってからの最初の一日だけで、あとは危ないからと実家に残っていた。家に戻った日に、近くの公園で水を汲んでいる人を見かけた。家の水道がまだ復旧していなかったのだろう。

家の片づけとはいっても、そのほとんどは棚から飛び出した割れた食器類を捨てるだけで、片づけにはそこまで時間はかからなかった。ほかに壊れたり傷ついたりしたものはなかったらしい。

家の近所の友達に電話して、ライフラインが復旧したという確認を取ってから家に戻った。祖父母の家で過ごしたのは２週間ほどだった。

６．帰ってからの生活

家に戻っても、冷蔵庫の中の物はダメになっていたので、近くのスーパーで買い物。モノは少なかった。

家の中は、風呂のタイルにひびが入ったり、柱が傾いたりしていた。当時隣に住んでいた人が掛け合ってくれて、半壊と診断されたらしい。アパートなので、一つの部屋がそう判断されれば、建物全体が半壊ということになる。

目の前の公園には被害は見られなかった。

とにかくやらないといけないことばかりで、バタバタしていて当時のことはあまり記憶にない。それくらい毎日必死だったのだろうと思う。地震からの数日間の詳細なら、父のほうが覚えているんじゃないかと言っていた。ただ、母は妊婦で、動きたいように動けなくてもどかしかったことは覚えているそうだ。

７．今思うと

長田や東灘に比べて垂水は被害が少なかった。小学校に炊き出しに来たり、芸能人が来ていたり、というのは被害の大きかったところに行きやすい。神戸のために動いてくれる人たちを見る中で、今まで気づかなかった一面を見ることもあったけれど、チャリティーコンサートをやっていても見に行けるような余裕はなかったし、「実際、自分たちに何か力になったのか」といわれると、あまり実感はないらしい。

「地震があってから、ずっとドキドキしてた。」

感想

震災の体験を聞く機会は今までにもたくさんあったけれど、今回初めて聞いたことのほうが多くあった。祖父母の家に避難していたことは知っていても、そこから自分たちの家に戻ってきたきっかけを知らなかったり、今すごく仲良くしている近所のおばちゃんと、当時はまだ挨拶するていどの知り合いだったり。当時と同じところに住んでいるけど、「この辺に割れた食器が転がってて…」と話を聞いてもいまいちピンとこないこともあった。地震がきっかけで食器の置き方を変えたらしい。それも知らなかった。

タンスの置き方と揺れ方の関係で、寝ていた３人にはタンスは倒れてこなかったけれど、もしどちらかが違っていたら、家族が一人欠けていたかもしれない。それを聞いたときすごくこわかった。もしかしたら母に何かがあって私が生まれていなかったかもしれないし、姉がいなかったかもしれないし、父がいなかったかもしれない。全員無事だったから、今は妹もいて弟もいる。偶然に感謝したくなった。私の周りには、震災で亡くなった人も大きなけがをした人もいない。

震度４の地震でも相当怖かった。また大きな地震が来るんじゃないかと思った。姉妹そろって落着け

ないなか、母だけは落ち着いてた。「あたしがパニックになったらあんたらどうするん。」親は強い。
その地震がきっかけで、震災の話も聞いた。
前日に今日くらいの地震が遠くで起こっていたこと。だから今回も神戸じゃないどこかで大きな地震が起こるんじゃないかと思ったこと。
私は今までで経験した一番大きな地震がその地震で、家がガタガタなっているのが本当に怖かった。何が起きているのか分からないし、揺れがおさまった後でもちょっとガタって音がするだけでまた揺れるんじゃないかと思ってすごくこわかった。環境防災科に入って災害のことを教えてもらっていても、とっさに何もできなかった。地震だということすら、すぐには判断できなかったのだ。そんな中で家にいたら危ないから実家に行こうなんて考えられた母に驚く。
いつも普通に生活していて震災があったことを感じることは少ないけれど、家の外壁にひびがあったり、風呂のタイルに補修した跡があったり、よくよく見ると柱が微妙に傾いていたり、と、その影は実はいろんなところで見られた。
震災から２回ほど壁を塗りなおしたり強化したりはしているみたいだけれど、外（家）をいくら強くしても、自分たちがそれに見合う対策をしていなければ意味はない。ふだんは気にしていなかった自宅の防災。母ともうすぐ 3 歳になる弟は家にいることがほとんどだ。もし平日の昼前に地震が起こったり火事になったりしたら、母が一人で弟を守ることになる。ただでさえ怖がりな弟は、何が起きたかわからないなか、きっと泣いて暴れると思う。最近大きくなって力も強くなっている。そんな中でしっかり行動できるのだろうか。道をふさいでしまいそうなもの、家から出るのに邪魔になりそうなものはないだろうか。家の中を思い出すと危険だらけに思える。海も川も近くにある。また、坂の上に友達の家もある。家を出てしまいさえすればきっと無事でいられると思う。
18 年が長いのか短いのか。今の神戸は復旧しているのか、それともまだまだ途中なのか。その感覚は人によって違っていて、とても難しいところだ。
当時のことを何から何まで詳細に思い出すには、18 年という年月は途方もなく長いものと思えるのかもしれない。ただ、被災した当時のつらさや暮らしの大変さを思い出す（または忘れる）のにはまだ短いのかもしれない。
わたしは、どちらにも思える。母が当時のことを「あの時はこうで、これがあった、こうした、…」と話している様子を見ていると、まだ過去にするのは早いんじゃないかと思うけど、その一方で「あれは二日後やったか、一週間は経ってたか、…」と細かいことを思い出すのに苦労しているのを見ると、さすがに 18 年前のことじゃあはっきりとは思いだせないか…、とも思うのだ。自分はまだ生まれていなかったから被災していないように思うけれど、母からすると私も母のおなかの中で一緒に被災しているようなものだ。
人によって感じ方が違うということは、人によって対応が変わることになる。これからの対策も変わることになるのかもしれない。タンスが倒れなかった家でタンスを固定しようなどとはなかなか考えにくいだろうし、物が落ちてこなかった家で、上に物を置くのはやめようとはあまり思わないだろう。
だからといって、すべて経験しなければ対策できないのでは防災や減災を呼びかける意味がなくなったしまう。災害を学び発信しようとしているこの科にいるなら、経験していないことを予想して対策すること、そうするように呼びかけることが必要になる。自分がそうするべきだと思う。
そうするべきだと思うけれど、難しいとも思ってしまう。実際、母からこの体験を聞いて文章にすることはとても難しかった。どこまで聞いていいのか、どう聞いたらいいのか、より分かりやすく伝えるためにはどの言葉を選ぶのがベストか。自分が体験していないことを人から聞いて人に伝えていくことは、よくすることではあるけれど正確に伝えようとする程に難しくなっていく。
しかし伝えていかなければ、その人が話してくれたことがなかったことになり、私がその人の話を聞いたことがなかったことになり、その人の体験すらもなかったことになってしまうかもしれない。そうなってはいけない。

震災での問題

小川　拳

1. はじめに

当時は、家族 6 人、母、父、兄が 2 人、おじいちゃん、おばあちゃんと一緒に住んでいて、神戸市の北区に引っ越して、1 か月ほどで、引っ越したばっかりのなかで阪神・淡路大震災が起きた。家は一軒家の二世帯住宅でいつもおじいちゃんとおばあちゃんが一階、母と父、兄二人は二階で暮らしている。兄は 5 才と 6 才だった。もちろん僕はまだそのころ生まれておらず、阪神・淡路大震災より前の 1 月の初めにおなかの中にいるということが発覚したばっかりだった。

２．地震発生

（１）安否確認

5 時 46 分、地震に最初に気付いたのは、母だった。4 人で布団の上で寝ており、母のとなりに兄の二人が寝ていた。兄二人はまだ気付かずに寝ていた。とっさに母はその二人の上に覆いかぶさった。運よく何も落ちてはこず、三人は無事で、父が落ちてきた段ボールがおでこに当たって、少しはれただけで、特に大きなけがはなかった。揺れがおさまったのを確認して、母と父は一緒に子供を抱えて、一階にいるおじいちゃんとおばあちゃんを確認しに行った。その時はまだ、真っ暗であまり見えなかったけど、足元にいろいろ落ちているのがわかり、手取り足取りで一階へ向かった。一階へ行くと、おじいちゃんとおばあちゃんは揺れたことにとてもびっくりしていた。でも、二人とも無事だった。

（２）情報収集

テレビをつけようとしたが、電気がストップしていてテレビが見られなくて、何が起こったのかわからなかった。すぐにおじいちゃんがいつも聞いているラジオをつけた。それで、阪神・淡路大震災が起こったということがわかった。父と母は耳が不自由で聞こえないので、おじいちゃんに情報を教えてもらった。

近所の情報もおじいちゃんに教えてもらった。電気、水道が 3 時間ぐらいで復旧し、テレビを見ると、長田区、兵庫区あたりが火事になっていて驚いた。

（３）家の被害

家自体は壁にひびがいっただけで特に損壊などはなく、まだ被害の少ないほうだった。でも、引っ越したばっかりの新居だったので少しショックだった。やっと本格的に朝になって周りが明るくなったので、二階に戻ってみると、色々な家具などが落ちてあった。当時の大きくて重いブラウン管のテレビが 50 センチぐらい移動していた。また、飾り物はほとんど割れてしまい、食器は少し落ちていた。とりあえず、ちらかっているものをそうじした。

３．周りの状況

（１）インフラ

父は会社に行こうとしたけど、電車がストップしていて行くことができなかった。また、長い間大変だったのが、道が混雑していたことでした。8 か月ぐらいずっと大渋滞だった。なので、車で出かけるのがとても大変だった。

電気が復旧した時に親戚から電話がかかってきていたけど、回線が混雑していてやっと夜ぐらいになってつながった。

（２）食べ物

お昼ごろに近くのスーパーで買い物をしに行ったけど、牛乳とパンが品切れで手に入らなかった。当時、ここに引っ越してきたばっかりだったので、近所に知り合いがおらず、情報が入らなかったので、三日後にパンが新しく入ってきたということもおじいちゃんに教えてもらった。

（３）聴覚障がい者の会

自分と同じ聴覚障がい者が無事かどうか心配だった。ちょうど、秋ごろに地元の聴覚障がい者の会に入った。そして、その人たちが被害を受けていたことを知り、その被災体験も聞いた。

（４）聴覚障がい者の震災体験

地震で家が全壊して、下敷きになっていた。声を出して救助を求めようとしても声がでなくて、近くに消防隊員が来てもその消防隊員の大声が聞こえないので、わからなかった。なので、ひたすら、見つけてくれるまで待つしかなかった。

ある聴覚障がい者の老夫婦が、震災当時、家が崩れて下敷きになり、火がすぐ目の前までせまってきており、おかあさんは叫んでいて、お父さんはお母さんを助けて逃げようとしたけど、そのお母さんの声が聞こえないので、どこにお母さんがいるか、わからなかったそうだ。でも、火がせまってきていて早く逃げないといけないので、悩んだ末に決断をしてお父さん一人で逃げたそうだ。そのままそのお母さんは亡くなった。その後、お父さんはとても悲しんでいた。

（５）避難所での生活

僕の母は避難所に行かずに済んだが、避難所にいる聴覚障がい者はとても困っていた。例えば、やっぱり情報が入らないので、毛布や食料などが支給されることを知らなかったので、みんなが動き出したのを見て、それについて行ったけど、もう着いた頃にはなかったことが多かった。

聴覚障がい者の中でも、家が半壊して避難所に行くことになった人がいて、避難所ではこっちはうまくコミュニケーションがとれないのに対してみんなが普通に不便なくコミュニケーションをしていることにとてもストレスが溜まって、避難所にいるのがいやになり、「半壊した自分の家にいたほうがマシだ」と言っていた。

（６）不便な点

当時、家の被害に対して相応の補助金が出るという罹災証明書というものがあったが、その情報すら入っていなかったので、その存在を知らなかった。たとえ、知っていたとしても、こっちは耳が聞こえなくて、当時の市役所や各地の区役所の人たちは手話通訳者をつけていなかったので、そのひとたちと会話ができないという問題があるので、意味が無いと思っていた。

（７）改善

当時、神戸市は各地から福祉が遅れているという批判が相次いでいたというのもあり、聴覚障がい者が訴えかけたことによって、阪神・淡路大震災からおよそ１年後ぐらいに市役所と各地の区役所に手話通訳者がつくようになった。その手話通訳者は全国から集めた人たちで、聴覚障がい者への情報提供と様々な人とのコミュニケーションを手伝ってくれた。

４．当時の心境

当時、この阪神・淡路大震災によって 6400 人以上の死者・行方不明者が出たことによって、妊娠している人はみんな、おなかの中にいる赤ちゃんにとても強い未来の希望を持っていた。なので、駅などに子供の手形が展示してある。

感想

僕の母にこの話を聴き、今まで何度か震災の当時の話を聴いたことがあるが、ここまで具体的に細かく教えてくれたのは初めてで、きっと母のなかでも今まであまり言えなかったことがあったのではないかと思った。それを話してくれて聞くことができたので、本当にいい機会になった。
父も母も耳が不自由で、耳が聞こえないのだが、幸いにも北区にはそこまで他の地域と比べて被害が少なかったので、そこまで困ることはなく、困ったことといえば情報が入りにくいということだった。それもまだ、おじいちゃんがいたので、情報を知ることができた。

もし、おじいちゃんと一緒に住んでいなければどうなっていたのだろうと僕は話を聴いて思った。おじいちゃんは今でも、普段からラジオを聞いており、そのラジオがあったおかげで情報も知ることができ、助けられたと思う。たとえ、ラジオを持っていても使い方がわからなければ、災害時の混乱し、パニックした状況では使いこなせず意味が無いので、普段から災害時の必需品を持ち、定期的に使うことはとても大切なことだと感じた。
しかし、母と父だけなら、耳が聞こえないので、ラジオを持つということ自体がなく、持っていたとしても音が聞こえないので意味がない。よって、視覚的に情報が入ってくるようにしないといけない。しかし、電気が止まっていることによって、テレビは映らないかもしれないので、このころから携帯に情報が掲示板などに映し出されるようなサービスが必要だと思った。また、さらに、全員が見る掲示板も必要だが、いろんな障がいを持った人がいるので、その一つ一つの障害に関する専門的な情報が載るような掲示板があれば、その障害を持ったひとならではの困ったことが解決されると思った。
道路が 8 か月間ずっと大渋滞していたという話を聞いて、それだけ長期的になると会社はともかく家の経済的な面でも影響がでるのではないかと思った。また、買い物に行くにも、もし、近くのスーパーに買いたいものがなかった場合、遠くのスーパーに行かなければならない。しかし、そこに行くのにはとても時間がかかるので、行くまでに売れきれてしまっているようなケースがよくあったようだった。
僕の家だとおじいちゃんとおばあちゃんが一緒に住んでおり、家族が多いので、すぐに家の食料などがなくなる。だが、災害時の場合、いちいち何時間もかけて買い物に行くのは、とても不便だ。なので、食べ物を販売している企業が配達などをトラックで一気にすれば、家庭の車の交通量が減り、スムーズに各家庭に大量の商品や食料を運ぶことができるので不便さが解消されると思った。
また、各家庭だけじゃなくても、各地域の体育館や公共施設に送ることによって、近場で欲しい物を買うことができるので、不便が消えると思いった。
母が聞いた聴覚障がい者の話を聞いて、確かに聴覚障がい者からしたら消防隊員が救助に来ても、下敷きになっていたら見えず、耳が聞こえないので足音ではわからない。被災者側にはいつ消防隊員が来るのかもわからないのに声をずっと出し続けるのはとても体力を失うと思うので、無理なことだと思う。そのままだと命が助かるか助からないかは運と時間の問題になってしまうので、対策としては常に身近なところに笛を置いたり、身に着けたりしておくことがいいと思う。なぜなら、笛だと声より、楽に音を発することができ、聞こえる範囲も大きいし、笛の音の方が見つける側からすると緊急の感じが感じられると思うので、とても見つけやすいのではないかと思うからだ。
しかし、笛を持っていても離れた場所やわかりにくい場所に置いていても、家が倒壊した場合、家自体がぐしゃぐしゃになり、その笛をなおした場所が分からなくなるので見つけることができず、結局意味がない。なので、これもラジオの話と同じように普段からバックの中に入れておくなどの、災害時だけではなく、平常時から身近に身に着けておく必要があると思った。
もうひとつの聴覚障がい者の老夫婦の話を聞いて、とても悲惨な出来事で、もし、片方だけでも聞こえる人がいれば、その人の声を聴いてその方へ救助に行けるのだが、あのような、まして火事がせまってきている状況では両方共が聞こえなければ二人ではどうすることもできなかったと思った。そのような状況での、僕が考える対策はその地域の人たちが自分たちの地域にいる障害を持ったひとがどこに住んでいるかをしっかりと把握し、災害が起きた場合、地域の人たちがその人たちを最優先に安否確認や救助をすることだ。このような無理なことは地域の人全体で支えていくことが重要だと思った。

阪神・淡路大震災の話

勝見　周平

父親の話

あれは忘れもしないと言いたいところでもあるが、あれから約 18 年半も時が過ぎていて本当のところすべて鮮明には覚えていないこともある。ただはっきりとしているのは平成 7 年 1 月 17 日火曜日の寒い日のまだ夜も明けてない朝の 5 時 46 分に、普段通りに寝ていて夢か現実との境目である寝ぼけた状態の中、どこからか遠くのほうから「ゴォー」と言うような大型トラックか飛行機の爆音のような音が段々と近づいてくるのを感じて、私の寝ぼけていた頭のピントがあったとき、地鳴りとともに下から突き上げる感じの揺れが始まった。すぐに地震だと思った。でもただの地震でもないとも思った。当時 5 階建ての団地の 4 階に住んでいたのだが、寝ていた体がジャンプするほどのすざましい揺れが来た。ここは本当に 4 階なのかと錯覚するほどの大きな地震、実際は 3〜5 分だったらしが体感的には 30 分以上揺れていたように感じていたと思う。

当時は引越ししたばかりで家の中には家具などもあまりおいてなかったため寝ていたところで物が倒れたりとかということはなかったので、長男とお母さんを寝ていた部屋にじっと座らせて、なぜか私はまだ揺れている最中とっさに台所に走り買ったばかりの食器棚を倒れないように無我夢中で抑えていた。その時は何が何だか分からなくとりあえず倒れそうなものを必死で抑えたのだろうと思う。しかし、台所の周りの電子レンジがわたしの体の横へ吹っ飛び、仕事に持っていくお弁当のごはんの炊き上がる前の炊飯器も吹っ飛び、蓋が開き中からおかゆ状態のごはんが「ドロッ」とでてきて、私の抑えていた食器棚の反対側の扉から飛び出てきたコップや皿が私の足元で割れテレビが倒れ、トランポリンの上に乗っているような状態がいつまで続くのだと心の中で思っていながら、私は食器棚を抑えていた。ようやく揺れがおさまった。全身の力いっぱいで食器棚を抑えていたため、地震がおさまった時には体中の力が抜けてその場に座り込んだ。その時足の裏に激痛が走った。割れたコップや皿の破片で足を切り流血していたが、ここは四階であるからとにかく早くここから逃げなければと思いとりあえずスリッパをはき長男とお母さんと 3 人で玄関に向かっていった。まだ薄暗くて廊下にも割れたガラスの破片がその辺にもおちていたが、ゆっくりと前に進み恐る恐る玄関のドアを開けたら一応普通に開いたのでよかったと思った。寒空の中近所の人たちが寝ていたそのままの格好で外にいたが、まず目に飛び込んできたのは表のマンホールが富士山のように盛り上がっていて、驚いた。

あたりは一面ガスのにおいがたちこめていました。その時ガス栓などを止めるのを忘れていたのに気付いたためすぐさま自分の家に戻りガスの元栓を止めて自分の実家に電話をかけたが繋がらなくて、携帯電話もダメだった。水も出なく電気もダメだった。前日までは普通に当たり前であった生活、当たり前で使っていた電気やガス、水道が一度に全部使えなくなっていた。とりあえず他ではどうなっているのかわからないので、私の車のラジオを聞こうと思い駐車場に降りていくと私の車が隣の駐車スペースまで飛んでおり 2 メートルほど横にずれていた。まさかと思ったが間違いなく車もジャンプして横に少し吹っ飛んだんだと思った。本当に車までもがと信じられない感じがした。

車に乗り込みラジオをつけるとアナウンサーもかなり動揺している感じであまりよく耳に入ってこなかった。そして、ふと食料を買わなくてはと思った。近くのトーホーストアに歩いて行ったら人がちらほらいた。普段は開店が 9 時からなのでまだ閉まっていた。しばらくして店長さんが出勤してこられ店に夜中に配達されていたパンがあり、それを売ってほしいと言ったら大変なことになっているし、店の中もぐちゃぐちゃでレジも打てないのでどうぞさしあげますと言ってくださった。本当にこの時の店長さんには感謝の気持ちでいっぱいだった。

そこでもうひとつ思ったのが車のガソリンも入れなければ身動きが取れなくなるので、近くのガソリンスタンドに行ったが、電気がきいてないのでガソリンがでないと言われた。いろいろなガソリンスタンドを回ったけどどこもダメで動いているガソリンスタンドはかなり行列であきらめて気が付いたら伊川谷まで走っていた。そこで見つけたガソリンスタンドでガソリンを入れようと店員さんに聞いたら一人 10 リットルまでしか売ることができないと言われ、10 リットル分入れてもらったことをよく覚えている。

とりあえず家に帰り、電気はすぐに復旧していた。テレビをつけると神戸、三宮、長田方面では信じられない映像が映っていた。三宮のビルが倒れ、高速道路もありえないほどに横になぎ倒されていてなかなか現実の映像であるということを受け入れられなかった。私の実家のことも心配だったのだが、電

話がパンクしており使い物にはならなかった。もちろん携帯電話も全然使うことができなかった。いざという時の携帯電話なのに全く使えなくて携帯会社にちょっと怒りを感じた。それでも何回かかけ続けているうちに繋がり私の実家に電話することができた。

私の実家は明石の一番西でありいつもの地震よりは少し大きく揺れたもののライフラインの影響は少なかったのだが、電車はダメで車も神戸方面へ行くのは警察の許可を受けた車しか行けない状態だったみたいだ。

スーパーマーケットなどでも震災を受けた地区同様、物流がストップしているため食料や飲料水やトイレットペーパーなどが全部売り切れで、パニックになっていたそうだ。

あと大変だったのはトイレだった。水がでないので流せなかったのだが、地震の前の日にお風呂の浴槽に満杯にしていた水があり、その水をトイレに使ったり、タオルをつけて体を拭いたりしていた。ガスがダメだったのでたまたま家にカセットコンロとカセットボンベが数本あったので節約して使い、お湯を沸かすことができた。

地震から 3 日目のころだったと思う。神戸の長田区のほうから火災が発生してまたたく間に燃え広がり街中が火の海になっていた。

私はテレビのニュースを見たのだが、本当に地震で悲惨な状況の中、追い討ちをかけるように次々に焼けていき、消防車が侵入できなくて消火活動ができない状況であったため、ただただ焼け落ちていくのを見ているだけで人々が巻き込まれていくという悲惨なことになっていた。その炎の灰が垂水区に飛んできた。東のほうの空を見ると火事の煙の影響でどんよりとしたグレーの色の空だったことは今でも思い出すことがある。

務めていた会社が気になったので車で三宮まで行くことにした。そしたら国道二号線が大渋滞していて、他の人はリュックを背負って二号線や線路を歩いてひたすら歩いて会社とかに向かっているのだと思った。車でゆっくりゆっくり進んで、行く時にはまだ余震というものがずっと続いており、毎日毎日いつ来るか先の読むことが出来ない揺れにずっと不安だった。道中で止まっていると突然倒壊しかかっている建物がくずれたり、看板が落ちてきたりとで、すごくこわかった事もあった。そして会社まで約 8 時間位かけて行ったが、見るも無残な事になっていた。少し片づけを手伝いすぐに家に帰ることにした。長い時間を掛けて無事に家に帰ることが出来た。それから次の日突然私の友達が明石の一番西の土山というところから、50cc のバイクで背中にリュック姿で、足元のステップには段ボールがあり、段ボールの中身にはお米とカップラーメンなどをいっぱい詰め込んで、遠くはるばるもってきてくれた。そのときは本当に感動した。感謝、感謝だ。色々な人に助けられて今ちゃんと生きていられているのだと思う。

母親の話

内容は父親と大体一緒で、私のお腹には小さな命がいた。それが周平だ。当時は、まだ妊娠直後でお腹の中の赤ちゃんもじっとはしてくれなかった。私は震災後、普段していることが出来なくてちゃんと生活を送れなかった。そして、二歳の長男の世話と慣れない生活を送る毎日でストレスが溜まり切迫流産をし、お腹の赤ちゃんの身が危なかったこともあった。今となってはここまで健康に育ってくれて命の有難さに感謝している。

まとめ（感想）

阪神淡路大震災は、平成7年1月17日午前5時46分、淡路島北部の北緯34度36分、東経135度02分、深さ16ｋｍを震源とするマグニチュード7.2の地震だった。この地震により、神戸と洲本で震度6を、豊岡、彦根、京都で震度5を、大阪、姫路、和歌山などで震度4を観測したほか、東北から九州にかけて広い範囲で被害があった。神戸市の一部の地域では、震度7を観測した。僕の両親は垂水区に住んでいて、まだ長田方面より被害は少なかったけど、阪神淡路大震災の被災地でもある。長田区ではないからといって被害がなかった訳ではなく、神戸市全体が被害にあっていた。垂水区は、被災後長田区や須磨区から避難してくる人が多かったため、そのために作られた集合住宅などがたくさんある。

当時は神戸市の全体の電気、水道、ガスがとめられていたこともあり、被災者の生活リズムは大幅に変わった。仮設住宅で生活を送る人や、体育館で避難生活を送り、ご飯は配給に頼らなければいけない人々もたくさんいた。その中で、ご飯の有難さや家がある有難さ、普段何も気にしないで使っている家具や道具、そして食べ物の有難さを改めて実感したと思う。

阪神淡路大震災は直下型地震であり、二次災害の被害も多く、死者約6400名、負傷者が約4万3700名という多くの被害をもたらした。阪神淡路大震災では多くの人が震災に備えていなかった。阪神淡路大震災が起こったことにより、今では耐震工事を施している建物が多く、新しく建つ家に関しては耐震工事を施している家が殆どだが、阪神淡路大震災前では地震に対して関心を持っていなかった人が大半で、地震の恐ろしさを理解していなかった為、対策が十分ではなかった。これも被害を大きくした原因の一つでもあると思う。

阪神淡路大震災は、戦後起こった地震の中でも大規模かつ被害の大きい地震だった。被災した人は、一生忘れることのできない恐ろしい出来事だったと思う。私は阪神淡路大震災を体験していないが、両親や被災した人の話、そして当時の映像や写真を見て、何度も胸をしめつけられるような気持ちになった。私は阪神淡路大震災という出来事を忘れてはいけないと思うし、今後も震災を知らない子供たちや、これから生まれてくる子供たちに伝えていかないといけないと思う。

私の知らない家族の記憶

北川　操奈

１．あの日

（１）震災の朝

阪神・淡路大震災が起こったあの日は、代休明けの火曜日だった。父の務める会社は週の初めにミーティングがあったため、いつもより早く家を出る予定だった。そんな父の出勤の準備のため、5 時 30 分頃に母も起床していた。

（２）突き上げる音と共に…

5 時 46 分ころ、母は洗面所で歯を磨いていた。すると「ドンドン!」と下から突き上げるような音がした。「何やろ！!」と思った次の瞬間、横にグラグラと揺れ始めた。洗面所から何とかリビングに移動し、机に入ろうとしたがお腹の子供がだいぶ大きくなっていたため入れなかった。その時お腹の中にいたのが私だ。妊娠 5 ヵ月だったそうだ。

その後、大きな縦揺れと横揺れが起こった。周りの物がぶれて見えないくらい揺れていた。食器棚からは揺れとともに“ザックザック”と食器が飛び出だして割れていた。その音を聞きながら、隣の部屋で寝ていた 2 歳の姉のもとへ向かった。揺れが始まるまでの出来事は本当に一瞬だったが、揺れはとても長く感じたと母は語る。

（３）ぐねぐね。

揺れもおさまり、姉を抱きかかえると姉の体はぐねぐねだった。びっくりして、思わず「死んでるー!!!!」と叫んだ。一緒に駆け付けた父も「えー!!!!」と声をあげた。ぐねぐねの姉を何度も何度もゆすり続けていると、ようやく姉の体に力が入った。そのときやっと姉が生きていることを確認した。子供が寝ている時は力が抜けるものだが、いつもと少し違っていてなかなか起きなかったために本当に死んでいるのかと思ったそうだ。しかし、姉が寝ていた布団の枕元には、ラジカセが落ちていた。もしかすると姉は、頭の上にラジカセが落ちてきて、その衝撃で気を失っていたのかもしれない。それについては母も今だに分からないままである。

（４）車のなかへ

姉が無事であることを確認し、母は父と姉の三人で車の中へ避難した。家の中はテレビが落ちて、サイドボードの中身が隣の部屋で割れていた。台所は食器棚の中身が割れて散らばっており、お弁当用の油がこぼれて大変なことになっていた。そんな家の中で余震がくると、いつ怪我をするか分からなかった。そしてなにより家にいる事が怖かったために外に出たそうだ。母はその後、父と一緒に家の片づけに戻った。2 歳の姉には、家の中はまだ危険だったので車で遊ばせていた。しかし心配で母は何度も家の窓から姉の様子を確認していたらしい。そんな姉はというと、本震の記憶がないということもあり、車のなかを珍しい遊び場だと思ったようで、とても楽しそうに遊んでいたようだ。

（５）夜明け

夜が明けて日が明るくなった頃、空に黒いなにかが降っていた。「何が降ってるんやろ？」そんな風に思っていた“何か”が何であるのかを知ったのはしばらくしてからのことだ。あの“何か”は長田で起こった火災の灰だった。私が生まれる前から私の家は垂水区にあったが、風に乗りここまで飛んできていたのだ。長田で大火災が起こっているなんて、その時はまったく思わなかったそうだ。

（６）電話

地震発生後は、家の電話も携帯もつながらなくなっていた。しかし、私の住んでいる団地のすぐ横には公衆電話が設置されていた。公衆電話は比較的につながりやすかったため、母は親戚の安否確認をすぐにすることができた。幸い、母の実家も父の実家も被害の少ない地域に住んでいたため、無事であった。しかしその後は、地域の人たちが安否確認をするために続々と公衆電話へやってきて、公衆電話の前にはすごく人が並んでいたそうだ。

（7）ぜんざい

その日の 11 時頃、お腹に子供がいる母を気遣ってか、同じ団地にすむ人から「温かいものを食べなさい。」とぜんざいをいただいた。その人は、自分にも子供が 2 人いたのに届けに来てくれたらしい。

2．不便な生活

（1）眠れない夜

地震発生後、何度も何度も余震がやってきた。そのため、地震が発生した日から 2 日間くらいは、ベッドで眠りにつくのが怖かった。非常持ち出し袋を用意し、自分の横に備えた。そして何かあった時にすぐに外に出られる格好をしながら、リビングのこたつで寝ていたらしい。

（2）寸断されたライフライン

震災の影響で、ガス・電気・水…とライフラインのすべてが寸断された。とくに水が止まるということは大変なことだった。食事をしても皿を洗えなかったり、お風呂に入れなかったりと非日常な生活だった。そのためさまざまな工夫をした。食事の時は、食器の上にサランラップをのせて使った。食べ終わった後に丸めて捨てることができるため、サランラップは水のない生活で非常に役立った。ライフラインの中で電気は比較的早くに回復した。そのため母の実家からは鍋型のホットプレートが送られてきた。ホットプレートとカセットコンロなどを利用してしばらくはご飯をつくっていたらしいが、水は出ないため、汚れないように焼いて食べるような食事が続いたそうだ。

お風呂は、当然水が出なかったために自宅では入れなかったが、明石市の大久保に住んでいる父の実家はライフラインが寸断されていなかったため、お風呂に入りに行くことができた。正月が明けたばかりだったために幸い車には十分なガソリンがあり、車で大久保まで行くのに支障はあまりなかったという。しかし、いくら工夫をしてもやはり水は必要だった。家の近くに給水塔がたっていたが、お腹が大きいために母は自分で水をくみに行くことができなかったと私に話してくれた。

（3）慣れない生活

震災からすこし経つと、当時大阪勤務のサラリーマンだった父は仕事に出かけて行った。しかし、交通も寸断されている所が多かったために、福知山を経由したり船をつかったりして通勤した。そうなると、毎日家に帰ってくるのは難しかった。そのため一度出勤したら 1 週間は帰ってこない生活が続いた。自分で水をくみにいけない身重の母と、2 歳の姉だけで生活するのは難しかったために、父の実家での生活が続いた。父の実家は被害が少なかったものの、余震は続いており、お風呂に入るのがとても怖かったという。いつ余震が起こるか分からないためにずっとビクビクしており、お腹のなかの私に影響しないかとも心配になるほどだった。そして、母が一番大変だったことは、余震が起こった時に思わず出そうになる「あっ」という声をこらえる事だった。姉は、本震の記憶はないものの余震には怖がっていた。そして、それ以上に母の「あっ」という声で怖がっていたらしい。そのために、思わず出そうになる声をこらえていたそうだ。

慣れない、実家での生活で起こった母の変化とは、体が丸くなったことらしい。父の実家で生活するということは、知らない土地で生活することだった。妊娠中なので動かなければいけないものの、土地が分からないために、まったくといっていいほど外に出なかったので、太ってしまったらしい。そして、その影響もあってか、3800 kgのまるまると太った私が生まれてきたらしい。その話をしながら母は少し笑っていた。

３．今でも

震災から 18 年がたったが、あの震災以降、母は今でも夜眠るとき豆電球がついていないと眠れないらしい。そして毎日茶だんすに鍵をかけるようになった。あの阪神・淡路大震災で観音開きの茶だんすからは気に入っているお皿も全部飛び出し、茶だんすの下にお皿が挟まっていたりした。ざっくざっくとお皿が落ちて割れる音、あの光景、あの時と同じ思いや経験をもうしたくないため、震災後すぐに、茶だんすに鍵をかけたそうだ。そして母は今でも、どうしても鍵をかけなければ気が済まなくなった。家の茶だんすはベルトで壁と固定しており、非常持ち出し袋も用意して、サランラップのストックは常においている。あの阪神・淡路大震災は母にとってそれほど大きいものだったようだ。

感想

母の話を聞いていて、私が住んでいるこの町で、この家で、本当に大きな地震があったのだとあらためて実感させられた。阪神・淡路大震災が起こったのは、私がお腹の中のときだった。だから物心ついたころには、私の住む地域はすっかりと傷跡を隠していたように思える。私の唯一の記憶は、家にあったテレビの一部がぺこりとへこんでしまっていたことぐらいだ。でも、きっと母にあの地震でへこんだのだと教えてもらわなければ、記憶の一部にも残らなかったと思う。私の中で阪神・淡路大震災はその程度のものだった。しかしこの“語り継ぐ”で母から話を聞いているうちに、いくつか思い出したことや、思ったことがあったので、ここに書きたいと思う。

大分前、私が小学校 3 年生くらいの頃だっただろうか。私の住む神戸市で震度 4 くらいの地震が起こった。その時私は姉と母で晩御飯を食べていた。小さく扉がカタカタと音を立てて揺れた。その時、姉は一目散に机の中にもぐった。母も「机にもぐって！！」と私に指示をした。あまりにも必死すぎて、私は不思議に感じた。そこまで必死になる理由があの時は分からなかった。正直、私にとって地震は怖いものだという認識がなく、「お姉ちゃんのくせに、ビビりすぎやん！はずかし！」なんて思っていた。その時の私には些細な出来事だったけれど、その記憶はなぜか今でも鮮明に覚えている。

私の通っていた小学校では、1 月になると“しあわせはこぼう”という阪神・淡路大震災関係の冊子をつかう授業があった。そういう授業があったことから、自分の家がどんな状況だったとか、地震が怖いものだということは母から教えてもらっていた。それでもあの小さな地震の時、私はただ「揺れている」としか思わなかった。今考えると、姉のあの行動は間違いなく阪神・淡路大震災から来ていると思う。姉はまだ小さかったけれど、体は覚えているものだと思った。その時の記憶から、「やっぱり、経験している人と経験していない人ではこれだけ対応がちがうんだ。」と思った。

どれだけ言葉で伝えていても、経験していなければなかなか本当の理解はできないものだと感じた。それと同時に、環境防災科に入ってたくさんの話を聞き、いろんな事を教えてもらったけれど、体験していない私は知らないことだらけなのだと実感させられた。どうすれば分かることができるのだろうか。どうすれば経験していない私たちが、震災を知らない次の世代に伝えられるのだろうか。そんな風に、母の話を聞いた後に考えさせられた。

しかし、私は阪神・淡路大震災や、大きな地震すらも経験していないけれど、今地震を”怖いもの“だと認識している。いつからそう思うようになったかを考えてみると、東日本大震災の被災地を実際にこの目で見たときからだと思う。あの時私は、自然の恐ろしさを肌で感じさせられた。寝ているときに起こった余震にさえ、怖くてたまらなかった。私のそんな経験から、経験していなくても、災害を知り、私たちにどのような影響を及ぼすのかを知ることで、災害に備えなければいけないと思えるようになると思うようになった。経験していなくても伝えていくことは私たちにもできる。この 3 年間、そしてこの”語り継ぐ“を通して私はそう思うようになった。

そして・・・

母の話を聞いていると、私が今こうして普通に高校生活を送っていることがとても不思議に感じた。もしあの時違う場所に住んでいれば、もしあの朝母が違う行動をとっていれば、私は生まれてこなかったかもしれない。そう思うとなんだか不思議に感じた。それと同時に、もし生まれてきていたら友達になっていたかもしれない子が、お腹のなかで亡くなっているという現実を考えさせられた。生まれてこられなかった子がいるなんて、今まで私は考えていなかった。自分の母親に会う前に死んでしまった子

のためにも、私たちは今まで以上に毎日を大切に生きてゆかなければいけないと思う。

「語り継ぐ」

神品　悠生

１．はじめに

当時、わたしの家族は大阪府豊中市のマンションに住んでいた。わたしは生まれていない。

２．母

（１）朝

1 月 17 日は連休明けの火曜日だった。連休中に母の友達の結婚式があり、父は奈良の方に仕事に行っていたので、香川県にある母の実家から当時 3 歳の姉の面倒を見るために伯母が大阪まで来てくれていた。この日はその伯母が始発の電車に乗って帰る日だった。5 時半くらいに伯母を送り出し、母は仕事に行く準備をしていた。そのとき、阪神・淡路大震災は起こった。突然今まで体験したことのない揺れを感じ、立っていられなくなった。ただただ、姉を抱きかかえるようにしてうずくまっていたという。しばらくすると揺れがおさまった。どのくらい揺れていたかはわからないがすごく長く感じたらしい。時計代わりに付けていたニュース番組では、「地震です！！地震です！！」とアナウンサーが繰り返し、テレビ局周辺の情報を流すだけで震源や震度、マグニチュードなどの情報は一切入ってこなかった。伯母のことが心配になったが当時携帯電話など持っておらず連絡の取りようがなかった。姉は半分寝ている状態だったので何が起こったのかわかっていない様子だった。そして、特に怖がることもなくまた眠ったらしい。とりあえず、父は携帯電話を持っていたので電話をして無事を確認した。家具は大きく揺れていたが倒れることはなく、食器棚の中の食器が倒れるくらいだったので母はまたいつも通り仕事に行く準備を始めた。

（２）職場

いつも通り 7 時半ごろに家を出発し、歩いて保育所に行き姉をあずけたあと、バスに乗って箕面の職場に向かった。職場に着くと電車を利用して通勤してきている人たちは誰一人として出勤できていなかった。母の当時の職場は工業団地の中にあるクリニックで、働き始めて 1 時間くらいすると患者さんが来始めた。が、いつもの患者さんではなく、さっきの揺れで怪我をしたという人たちだった。いつもより患者さんは少なかったが、職員も少なかったため忙しく働いていた。すると、姉をあずけていた保育所から連絡があり、「今日はあずかれなくなったのでお子さんを迎えに来てほしい。」と言われた。母は仕事を早退し、姉を保育所まで迎えに行き、11 時ごろ帰宅した。

（３）帰宅後

家に帰ってテレビを付けた。そして初めて事の重大さを知った。神戸の街が火の海だった。前代未聞の大参事であることだけは理解できたが、あんなにたくさんの人が命を落とすことになるという意識はそのときなかった。テレビの前でただただ呆然としていたが、だんだん伯母のことが心配になってきた。しかし、どうすることもできなかった。しばらくすると、公衆電話から電話があった。伯母からだった。母は伯母の無事が確認でき、ひとまず安心した。伯母は交通機関がまったく動いていなかったので、まだ大阪で立ち往生していたらしい。今日は家に帰れそうにないので母の家を目指して帰ってくるということになった。結局、伯母が母の家に着いたのは 14 時ごろだった。

（４）１月１８日

次の日、伯母は大阪南港から船に乗って香川県の実家に帰った。本当は新幹線に乗って帰る予定だったが、新幹線の線路が倒れていたため動いていなかった。伯母が乗るはずだった新幹線が走っているときに揺れが来なくて本当に良かった、と母は心から思ったらしい。

（５）その後

豊中市は大阪の中で唯一「被災地」として認定されたこともあり、当時の自宅周辺の古い戸建ての家などは半壊していたりしていた。母は翌日から普通に働くことができ、生活に困ることはなかったが、神戸に親戚や知り合いがいる人たちは仕事を休んだりして支援をしたりしていたらしい。阪急・阪神・ＪＲなどのすべての交通機関がストップしていたため、物資を運んだりするのもすごく大変で神戸まで歩いたりもしていたそうだ。実際に最寄り駅であった阪急豊中駅は全壊していた。当時 80 歳くらいの母の叔父も三宮に住んでいたが無事だった。しかし、家は全壊した。そのせいか叔父は元気がなくなり、震災の約 1 年後、仮設住宅で亡くなった。母は震災が起こっていなかったら叔父はもっと長く生きられた、と言った。

３．伯母

（１）地下鉄

伯母は連休で母の家に来ていた。そして連休明け、1 月 17 日 5 時 46 分発の地下鉄で新大阪まで出て新幹線に乗って、そのまま職場に出勤する予定だった。しかし、電車は駅を出発し、すぐに停車した。車内のアナウンスで「ただいま地震が発生したもよう」と流れたが、伯母は揺れをまったく感じていなかった。電車から降りるよう誘導され、もといた駅まで線路の上を歩いて戻った。すぐ止まったわりには結構長い距離を歩いたらしい。駅に着いたが、まったく情報がなかったので伯母はとりあえずタクシーで新大阪まで行くことにした。タクシー乗り場には列ができていてタクシーに乗るのに 1 時間ほど待った。

（２）新大阪

新大阪に着くと「大きな地震が発生したため、ただいま新幹線は運行しておりません。」とアナウンスが流れていた。それでも、もしかしたら動くかもしれないと期待し、しばらく待っていると、何度か余震があった。伯母はそのとき初めて揺れを感じ、地震による恐怖を生まれて初めて味わったという。30 分ほど経ってから伯母は職場と実家に今日は帰れそうにないと連絡をしようと思い、公衆電話の列に並んだ。列は長く、結局伯母の順番がまわってきたのは 3 時間半後だった。とりあえず、職場に電話をかけ、理由を説明して休むことを伝えた。次に実家、その次に母にかけた。そして母の家に戻るためにまたタクシーの長い列に並んだ。今度は 3 時間待ちだった。タクシーに乗ると運転手さんが「早朝の揺れはすごかったですね。タクシーがポーンっと浮いたんですよ。最初は何が起こったのかわかりませんでしたよ。怖かったですねぇ。」と話してくれたらしい。

（３）母の家

母の家に着いたのは 14 時ごろだった。そこでテレビを見て初めて被害の大きさを知った。交通機関が麻痺し、流通が止まっているから食料がなくなってしまうかもしれないと、母が近くのコンビニでパンや水などを買ってきてくれた。3 歳の姉は伯母がまた帰ってきたことがうれしかったのか、とても楽しそうにはしゃいでいたという。

（４）１月１８日

翌日、7 時半に伊丹空港行きの阪急バスに乗った。が、渋滞に巻き込まれ、バスはなかなか動かなかった。いつもなら 30 分くらいで行けるはずの空港に着いたのは 5 時間後だった。やっと空港に着いたが飛行機は飛んでいなかった。しかし、阪急バスの運転手さんが「飛行機が飛んでないかもしれないから」と、大阪南港から高松行きの船が出ていること、その船に乗るための道のりなどをあらかじめ教えてくれていたため、伯母は無事香川県までたどり着くことができた。そのバスの運転手さんのおかげで伯母はその日のうちに香川まで帰ることができたのだ、という。船の待合室で流れていたテレビでは、死者・行方不明者の名前が発表されていてその多さに驚いた。母がつくってくれていたおにぎりを食べると安心した。高松に着いたのは 21 時過ぎくらいだったのでその日はビジネスホテルに泊まった。そ

して、次の日そのまま出勤した。

４．話を聞いて

（１）情報

今回、母と伯母の話を聞いて一番印象に残っているのが「情報がまったく入ってこなかった。」ということである。ふたりとも神戸の被害の甚大さを知ったのは震災が発生してから数時間たってからで、しかもそれまで普通に過ごしていたことには驚いた。それは今の時代ではありえないことだと思った。今はどんなに小さな地震でも「○○で地震が発生しました。震度は××で、マグニチュードは△△です。」くらいの情報はすぐに入ってくるからだ。

交通機関の運行情報もそれと同じで調べればすぐに情報が手に入る。もし、この時代に携帯電話などが普及していれば伯母はもっとスムーズに帰ることができたに違いない。

緊急地震速報など災害が起こるとすぐに情報がはいってくるのは、阪神・淡路大震災での教訓が生かされているんだということをふたりの話を聞いてあらためて実感した。そして、これからも災害が起こったときに正しい正確な情報が、よりスムーズに手に入れるできる技術ができたらいいな、と思う。

（２）連絡手段

伯母の話の中にあった職場や実家、母と連絡を取るために公衆電話に 3 時間半も並んだという話にはとても驚いた。電話をするのにアトラクションの待ち時間と同じくらい待つなんて考えられない。

そして、伯母のことが心配だったがどうすることもできなかったという母の話も印象的だった。やはり携帯電話の存在は大きいなと、あらためて感じた。

また、母と伯母は被害の少なかった地域でよかったが、神戸の人たちはもっと不安だったんじゃないかと思う。

それから、この話を聞いて災害用伝言ダイヤル 171 ガ重要であると思い、もっと多くの人に知ってもらい災害時には利用してもらえるように広めていかなければならいな、とも思った。

（３）寄り添うこと

母の叔父のような人の話は何度か聞いたことがあったが、自分の身近な人がそんな風に亡くなっているなんて知らなかった。叔父さんはきっと母の言った通り震災のショックで亡くなったのだと思う。今回は今まで聞いたことのなかったこういう話も聞くことができてよかった。

また、災害後このような亡くなり方をする人が少しでも減ったらいいなと、思った。それから、災害後心のケアが被災者には必要で被災者に「寄り添う」ことの重要さや大切さをこの話を聞いてあらためて感じることができた。

５．これから

日本では阪神・淡路大震災のような地震や東日本大震災のときのような津波、毎年夏になるとやってくる台風、それによって引き起こされる洪水や地滑りなどたくさんの災害が起こる。そして、それらの災害はいつ・どこで自分の身に起こるかわからず、日本に住んでいる限りそれらを避けることではできない。

しかし、日ごろから災害を意識して防災を行っている人はまだまだ少ないように思う。わたしの家庭でもわたしが環境防災科に入るまで「防災」という言葉が家族の会話の中で出たことはあまりなかったし、こんな風に家庭で阪神・淡路大震災について話したりすることはなかった。

だからわたしは、もっと多くの人たちに阪神・淡路大震災や東日本大震災などの大きな災害が他人ごとではなく、日ごろから災害に備えておくことがどれだけ大切かを広めて、「防災」を当たり前のものにしたいと思う。「防災」を浸透させ、身近なものにし、いつ大きな災害が起こっても大丈夫なような災害に強い社会をつくっていきたい。そして、これから先、災害によって悲しむ人がいなくなればいいと思う。

「語り継ぐ」

児玉　優奈

１．はじめに

1995 年 1 月 17 日午前 5 時 46 分、阪神淡路大震災発生。マグニチュード 7.3、震度 7 もの大きな揺れが神戸を襲った。

震災時、私は母のお腹の中で、震災を経験していないため、父と母から聞いた話をもとに書こう。

２．震災体験談

（1）震災前

当時、父と妊娠 7 ヶ月の母、1 歳 4 カ月の姉の 3 人で暮らしていた。家は 2 階建てアパートの 2 階で、1 階は自転車屋さんだった。毎朝仕事に出かける父を母と姉で見送り、昼間は母と姉の 2 人で過ごす、そんな生活を送っていた。震災が起こる数日前にディズニーランドに行ったこともあり、震災前日は「幸せだね」と過ごしていた。父と母は、地震が来るとは思ってもおらず、防災対策はしていなかった。

（2）震災当日

午前 5 時 46 分。父と姉は寝ていて、母はお弁当を作っているところだった。突然の「ゴォ～」という大きな音を聞き母は姉のもとに駆け付け、姉に覆いかぶさった。母の叫び声を聞き、起きた父は母の上に覆いかぶさった。揺れにより、姉の上にテレビが落ちてきそうになったりもした。姉は、地震を理解しておらず、起きると、父と母の顔を見て、にっこり笑っていた。揺れがおさまると、外に出ようとしたが、すぐにはドアが開かなかった。父が、ドアに倒れ掛かっているものをどかし、何とか一旦外に出ることができた。外は、薄暗く、雪がちらついていてとても寒かった。瓦の落ちている家が見られた。その後、父はストーブやキッチンの火を消しに行った。家の中は、家具が倒れていたり、食器が割れていたり、天井が落ちていたりと、ぐちゃぐちゃな状況だった。それから、外は寒かったので、姉が寒くないよう毛布で包み、車に避難し、車で暖をとっていた。

祖父は、震災が起きてすぐ自転車で駆け付けた。しかし、父も母も姉も車で暖をとっていたため、家にはおらず、家の中の様子を見て、死んでしまったと思った。その後、車にいる父と母と姉と会うことができ、安否確認をすると、仕事に行くため、家に帰っていった。

外が明るくなってくると、一旦家に戻った。少しの間は、ガス以外のライフラインは使うことができた。だから、テレビでニュースを見たり、母は姉にかわいそうな思いはさせたくないと、すぐにご飯を炊き、たくさんのおにぎりを作ったりすることができた。父は、家の天井が落ちていたため、放っておくと瓦が落ちてきて危ないということで、余震の続く中、屋根を修理した。また、隣の家は、壁から水が噴き出していたらしく、父が復旧作業を行った。

その後、最低限必要なものだけを抱え、当時近くに住んでいた母方の祖父母の家に、車で避難した。

（3）震災後

震災後は、家の中はぐちゃぐちゃで、姉が小さかったこと、母が妊娠中であったこともあり、50 日間程度は母方の祖父母の家で暮らした。ライフラインは、工事のため一時的に使えなくなることもあったが、使うことができた。ライフラインが使えたこともあり、生活に大きな支障はなく過ごすことができた。祖父と父は、仕事だったため、昼間は祖母と母と姉の 3 人で過ごす生活を送っていた。余震におびえる日々が続いた。

当時 1 歳だった姉は余震をひどく怖がり、何をしていても揺れるたびに動きが止まり、固まっていた。小さかった姉は、揺れを怖がるものの、地震を理解しているわけでもなく、毎日ニコニコしながら遊んだり、音楽をかけて踊ったりしていた。そんな姉の行動は場を和ますものとなっていた。親戚も、祖父母の家の近く住んでいたため、みんな、小さい姉を心配し、お菓子などを届けてくれた。

妊婦である母は、姉が小さかったこともあり、ずっと祖父母の家で過ごしていた。地震の数日後、検

診に行った。お腹の中の私は元気で安心した。
父は、一週間後くらいから仕事を再開した。仕事が再開するまでの一週間や、仕事の合間に、家の修理や片付けを行った。
それから、震災約 50 日後、自宅に戻り、震災前と同様の生活を再開した。

（4）父の体験

父の職業は当時も今も大工だ。
震災後、当時手掛けていた増築工事の現場は施主の都合によりストップした。身内や知り合いの大工の要請で屋根にブルーシートを被せる作業に奔走した。近所ではシートも手に入らなくなり、故郷である九州から親戚に送ってもらったりした。シート張りに行った先で両手を合わせて拝まれる事もあった。そんな中、高額でシートを張ったり売ったりする業者もあった。悲しいことだ。シート張りが落ち着くと、屋根の復旧作業に取り掛かった。毎日毎日瓦と土の撤去、そして下地の補強や補修の連続で何軒行ったかわからないほどだった。街の中がなんとなく埃っぽく感じた。カラーベストという瓦に代わる軽い屋根材が多く使われるようになったきっかけになったかもしれない。
建物の被害状況もさまざまで、柱や梁の補強を必要とする物件や基礎から直さないといけない物件、また傾いている家を起こすなど困難を要した。材料の確保や人員の確保も容易ではなく、建築資材の品薄状態や職人不足などが続き作業が進まなかった。特に電気、ガス、水道などの業者が手配困難となっていた。作業時間も朝 8 時前から夜 9 時や 10 時頃までと長時間やらないと間に合わなかった。朝から夕方まで住宅を施工し、そのまま百貨店などの店舗の工事に行って夜中まで仕事、朝方家に帰り風呂だけ入ってまた現場へということもよくあった。
今でもよく覚えていることがある。長田で建て替えの工事をしていた時。工事もだいぶ進み、近隣の人とも会話する様になった頃だ。現場の前の家の子供が夕方になると木屑などをそうじしてくれるのだ。夜 9 時頃になると今度はその子のお母さんがコーヒーを入れて持って来てくれた。私は「何時まで仕事しているの！うるさい！！」と怒られるのかと思ったのだが、「毎日遅くまで大変ですね」と差し入れをしてくれたのだった。他人の家の工事、まして遅くまで音をたてて迷惑をかけていたにも関わらず、親切にしていただいたのだ。
家を直していて「ありがとう」という言葉やちょっとした心遣いが、疲れた体を動かしてくれた原動力になっていたかもしれない。

（5）母の体験

震災当時、災害時要援護者といわれる妊婦だった母は、いろんな苦悩に直面したと同時にたくさんの人の気遣いや優しさに触れた。
お腹にいる子供をかばうため、自分が思うように動けず、不便だった。震災後は、とにかく不安な気持ちに駆られていた。寝ることができなかった。もし何かあっても、自分はいいから、姉だけは助けるよう、周りに頼んだ。自分の目で被害状況を見ること、父が仕事で自分のもとを離れてしまうこと、自分が死ぬとお腹の子供も死んでしまうことが怖かった。生活していくこと、子育てしていくことができるのか、将来が不安だった。というように、精神状態が不安定だった。それは、父から見てもわかる程だった。
当時は、たくさんの方々に助けてもらった。挨拶をする程度だった近所の人は、ケーキをくれた。親戚は、お菓子を届けてくれるなど、食べ物に気遣ってくれた。また、服の通販会社の方々から、震災のお見舞いとして、タオルやガーゼ、服を頂いた。それも、避難している祖父母の家まで届けてくれた。本当に助かった。感謝している。
震災 6 日後、お腹の子の検診に行った。寝不足のため、血圧が上がってしまっていたが、お腹の子は元気で安心した。その後、順調に成長し、震災から約 3 か月後の 4 月に出産した。入院中も、余震があり、怖かった。しかし、地震の揺れがあると、病院の先生がすぐに飛んで駆けつけてくれることで、安心することができた。

（6）伯母の体験

当時、伯母は伯父と 2 人、妙谷に住んでいた。父と母と姉が住んでいた家から、少ししか離れていな

かったのに、父と母が受けた被害と比べると被害は小さく、食器が少し落ちるという程度の被害ですんだ。その日の晩はガスを使わなくてもできるお好み焼きを親戚も呼んで食べたらしい。
震災の次の日から、伯父は会社に行き始めた。会社に行くと、被害が大きかったために、前の日から何も食べていない人がいた。伯父はその人たちに自分のお弁当をあげた。その話を聞いた伯母は、次の日から炊けるだけのご飯を炊き、できるだけ多くのお弁当を作って伯父に持たせた。
震災から何日か経ち、家を訪ねてくる人がいた。その人は家がつぶれてしまい、車で生活していた。伯母はその人に「お風呂入っていきますか？」と声をかけたが「家族のみんなが入っていないのに、自分だけお風呂に入るなんてできません」と言って帰って行った。

３．伝えたいこと

（1） 父より

地震の怖さも時間がたてば忘れてしまっている。しかし、テレビから地震の警報音が流れると身構えてしまうのは、あの時の恐怖が身体のどこかで覚えているからだろう。地震への恐怖心はあるものの、なかなか普段から災害が起こったら「こう動こう」などのシミュレーションは出来ないのが現実だ。阪神淡路大震災は、たまたま朝で家族がそろっていたため、家族の安否は確認できたし、家族で避難することができた。しかし、災害はいつ起こるかわからない。家族間でも連絡を取り合えるか心配になることもある。家族のコミュニケーションはもちろん、友人や仕事場、学校や地域でのコミュニケーションをとることが、災害が起こった時に重要なのかなと思う。だから、そのためにも日ごろからのコミュニケーションが重要だと思う。家族であれば、毎日の家族それぞれの居場所をみんなが把握しておくこと。地域であれば、あいさつなどを通して顔見知りになっておくこと、仲良くなっておくこと。普段、何気なく行っていることかもしれないが、重要なことだと思う。

（2） 母より

時間がたつにつれ、震災の記憶は薄れている。しかし、どこかで恐怖心はある。今でも、あの時の恐怖からか、テレビからの緊急地震速報の音や、震度１や２程度の地震でさえ、身体はこわばる。
私たちは避難所にいくことも、ライフラインが途絶えてしまうこともなく過ごしたが、生活に困った人はたくさんいる。水や電気を使うことができる、たくさん食べることができる、１つの家で家族と一緒に生活ができる、当たり前のようだけど感謝すべきこと。この当たり前のような日々に感謝して過ごしてほしい。
今ある命を大切にしてほしい。１日１日を大切に生きてほしい。

４．考えたこと

私は、神戸市に住んでいることもあってか、防災教育は小学生の頃から受けてきた。そんな防災教育の宿題と言えば、必ずと言っていい程、親の震災体験談を聞くことだった。そのため、親の震災体験談は小学生の頃から何度も何度も聞いてきて、父や母の震災体験やそれに対する想いは知っているつもりでいた。しかし、今回初めて話してくれた話もあり、父や母の震災体験に対する理解が深まった。また、環境防災科での３年間を経て、父や母の震災体験に対し、小学生や中学生の頃とは違った思いもあった。
私は、改めて、災害の脅威を感じた。初めて、父と母の個々の震災体験を聞いた。そのため、今までは、「父と母は震災後も避難生活をすることなく、ライフラインが途絶えることもなく、生活できただけよかった。」や、「父と母以上につらい思いをした人はたくさんいる。」などと思っていた。しかし、それは違った。父も母も、震災そのものに対する恐怖、震災後生活していく中で発生するいろんな苦悩や不安を抱え、生活してきたのだ。そして、震災そのものに対する恐怖は、今も身体のどこかで覚えているのだ。父と母は、普段、震災の話をしようとはしない。また、テレビからの緊急地震速報の音に対し異常なほどの反応を示す。これらの行動が、父と母の阪神淡路大震災に対する恐怖心を物語っていると思った。災害による悲しみやつらさは人それぞれであること、災害で負った傷は時間によっていえるものではないことを、改めて感じた。3 年間防災を学んできたものの、その父や母が感じる恐怖を分かることができない、また恐怖を軽減してあげることができていないことに、もどかしさを感じる。
一方で、たくさんの人の優しさにも触れたようだ。私は、父にとって忘れられない話が印象に残った。

父は、災害後の現場で働く上で、多くの困難と直面しても、寝る間を惜しんでも、働くことができていたのは、「ありがとう」という言葉やちょっとした心遣いがあったからかもしれないと話してくれた。私も、これに似たような経験がある。私は、東日本大震災発生の約 3 か月後、被災地で 5 日間のボランティア活動をさせていただいた。主な活動内容は、泥かきや清掃だった。海水を含んだ泥は重く、自分の想像を超える重労働だった。正直しんどいと思うことがあった。しかし、そんな私に、現地の方は、「おつかれさま。」や「ありがとう。」という声をかけてくれたり、アイスやジュースの差し入れをしてくれたりしたのだ。その言葉や気遣いは、私の活力となった。普段は何気ない言葉や気遣いが、この時は何百倍もの力に感じられ、人の温かさを実感したのだ。

震災から 18 年が経ち、震災を経験した父や母でさえ、地震への恐怖心はあるものの、震災の記憶は薄れている。私の世代から、震災当時生まれておらず、震災を知らない。出前授業に行くと、生徒から聞こえてくる災害は東日本大震災だった。これからどんどん震災を知らない人たちが増えていく。私は、父と母の震災体験談を聞いて、恐怖を分かることができないもどかしさを、また東日本大震災被災地支援活動を通して、自分の無力さを感じた。しかし、そんな自分にもできることがあることを知った。それこそが、語り継いでいくことである。まずは、災害そのものの恐怖を伝える必要がある。災害に対する恐れの気持ちが、備えるという気持ちにつながると考えるからだ。父と母の震災体験からも、教訓があった。災害に対する意識の低さが、被害を大きくするということだ。姉の上にテレビが落ちていたかもしれないし、障害物によりすぐに家の外に出られず、その間に余震が来て家が倒壊していたかもしれない、そうすると、取り返しのつかないことになっていたかもしれないのだ。いつ起こるかわからない地震に備え、家具の固定や家具の配置の工夫といった、ちょっとした災害対策が、生死を分けることになる。日頃からの災害に対する意識と、備えが重要なのである。また、父の伝えたいことにもあった、人と人とのつながりの大切さである。祖父母の家に泊まることができたことも、親戚が気遣ってくれたことも、日頃からのつながりがしっかりできていたからだ。挨拶程度の関係でも一つのつながりなのだ。日頃のつながりによって、災害時には助け合うことができる。日頃からの関係づくりが重要なのだ。父と母が経験したような恐怖を味わうことがないように、震災を経験した方々の想いが無駄にならぬように、教訓は多くの人に知ってもらう必要があると思った。母の伝えたいことにあった、当たり前のような日々への感謝の気持ち、命あることへの感謝の気持ちを忘れてはならないということも伝えていこうと思う。

今回のこの機会を通して、改めて震災について考えなおすことができ、勇気をもって話してくれた父や母や叔母に感謝したいと思う。これまで話を聞かせて下さった方々の想いを、また、自分の環境防災科での経験を、無駄にすることなく、これからもより多くの人に発信していきたい。

震災体験を聞いて

阪本　大也

１、　初めに

最初に、私は震災当時、影も形も無かった。だから以下の体験談は、当時も今も尼崎市に住んでいる母から聞いたものだ。

神戸市と比べると、尼崎市の被害は少ない。しかし、亡くなった人もいれば、倒壊した家屋もある。隣の伊丹市では、阪急伊丹駅の高架が崩落して、下の交番で寝ていた警官が亡くなっている。さらに武庫川を挟んで隣にある西宮市では造成住宅地の斜面が崩落して、多くの死者を出した。

震災は神戸市や淡路島だけではなく、他の近隣の町も大きな傷跡を残していったという事。この事を忘れないでほしい。

２、　尼崎での震災

兵庫県で南東端にある尼崎市は、西を武庫川、東を猪名川に挟まれ、平野部なため山はない。人口は現在約４５万人（神戸市約 154 万人）で神戸市、姫路市、西宮市に次ぐ県下第４位の人口となっている。

一方で、面積は 49.97 ㎢（同 552.26 ㎢）と人口にしては狭く、人口密度は 9010 人／㎢（同 2790 人／㎢）という兵庫県下で最も高い値となっている。

また、尼崎市は３つの鉄道が京阪神間で最も広い間隔で通っている。北から阪急神戸線、JR 東海道本線、阪神本線である。支線として阪急伊丹線、JR 福知山線、阪神なんば線も通っている。

私が住む園田は、猪名川の中州にあり、家はその中州の南のほうにある。そしてその中州を阪急神戸線が通り、その所に園田駅があり、知っている人は知っている園田競馬場がある。

父方の祖父母が住むその家は当時築 20 年くらいの一軒家で､道路を挟んで阪急神戸線が通っていた。

その阪急の向かい側には、当時２階建ての文化住宅が多くあった。

1995 年１月 17 日、連休明けの火曜日であるその日、父は１階の部屋で、祖父母と母と兄は２階の部屋で寝ていた。午前５時 46 分、まだ祖父・父・母・兄は寝ていて、祖母はトイレの中にいた。そこを強い下から突き上げる縦揺れが襲った。母曰く地震時、阪急電車の電線を青白い光が走った。さらに、当時自転車で出勤途中だった人から、その時空が赤かったと震災の後聞いた。

寝ていた４人は全員起こされ、祖母はあわててトイレの外に出た。横揺れが来るまで、母は「一体何が起きているのかわからなかった」と話している。母と当時赤ん坊だった兄が寝ていた部屋はタンスの上から物が落ち、兄は大声を上げて泣いた。

祖父母が寝ていた部屋では、仏壇の上に置いてあった線香立てが前に落ち、コップは倒れ、タンスの上に置いていた 14 型のブラウン管テレビは落ちる。

揺れが収まり、家族は１階の別のテレビがある部屋に集まった。１階も神棚の上の花瓶が下に落ち、食器棚の中の食器は割れ、壁にはひびが入っているという惨状だった。

最大といえる被害は、水道管が破裂したため水が来ないことだった。電気とガスはすぐに使用できた。外の方では塀が前に傾いていたらしい。

周りでも大変なことになっていた。

文化住宅が神戸のように火事は無かったが１階がつぶれる形で倒れていたり、阪急も止まった。その止まった阪急の線路の中に入った住民が付近の家の屋根の様子を確認して大丈夫だと判断したため、ブルーシートはかけなかった。

電気は前述したとおりすぐ後に復旧した。すぐにテレビを点ける。画面に映し出されたのは、横倒しになった阪神高速だった。この時になって、初めて神戸が大変なことになっている事がわかったと、母は言っている。

さらに、家族で口々に「大変なことになっている」と言い合っていた。

震災後の生活は、主に水にかかわる物で変わった。業者に頼んで破裂した水道管の修理を待つ間、5 分ほど歩いたところにある小学校の給水車に汲みに行った。風呂は小学校の近くにある銭湯に行った。祖母は時々当時伊丹に住んでいた父の妹の方にも汲みに行っていた。

水道は数日後には復旧して、生活は元に戻った。

３、　震災を知らない私たちに伝えたいこと

母が私たちに伝えたいことは 3 つある。
1 つ目に「困っている人がいたら助けること」である。
水が復旧するまでの間、家族は小学校の給水車や親戚の家に水を汲みに行ったり、テレビを見て神戸市内で活動するボランティアや、被災者同士の助け合いの様子を見てそう思ったらしい。
２つ目に「人に優しくすること」である。
これも水に関する体験から得られたことで、日常生活でも重要である。人に優しくすることによって、何かあったときに助けてくれる。そうすることで、自分やほかの人の生存率も上がる。
最後に「自分勝手に行動しないこと」である。
自分勝手に行動すれば、今まで保たれていた秩序が崩れ去るかもしれないし、そうなれば無駄な被害を生み出すことになる。

４、　私の感想

まずは体験談を聞いて。
これまでも何回か震災に関する話は聞いていたが、文面にまとめて見るというのはおそらく初めてのことなので、書いた文章を見直して、尼崎でも大きな被害があったんだなという実感を改めて得ることができた。
そして、新たな考えが浮かんだ。
それは『はじめに』でも述べたとおり、災害が起きた後、クローズアップされている町や地域の他にも、多かれ少なかれ被害を受けたところはあり、その地域への支援も忘れてはならない、という事である。
例えば 2011 年 3 月 11 日の東北地方太平洋沖地震の本震では、2004 年 10 月 23 日の新潟県中越地震時の新潟県山古志村以来の震度 7 を宮城県栗原市で観測した。
栗原市のサイトでは、2008 年 6 月 14 日に起きた岩手・宮城内陸地震により同市で震度 6 強を観測、多くの死者を出した教訓から、死者は出なかったものの多くのけが人と住宅被害が出ていると書かれていた。
さらに直下型地震だった兵庫県南部地震とは違い海溝型地震であるこの地震では、強い揺れが何分間にもわたって続いたはずだ。揺れを経験した住民にとっては、言葉では言い表せないほどの感情を抱いただろう。
兵庫県南部地震における尼崎市も大きな被害を受けた。
市のサイトによれば死者 49 人、負傷者 7145 人（重傷 1009 人、軽傷 6136 人）、全壊 5688 棟、半壊 3 万 6002 棟という大きな被害が出ている。
しかし、マスコミやボランティアの人々の多くは神戸に向かった。もちろん、震源に近いほうが被害は大きい。しかし、被災者が受けた心の傷は両方後々まで深く残り、なかなか癒える事がないかもしれない。
だから、心のケアを中心にして一番被害が大きかった都市・地域の周りにも目を向けてほしいなと、母からの体験談を聞いて考えた。
続いて、母から伝えてもらった事を聞いて。
まず言えることは、3 つとも有事の時には忘れてはならないという事である。
「困っている人がいたら助けること」は、現在の用語で言えば共助になるだろうし「人に優しくすること」はその土台になり得る。なぜなら、災害が発生した直後、自衛隊や警察、消防の機能は一時的ながらも止まる。つまり、公助を求めることができない状態になるのだ。だから、頼りになる人は周りの地域住民ぐらいしかいない。共助が必要となるのだ。普段から「困っている人がいたら助けること」が体に染みついていたら、体はすぐに動くだろうし、それに、もし助けを求めている人がいつも優しくしてもらっている人なら、どだい助けてあげたいという気持ちはますます大きくなるだろう。
ただし、助けを求めている人を救おうとする場合、気をつけなければいけないのが二次災害である。地域住民を助けに行った自分や、自分を助けに行った地域住民が、家の破片を踏むなどしてけがをしたら元も子もなくなる。
そして最後の「自分勝手に行動しないこと」も、例えば避難所で生活している時に大事になる。もし

配給の順番を無視して勝手に割り込んだ場合、周りの人からは嫌な視線で見られ、空気はギスギスするかもしれない。そうならないためにも、しっかりと空気を読んで、周りの行動に合わせていくという事は、避難所内のストレスを溜めないためにも大事なことである。

母から聞いた震災体験談を聞き、それを文章にまとめて、新たに考えたことが多く浮かんだ。

現在では南海トラフで起きる東海・東南海・南海地震について騒がれ、国は従来の想定を超える新想定を発表した。そのため、今では公助や共助で大きな動きが起きているが、地震が起きた後、つまり自助の後に最初に必要となるのが共助となり、それを支えるのは周辺住民との関係の深さである。近所づきあいは、絶対大切にしなければならないという事が実感できた体験談でもあった。

語り継ぐ

篠原　龍仁

１、地震発生直後

1995 年 1 月 17 日午前 5 時 46 分の地震が起きた時、家族は当時 2 歳の兄を挟んで父と母が寝ていた。しかし、ドンという音がして凄い揺れと大きな音で目が覚めた。父はとっさに兄に覆いかぶさった。そして揺れがおさまった。その後も、余震が何度もあった。その当時関西では地震が起こるとは思っていなかったので、知識もなくてとても不安だった。父が寝ていた場所を見てみると、ちょうど頭のところにテレビが落ちてきていた。兄は怖くてずっと泣いていた。部屋の中は、食器棚のものがほとんど出てきて割れていたり、タンスの上のものが落ちてきたりしていた。幸い家が壊れたりすることはなかった。

当時、私たちの家族は社宅に住んでいた。外ではみんな家を出てザワザワしていた。社宅が危ないと思った人は車の中に避難したりする人もいた。しかし、父が「外に出ても危ない」ということで自宅に待機していた。そうしていると、私たちの家族が出てきていないのを不安に感じて近所の人が大丈夫かと声をかけに来てくださった。

地震が起きる前の夜から空がどんよりしていて気持ち悪い感じがしていたらしい。

２、ライフラインが復旧するまで

（1） ライフラインがない生活

自宅の電気は地震が起こったそのすぐ後には戻っていた。そしてテレビを見てみると、自分の知っている街とはまったく違い、ビルが壊れたり、あちこちで火災が起きている悲惨な神戸の街を見て信じられなかったそうだ。また、テレビを見て初めて事の重大さを感じた。自宅近くの普通では壊れないだろうと思うようなコンクリートの地面でも、あちこちに地割れがあったり段差ができていたりして驚いた。

幸い電気はすぐに復旧したので、割れた皿やコップなどは掃除機を使って掃除することができた。また、当時は社宅に住んでいた。ほかの家族の人も父親は仕事上、帰って来れなく、不安だったので地震が発生したその日は一つの部屋で集まって皆で寝ることにした。また、少しの間実家に帰る人もたくさんいた。だから、社宅に残った人同士で密に話し合い助け合おうとしていた。

ガスや水がないと火を使って料理も作れないしお風呂にも入れないし、洗物や洗濯もできない。だから遠くのスーパーなどに行って紙コップや紙皿、カセットコンロ、サランラップや食べ物などを買っていた。スーパーに食材はあったので食べ物には困らなかった。また、カセットコンロで火をおこせたので、地震が起きた時はすごく売れていた。また、水を使わないでも洗えるシャンプーなどもあって売れていたらしい。他にも電気は使えたのでホットプレートを使って料理をしていた。また、洗い物ができないので紙皿や紙コップやサランラップを巻いたりして洗物をしないで済むようにした。水は地震が起きたその日から、近くの公園で自衛隊が毎日配りに来てくれた。その水は手を洗ったりトイレを流すのでほとんど使っていた。しかしトイレに流しても流れきれないのでかなり臭かった。

お風呂は祖父の家に借りに行ったり、友達や友達のおばあさんのお風呂に入らせてもらったり、銭湯に行ったりした。このことで 3、4 日に 1 回はお風呂に入ることができた。洗濯も祖父の家に借りたりして洗っていた。2 月 27 日に大阪ガスの人が、ガスの点検をしに来たが、その時はまだ使えなかった。ガスがなかなか復旧しなかったので 3 月 1 日から一泊二日で新舞子に泊まりに行った。そして帰ってきたときに、近所の人に使えると教えてもらい、大阪ガスの人に空けてもらい 3 月 2 日にはガスが使えるようになっていた。そして結局水は 3 週間くらい止まっていた。その時初めて、水道から水が出てくること、自宅で洗濯ができること、電気、家でガスコンロを使って料理ができること、自宅でお風呂を沸かすことができるなどの、当たり前の生活ができることのありがたさがわかった。父は仕事で一週間くらい帰って来れず、その時にできたシミは今も取れないらしい。

（2） 祖父母たちとの生活

舞子に住んでいた祖母と祖父の家は半壊してしまい、芦屋に住んでいた叔母の家族の家は全壊してし

まっていた。私の家は部屋の中しか被害を受けなかったので、祖父と祖母とその時祖父の家に住んでいた母のいとこと叔母の家族で合計 5 人が一週間くらいは自宅に泊まりに来ていた。通常の交通機関が止まっていたので、さまざまな経路を使って私の家に来た。2 日後に母のいとこは神戸は危ないということで地元の徳島に帰った。この時母は妊娠していて 4 月に私が生まれるのでお腹はパンパンだった。だから買い物などには祖母や叔母が行ってくれていた。そして、一週間後には祖母と祖父はマンションを借りることができて、叔母の家族は船で寝泊まりして生活できるようになった。叔母は大阪で仕事をしていて、大阪に行くと地震の影響がほぼなくて、近いのにこんなにも被害が違うのかということで驚いた。地震から 1 か月後くらいに近所の人が鉢伏山を家族で上ると東と西で景色が全く違い東の景色が荒れ果ててしまっていて信じられない光景が広がっていたらしい。

３、安否確認

阪神淡路大震災から少し時間経って少し落ち着いたころに、母は友達などの安否確認などをした。携帯電話は全くつながらなかった。自宅の電話も繋がりづらいが何とか繋がっていた。母が勤めていた会社では淡路に住んでいる人がたくさんいた。震源が淡路だということを知って、心配になり地震から 2、3 週間後に連絡をしたら、淡路の人は全員助かったが、須磨に住んでいる母の後輩が一人なくなってしまっていた。その亡くなってしまった人は、いつもは 2 階で寝ているが、帰ってきたのが遅くて次の日にも早くに仕事があるということで、その日だけ 1 階で寝ていて、1 階が壊れてしまい亡くなってしまった。近所に住んでいる人が亡ってしまい驚きと悲しみがあった。

４、母が伝えたいこと

阪神淡路大震災から早くも 18 年がたとうとしている。人々の力により街が復興していき、あの大震災の跡形もなくなっていき、記憶も遠のきかけている。

しかし、あの日、あの時に大地震が起き、多くの人々の貴重な命が奪われた事実は決して消えない。無念な思いで亡くなった方がたくさんいるだろう。きっと今この時代に生きたかっただろう。もっと笑って、もっと楽しんで、もっともっと生きたかっただろう。その人々の思いを決して忘れることなく、大震災を教訓として、知識を持って、もしもの時に常に備えておかなければいけない。そして近所の方々とのつながりを大事にしていかなければと思う。

５、感想

話を聞いて一番強く思ったことは神戸を大切にしようと思った事だ。そうするためにいずれ来る大地震に備える必要があるということだ。

つい最近に震度 4 の揺れでもすごく揺れたように感じて怖かったが、阪神淡路大震災では震度 7 ということで前の 5～16 倍くらいの揺れなので想像しただけで足がすくむ。また、震度 7 を体験する機会があったが、それも実際の家の中とかではなかったので、実際は急に来て、いろいろなものが落ちてきたりもするので、もっと危険で怖いだろうと思う。

私が物心ついたころには神戸はすでにきれいな街に復興していた。しかし、母の話や当時の映像などを見ても本当にこれが神戸か、と思うくらいの大きな被害を受けていた。母たちはそんな時代の神戸を知っていて、また住んでいた。そしてここまで復興できていると、私たちより神戸への地元愛は大きいのだろうと思う。そんな神戸を私も大切にしていきたい。また、父が兄を守るために覆いかぶさらなかったらどうなっていたかっわからないというのを聞いて、人を守ろうとしたら人は強くなって、何かに守られている気がする。父が兄に覆いかぶさっていなかったら、今の家族はなかったかもしれないので感謝したい。私も自分の命と他の人の命の両方を守れる人になりたい。

また、お風呂が使えないときに友達の母のお風呂を借りたりするのは、日ごろからの近所付き合いがないとできないことなので、やっぱり近所でのあいさつや触れ合いは大切だと思った。今はそんなに深くしゃべることはないので、あいさつなどはしっかり続けていきたい。そして家を出て自分で暮らすときが来たらもっと近所とかかわっていきたい。これらの助けがあったから今があると思う。だから、お風呂を貸してくれた友達の方や、お風呂や洗濯機を貸してくれた祖父母に感謝したい。

ガスや水、電気が止まってしまう生活は今では想像もできないけど、いずれまた大きな地震が来るといわれているので、それに備えてライフラインが止まらずに家も壊れないようなところに住むことが大切だと思う。また、非常持ち出し袋なども持っておく必要があると思った。

水が出ない生活で洗濯物もできないで洗い物もできないとき、近所の人などでいろいろな工夫の仕方などを聞いたりしたと言っていて、その情報を得ることができたのは、ここでも近所付き合いがあったからこそできたことだと思う。

祖父母は家が半壊したというのは、すごくショックだったと思う。また大きな地震は起こるといわれている。それに、祖父母は高齢で祖母は一階で寝ているようだ。だから、もうこのようなことにならないように、耐震診断などをするように進めていきたい。

今では、水道から水が出るのも電気をボタン一つで点灯させることもガスコンロで人ひねりすればガスが出るのも当たり前だ。しかし阪神淡路大震災などのときではそれらのものが全く使えなかった。私は今までこれらのものが全くつかえなくなった経験はない。工事で数時間断水になっただけでかなりの不便さを感じるのに、それが何か月も続くと想像しただけで不便さを感じるし、実際はもっと大変なのだと思う。いま、当たり前だと思って使っているこのような水、ガス、電気などが当たり前に使える今の生活を感謝する心を心に留めておいて、これからも生活していきたい。

自分一人だけで生活していくのなら何とかなるかもしれないが、家族を守るとなるとさらに大変だと思う。私の家族は 2 歳の兄とお腹に私がいる状態で大変だったと思う。そんな大変な状態でしっかり守ってくれた両親にも感謝したい。また、自分も家族を持ち守らないといけないときは最後まで守りぬけるようにしたい。

母に話を聞いている時に「もう 17 年も前のことだから忘れていることが多い」という言葉を頻繁に聞いた。時間がたっているので仕方ないことだとは思う。しかし、実際に被害にあった地に住んでいた母でさえ忘れていることがいくつかあったので、震災の被害を受けていない人や阪神淡路大震災が起こった後に生まれている人は、阪神淡路大震災のことを忘れてしまっているかもしれない。このことは絶対にあってはいけないことだと思う。もう阪神淡路大震災のような被害を出さないためにも、この震災を教訓にこれから起こるであろう、東海、東南海、南海地震などの地震に備えて防災力を上げる必要があると思う。だから、阪神淡路大震災を経験している人などがいろいろな世代の人に語り継ぐ必要があると思う。そうすると、人々の防災への意識も上がるし、阪神淡路大震災で亡くなってしまった方もそっちの方が報われると思う。だから、私たちはもっと地震や防災力への意識を高めて、実際に行動していかないといけないと思った。また、母に聞いた話や、今までたくさんの方に聞かせていただいた話、実際に見た光景や東日本大震災の現状などを、私が身近な人からでもできるだけ多くの方に伝えていくことが大切だと思った。だから、これからもっと自分の知っていることを正しく伝えていこうと思う。

私はもう阪神淡路大震災と同じような大きな被害は起きてほしくない。また、他の人たちも皆、そう思っているだろう。だから私は、こういう災害に備えて防災を呼びかけたり、市民の方の身や命が危険になった時に守れるようにしたい。そのために今は、阪神淡路大震災や他のいろいろな災害のこと、防災のことそして一般的な知識もしっかり身に着けておきたい。そして将来は市民の人たちの力になれたらと思う。

1995. 1.17　震災体験

志摩　美聡

私は、父母に阪神淡路大震災の体験についての話を聞いた。

１．１月 16 日　震災前日

（1） 怪奇現象

その日は地震が起こる前日だが、母はもちろん明日地震が起こるなどとはまったく思っていなかったので、いつもどおり、当時三歳である娘の遊び相手をしたり、散歩へ連れて行ったり、近所のスーパーへ晩ごはんの買い物をしに行ったりといういつもと特に変わらぬ生活を送っていた。しかし、母はそのとき怪奇現象なのではと感じ気づかないふりをしていたが、家にいたとき、小さくカタカタと揺れた気がしていた。

（2） 震災前日の夕日

そして夕方、父が仕事から帰ってきたとき「今日の夕日は独特な感じやなあ。」と言い、父と母２人で「明日、なんか起こるんちゃう？」と、笑いながら冗談で言っていた。
そして夜は、父が明日の朝家を出る時間がいつもより少し早めだったので、家族みんなで早くに就寝することにした。

２．１月 17 日　震災当日

（1） 地震が発生するまで。

母はその日、父が朝家を出る時間が早かったこともあり、いつもより少し早い時間に起き、朝ごはんの準備をした。
そしてそのあと、朝風呂する父のために湯船にお湯をためていた。

（2） 午前５時 46 分　地震発生

お風呂が沸いたので、母は父を起こしに寝室へ行った。そのとき父は、地鳴りのような床の奥底からゴオオオオオという音が近づいてきたように感じた。そして、ドーーーーンという音とともに体が突き上げられるような感覚になった。最初は、ガス爆発などがおこったのかと思った。そうすると、大きな横揺れが来て、地震が来たのだと分かった。長い間揺れていたような気がした。父はとっさに、隣にいた母と娘に布団をかぶせ、落ちてきたものなどで怪我をしにくいように「端によっとけ」と叫んだ。そして、揺れがおさまるのを待った。

（3） 発生してから

揺れがおさまって落ち着いてからリビングのほうへ行ってみると、食器棚の中にあったお皿などが飛び出して割れていたり、テレビが床に落ちていたりした。それらを片づける間もなく、震度４程度の地震がまた何回も来た。外へ出てみると、真っ暗ななか近所の人たちも外へ出ていて、みんな不安そうにしていた。
しばらくして、祖父母の実家が気になったので、近所だし大丈夫だったか見に行こうと思い路地を歩いていたら、とてもガス臭いにおいがあたり一帯に充満していた。近所の人たちが、「近くでたばこ吸わんといて。」や、「火気厳禁やで、ガス漏れしとうから。」といっていたのが印象的だった。実家に着くと、その団地の地面から水が噴き出していた。水道管が破裂していたのだ。もちろんそこは断水だった。また、停電しガスも止まっていた。しばらくして、家の様子も気になったので家に戻った。お風呂のお湯を沸かしていたことを思い出したので、まだお湯もあたたかくもったいないし、もしかすると当分お風呂に入ることができないかもしれないので入っとこうということになった。お風呂のお湯は、地

震による揺れで半分ほどになってしまっていた。だが、断水していたので、そのお湯がとても役に立った。
ガラスの破片などが床一面に散らばっていたのでとても素足では歩ける状態でなく、家の中も靴を履いて歩いた。

３．震災後

（1） 長田の祖父母

母は私を妊娠中だったこともあり、このまま家で暮らすよりも実家で暮らすほうが安全だと思い、1ヶ月ほど近所に住んでいる祖父母と一緒に暮らすことにした。
震災から 2 日目、一部の電気が回復しテレビを見ることができるようになったので地震の情報が入ってくるようになった。そこで目の当たりにしたのが、長田で起こっている火事と真っ黒な空だった。父は、自分の実家がとても心配になり家を飛び出した。父の実家はまさに長田だったからだ。祖父は、「危険だから今は長田へ行くな」と止めたが、父は不安でいっぱいだったので、その言葉を聞かずに急いで、長田へ行った。
車で長田まで向かったが、火事が起こっていることもあり規制がかかって長田へ入ることができなかった。しかし、何時間も待ちやっと入ることができた。長田の町は、火事などから逃げるために長田から出ようとしている人たちで溢れていた。家と家が倒れかかりトンネルのようになっていて、そこに火事の煙が充満し前がほとんど見えない状態だった。そんな危険な道でも、父は祖父母のところへ向かうためなんとか通っていった。そして、やっと実家にたどり着き、無事を確認した。亡くなっていたとしてもおかしくないような町の状況を目の当たりにした後だったこともあり、父はとてもホッとした気持ちでいっぱいだった。
無事を確認できたので、また垂水まで戻った。行きと同様で道がとても混雑していて、約 8 時間かけてやっと戻ることができた。

（2） お風呂の開放

家が壊れていなかったので避難所へ行かなかった父母は、水やガスが止まってしまっていたので生活に困っていた。家でお風呂に入ることはできず、お風呂屋さんに並ぶのにもとても寒い中何時間も並ばなければならなかったので、三木市まで行ってみることにした。すると、神戸とは全く違い通常の生活をしているように見えた。水やガスボンベ、食料などもたくさんあったので大量に買って帰った。
帰り道、たまたま通りがかったところにホテルがあり、そこがお風呂の開放をしてくれていた。父母と娘 3 人で入らしてもらい、1 週間ぶりだったこともありとても気持ちがよかった。
垂水に戻ってから、そのことを祖父母にいい、次の日 5 人でそのホテルまで行ってお風呂にはいらせてもらった。

（3） 会社へ出勤

震災が起こってからは、会社自体も壊れていたということもあり当分は出勤することができなかった。やっと出勤できるようになったのは、震災から約 1 か月後だった。その時は、片付けに来ることのできる人が片づけてくれていたのでだいたいは片付いていた。職場の仲間も、次々に出勤してきた。
しかし、その中には亡くなった方や大切な人を失った方もいて、職場は普段のような明るい雰囲気ではなかった。

（4） その後

通常どおり、朝起きて仕事に行き、ご飯なども普通に食べることができるなどの生活に戻ってきたのは、約 3 か月たってからだった。しかし、倒壊したビルや家屋などのがれきの処理はまだ進んでおらず、交通事情も悪いままであった。本格的に復興へ向かいだしたのは半年過ぎたごろから 1 年ぐらいたってからであった。

（5） わたしの誕生

震災から 4 か月後の 5 月 15 日、私が誕生した。幸い、震災後少し経ってから生まれることができたので、健康で快適に過ごすことができたが、看護婦さんから聞いた話では、震災が起きたときに生まれた子やそのお母さんは、暖房もつかない寒いところで過ごしご飯も質素なものしか出してもらえない状態であったそうだ。私や母は運が良かったと言っていた。

話を聞いて、私が思ったこと、考えたこと。

私は、今までいろいろな方から、たくさんのさまざまな震災体験を聞かせていただいてきた。
だが、震災当時、私自身はまだ母のおなかの中にいて、この世には生まれていなかったので、話を聞かせていただいただけで実際には体験していない。
そのこともあり、話を聞かせていただいているときも、どこか他人事のように、「かわいそう」とか、「大変だったのだな」という風に感じながら聞いていた部分もあった。
しかし、今回“身近な人の震災体験を聞き、語り継ぐ”ということで、私は父と母の体験を聞かせてもらった。今までも、何度か聞いたことはあったのだが、ハッキリとそのときの状況などが分かるように聞いたのは、はじめてだったので、感じることが多くあった。
父母の震災体験を聞いていると、そのときの家の、お風呂場や台所、寝室などの位置を知っているので、私自身もその場にいるような気持ちになり、とてもこわく感じた。話を聞いているだけなのに、怖いという感情をもってしまうということは、体験した方たちはもっともっと怖い思いをされたのだなと感じた。
話を聞いて、私が一番感じたことは家族や身近な人たちの協力することの大切さだ。どれだけ怖い思いをしても、傍に家族がいることで気持ちも強くなれるだろうし、乗り越えることもできる。父母や祖父母がお互いのことを考え、協力し合ったことにより大変な状況でも乗り越えられたのだろう。どんな時でも、家族のことを大事に思って行動した父と母を、私はとてもすごいなと思い、尊敬している。
話の中で、お風呂をたまたま朝から湯船にためていたので、断水してからも少しの間はそこまで困らなかったということがあった。そのときは、“地震が来るから”と分かった上で事前に対策をするつもりでためていたわけではないのだが、そういった小さいことでも、日頃からの備えや意識が必要だと思った。
たとえば、連絡をとるためには欠かせない携帯をできるだけきちんと充電しておくとか、情報収集のために必要なラジオなどの電池がなくなっていないか確認することや電池のストックを準備するなど、たとえ小さなことでも、もしものときのために備えておくという意識を持つことが大事だと、話を聞いて考えた。
阪神淡路大震災によって、たくさんの方々が亡くなり、傷付き、苦しんだと思う。そんな中で、私の家族はケガもなく無事で、そのあと元気に私を産んでくれたことに、本当に感謝しなければならないなと思った。
この先、阪神淡路大震災の時のような、大きな地震がまた神戸にやってくるかもしれない。
私はこの前、はじめて神戸で震度 4 の地震を経験した。たぶん、私が経験した中では今までで一番大きかったと思う。とても大きな揺れに感じ、すごく怖かった。揺れているときはなにも考えることができず、自分がどう行動すればいいのかがわからない状態だった。
揺れがおさまり、気づくと高いところに置いているものなどが落ちてきていて、私の部屋は対策が全然できていないということがハッキリとわかり、改めて対策をきちんとしなければならないということを感じさせられた。私はそのとき、環境防災科に入り二年間防災について学ばせてもらっているのに、自分の身の回りの対策がきちんとできていないということを実感させられ、恥ずかしく感じた。
せっかくこの環境防災科で学んだことや、父母から聞いた話、被災者の話などを聞かせて頂いたのだから、それを忘れず、自分自身の周りはもちろん、学んだことや聞かせていただいた話をできるだけ多くの人に伝え、語り継ぎ、次に生かすことが大切だと思った。
東海、東南海、南海地震がもうすぐ起こるだろうと言われている。
その地震が発生したとき、今のままの状況ではまた阪神淡路大震災の時のように、多くの犠牲者が出てしまうと思う。私自身も、その地震によって死んでしまうかもしれない。だが、まだ私は絶対に死にたくないと思っているし、みんなそうだろうと思う。そのためにも、できるだけたくさんの方がきちんと防災に対して関心を持ち、他人事だと考えず、目をそらさずに向き合わなければいけないのだろう。

私も、今まで他人事のように自分は大丈夫だと考えてきたが、父母の話を聞き、私たちの身にも誰の身にも大規模な災害が起こってしまう可能性は少なからずあるのだと実感し、目をそらさずにきちんと向き合おうと思えた。

これから先社会人になったとしても、もっと防災について学び、知識をつけ、自分や周りの人が少しでも犠牲者になりにくいようにしたいと思う。みんながそうすることによってたくさんの方が被害を軽減できるのだろう。

私は今、高校三年生なので、この環境防災科で学べるのもあと少ししかない。その残り少ない日々を無駄にせず、多くのことを学び、その知識を生かすことができるよう努力しようと思う。

知られざる母の震災体験

竹内　大輝

１．あの日…

18 年前の阪神・淡路大震災では、当時、娘（姉）は、1 歳 6 か月で、息子（僕）は妊娠 3 か月だった。長田区にある 10 階建ての市営住宅 4 階に、当時は住んでいた。

最初、「ドーン」という何かにぶつかるような強い衝撃の音がして、体が上に持ち上げられるようになったと思ったら、次は強い横揺れで、何が起こったのかわからなくなったそうであった。強い揺れが収まっても、立つことが出来なかったそうである。気が付くと、家にある家具や食器は、すべて倒れてしまっていた。近所の叫び声が聞こえ、「家に居ては危険だ。」と思い、倒れている家具や食器の上を通って、外に避難した。辺りを見ると、木造のほとんどの家が潰れていた。より遠くを見ると、次から次へと火事が起こって、こちらに迫ってきたのであった。私は、その時、妹の家族が近くに住んでいたので、とりあえず、妹の主人の実家が、名谷にあるので、車で移動して、実家に行った。

移動したのが、早かったため、幸い道路の渋滞に合わなかった。移動している時、窓から辺りを見渡すと、「一瞬の出来事で、町があんなに変わるのか。」と思うほどの凄まじい光景だった。それから、名谷での避難生活が始まったのであった。

名谷も水道やガスが止まっていたので、毎日水汲みや食料の買い出しに明石や姫路など神戸市外まで、車で移動していった。

２．九死に一生　救われた命

それから、私の妹の主人が仕事をしていた時の出来事であった。当時、一度仕事に出ると、24 時間体制になっていたそうである。なぜ 24 時間体制になったのかというと、水道とかガスが、まだ止まっている状態なので、水汲みや食糧を運ぶなどのボランティア活動の仕事も含まれていたからだ。それにより、いつも以上に疲労が溜まったり、睡眠不足になったりなど、体が限界に達していた。その状態で、ストーブなどの暖かい部屋にいると、つい眠くなってしまうのだ。そのせいで、妹の主人が一酸化中毒になり、「お父さん、お父さん」と叫んでも全然、反応しなかったそうであった。扉を開けようとしても鍵がかかっており、ガラスも強化ガラスなので、壊そうとしても出来なかったそうであった。誰もが諦めかけていたその時、自衛隊の方が異変に気づき、駆けつけてくれた。

駆けつけた自衛隊の方は「どうされました。状況を説明してください。」と尋ねたが、私は、パニックになっていたので、うまく状況を説明することが出来なかった。ただ唯一言えたのが、「どうか、助けてください。」、この一言だけだった。うまく伝わったかはわからないが、自衛隊の方は「わかりました。」と力強く答えてくれた。それから、ほどなくして救助活動に取り掛かっていた。特殊なドリルやハンマーを使って、強化ガラスを壊していた。救助活動をしている時も、私のことを気遣ってくださり、「このくらいのガラスならすぐに壊せますよ。」「後、もう少しですからね。」と声をかけてくれた。そのおかげで、少しは楽になれた。強化ガラスは数分で壊れ、その壊れた所から手を入れて、鍵を開けた。開けた瞬間、白い煙がドーと出て、周りが見えない状態だった。それから、煙は消え、周りが見えだした。そこには、変わり果てた妹の主人がいた。自衛隊の方の応答にも答えられないほど、意識を失い、危ない状況であった。自衛隊の方がすぐに救急車や大学病院を手配してくれた。

大学病院に着くとすぐに、緊急治療室に運び込まれていった。数時間後、酸素マスクを付けた妹の主人がタンカに運ばれていた。私は、担当の医師に「ありがとうございます。」と言いながら、深々と頭を下げた。すると、担当の医師は、「私のおかげではありません。後、5 分から 10 分救助するのが遅ければ、助からなかったでしょう。救助してくれた自衛隊の方に感謝するべきです。」と言った。私はこの時、「自衛隊は、神様みたいな存在だ。」と思うようになった。

あの日の出来事を母は「これからも忘れることのできない日だ。」と言っていた。

３．度重なる危機

あの出来事からすぐにインフルエンザが流行し、私も感染してしまった。私が妊婦であったこともあ

り、病院で入院することになった。先生には、「お母さんより、お腹の中の赤ちゃんが危険な状態だ。」と言われた。ちなみにその時の赤ちゃんが、息子（僕）であった。点滴や抗ウイルス剤などの治療のおかげで、何とか危険な状態は免れることが出来た。約１か月弱で、退院し、退院後はすぐ「休んでいた分を取り戻さないと。」という思いから、仕事に復帰した。通勤手段として、ＪＲ鷹取駅まで歩き、職場が三宮駅付近だったので、三ノ宮駅まで電車を利用していた。当時の鷹取駅近辺は、焼け野原状態だったそうだ。そして、職場に着くのも現在なら１時間もかからなかったが、当時は約１時間半や２時間かかったそうだ。通勤によるストレスと仕事による過労の原因で、ある病を発症し、私は再び入院することになった。その病は、「切迫流産」だ。

切迫流産とは、流産が始まろうとしている状態のことだ。陣痛のような痛みが、私を襲った。しかし、症状が軽かったため、流産の危険はなかった。「この子は必死に生きようとしている。」と私は、改めて思った。極度の過労によるものだったので、インフルエンザの時よりも入院生活が長くなったが、2 か月後には、無事退院することが出来た。

４．その後の生活

退院後、私は仕事を続けながら、阪神・淡路大震災の時に住んでいた家の掃除を行っていた。あの日以来、立ち寄ってもいなかったので、震災から半年後に家に行った。扉を開けた瞬間、今まで見たことのない光景が、広がっていた。ガラスは全部割れ、棚やテレビなどは転げ落ち、食器も割れて散乱していた。家の掃除は、相当の時間がかかった。その中でも一番大変だったのが、台所やリビングの掃除だった。台所では、食器などが割れて、散乱し、冷蔵庫の中の物も飛び出していた。それをゴミ袋、何袋も使って、処理した。リビングでは、大きい棚が倒れ、中の服が部屋中に散乱していた。棚を持ち上げ、掃除した。今となってはすぐに終わるフローリングの床の拭き掃除も、当時は、4 日、5 日かかりました。掃除を行ったけど、まだ住めるような状態ではなかったが、いつまでも避難生活をしているわけにもいかなかったので家に戻る決心をした。

ところが実家（私の家）は全壊だったので、私の母と父と一緒に住み始めた。当初はなかなか慣れなかったが、時間とともに慣れていった。そうしている間に店や長田の町が復旧し始めていたので、家具や食器など家財道具を買うことが出来た。さらに、食材も以前と比べて、たくさん買うことが出来た。

その時、私は妊娠 7 か月に入っていた。産休までは、まだ１か月余りあったので、仕事に復帰した。この時期から時間が経つのが早く感じて、気づけば徐々に町も復興し始めていた。その 3 か月後、出産があり、息子が誕生した。忙しい時もあったが、私たち家族に再び笑顔が戻った。

５．１８年目の思い…（母の感想）

今思えば、長かったような短かったような思いだ。2 年前の東日本大震災をテレビで見ると、忘れていた 18 年前のあの日のことが思い出され、怖さで体が震えてきた。この話を息子にする時、18 年前は無我夢中だったので、どういう避難生活をしていたのかうまく表現出来なかったことや詳しく話せないことも多々あった。ただ、あの地震の揺れの恐ろしさは、18 年たった今でも体に残っていた。

こんな怖い思いが残っている時に、東南海・南海地震が起こると、テレビで報道されていた。今後起こりうる災害にどう対応したらいいのか正直、わからなかった。しかし、あの日の教訓から非常持ち出し袋を用意したり、家具の固定を行ったりなど、自分の出来る範囲で備えていきたいと思った。さらに、津波も発生すると言われているので、どこに避難して、どういう道を通っていけばいいのかなど明確な避難ルートを家族で話し合える機会を作りたいと思うようになった。

この「身近な人の震災体験を聞く」を行う前から、息子には、何回も自分の震災体験を話してきた。しかし、この「身近な人の震災体験を聞く」を機に、今まで息子には話してなかったことや同じ話には、もっと詳しく話せたりなどしっかりと伝えることが出来たと思う。少し気持ちも吹っ切れて、私もこれから身近な人に自分の震災体験を語っていきたいと思うようになった。この話が、息子にとって、これからのボランティア活動や震災を語り継ぐ活動の中で、役に立って欲しいと思った。

６．話を聞いて…（自分の感想）

母の震災体験の話を聞くのは、初めてではなかったが、初めて聞いた話もいくつかあった。従妹のお父さんが危なかったことの話や赤ちゃんだった僕が、何度も危険な状態であったことなど。こんな壮絶

な震災体験を聞いたのは、高校１年の時以来だ。私は、実際に現地行き、ボランティア活動をさせていただいた。そのボランティアの際と被災者との交流会で、被災者の震災体験を聞くことが出来た。実際の話は、「近所の人が津波で流された。」や「津波にのまれる町をただ見ることしか出来なかった。」など、想像もつかない話ばかりだった。その時は、あまりの話の重さにただ聞くことしかできなかったのであった。その時の記憶が甦ってきたのである。まず、この機会から、以前の聞いたことある震災体験を思い出すことが出来た。さらに自分が知らなかったことを多く知ることも出来た。母もこんなに話したのは今回が初めてだと言っていた。母が少し涙を浮かばせながら話をする姿は、初めて見る光景だったので、とても驚いた。実際に震災を体験していない私は「母だけでなく、他の人も苦しんでいるのではないか。」と思うようになった。そして、「こんなことが起きないようにするためには、しっかりと備えをしていく必要がある。」と思った。

備えるといっても具体的に、そして適切に行わないと意味がない。例えば、家具を固定する時に壁の中に柱がないところで固定を行うとか、落ちそうなものに耐震ジェルシートを１個だけ装着するなどである。柱がないところで家具を固定しても、壁の中が空白の状態なのでただ釘を打って、固定しているだけである。それだと固定されていてもすぐに、物が倒れてくるので、固定をする位置を考えないといけないと思った。耐震ジェルシートでも同じことで、ただ貼るだけではなく、物の大きさを考えてジェルシートを多く貼ることやジェルシートを貼るプラスアルファ固定をするなど工夫と地震に対する知識が、必要であると思った。

しかし、物による備えだけでいいとは思わない。なぜなら、阪神・淡路大震災や２年前に起きた東日本大震災のように想定を大幅に超える災害が起こってしまうと、物による備えだけでは、助からない可能性が高いからだ。母も話で言っていたように「すぐに避難しなかった人は、家屋の倒壊や大規模な火事に巻き込まれた。」と言っていた。このことから、避難することも大切だと感じた。さらに、「当時は、避難所や高台に避難するということは、考えもしなかった。」とも言っていた。幸い、阪神・淡路大震災では津波が発生しなかったので、その分、助かったケースも多々あったと思うが、東日本大震災ではこの考えだと津波に流された可能が高いと私は思った。明治三陸地震や昭和三陸地震あるいは、チリ地震での大津波など過去の津波で被害を受けてきた東北の人たちの防災意識に比べると、私たちの防災意識は低いと感じた。何よりも恐ろしいのが、あの防災意識が高い東北でも、東日本大震災で多くの犠牲者を出したことだ。このままだと、今後起こると予想される南海・東南海地震から助かることができなくなると思った。南海・東南海地震では、東日本大震災よりも被害の規模が大きくなると予想されていたので、さらなる防災意識を一人一人が高めていく必要があると感じた。特に津波による被害が大きいと予想されているので、津波に対する防災意識や備えを行っていかなければならないと思った。

話は変わるが、市民の方々は一人一人が防災意識を高めることは、難しいことと思われがちであるが、そんなことはないと思う。震災の映像、地震や津波の番組を見て、「怖いな。しっかり対策しないと。」そう思うことが防災意識を高めるきっかけになると私は思った。自分の目で見て、感じることで初めて行動に移せるのである。しかし、この行動に移さないことが今の日本人の問題だ。すぐに行動に移すためには、もっともっと震災体験を語り継ぐ必要があると思った。話す人の中には親戚を亡くしたり、友達を亡くしたりなど人には言いたくない体験をもっている方もいると思うが、私は、勇気を振り絞って語ってほしいと思った。なぜなら、それがたくさんの人へと繋がり、あなたの語り一つでたくさんの人たちへのエールや生きる希望となりうるからだ。私も津波で近所の人を亡くした話を聞いたとき、「自分の悩みなんか、なんて小さいことだろう。」とか「今生きていることを大切にしていかなければならないな。」と思うようになったのだった。そうなるためには、聞く側も真剣に震災体験の話を聞き、話してくれた人と痛みを共感しあうことが必要だと思った。話を聞いている時に無理に我慢せずに、泣きたい時は泣いて欲しいし、何か声をかけたい時は、何でもいいから声をかけて欲しい。それが、語ってくれた人にとって、かけがえのない存在や出来事になるのである。このことを実現するためには、人と人とがコミュニケーションできる場や雰囲気を作っていくべきではないだろうか。その場や雰囲気を作るためには、私たちのような震災を体験していない若者が中心となって行うべきだ。避難訓練や防災の勉強を行うことも大切だが、この「震災体験を語り継ぐ」ことも大切だと思った。私たちの防災意識を高めるきっかけや災害に対して備えるきっかけになると思うし、語ってくれた方も「話して、本当に良かった。」など気持ちが楽になるきっかけになると思ったからだ。

このことから、私は物による備えだけではなく、避難する場所や避難ルートを考えるなどの備えも行うことと語り継いでいくことが大切だと思った。備えの話をすると、この物による備えをハード、避難するなどの備えをソフトという。この言葉は、環境防災科特有の授業で学んだ。授業でも言っていたが、備える時はこのハードとソフト、両方を行うべきだ。

物による備えでも対処できる自然災害もあるが、物による備えだけでは対処できない自然災害もある。東日本大震災の津波のように高さ 20～30m級の千年に一度の大津波では、到底物による備えだけでは助からない。なぜなら、物には限界があるからだ。堤防や防潮堤もその物による備えの一つで、人間が造れる高さには限界がある。20～30m級の堤防や防潮堤は、今の技術では建設するのは、非常に困難である。これより物による備えは、あくまでも自然災害を抑止するのではなく、軽減するものだということがわかった。しかし、自然災害の種類によっては逆のことも言える。

例えば、台風が日本に上陸した時では、避難することよりも物による備えを行うべきである。なぜなら、避難しようと外に出た瞬間、突風に飛ばされることもあるかもしれないし、風によって飛ばされた物が直撃するかもしれないなど、かえって危険だからである。この場合は、シェルターにいることや家にそのままいることなど物による備えを行うべきである。

このように、両方の備えをしておけば、さまざまな自然災害に対応できるのである。対応するにあたって、「今はこういう状況だから避難しよう。」とか「いや、避難したらかえって危険だから家にいよう。」など適切な判断力も必要になってくる。こういう備えや判断力が災害時に生かせるようにするためには、日頃から意識を高めることや考えていくことが必要だ。なお且つ、このような気持ちに人々がなるためには、震災体験を語り継ぐことも大切だ。備えを行う上で、語り継ぐことは非常に重要なことだ。

私は、南海・東南海地震だけではなく、さまざまな自然災害から対処できる備えを家族と共に考えていきたいし、母の震災体験や東日本大震災の被災者の震災体験を、ボランティア活動や発表を通じて、たくさんの人に伝えていきたい。しっかり出来るかわからないし、不安もたくさんあるが、自分のやれるところは、すべてやっていくつもりで取り組んでいきたいと思った。今以上に市民一人一人の防災意識が高まり、防災や災害に対して、積極的に関わっている社会になる日を願いつつ、自分も備えやボランティア活動など、行動に移していきたい。

18 年を経た記憶

土江　拓真

1.　1.17　未明

（1）　瞬間

最初の衝撃は家の前で交通事故が起こったと思った。母は、何が起こっているかわからなかった。次に食器棚が揺れる横揺れで地震とわかった。揺れながらも頭の中はしなければならない事がよぎっていた（取引先との約束・妊婦の定期健診）あとは「早く揺れが止まれ」と寝室の天井の電気を見つめていた。揺れの後も悲鳴が続いていた。

（2）　直後

「もう一度寝られるなら」が本心。でもそれを妨げたのが町の空気だ。事の大きさがわかったのは外を見たとき消えた信号としゃべらなくなったラジオだ。母は緊張しておなかの子どもは全く動かなかった。

家を出るまでは異変に対する興味が先走って緊張や恐怖はなかった。

恐怖と興奮は真冬の寒さを忘れさせ、服装への懸念が一切なかった。

同じ思いをした人と会いたくない、次に来た感情は同じ思いをした人に共感を求めた。

ライフラインは全て止まった。

（3）　家の中

家の中の物はほとんど壊れたり勝手に移動したりしていた。中でもひどかったのは食器棚で、入っていた食器はほぼ全て外に飛び出し散乱していたことだった。また、本棚は部屋の端にあったものが部屋の中央あたりまで移動していた。

（4）　震災体験

時間に似合わない人出と、盛り上がり亀裂の入った道路で、「うわぁどうしよう」。そのまま父は職場へ。母は親元へ。

（5）　時系列

信号がない道はドライバーがみんなやさしくなった。カーラジオの情報と目の前に繰り広げられる情景が一致するのを確かめていた。サイレンなどは一切聞こえなかったが立ち尽くす人々の顔は見えていた。途中の道から見える景色には中の物が外に散乱している店や少し傾いた家など地震の傷跡が多数みられた。普段明るい真っ暗なコンビニエンスストアの中を店員が片付けていた。母は、駅以外で停まる電車の明かりが印象に残った。目的を持って行動をしていると、余震の概念は消えていた。

（6）　父の職場

警報が鳴り響く社内。当直勤務者の引きつった表情。一つ残らずロッカーの開いていた更衣室に新たに恐怖がこみ上げてきた。

（7）　子を守る母

何もかもが普通と違って何も考えずただ「早く家に着きたい」と思っていた。それは単純に心配だったからである。

（８） 母の実家

幸い倒壊はしなかったが、屋根のかわらが一直戦場に道に落ちて散乱していた。
たくさんの物が散乱して階段が通れなくなっていた。

（９） 避難生活

父方の実家は水道が通っていたし生活できる環境だった。母はそこで短期の避難生活をすることにした。
電気・ガス・水道（ライフライン）があっても被災者。
肉親を失い全てを失った被災者。双方が違和感を覚える避難生活。
避難生活はあの瞬間を思い出す場所に帰るための心の準備。

2. 当日夜

（１） 帰宅

人の居るはずのない明かりのついた家に入る恐怖。あるはずのない位置にある家具、意味もなく蛇口から出る水。怖さのあまり大事な物を取りに帰った目的も忘れ一分も経たず飛び出した。

3. 数日後

（１） 水

トイレに困ると人は物を食べない。特に自分はそうであった。食料需給よりも排泄、入浴など人間の生理的な部分に重要性を感じる。

（２） 睡眠

人はどこででも寝られる。毎日毎日寝る場所や寝る時間が変わった。加えて不規則に起こる余震。それでもずっと変わりなく疲れると人は寝た。起きているときに人の寝顔や寝息に安堵感を感じたのもこの頃であった。

（３） ラジオ

阪神・淡路大震災の後、何度も余震がきた。昼間にも夜中にも。家はもともとラジオをつける習慣があって、一日中、ラジオをつけて情報収集をした。そして、情報収集だけでなく余震の恐怖を紛らわす役目もあった。
何度も起こる余震は、不安や恐怖をよみがえらせた。

（４）町の雰囲気

サイレンに緊急性は感じてもある種無関心な雰囲気が町全体を覆っていた。

4. 震災 6 か月後

復興に格差を感じるようになった。それは、地域・環境・収入などによるものである。
将来に対する不安はマスコミが騒ぐほどなかった。
「なんとかなるだろう」的なある意味“ひらきなおり”みたいな精神だった。
震災報道の過多により他の地域の人間が震災に飽きたことを感じた。それは、当事者の中にもあった。
過剰な同情に対する嫌悪。

5.　震災後

（1）　感じたこと

ライフラインが確保された時点で前を向いていた。
余震にも慣れ地震の興奮からさめたあとにきた感情は元の生活、元の風景への懐かしさからこみ上げてくる怒り。
世界から忘れられたくないが過剰な報道による世間からの震災に対する嫌悪を懸念するようになった。
ヘルメットや軍手が道にたくさん落ちていた。

（2）先月の地震

先の四月の地震で感じたことは「災害は忘れた頃にやってくる」「市販非常用持ち出し袋への殺到」。
その地震での近親者への安否確認に関しては、阪神・淡路大震災の教訓が活かされていた。

6.　18 年を振り返って思うこと

今でも地震を思い出す最大の要因は建物のきしみや震動など普段耳にすることのない音。
建物など物理的損害と震災死にはタイムラグがあった。
不思議なことに県外から来る援助の人たちと好奇心の野次馬の区別はできた。
地震前日に見た風景と地震後に見た風景の違いが震災だ。
全てが震災前に戻る事は無理でもより多くの人が前進を望む。
震災で亡くなられた人のその瞬間に想いを馳せている。

感想

前にもいろいろと阪神・淡路大震災（兵庫県南部地震）について親から聞いていたが、今回のレポート作成のおかげでよりたくさんの話が聞けた。
震災当時、私はこの世にいなかったわけではない。母のおなかの中で震災を体験した。といっても記憶がないし体験していないともいえるが、実際、いつもなら動くのに地震の直後私はじっとして動かなかったという。何か感じたのだろうか。
またその中には自分の知らない話があり、その中で一番印象に残ったのは震災後、久しぶりに家に帰ると電気がついていたという話だ。自分は体験していないので恐怖の度合いがわからないのだが、地震がきて、物が散乱した状態で家を出て、何日後かに帰って来ると電気がついている。わからないものからすればただ、地震が来て電気のスイッチを押して停電しているなと知りスイッチを切るのを忘れて家を出た。そして電気が復旧し勝手についた。ただそれだけに思えるが、少しわかるような気もする。みんないなくなって人気のない（みんな避難している）マンションの部屋にたくさん物が散乱している状態、すなわち、地震直後のままの部屋に帰ると“ゾッ”とするような気がする。さらに水も流れていたという本当に恐怖だ。
他にも私の知らない話がたくさんあった。たくさんの印象的な内容の話を聞いた中でも今の自分では想像できなかった話は、“トイレの話”で、人間は生理現象でトイレは誰もがする。しかし、断水したトイレを使用しなければならなくなったとき、人間はたくさん物を食べるのだろうか。少なくとも私はあまり物を口にはしないだろう。必要最低限しか食べないと思う。これは、話を聞いて初めて納得のいくものだった。
あと、気になったのが、援助の人（災害ボランティアの人）と野次馬の違いが区別できた話だ。これは体験しないとわからないと思う。一見、見た目は変わらないかもしれない。中には見てすぐ「こいつは、野次馬や」とわかるやつもいるだろうが。
父の仕事柄からそういうのに敏感になっていたと思う。
また、被災者は被災者でも度合いがあるということだ。私自身、ボランティアを行う側からすれば、被災者に度合いをつけない。いや、つけるのは失礼すぎる。でも実際、被災した側の話は度合いを感じると言っている。今までに考えていなかった分何か考えさせるものがあった。被災はしたが何も壊れな

かった人、被災はしたし物もたくさん失ったが家族や身内を失わなかった人、被災して物や大切な人を亡くした人などさまざまなパターン、被災状況があり、互いが同じ被災者という単語でくくってしまってよいのかどうか思うようにもなった。

私は、阪神・淡路大震災の記憶がない。でも、先月の地震は少し驚いた。いや、かなり怖かった。でももっと恐怖に襲われたのは 1995 年の阪神・淡路大震災を体験したひとだと私は思う。大きさを比較すると全然違うし、阪神・淡路大震災のほうが大きいし暗闇の早朝であったため恐怖感も全然違ってくるだろう。阪神・淡路大震災を体験していない私が言うのもおかしさを覚えるかもしれないが、地震そのものに対する恐怖心は同じだと思う。

なぜならそのときの記憶がよみがえるからで、ふすま、ドアのがたがた揺れる音、食器棚の中でガチャガチャと食器どうしが無造作にぶつかり合う音、物が落ちる音などなどたくさん阪神・淡路大震災と同じ要素があるからだ。

地震が起こった瞬間何がなんだかわからなくなるという話をよく耳にする。私も、そのような体験をした事がある。昨年の夏のある夜中の出来事。部屋が暑かったので窓を網戸の状態にして窓のすぐ横で寝ていた。急に“ドッカーン”という爆音に起こされた。最初何が起こったのか頭の整理ができない状態だった。「飛行機が墜落した」正直そう思った。かすかに残る町、空、空間に漂う音の余韻をなんとか寝ぼけながらも感じ取り、必死に情報を得ようとしている私がそこにいた。結局それは雷と結論づけた。

人間は準備をしていないと“弱い”私はそう思う。だが、地震のように急に襲ってくるとどんなに優れた人間でも準備はできない。その中でどう反応、対応していくかが〝カギ“になると思う。準備をしていない人間、すなわち弱い人間に地震をはじめとするあらゆるハザードは容赦なく公平に人々に襲い掛かる。人は誰でもパニックを起こす。準備をしていないのだから。しかし、阪神・淡路大震災を経験した神戸は違うと思う。どう違うか。前に体験をしているかどうかだ。人は賢い。一度経験したものは身体中が覚えている。先月にあった地震は阪神・淡路大震災のことを思い出し、恐怖を覚えながらも誰もが 18 年前とは違う動きをしたはずだ。

話を阪神・淡路大震災に戻す。私は改めて地震が起こった時は真っ暗だったことを考えてみる。かなりの恐怖だったとみんなが言うようにそれはもう言葉にできないものだったに違いない。私がもし阪神・淡路大震災を体験したらどうなるか。多分震災の日の半日は放心状態になるかもしれない。でも、父母は私を守り、行動をした。これは感謝しなければならない。今の私がいるのは彼らのおかげであると私は考える。

これから生きているうちに必ず起こると言われている東海地震、南海地震、東南海地震。3 つが同時に起こると想像を絶する被害を受けると言われている。これらの地震にどう対応するか。極端な話、それらの地震が明日起こるかも知れない、明後日起こるかも知れない、一週間後起こるかも知れない、今起こるかも知れない。よく考えてみると極端で大げさな話でもない。もし今起こったとして私はきちんと行動できるだろうか。きっと戸惑って何が何だか分からなくなって何もできないと思う。でもこれではいけない。高校生として、環境防災科の生徒として恥を掻かぬ行動をしなければならない。今できること、準備をしていこうと思う。具体的に言えば、防災に関して正しい知識を身につける、日ごろから災害の準備をしておく、非常用持ち出し袋の中身の点検、部屋の家具の固定、寝室のスリッパ等準備、言い出せばきりがないが今、できることは山ほどある。していないだけのことで後になってああしとけばよかった、こうしとけばよかったと嘆いても後の祭りで後悔だけが残る。それだけは避けたい。みんな思うことだ。それを避けるために今できることをしておこうと私は思うのである。もし、30 年後に地震が起こったら私はいい大人になっている。その時、高校生の時あれをしていて助かったなと感じられるようにする。それは、今、すること、できることを実践し、自発的に準備することが大切だ。

～語り継ぐ　あの日の出来事～

長井　梨紗

１．　ゴジラがやってきた

（１）地震の前夜

今回の体験記録は私の母から聞いたものである。
私が産まれる前の震災当時、父と母と姉は兵庫県神戸市東灘区の魚崎にあるマンションで暮らしていた。地震が発生する前の日、3 人は母の実家のある垂水に里帰りしていて夜になって家に帰ろうとしたとき、空には怖いくらいに綺麗な満月が見えた。この月のことを未だに母は忘れられないでいる。この日は普段なら 3 人は川の字になって寝ていたのだが、そのときはたまたま父が熱を出してしまい、当時 2 歳だった幼い姉に風邪がうつってはいけないと考え、父だけが隣の部屋で寝ていた。

（２）午前５時４６分

突然(ドーンッ！）と下から突き上げられたかと思うと大きな揺れが起こった。まるでマッチ箱の中を思いっきりふられたような大きな揺れだった。大きな揺れの中でも隣で寝ている姉を母は急いで布団で包み姉の頭を守るようにして抱きかかえた。その直後に母と姉の上に部屋に置いていたタンスが倒れてきて、母と姉は下敷きになった。起きて泣いている姉を抱えながら母は大きな声で「助けて！」と何度か叫んだ。しばらくして隣の部屋で寝ていた父が来て、タンスを持ち上げて母と姉を助けだした。父は被害にあうことがなく、母の声がしてすぐに部屋に駆け込んできて、母と姉を助けた。このときの揺れを母は「ゴジラが来たんだ、マンションを掴んでゴジラが揺らしたんだと思った。」と言っていた。

（３）日が昇る

暗かった空がだんだん明るくなり、周りの様子が見えてきたころ。家の中を見渡すと食器が散乱し、テレビや本棚、タンスなどの大きな家具や家電までも倒れていた。父と姉を抱きかかえた母はいったん外に出てみると自分たちと同じ階に住んでいるはずの人たちの家は何ともなかったみたいだが、自分の部屋の外壁だけがなぜか大きなひび割れが発生していた。たまたま自分たちの住んでいる部屋の向かい側の部屋が空室になっていたのでマンションの住民がオーナーにその部屋を開けてもらい、みんなでその部屋で身を寄せ合っていた。このマンションの住人はみんな無事だったそうだが余震が続き怖かった。また部屋の中ではみんなで地震の話をして、隣の人の部屋ではピアノがとんでいった、などといった話も聞いたそうだ。

（４）交通状況

とりあえず家族 3 人は神戸市北区にある父の実家に行くことにした。車に乗り北区向かおうとしたのだが、車がとても混んでいた。コンビニには人がごった返しだった。信号は壊れていたのだがみんな秩序正しく運転していた。

（５）場所によっての揺れの違い＝被害の違い

北区に着くと、すぐに父の母と父が家から出てきて迎えてくれた。「地震、大きかったね。お義母さんもお義父さんも怪我なかった?」と聞いたのだが意外にも「いや、それがね。揺れたわ！と思ったんやけどさほど大きくなくって・・・。で、テレビつけたら大きい地震やってゆうてるもんやから、あんたらのほうが大丈夫かいなーって思って心配してたんよ。こっちなんかいくつか物がこけてきたぐらいやったで。」という返事が返ってきた。「あのときは地域によってこんなに被害の大きさって違うもんなんやねー。って、話したよね。」「そうやったね。」と母と祖母は話してくれた。

２．日々の生活

（1） 日々の生活

北区で生活しつつも、何度か片づけをしに魚崎のマンションに帰っていた。北区で生活している間、住んでいるマンション付近では近くのガスタンクが爆発する可能性があるかもしれないということで避難勧告が出ていたことをマンションの友人に後から聞いた。電気が通るようになりマンションに帰った。生活に必要なものは北区で買って帰り、床には危険物がまだのこっているかもしれないということでビニールシートを敷いての生活。ホットプレートで温かいものを作り、ポットでお湯も沸かせるようになった。ガスが通っていないときは大阪の友人のところまでお風呂をもらいに行った。水はマンションがタンク式の貯水だったので困ることはなかった。電気が通るとだいぶ生活が違い、ガスが通った時の嬉しさは忘れられないという母。

魚崎から垂水の実家に帰るとき電車がまだ運行されていなかったため代替輸送のバスを乗り継いで行った。バスに乗る人の長蛇の列の光景を母は覚えている。

3 月になって姉の 1 歳の誕生日。ケーキを買ってあげたかったが神戸には売っているところがなかったので、姉をバギーに乗せながら甲子園まで行き、ダイエーでケーキを買った。

5 月のゴールデンウィークに魚崎から北区へ引っ越しした。地震が起きる前から引っ越しの話をしていて、地震が起き、その後わりと早く家が建ち、早く引っ越すことができた。

（2） 私の誕生

被災してから 9 か月が経った 11 月。この月には新しい北区の家から病院までは遠すぎるので垂水で母は過ごしていた。このときにはいろんなところが工事されており、外は砂ぼこりでいっぱいだった。しかし、阪神間、三宮から東の交通機関はまだ整備されていなかった。そのなかで私が産まれた。

（3） 数年後

阪神淡路大震災から今日にいたるまで。私がこの舞子高校の環境防災科を受験したいと思い、受験に備えるため灘区にある[人と防災未来センター]を母と訪れたときのことだ。そこでは最初に阪神淡路大震災が発生した時の映像が壁に立体的に流される部屋に入った。映像が始まる前から母は「どうしよう、怖いな。」とつぶやいていた。「私がいるから大丈夫!」と声をかけ部屋に入ったものの、いざ映像が流されだすと母は急に具合が悪くなり外で休むことにした。そのときに「梨紗の勉強のために一緒について入ってみたけど、どうしてもあの日のことを思い出して怖くなってしまった。ごめんね。」と言っていた。私は悪いことをしたなと思い、そのときの母の様子が未だに忘れられないでいる。

感想

最初に母に震災体験を聞こうとしたがなかなかすっとさっとは話してくれずになかなかてこずった。しかし少し話しだすと、ぽろぽろと少しずつ語ってくれた。話し終えると少し力のない声で「もうあの日のことは思い出したくもないなー。」とつぶやいた。

母は今も地震の影響から怖がるものが多い。2 人で映画に行ったときにも場内が暗くなった瞬間、隣にいる私の手を握りしめて「怖い、怖い。」と言う。またあるとき、いとこの小さい子を連れて遊園地に行ったとき観覧車に乗るときもドアが閉まる瞬間に「怖いわー、どうしよう。」と言い乗っているときもこぶしを握り締めてがちがちになりながら乗っていた。結局観覧車が地上に着くまでほとんど景色を見ることなく降りる始末だった。不思議に思ったいとこの小さい子が母に「晴ちゃん（母)、どうしてそんなに怖がるの？お外、綺麗やったのに。」と言うと「晴ちゃんね、大きい地震にあってから怖いんよ。」と言っていた。後々話を聞いてみると「暗かったり閉じ込められるような空間、そのなかで大きな音が出るような映画館や観覧車などに入ったら、やっぱりあの地震のときのことを思い出しちゃって怖くなっちゃうねん。景色も映画も楽しみたいねんけどなかなか楽しめないねん。」と言っていた。どうやらフラッシュバックを起こしてしまうみたいだ。小さいころになかなか映画館に一緒に行ってくれなかった母に一緒に行ってよ!と、駄々をこねていたが、大きくなって言葉の理解ができるようになった今では申し訳ないことを言っていたのだなと改めて思った。

阪神・淡路大震災が発生した日に近づくにつれて、特番が多くなったとき、普段なら一緒にテレビを

見てほっと一息をいれる母だが、私が特番を見ようとするときには「お母さん、洗濯してくるね。」などと言ってあまり一緒に特番を見ようとしない。東日本大震災の特番が流れる時も同然である。その映像を見ているとタンスの下敷きになっていた時のことを思い出してしまい、まためまいも起こしてしまう。だけれども母は父に助けてもらったことを覚えてはいるが、どのようにしてタンスから這い出してきたのかが分からない、覚えていないと繰り返しつぶやいていた。その地震が発生していた何分間かの記憶が全くといっていいほど消えてしまっているみたいだ。その後に体がむち打ち状態だったことと、あとからおそってきためまいで気分が悪くなったことは覚えていた。

「この地震で、人生が変わった。」といった母。地震が起きたことにより、本当は違うところに引っ越しをするつもりだったのに北区に引っ越すことになってしまったり、また今まで酒屋で働いていた祖父だったが地震の影響で工場が壊れ、職を失った。母自身、大好きだった映画を見たいのに暗さと人が密集する映画館はあの時のことを思い出してしまい、見ることができなくなってしまった。地震のときの記憶はあまり残っていないにもかかわらず、恐怖心は年を重ねていくにつれだんだんと強くなってきている。特に記憶に残っているのが、震災に関連した人間関係のことや惨めな思いをしたことだ。生活にちょっとずつ支障をきたすようになってきている。なにもかもが変わってしまった。なぜ記憶がないのか、必死すぎて本当に覚えていない。断片的な記憶しか残っていないにもかかわらず、そんな思い出したくもないことだけが記憶に残っている。人間は時間が経ったら忘れていくはずなのになぜなのだろう。いやだな。と何度も何度も涙を流しながら語ってくれた。

しかし母のことがすごいと改めて感じたことがある。それは今年の4月の半ばに地震が起こったときのことだった。震度5の揺れが発生し、私にとっては産まれてきた中で一番大きな地震だった。明け方ということもあり何が起こったのか分からずただ布団をかぶり正座していた。私は寝るときいつも少しだけドアの隙間を開けて寝ているのだが、地震が起こってすぐに母がドアを開け「大丈夫？」と言いつつ部屋の様子を見に来てくれた。それが終わるとすぐにガスの元栓を閉め、玄関のカギを開けに行った。このとき私は母の様子を見ながら、なぜあんなに動けるのだろう。いやな目にあったのに。怖くて動けなくなるものじゃないのか、と冷静に考えてしまっていた。

今回のこの“語り継ぐ”という授業を通して普段は触れることのなかった阪神・淡路大震災の話を聞くことができて普段通りの日常を送っている母でも実は古傷を負っていることが分かった。普段の日常を一緒に過ごしている母では想像もつかないような傷があることを知った。テレビで放映される震災に関連するドキュメンタリーでもよく母のような人を追いかけている。私はその映像をみて、やっぱりこんな人っているんだな、とは思ったのだが、こんなに自分の身近にテレビに映っている人と同じ傷を負っている人がいることに驚いてしまった。ましてや、毎日一緒に仲良く過ごしている母だったため、余計に驚いた。この話を聞いているとき、涙を流しながら語ってくれる母の姿を見ながら私はどんな態度をとればいいのか分からず、困ってしまった。この環境防災科に入学して以来、ボランティアや地学など幅広い分野で災害や防災に学んできた。もちろん「こころのケア」についても学んできているつもりだ。「このとき、どうしたらよいだろうか。あなたの考えを書きなさい。」などといったテストで出た問題もしっかり答えることができたつもりだ。だけれども、いざ自分の目の前に心に傷を負った人がいると、どういう対応をとっていいのか分からなくなり、結局はなにもしてあげられなかった。「人の話を聞いてあげるだけでも、その人の気持ちを楽にしてあげることができる。」といったことをどこに行っても最近耳にすることが多々ある。実際に1年生の時に行かせていただいた東日本大震災のボランティア活動の時、被災された方との交流する機会があり、地震と津波が起こった時のことの話を聞かせていただくことがあった。そのときにもその方々は「あなたたちに話を聞いてもらえてうれしい。聞いてくれてありがとう。」などといった言葉をかけてくださった。しかし。私は今回のこの阪神・淡路大震災の話を母に聞くとき、話を聞かせてほしいといい、いやいやながら語ってくれた母を余計に苦しめてしまったのではないかと思った。そのときに思ったのが「聞いてほしい人がいれば、聞いてほしくない人がいるのではないか」ということだ。だけれども、この人たちを見分けるのはやはり難しくこころのケアといっても逆に傷つけてしまう怖さもあるんだなということを身をもって感じた。

またもうひとつ考えたことがある。それは救援物資についてだ。母が被災したときにはまだ幼かった姉がいたということを話したとは思うが、やはりそのときに困ったのが子供用品の紙おむつや、哺乳瓶、ミルクなどといったものを手に入れるのがたいへんだったそうだ。授業でも学習したが救援物資やボランティアといったことには「wants」と「needs」といったことがある。「wants」は「～がしたい」,「needs」は「～を必要としている」という意味である。“ボランティア元年”とよばれたこの年。全国におさまらず、世界中から神戸は支援を受けた。だがしかし、その支援といったもののなかには、ほんとうにこ

れは支援と言えるのだろうかといったことがあった。着る服が少なく困っているだろうといって自分が着なくなった汚れが目立った服や、どう見ても着ることができそうにない洋服を送ってきたりするのが一つの例である。また、よくテレビやラジオで放映、放送されている場所で「～が不足しているようです」などといった情報をキャッチするとすぐにその場所にその物資を送る。これを送る人が少人数であるならば問題はあまりないのだが、何人もの人が物資を送るため逆に仕分けに時間がかかったり、物資が余りすぎてその物資の処分に困ってしまう。逆にメディアにとりあげられていない地域では物資が不足しており、困ってしまうという例もいくつかある。このような事柄から、もし私たちが住んでいる地域で災害が発生せず、どこか違うところで起こり、自分たちもなにか支援をしようと考えるのであればその地域で必要だというものをちゃんと聞き、必要な分だけを送ることが大切だと思った。

狂ってしまった人生の歯車

中山　直樹

１．祖母の体験談

（１）厄災の序章

「2階のベッドの上で3､4回下から突き上げられてとんだ」衝撃の一言から祖母の体験談が始まった。
1月17日早朝5時46分ーまさかこんな悲劇が襲うなんて夢にも思わなかった。突然の揺れに、ベッドの上で恐怖に怯えた。激しい揺れによって大きな本棚が倒れてきたが、幸いにも頭上にあるベッドの壁によって支えられ一命を取り留めた。何とかベッドから起き上がり、脱出口を確保しようと部屋の戸を開けた後、娘(叔母)の安否確認に向かった。娘の無事を確認すると、1階にいる愛犬を探しに向かった。1階に下りると、目の前に広がる光景に呆然とした。足の踏み場も無い位、食べ物や食器が散らばっていた。それを踏んでしまったのだろう、こたつの中で震えていた愛犬は足を切ってしまっていた。
後で叔母に聞いた話では、4段もあるCDラックがベッドの枕元に倒れたが、その日は寒くてたまたまこたつで寝ていた為、助かったと言う。もしいつものようにベッドで寝ていたら、今頃叔母の姿は無いだろう。

（２）こわれた長田

毛布と愛犬とを持ち、外の様子を知るために家から出た。家は比較的高い位置に立っているため、まちの様子を上から見ることができた。この時、火はまだだったが、JRより下の方から煙の柱が5、6本既に上がっていた。近所の人たちはほぼ無事だったが、ほとんどの家は全壊。ガス漏れや隣の人の工場が焼けてしまったという知らせがあったり、骨折している人もいた。この辺りは工場が多く、被害も大きかった。その後、避難のために長田高校に居たが、いとこが来てくれて北区の兄の家に2か月ほど避難させてもらった。避難生活中、空き巣が多発しているという知らせを聞き、何度か大事なものや高価なものを取りに帰った。
「生活が一変した」
自宅はほぼ全壊。ライフラインは2、3ヶ月止まったままだった。近くの工務店に頼んで復旧作業が始まったが、修理費に1,000万円もかかった。ガレージの車のタイヤが歯止めに乗っていて（1000kgある車が跳ねる揺れだったと分かる）ガレージ出口の地面が地割れで段差を作っていた為、車を出すのにも近所の人に誘導してもらってやっとだった。

（３）救いとそれから…

「足りるはずがない。」
市からの義援金はわずかに30万円。欲しいものは沢山あったが、それだけのお金じゃどうしようもなかった。結局、買えたのはオーブンと早く欲しかった冷蔵庫などだった。
少し落ち着いた頃、友人と連絡がついた。状況を知った友人は、生活用品やお金を送ってくれた。早速買い物に出かけたが、神戸では物が買えなかったため、姫路まで行って服や食器を買った。他にも、普段から仲の良かった友人たちからの手紙に救われたり兄妹の助けがあったりと、大勢の人に支えられた。
生きていくためには食べ物が必要だ。その食べ物を買うにはお金が必要だ。だから、ただただ働いた。災害の後は、「絆が深まった、人とのつながりがより強くなった」とよく聞く。実際にそうではあったが、何よりもこの震災で『私の人生は狂ってしまった』。

２．その他の話

（１）　まちの様子

職場に向かう途中の移動は車。移動中のまち並みに昨日までの活気はなく、状況もまだまだ良くはな

かった。ビルが倒れて、向かいのビルが支えているという状態の場所もあった。困ったことに震災の影響で信号はすべて止まってしまっていた。だからどこの交差点でもお互いが譲り合って運転した。しかし、そんな中でも我先にと通る人もおり、危険な場面もあった。

（2） 西市民病院

西市民病院の座屈はよく知られているだろう。座屈したのは5階。祖母の話によるとその5階にいた人のうち1名が亡くなられたそうだ。座屈した写真を見たことはあっても、被害者の話は聞いたことがなかったので、衝撃を受けた。

『病院の先生からの話』

「私は外科で、当直していた。場所は南館だった。新しくできた所の2階に当直室があって、今は新館で11階の建物があるとこの南側だった。そこの2階に当直室があった。私は仮眠していた。最初、5階が潰れているというのは、解らなかった。揺れておさまってから、外科の病棟、南館の3階を見回りに行って、棚か何かが落ちてきたくらいで他に異常はなかった。見回った後に、今度は救急に呼ばれた。外傷の患者が大勢来ており、あと、心肺停止の患者さんも来ていた。6時くらいに、救急に行ったら、ものすごい数の患者さんが来ていて、止血とか縫合処置をした。それで、その処置の途中くらいに5階がつぶれているとことを聞いた。

近くに住んでいた先生は6時過ぎくらいには病院に集まってきていた。内科の先生で1人、5階のほうにいった先生がいる。それで、潰れているということが解って、それから、たぶん救出に向かって行った。

結局、廊下を歩いていた人が、1人亡くなられて他の人はベッド柵で（支えられて）、看護婦さんも大丈夫だった。

私は、救急のことが大変だったので5階の詳しいことはよく解らない。5階が潰れたのは、その上に増築していたから。だからそこが弱くて、そこも工事中だったのがひとつ原因であると思う。上にもう2階積んでいて、そこの階も工事だったで。亡くなった人が1人だけで済んだのが、奇跡的やというか。かなりの人数が入院していたから。」

３．話を聞いて　～感想～

僕は震災当時にはまだ母のお腹の中にいたため、直接震災を体験してはいない。阪神・淡路大震災のことをちゃんと知ったのは幼稚園の頃だっただろうか。「しあわせ運べるように」を歌うということでその惨劇を知った。当時は幼いが故に、「ただ怖いもの」としてしか認識していなかったと思う。長田区の大火災もその頃は多分知らなかっただろう。それから小学生・中学生と成長して、学校で何度か阪神・淡路大震災について学んだ記憶があるが、「1995年（平成7年）1月17日午前5時46分、M7.3の都市直下型地震、死者6434名」と繰り返し学んだり、道徳の教科書でいくつかの体験談を読んだり、当時の映像や写真をいくつか見たりしただけだったと思う。当時震災を体験した方や支援に携わった様々な職業の方から貴重な体験談を聞き、詳しく学んだのは、阪神・淡路大震災がきっかけで設置された「環境防災科」に入学してからだ。

長田区の大火災や被害について詳しく学んだあと、祖母が住んでいるのが長田区であるため、当時いったいどんな体験をしたのだろうかと思うようになったが、会いに行ってもいとこと遊ぶことに夢中になってしまい、面と向き合って話を聞くことができなかった。だから、今回こうして改まって話を聞けて良かったと思っている。

文頭にも記したように、祖母の体験談は本当に衝撃の一言からだった。僕の中では、「大きな地震が起こると立ち上がることができず、その場で自分の身を守るという行動で精一杯」というイメージだったためか、突き上げられてとぶことなんて思いもよらなかったのである。幸い、祖母も叔母も大事には至らなかったが、もしベッドの位置がずれていたら…、もしこたつで寝ていなかったら…と思うとぞっとする。そうなっていたら、いつも笑顔で迎えてくれる二人は今頃居ないのだから…。

被災地では犯罪がよく起こると聞く。実際、祖母の話の中にもあった。誰しもが思うことではあると思うが、理解できないのが「なぜこれだけの大惨事の中、平気で人の物が盗めるのか」ということ。そもそも人の物を盗むこと自体許せないことなのだが、人が苦しんでいることをよそ目にそんな行為ができるなんて狂っているとまで思う。

祖母が一番強く言っていたことは「私の人生は狂ってしまった」ということ。今のおだやかで優しい

祖母を見る限りではそんなことは感じられないのだが、話を聞いていると表には出さない当時の辛さや体験の凄まじさがよく解った。幼いころから祖母の家にはよく遊びに行っていて、その度に笑顔で迎えてくれた祖母。そんな祖母が普段は見せない辛い表情で語る姿を前に、僕は少し複雑な思いでいた。

４．これから必要なこと

今回の祖母の話もだが、環境防災科に入学してから、僕は沢山の人から阪神・淡路大震災や東日本大震災の体験談を聞かせてもらってきた。授業やボランティア活動も合わせて、防災に関する考え方が大きく変わった。中学生までの僕にとって防災という言葉はなじみがなく、学校で行われる避難訓練さえも重要なものとしてとらえていなかった。そんな僕を変えた数々の貴重な体験を自分の中にしまっておくだけなのでは意味がない。経験を積んで知識を深めていくことは確かに大切なことではあるが、自分の得た物を自分の言葉に変えて発信していくことが必要だと、今回改めて思った。

入学して間もなく行うことになった「東日本大震災復興支援ボランティア」。防災に関しての知識は限りなくゼロに近かった僕にとってはとても不安だった。宮城県の光景を目の前にした時、僕は今までの人生では感じたことのない感情でいっぱいになった。テレビのニュースを見たときでも言葉を失ったが、メディアを通してではなく、実際に被災地に訪れた時のあの感情は、僕の知っている言葉では到底表せない。活動を終えて、現地で聞いた数々の体験談や自分の活動を家族や親戚に話した。その時一人の叔父に言われたのが、「もっと沢山の人に知ってもらわないといけない事実や。おじさんも職場の人に是非知ってもらいたいと思う。直樹君もその貴重な体験を大事にして、いろんな人に伝えてほしい。」という言葉だった。将来、防災の専門家にならなくとも、この数々の体験を伝えていくことはできるはずだ。だから、僕は自分なりの言葉でこれからも災害や防災について伝え続けていきたいし、そしてそれが環境防災科で学んだものとしての使命であるとも思っている。

僕は将来、警察官になって鑑識として働きたいと思っている。鑑識は直接に自然災害との関わりはない。だが、人間が関わり引き起こす「人為災害」には強く関係している。だから、この世界で人為災害に対する防災に関わり、少しでも多くの人がより安心して暮らせるまちづくりに貢献していきたいと思う。

父から私へつなぐ震災の記憶

西尾　栄美

１．阪神高速の上で…

（１）午前５時４６分

父は前日に用事があり滋賀県に行っていた。翌日の 1 月 17 日、阪神高速を利用し自宅に帰ろうと車を走らせているころ…。午前 5 時 46 分、突然「ドカンっ」と音がして何が起こったのだろうと驚いた。初めは近くにある工場が爆発でもしたのかと思ったが、強い横揺れが始まり中央分離帯に立っている電灯も大きく揺れていて地震だと気付いた。最初は何が起こったのか把握できなかった。激しい異常な揺れを感じてはじめて地震だと気付いたのだ。この時間だから車はそんなに多くなかった。スピードも出ていなかったが、前の車と後ろの車に当たらないようにと神経をとがらせながらひたすらブレーキを踏み、とっさに車を止めた。周りの車もみんなそうだった。

辺りはシーンと静まり返り、数分間は誰も車から出ずに状況を飲み込もうとしていた。何が何かわからないため多くの人が周りの状況を確認するために車から出始める。父も状況を確認しようと車を降りた。その時点では、異様な静けさを感じ、地震の兆候かどうかということはわからなかったけど前日に空気の焦げたような不思議なにおいがしていたことを思い出した。それから、津波が来るのではないかと心配になり海のほうを見ると多くの家が倒壊していて、これはただの地震ではないと改めて実感した。この時点では父の目からは炎は確認できなかったが北側を見るとビルが倒壊、看板も曲がったり落ちかけたりしていた。

（２）家族の安否確認

倒壊した家屋の姿を目にして背筋が凍りつき嫌な予感が頭をよぎる。真っ先に父が考えたことは家族の安否だった。家族は当時、社宅の 5 階に住んでいたため父の頭の中では「もしかしたら、潰れてしまっているかもしれない」と最悪の状況が巡ってしまったのだ。早く連絡を取りたい気持ちでいっぱいだった。当時はまだ携帯電話が普及しておらず父も携帯電話を持っていなかった。連絡を取って妻や子供が被害を受けていないか確認しようと思うが携帯電話がない。

すると、反対車線にいた人が携帯を持っている。どうやら、この人も安否確認をしているようだ。「安否確認をしたいので、すみませんが携帯を貸していただけませんか？」とっさに父は反対車線の男性に声をかけ電話を借りた。しかし…つながらない。電話を何度かけてもつながらなかったのだ。貸してくれた男性も同じく繋がらなかった。「携帯電話は災害時には使い物にならない。」連絡する手段は公衆電話しかない…そう悟った。

安否確認も気になるとこだが、父は今、自分が立っている阪神高速の状況を気にしていた。そして、道路の上を歩き被害がないか確認しようと歩き始める。高速道路の上には父のような人がたくさんいたという。すると、50 センチ程度の段差があり道路に亀裂が入っているのを見て驚いた。強いと考えられていた阪神高速にもこのような脆さがあるのだということを初めて知った。

阪神高速神戸 3 号線の一部では橋が落橋していたり崩れていたがまだこの時はその被害の大きさを知らなかったのだ。

２．もう一つの不安

（１）親戚の安否

うろ覚えではあるが地震発生から約 2 時間経ったころ父はもう一つ大きな不安を抱いていた。

父の親戚や姉が灘区の六甲に住んでいたのだ。車を高速の上に止めて摩耶の出口から歩いて出て行った。「まず、六甲小学校を目指して歩こう」そう思い、歩き続けていると様々な現状、被害の大きさが目に飛び込んでくる。

真冬の寒い中、毛布でくるまって公園に一時避難をしている人々。着の身着のままで凍えそうに避難している人を見て自分の兄弟家族も今、このような状況であるかもしれないと思い不安が募る。

家は潰れ、電柱は折れ曲がり、まちを歩いて行くたびに急いで家の外に逃げてきたと思われる人達がそこらかしこにいた。そして、父は早い足取りで進む中、想像もしていなかったような被害を次々と目にすることになる。灘区に近づくにつれ段々と被害もひどくなっていきまだ、自分の目で直接最悪の状況を見たわけではないが自分の家族だけではなくて兄弟・親戚の家も潰れてしまっているかもしれない、「これは…もうだめかもしれない」本気でそう思った。

親戚・兄弟の家に着くと家はことごとく潰れていた。全壊だった…。家屋の下敷きになった親戚のおじさんは近所の人に助けられ、家は潰れてしまったが命は助かった。姉の家も全壊だったが車の中に逃げて全員の命は救われたのだった。家は地震によって潰されたが兄弟・親戚が生きていてくれて本当に良かったという感情で少し、ホッとした気持ちを持つ事が出来た。

その後六甲小学校に兄弟家族は避難することになったが避難所は人であふれかえっていてとても混雑していた。赤ちゃん、高齢者、体力の弱い人も多くいたそうだ。「こんな寒くて人でひしめき合っている避難所に兄弟家族を置いて帰っていいものか」と父は複雑な心境を語った。

親戚や兄弟の安否は確認できたが朝、携帯電話がつながらなかったきり家族がどんな状況なのかはわからなかった。「公衆電話で一刻も早く電話をかけて家族の声を聞きたい。」そう思い公衆電話を探す。

すると、公衆電話にはたくさんの人が並んでいた。安否確認するにも時間がかなりかかってしまうことを実感しながら列に並ぶ。そして、自分の番に回ってきて電話をかけると…つながったのだ。社宅はもう壊れてしまっているかもしれないと思っていたが電話口からは母の声が聞こえて全員安全だという事を知ることが出来た。社宅では食器棚の中から全部お皿が飛び出してきて倒れてしまったが、誰も怪我することなく無事で本当によかったと父は思った。

その後、親戚を避難所に残したままで帰ることには戸惑ったが、もう一度摩耶まで戻るために歩き、車に乗って帰ることにした。長い道のりを歩いて高速道路に戻った後車を走らせた。まだ通行止めになっていなかったため車を走らせることができたが帰る途中も段差があり大変だった。

しかし、それ以上に家に向かう途中の車の中で見た衝撃は今でも忘れられない。

長田や兵庫の辺りでは火事によって家が燃えてしまっている。朝、地震が起きた直後には見えなかった被害やその現実の恐ろしさ、悲しさを突き付けられたようで苦しかった。衝撃と苦しさを感じながらも父は炎が激しく燃えているその横を車で通りすぎた。

（３）一か月後の神戸

あの日から神戸のその後の様子はテレビなどで入る情報でしかわからなかった。一か月後、父は再び神戸を訪れた。親戚の倒壊した家の中にあったものを取り出す作業を手伝うためだ。

家の中からはピアノなど大切にしていたものが出て来て、その頃は被災地で堂々とカメラを向けるカメラマンや記者が多くいたという。無断で写真を撮りまくっているカメラマンに対してある人が「撮るな。人の不幸を撮るな！」と怒っていた。「多くの人が報道人に対して怒りを抱いているように見えた。」と父は語っていた。被災者のつらい気持ち、毎日の苦しい生活を何も考えずに写真を撮る記者に対してこの時、父も不快感を抱いたのだった。

父の言葉

阪神淡路大震災を阪神高速の上で経験し、人間の作るものは壊れやすく脆いと感じた。その割には、復旧には時間がかかる。阪神淡路大震災で自然の脅威を改めて感じた。自然の力は大きすぎて、人間はこの力には勝つことはできない。
災害が起きた時に命を守り、日頃から自然とうまく付き合うためにはもっと災害を知り、災害が起きた時の対応を考えていかなければいけない。

父の震災体験を聞いた感想

阪神淡路大震災の時、父が阪神高速で車を運転していたと知ったとき「もしかしたら父は死んでいたかもしれない」と思い本気で怖くなった。阪神高速と聞くと落橋している姿がまず思い浮かんだからだ。

私の母もテレビで高速道路が崩れている姿を見て、もうだめかもしれないと思っていたそうだ。

父も母もお互いに死んでしまったと思っていたことが分かった。電話がつながらない場合、被災地のど真ん中にいる人は自分がどんな状況に置かれているかわからない。

父の話でも出てきたが携帯電話が不通になって安否確認ができないことは人にとって大きな不安であると思う。安否確認が出来なければそのことばかりに気を取られてしまい地震による新たな被害が発生したときに気付くことができないかもしれない。より危険な事態を招くのではないかと感じた。

家族がそれぞれ学校や仕事で外に出ていてバラバラの時に地震が起きたらまず、携帯電話は使えないと考えるほうがいいと改めて感じた。できるだけ長く避難できそうな学校に集まるようする、また津波の被害を考えて海から離れたところで集まるようにするなど、今まで家族で話し合う機会は少なかったが改めて一緒に安否確認の方法を考えていきたいと思う。

父は車に乗っているときに被災したためまず、事故を起こさないようにと気を張り詰めていた。この時間は交通量も多くなくて車間距離が開いていたから父は助かったのかもしれないがもし、地震発生時刻が明け方の 5 時 46 分ではなくてもっと交通量の多い時間だったら、多くの車が接触して大きな事故が起こっていたかもしれないと感じた。車を運転していると地震で揺れても揺れを感じにくいと言っていたが最初、地震だと思わなかったのは周りの車も同じかもしれない。

同時に車が急ブレーキを踏むと玉突き事故のようになってしまうのではないかと私は想像した。

まさか、父自身も高速道路の上で被災するとは考えていなかっただろう。

自分の普段生活しているそれぞれの場所（学校、家など）で被災したときにどう行動すればよいかということを普段から考えていないと災害時に行動を起こすことは出来ないと改めて実感した。また、自分だけが把握するのではなく、「災害時に私はこのようにするつもりだから」ということを家族にも話し、それぞれが第一に自分の命を守ることを考えられるようにしておく必要があると思う。

災害時の安否確認に対する不安を少しでも小さくできるようにしたい。

被災直後からこれはただ事ではないと感じたと父は言っていたが灘区に住んでいる親戚や姉（私にとっては叔母）の安否確認をしようと神戸のまちを歩き回った時間はとても辛かっただろう。親戚の住む家に近づくにつれて被害が酷くなっていくという言葉から父の中にあの時の不安な気持ちがよみがえったのではないかと私は心配になった。父の親戚も叔母さんの家族もみんな命が助かって本当によかったと思う。助かった理由は家が潰れる前に車の中に逃げたから…。下敷きになったが大けがをしなかった、近所の人に救出されたから…。どれも奇跡が引き起こした結果だと最初は思った。しかし、亡くなってしまった人は奇跡が起こらなかったから死んでしまったのか、たまたま運が悪くて多くの人が亡くなったのか…。震災で亡くなった人や家族のことを考えるとそんな簡単に奇跡という言葉は口にできないし偶然という言葉で人の生死を決めてはいけないと思う。

阪神淡路大震災で、どうして生き残れたのか…また、なぜ亡くなってしまったのかということを環境防災科で学んできたからこそ自分にできる最大の備えをしておかなければいけない。学んできたのに備えがしっかりできていなくて最悪の結果になってしまったということだけは避けたい。

父が一か月後、姉の家に行ったときに報道人が被災者に対してむやみにカメラを向けていた。

被災者が災害に対する恐怖や憎しみ・家族を亡くした悲しみでいっぱいな姿をテレビで流すこと、被災してどう感じるかという言葉を聞く事はいけないと改めて感じた。

被災地外ではテレビを通して被災者の姿を目にし、何か力になりたいと思って募金活動をする人が出てきたり、ボランティア活動に参加しようと人々の心を動かすこともあるだろう。しかし、被災者が自分の姿をテレビで見たらどれだけ嫌な思いをするだろう。阪神淡路大震災では災害が人を傷つけただけでなく、人が人を傷つけるという悲しいこともあったのだと思った。東日本大震災の時も被災直後に報道人が被災者に話を聞いている場面が見られたが、被災地の現状の伝え方についてはもっと考え直さなければいけないと私は思う。そして私達自身も情報が交錯する中で正しい情報がわからなくて混乱するかもしれないが情報の受けとり方にも気をつける必要があると思う。

家族が生きていてくれて

今回、被災体験を聞いて改めて感じたが、阪神高速の上で被災した父が生きていてくれて本当によかった。もし、父の車が走っている高速道路が壊れて亡くなっていたら私は父を知らない子供に育っていたかもしれない。

幼いころに家族から阪神淡路大震災の被災体験を聞いた事がある。しかし、私は震災の話を聞いても分からなかっただろうし、家族がいつもそばにいる生活が当たり前だと思っていた。改まって父から阪神淡路大震災の時の話を聞いたのは初めてだったが、なぜ、震災の話をしてもあまり理解できないのに幼いころから被災体験を話してくれたのだろう…。家族が私に語り継いでくれたのは阪神淡路大震災のあの記憶を風化させてはいけないという強い思いからだったのかもしれない。震災でたくさんの方が命

を落とした年に私が生まれてきたということの意味を考えなければいけない。私は直接、阪神淡路大震災を知らないけれど、家族から聞いた話を次は私が伝えていかなければいけないと思う。
震災によって家族を失うことで一生その死と向き合って生きていくということ、家族の死を受け入れる事の苦しみと今でも闘っている人がいるということを環境防災科で学んでいくうちに、「家族がいつもそばにいてくれる事は素晴らしい事だ。」震災の記憶は辛いけど残していかなければいけないのだと思うようになった。
阪神大震災の話を被災者の人から聞き、学校で防災を勉強するたびに家族のありがたさを実感する。
自分では何もできないのに偉そうな口をたたいたり、家族を困らせる事もいっぱいあったけど、いつもそれでも支えてくれる家族がいて本当によかった。
父が私に語り継いでくれたからこそ、次は私がこの環境防災科で防災についてもっと学びたいと思う。
そして、今まで学んできた事を行動に移して具体的に災害が起こった時の対応方法や日頃の備えについて家族、友達、地域の人に伝えていき一緒に防災について考えたい。南海地震や東南海地震が予想されているが阪神淡路大震災の時守ってくれた家族。そして、地域の人たちの命を守れるようにしたい。

これからの課題

環境防災科に入り、東日本大震災のボランティア活動に行くたびに自分の無力さを感じる。防災を学んできたにも関わらず被災地で困難にぶつかった時に臨機応変に対応することができていないからだ。この先、南海地震や東南海地震などの大規模な災害が起こったときに、今のままでは落ち着いて行動することができないかもしれない。避難所では救援物資の問題、トイレの問題、など生きることに直接関わることはもちろん出てくるだろう。しかし、被災者同士のけんかやストレスが発散できない問題などもあると思う。精神的な疲労でうつ病やPTSDになって、その後の生活に大きな影響を及ぼすこともあるかもしれない。だからこそ、精神的な苦痛を少しでも和らげられるような支援は大切だと思う。被災者に対して心が休まる空間づくりをしたり、毎日何気なく被災者に話しかけてコミュニケーションの場を作りたい。そのためには、今までの災害ボランティアの人がとってきた行動をもっと勉強し、災害現場で自分ができる支援を増やせるように臨機応変に行動する力をつけていくことが必要だと思う。
もう一つ私には課題がある。被災地で出会った人とこの先も継続して関わっていく方法を生み出すことだ。東日本大震災のボランティア活動で出会ったおじいさんやおばあさん、現地の高校生、復興に向けてワークショップで話し合った被災地の人…。私は震災がきっかけで多くの方と出会った。この人達とまた会うためにはどうしたらよいのか。今までは被災地ボランティアや現地の人との交流も学校に用意してもらっていたから出来ていた。しかし、この先は私個人が考えたことをほかの人に提案して仲間を作っていかなければいけない。自分から行動し始めなければいけない。これからどのようにつながっていくかということを考えると共に自分から発想を生み出したり、意見を他の人に発信できるような人になりたい。

1.17　母親　体験談

西村　小百合

１、震災当時　1 月 17 日　5 時 46 分

当時私の家族は、4 階建ての住宅の 1 階部分に住んでいた。父、母、兄の 3 人家族だった。兄はまだ幼く、2 歳だった。もちろん私は、母のおなかの中にすらいない時だった。部屋では家族 3 人、川の字になって寝ていたという。

5 時 46 分ごろ何もないはずの地面から、ゴゴゴゴゴォォォォォォォォーという音が鳴り響き、下から突き上げてくるように地面が揺れたそうだ。

これが都市、直下型の阪神・淡路大震災だ。

今までに聞いたこともない音と、体験したことのない揺れと共に、兄の上に覆いかぶさり、母の上に父がかばう形になったそうだ。母は必死に兄を守った。父は家族２人を必死に守った。

食器棚からたくさんの皿が落ち、割れる音が鳴り響く中揺れがおさまるのを待っていた。幸いにも、怪我をすることはなかった。物が壊れるといってもお皿がほとんど割れたくらいだったそうだ。

初めての大きな地震、ライフラインは途絶え、情報も入らない中何が起こったのか判断するまでに時間がかかったそうだ。

母はこの時人生で初めて大きな地震を経験した。

２、ライフライン

住んでいた垂水は震源地から近いものの、被害はほとんどなかった。ライフラインも復旧するのは早いほうだった。電気はすぐに回復し、テレビをつけてみると今までとは違った神戸の街並みだった。長田の街が火の海と変貌していた。水道は３日後、ガスは１か月後に復旧したそうだ。水道は、住宅にタンクがあったため、早くに水が通った。ガスが止まっていた間、お風呂に入れなかったため、被害のなかった北区の母の友人の家や父の母の家、親戚の家、明石の銭湯などに行ってお風呂に入っていた。母が言うに神戸から明石まで銭湯に入りに来ていた人は多かったらしい。

３、長田で暮らす祖父母

母の両親、私から言う祖父母は長田方面に住んでいたため、母は心配し電話をかけてみるが、もちろんつながらなかったと言う。すぐに親子 3 人で祖父の家へ駆けつけた。古い家だったので潰れていると母は思ったそうだが、着くと母の実家は、何も変わらないままだった。2 人とも無事でけが一つなかったそうだ。しかし、揺れは同じようにすごかったと。

同じ長田、丸山なのに家からモノ一つ落ちなかったという。ガスもまだ止まっていなかったそうだが半日後ストップしてしまったそうだ。同じ長田でも被害の差はすごかったそうだ。祖父母の家は北区寄りにあったためほとんど被害はなかった。被害といってもライフラインの水道、ガスが使えなかったぐらいだったそうだ。

４、まさか神戸に…

母もそうだが神戸市民のほとんどが何の根拠もなく、「神戸には地震が来ない」と思っていたそうだ。諏訪先生でさえそう思っていた。みんながそう信じていた時に阪神淡路大震災が起こった。きっとその時驚きにあふれていただろう。

「まさか神戸にこんな大きな地震が来るなんて…」と。

なぜ神戸に地震が来ないと思われていたのかは、誰もわからないという。

５、震災を経験して母が感じたこと

小さな揺れは何回か経験してきた。大きな地震が阪神淡路大震災を受けるまで、なかったという。大きな地震といっても違う地域や、世界で起こるところしか見ていなかった。こんな大きな地震、自分が

受けるわけがない、体験するはずがないと思っていたそうだ。
　４で書いた通り神戸市民ほとんどが何の根拠もなく、地震は来ないと考えていたからなおさらびっくりしたという。
　母の友人や親せきはみんな無事だった、母の弟が阪神高速を車で走っていた、という話は以前に聞いたことあった。
　母にとっての震災は、「人生で初めて大きな揺れを体験し、地震の怖さを改めて知った。そして尊い命がたくさん失われた悪夢だ。」と私に言った。

感想

　阪神淡路大震災、当日の母の話を聞いて、初めて経験した大きな地震に本当にびっくりしたということがよくわかった。
　当時住んでいた家が住宅で一階だったのがよかったと思う。もし最上階だったらどれほど揺れていたのだろう。兄も小さく２歳という小さい歳で大きな地震を経験しているが自身はなにも覚えていないそうだ。また家にあったたんすが倒れてしまっていたら、父は怪我をしていただろう。本当に奇跡だと思う。大きな揺れで家族３人が怪我もなく家も潰れずに本当に良かったと思う。家族が助かり私が生まれた。本当に奇跡だと思う。
　ライフラインについては、少し驚いた。震源地から近い分、もっと被害が大きくすべてのライフラインが寸断されると思っていたがガス以外復旧するのが早く、びっくりした。復旧が早いことにすごいなと思った。またガスの復旧に時間がかかったため、お風呂に入られなかった人がたくさんいたことは母から初めて知った。
　長田に住む祖父母の話では、一番といえるほどに被害を受けた長田に住んでいたのに、モノ一つ落ちずに家も無事だったということに驚いた。無事だったことは本当に良かったが、長田といっても被害の差は本当に激しいということを初めて知った。またほとんどのライフラインが使えなかった祖父母はその間どのようにして生活していたのか、聞いてみたいと思っている。
「神戸に地震が来ない」といった話はどこでできたのか、気になります。
　私は、母から地震の体験談を聞いて「地震は怖い」という感情はなかった。実際体験している母からすればもちろん怖かっただろう。しかし体験もしていない、地震を体験していなければ実際話を聞くだけでは何も感じない。
　私は小学校高学年で初めて住んでいる神戸に大きな地震があったことを知った。ビデオを見せられた時信じることができなかった。自分の知っている神戸とまったく違う映像だったからだ。おばあちゃんといつも会う長田の街が火の海だったあの時の映像は今も覚えている。それほど衝撃的だった。友達と遊びによく行っていた三ノ宮の街並みが崩壊している部分も衝撃的だった。
　小学生の自分には受け止められない部分も多少あった。
　幸せ運べるように、を必死に歌った。亡くなった人に伝えようと必死だった。
　震災のメモリアルも校外学習で行った。亡くなった人の名前がずらりと彫ってあった。見たとき思わず涙が溢れそうになった。
　中学校に入ってから震災の話を聞くことはほとんどなくなった。小学校の時のように震災を学ぶ授業もなくなった。震災に触れるといっても、毎年１月 17 日にニュースで見るぐらいだ。そのニュースを見るたびに、母に震災のことを聞いていた。
　母に「あなたたちの年から震災を知らないんだよ」と言われて初めって知った。自分の世代から震災を知らないんだと。その時なぜか責任感を感じた。たまたま見たニュースの一部で被災した方が、震災があったことが忘れられることが一番心配だと語っていたからだ。といっても中学の自分には何もすることはできなかった。
　高校に入って震災と向き合う日、触れ合ったり知ったりすることがたくさん増えた。小学校や中学校では学んでいなかった詳しい部分まで、知ることができた。被災者の話を聞いたり、こうして親に体験談を聞いたり。自分の知らなかったこと、ビデオではわからない部分も学ぶことができた。地震のメカニズムも勉強し、野島断層も見に行った。
　高校に入ってたくさん学び、阪神淡路を決して忘れてはいけないと実感することができた。

　私が親の体験をここまで詳しく聞いたのは初めてだった。聞いていて想像が浮かび上がってくる。
私は震災を知らない。私たちの世代から震災を知らない。体験していない。

震災を忘れてはいけない。あの日から約 18 年が過ぎた。母は経験したことは、あの揺れは決して忘れないと、言っていた。私たちが体験談を聞き、次の世代へと繋いでいく。そんな責任を感じながら真剣に話を聞いた。

もし、あの地震で、阪神淡路大震災で大きな被害にあって、今の私の家族の誰かが死んでいたら今の私はいないだろう。そう考えてみると本当に地震って怖いなと思う。

いつどこで、どれくらいの地震が来ると予想がつけばまた現状は変わるだろう。
でもそれは不可能だから。今、防災を学び、被害を軽減させようと思っている。

母の話を聞いて改めて震災のことをもっと知ろう、次の世代へと繋いでいこうと思った。神戸市民にとって阪神淡路大震災は決して忘れてはいけない大きな出来事だということを知りこれからまた防災に励もうと思う。

私のおじいさんの阪神淡路大震災体験

橋本　祐希　ダニエル

阪神淡路大震災前日

当時私のおじいちゃんは、神戸市垂水区に住んでおり、兵庫駅の近くにある食品会社に勤務しており夜勤明けの次の日社員と慰安旅行に行く予定だった。
そして、まさか神戸であんな大きな震災が起きるとは思ってもいなかったそうだ。

阪神淡路大震災当日

おじいちゃんは当時46歳で冷凍庫の中で商品の数を数えて台車に積んでいるときに、地震が発生した。揺れた瞬間冷凍庫の電機は消え真っ暗になり、「このまま閉じ込められるのでは」と恐怖感がでたが、事前に電気が消えた時の冷凍庫からの脱出方法を知っていたので脱出できた。
靴を片方冷凍庫の中に落としてしまったが気にせず、店から飛び出ると周りから火の手が上がっていて、とてもガス臭かった。しかし、そこまで火は近くなかったので7時頃まで会社のラジオで被害状況を確認しながら片づけをしていた。
その後、家に帰るため車で国道二号線を使い帰ろうとしたが、いつもなら40分で垂水にある家に着く道のりなのに、大渋滞で4時間以上もかかった。
途中、長田の横を通ると大火災が起きていていろんな場所でサイレンが鳴り響いていて黒煙が上がっていたそうだ。そして、垂水に近づくにつれ被害は少なくなっているように見えて安心したそうだ。
しかし、もう一つおじいちゃんが気がかりだったのは、建設途中の明石海峡大橋のことだ。震災当時はまだ完成しておらず、長いケーブルと支柱だけだった。おじいちゃんが、二号線から無事な明石海峡大橋を見たときは何故かほっとしたそうだ。
そのまま、ひびの入っていない安全な道を探しながらなんとか家に向かった。

帰宅後

帰宅すると住んでいたマンションは無事だった。街並みも一軒家の瓦が落ちていたくらいで、ガスと水道は使えなかったが電話と電気は無事に使うことができた。
家の中の食器はほとんど割れていてグランドピアノも30㎝も動いていた。その後すぐに、六甲と三宮に住む親せきに無事か電話で確認して無事であることがわかった。
トイレの水はお風呂に水を溜めていたままだったのでそれを使った。その後、飲み水を確保するために近くのガソリンスタンドにある井戸水をいろんな入れ物を持ち、もらいに行った。
その日の晩は、電気が通っていたこともあり冷蔵庫が無事だったので、鉄板で呑気に余っていた肉や野菜を炒めて食べた。
近くの小学校にはほとんど、避難してきている人はいなかった。

震災が起きてから数日・・・

三宮に住んでいた親せきが避難してきた。
息子が食べ物を買いに行こうと言い、近くの店に行ったが米が売り切れていた。しかし。米は買い置きしていたので困らなかった。値段は高騰してなかった。
イランにいる私の母に無事だと連絡した。
水は3日で復旧した。
会社は1週間休ませてもらった。
おじいちゃんの息子は芦屋に住む電話の通じない友達の安否を確認するため、自転車を買って向かった。自転車はありえないほど値上がりしていた。その後知り合いの家に着いたが誰もいなかった。しかし、地域の人がどこにいったか教えてくれ無事に再開することができた。その後は普通に仕事にも復帰し、震災前とさほど変わらない生活が送れた。足りない物資を地域の人たちでお互い必要なものを交換したりしていた。

おじいちゃんの震災体験を聞いた感想

私はいままで肉親の阪神淡路大震災の被災体験を聞いたことがなかった。お母さんは外国に行っていたし、お父さんもその頃は北区にいたからだ。おじいちゃんやおばあちゃんに聞くのも何故かためらっていたので聞いたことがなかった。さらに私の中で「昔のつらい体験をおもいだすのは嫌なのではないか」と案じていたのかも知れない。今回、阪神淡路大震災で被災した近い存在の人の話を聞いてレポートにまとめるという課題が出よかったと思う。おかげでいつもは聞けない事なども聞けた。

最初に質問したことは地震の当日、何歳でどこで何をしていたかだ。

すると、当然のように家で寝ていて地震にあったと言うと思ったのに、会社で仕事中だとは思いもしなかった。しかも、冷凍庫という特殊な環境下で震災にあったと聞いて、驚いたとともに無事でよかったなあと思った。

そして、真っ暗なのにもかかわらず一目散で飛び出したという話にも驚いた。私なら真っ暗な空間になったら、びっくりして身動きが取れなくなると思う。

その後、国道２号線伝いに帰ったと話していましたが、あれほどの揺れだったにもかかわらず道路はぶじだったそうだ。意外と道って強いんだなあと思った。しかし、逆にその道しか使うことができなくて、車が殺到てしまったのはしょうがないなあと思った。

垂水へ帰っていくとき、おじいちゃんは街並みがよくなっていっていると言っていたが、後々地震のとき撮った写真や記録などを読んでいくと、垂水はほとんど取り上げられていない。垂水の被害が少なくて、本当に良かったと思った。

明石海峡大橋の話をしだしたとき、私はもうすでに完成しているものと思っていたので驚いた。そして、地震の影響で 1mくらいずれたという話にも驚いた。ああいう大きな建造物からすると、たった 1mの誤差でも危ないそうなので、という話を聞いたことがあるので調べてみると、完全に完成しているときに起きたら、「明石海峡大橋が損傷し、本四間の輸送が大打撃を受けていた。橋の長さが 1m 伸びる為、下手をすると道路部分が海に崩落していたかも…」ということも書いていた。阪神淡路大震災の時に完成していなくてよかったと思った。

帰宅後の話を聞くと、やっぱり垂水の被害は少なかったおかげか、被害は少ないみたいだった。

電気と電話がつかえたという話にも驚いた。被害は少ないとはいえ、さすがに電線とかが千切れていて、使えなくなっていると思っていた。この、電気と電話がつかえたおかげで垂水に住んでいる人たちはほかの被害の大きかった地域に比べ、とても助かったと思う。電気のおかげで電子レンジや冷蔵庫がつかえたことは良かったと思う。電話も無事なおかげで、安否確認などができたのでよかったと思う。

水も三日程度で復旧したみたいだし、近くに井戸水もあったそうなので本当におじいちゃんたちは恵まれているなあと思った。

数日後、親せきが何人か避難してきたそうだ。やっぱり避難所よりは身内の家の方が気持ちも楽なんだなあと思った。

食べ物を買いに行ったら米はなくなっていたと言っていたが、それ以外の食べ物は普通にあり、物価も高くなってなかったという話には驚いた。普通、食べ物などすぐに買い占められていると思っていたのにいつもと変わらなかったというのは良かったと思った。

その代り自転車が高騰していたという話には驚いた。やっぱり、ほとんどの道が塞がっているので自転車が重宝されたのかと思ったが、がれきなどでパンクしたという話も聞いたので、やはり三宮や長田付近は被害が大きかったんだなあと思った。

おじいちゃんのいろんな話を聞いていくと将来は垂水に住みたくなると思うほど恵まれていたんだと思った。そして、いろんな聞いた話をここに書いただけで終わらずに友達や、阪神淡路大震災を経験していない世代に語り継いでいきたいと思った。

また機会があればおばあちゃんにも聞いてみたいと思う。

私たちが知れる、阪神淡路大震災

濱岡　小有里

1.　母の中の「阪神淡路大震災」

（１）　阪神淡路大震災、前日

震災当時、母のお腹には約 6 ヶ月になる私と双子の兄がいた。
1 月 16 日（月）、母は切迫早産と貧血で入院していた病院を無理して退院。母の入院で学校を休んでいた、長兄と姉たちの登校の準備をしていた。その日の夕方 18 時ごろ、母は身体に感じる地震を感じた。しかし、今までの経験上神戸でそんな大きな地震が起きるなど考えてもなかったので、揺れているなぁとしか思わなかったそうだ。

（２）　5 時 46 分

1 月 17 日早朝、ドーンと下から突き上げられる揺れで目を覚ました母は、続いての大きな揺れに反応しとっさに、隣に寝ていた兄と姉達に覆いかぶさった。その直後、母の寝ていた布団には整理ダンスが倒れてきたそうだ。母が周りを見ると、いつもは街灯や近くの市バス車庫の灯りでほの明るいはずの窓の外が真っ暗になっていた。
揺れが少しおさまってから見た光は、玄関の扉の隙間から漏れる階段の非常灯のわずかな光だけだったそうだ。次々に余震が襲う何が何かわからない状態の中、近所の男性の安否を聞いて回る声が聞こえ、母は玄関のわずかな明かりを目指して兄と姉達と一緒に外にでて、団地の集会所にむかった。

（３）　避難

集会所の周辺では近所の男性達が、周りの家々を回り安否を確かめるためにドアを叩き、声をかけていた。集会所の和室では年配の人や子供を連れたお母さん達が身体を寄せ合ってラジオから流れるニュースに耳をかたむけ、何度も何度も襲ってくる余震に驚き震えていた。
ラジオは、誰もが予想もしなかったひどい事態を伝えた。
医師から絶対安静を指導されていた母はあまり動けず、父や祖母など家族の安否が心配で仕方なかった。近所の人々は余震が少しおさまると家にある食べ物を集会所に持ち寄り、分け合ってくれた。兄と姉達は頂いた果物やお菓子を自分たちが食べる前に母のお腹にいる赤ちゃんにと、母に渡して食べるようにいったそうだ。大きな余震が続く中、まだ顔も見えない双子の兄妹の事をまず想う子供たちの優しさに母は心うたれた。
不安や恐怖はお腹の中にいる私たちにも響く大きな出来事だったと思うが、周囲の人達や優しい兄姉たちの思いやりで母体にも悪影響も出ず済んだようだった。

（４）　現状把握

外がどんどん明るくなり、周りの様子が落ち着いて見られるようになってくると、驚く事態が母の目に見えてきた。あちこちに地割れの跡、傾いた建物、車の中の避難者。鳴り響くサイレンとヘリコプターの飛ぶ音は、その後何日も続いた。コンビニは現金をもった人たちが長い列を作ったそうだ。停電で普段のレジはできず、店にある商品をどんどん現金で販売していた。母は非常時には電子マネーやクレジットなどは役に立たず、非常持ち出し袋には細かな現金を入れておくことが大切だと身に染みるように感じた。

（５）　再会

母は車で 10 分程度に住む祖母が一人だったのが心配で（我が家が玄関から奥に進めない状態だったので）、近所の一階に住む人に電話を借りに行った。電話を借りに行った家も倒れた家具と、家財道具で足の踏み場のない状態だった。やがて早朝から仕事に出ていた父が、地震後何時間もかけて帰ってき

た。車で祖母の家に連れていってくれ、母は家から出てきた祖母と無事を喜び、涙の対面をした。その時母が驚いたのは、同じような地震の揺れがあったはずのそれほど離れていない距離に住む祖母の地域の静けさと、何の変わりのない風景だった。サイレンやヘリコプターの音は同じでも、街は人の姿もなくシンとしていて、余震がなければ同じ震災の街とは思えない様子だった。

祖母の家は、水道は止まっていたが、電気もガスもいつも通りに使えた。また、遠くの地域へは電話が使用でき、祖母は地震の時布団の中で震えながら京都に住む叔母と励まし合っていた。 地面の中は見えないが、大きな揺れの場所のラインから外れているのではと母は感じた。大きな一軒家の立ち並ぶ祖母の家の地区はそれぞれが家の中でじっと揺れがおさまるのを待っていたようで、一人だった祖母は大変心細かったそうだ。母は広い家ではないが、団地に住んでいて近所の人たちが助け合い、励まし合って恐怖の時間を乗り越えられた環境を大変ありがたいと思った。その後しばらくは母の実家である祖母の家で暮らし、学校が再開するまでを過ごした。

（６） 震災の被害

テレビの中では信じられない光景が映し出され、サイレンは夜中もなり続けた。時々、大きな余震が襲い、そのたびに驚き、声を掛け合う時間が続く。水が止まって給水車が来てくれ兄たちはバケツなどを持って水をもらうため並びに行った。そんな中、母は注射を打ちに毎日通院しなければもたない状況だったので、仕事にならなくなった父の車で病院に通った。病院も水が出ない、電気も不自由な状況だったが、医師やナースたちが力を合わせて来られる患者さんたちに対応されていたそうだ。

一ヶ月以上が経ち、やっと小学校が再開されたそうだが、やはり校内や運動場など地震の被害があったところは使用できず、隣の学校は全壊だったため兄や姉たちが通う小学校の校舎を使い午前と午後を分けて二つの学校が再開された。隣の小学校にプレハブ校舎が出来るまで、二つの小学校の同居はつづいた。

その頃「しあわせはこべるように」の歌が生まれ、子どもたちがずっと歌っていたので母は今でもあの歌を聞くと胸が絞めつけられるような気持ちになり涙が出そうになるそうだ。

２．感想

（１）自分の中の「阪神淡路大震災」

自分がはじめて阪神淡路大震災を知ったのは、小学校で読んだ「しあわせはこべるように」を学習したときである。震災に対して知識を持っていなかった自分は、書いてある現実離れした内容に驚いた。総合という授業で、一番最初に先生が読み聞かせてくれた被災体験は、今でも忘れていない。

「あの子は天使です。」娘さんを亡くしたお母さんの話だった。お母さんと娘さんは、長時間瓦礫の下敷きになった。お互いを励ましあい、やっと救助された病院先で発症した、娘さんのクラッシュシンドローム。集中治療室で娘さんは症状が出た状態でもお母さんを励ますために、手を握ったり指を動かしたりしていたそうだ。読んでいたとき、泣いてしまったのを覚えている。その日、家に帰って初めて母親に阪神淡路大震災の事を聞いた。阪神淡路大震災が本当にあったことなんだ、と初めてその時おもった。

自分が環境防災科を知ったのは中学三年生の後半だった。学校に舞子高校の先生が来て説明会を開いた。家から近かったという単純な理由で興味を持っていた。その時初めて、環境防災科について知った。募金活動、ボランティア活動の様子をみてすごいなと感心した。専門の、防災の知識を勉強できるという魅力にひかれ、環境防災科に進みたいと思った。

環境防災科面接に向け、防災の記事、阪神淡路大震災の記事や本をたくさん読んだ。当時の記録の本を読んでいるうちに自分が知っていた阪神淡路大震災はほんの一部だったことが分かった。悲しいことばかりだったイメージの震災だったが、そこには現状に目を向け協力しあい、支えあう人がいた。人と人同士の暖かさを感じた。その本や記事を読んでから、流してみていただけの阪神淡路大震災の記録ビデオが刺さるように現実に感じた。それからテレビで流れる地震情報に敏感になった。

母はしあわせ運べるようにを聞くと、いつも目を逸らして「この歌涙がでてしまう」と言う。「お兄ちゃんたちがね、よく歌ってたんよ」そう言う母は、どこか悲しそうにも見えた。被災された方に当時の事を聞くと、一人一人違う表情をされる。その表情は、悲しそうだったり、怒っていたり何かをじっと見ているようにも見える。神戸に住んでいる自分たちにとって、震災を学ぶのは普通のことだと思っ

ていた。1 月 17 日近くになれば、テレビで放送されるニュースが普通にある。小学校では「しあわせ運ぼう」で阪神淡路大震災が授業で教えてもらえる。環境防災科に入るまで、それが普通で当たり前だった。でも、それは被災された方々が手を取り合い、記録し、心の傷を自分たちに見せてくれているからだ。自分たちに、辛かったことや悲しかったこと、大変だったこともすべて教えてくれるからだろう。それはとても、尊いものではないだろうか。

あるボランティアに参加させていただいているときに「君たちは、阪神淡路大震災を知らない世代か」と質問された。その質問をされた時に、自分は「知らない」世代なんだと痛感した。どんなに勉強しても、お話を聞いたとしても「知らない」ことに変わりない。倒れた阪神高速道路を目の前で見たことがない。余震の中、家族の安否のために駆け回った訳でもない。自分たちは、何も「知らない」のだ。想像して、第三者にしかなれない。そんな自分に、何ができるだろうか。

（2）これから

自分たち環境防災科 10 期生は入学してからすぐ、東日本大震災のボランティアに行かせていただいた。右も左もわからない自分が被災地に行って本当にいいのか、本当に何かできるのか不安でたまらなかった。被災地に行ってどこから来たの、と多く質問された。神戸からきましたと答えると、遠いところからありがとうとお礼言ってくださった。ほとんど無力の自分に、涙を流して握手してくださった方がいた。目の前で、人が津波に流され自分一人が助かったと涙をこらえながら話して教えてくださった方もいた。そんな方々に私は何も声をかけることができなかった。

人と防災未来センターに校外学習に行ったとき、震災当時を体で体験するブースがあった。自分の立っている場所が実際に揺れ、四方八方から音が聞こえる。そして、映像が画面で流れる。終わった時には手に汗をかいていた。実際に体験していない私たちが伝えることができるものは、語り部の方々と比べることができないくらい少ない。どんなに勉強したって、被災した方々にかける言葉が見つからない。記録を読んだり、聞いたりしても全部を知ることはできないと思う。でも、知りたい。過去の人たちに何があって、どうやって乗り越えてきたか、どんな背景があったのか。目の前にいる人にきちんと向き合いたい。

私は今心理学に少し興味がある。カウンセラーになりたいと思ったことがあった。納棺士の笹原瑠似子さんの講義を聴きに行ってあんな人のようになりたいと思った。お話を聞いて、話してくれたその人が少しでも軽くなってもらえたらうれしい。軽くなれなくても、話してくれた人が少しでも休まることができるそんな人になりたい。偽善者の考えかもしれないけど、誰かの支えになるような、誰かを笑顔にできるような人になりたい。

もし、今後大震災が起きて被害がでてしまったとき、自分にできることがあるだろうか。

環境防災科に入って思ったことが２つある。１つ目は、この前の震度 4 の地震で何もすることができなかった自分。地震だと認識できたけれど、びっくりして動くこともできなかった。そんな自分の無力さ、行動力のなさを変えたい。今後、災害にあってしまった時、何もできない自分にはなりたくない。

２つ目は、お話いただいたたくさんの方々の被災体験、学んだ災害に対する知識を広げたい。環境防災科でできた繋がりを自分で止めたくない。「知らない」世代だからこそ、今後自分たちより年下のもっと「知らない」子たちに伝えたい。震災当時の方々と一緒に語り継いでいきたいと思う。

自分は、今後かかわる人とずっと繋がりを持っていきたい。地域の人たちと関わりを持って、防災を一緒に学んでいけるようにしたい。子供も、年輩の方も一緒に学べる防災を広めたい。今まで自分にかかわってくれた人に被災体験を話してくださった人たちに感謝し、教えてくださったことを忘れず防災に関わり続けたいと思う。

母の震災体験

平木　爽

１．地震発生直前から直後

地震発生時は寝室で寝ていた。最初の衝撃で目が覚めたが、何が起こっているのか分からなかった。大荒れの嵐の中の船に乗っているかのような激しい揺れで、立ち上がれず、すごく長く感じた。家が坂道を滑り落ちているような感覚でもあった。地鳴りと家じゅうがきしむ音がすごくて、家が潰れてしまうのではないかと怖かった。地震が起きてすぐ電気が消えた。揺れが収まり、まず懐中電灯を取りに行き家族の無事を確認。そして家の中を見て回った。激しく揺れた割には、落ちた物や割れた物、壊れた物はほとんど無かった。30 分ほどして外に出ると(6 時前は暗かったため)、最初は雪かと思ったが灰が降っていた。長田や須磨の方の空が、火事の炎と灰で変な色になっており燃えているにおいが漂っていた。

２．ライフライン

まず、電気とガスが直後に止まった。テレビ、電話が使えずネットが使える環境でもなかったため、情報が入ってこない。孤立した状態で「他にもっと被害が大きい地域があるのだろうか」などを考えて、とても不安だった。そんななか、ヘリコプターが飛んでいるのを見て安心した。携帯ラジオがあったのに聞くのを忘れていた。甚大な被害があった地域ではなかったため、変に冷静で「この時間に電話したら迷惑かもしれない」と直後にはせず、祖父らへの連絡は 7 時頃にしたが、全く繋がらなかった。電話が繋がった人やネットが使えた人から大まかな地震の情報を聞きやっと状況を把握。

お昼頃、祖父らの方から電話がかかってきて連絡を取ることができた。2 時～3 時頃、電気が通りテレビをつけると高速道路が倒れている状態や地震の規模、大火事が映っていて被害の大きさを知る。当日は水が出ていたが翌日から一週間ほど断水した。だが、家の近くに主水管という太い水道管があって、毎朝水道局の人が検査や修理のために水を流していたので、午前 10 時くらいまでは水を使うことができた。そのため、給水車のところまで水を取りにいかずに済み、浴槽やポットなど貯められる物には何にでも水をためた。ゴミ収集車は一週間後くらいに初めて来た。その時はゴミが溢れていたが、買い物があまりできないため次からはあまりゴミは出ていなかった。

３．発災からの数日間

家周りの被害が比較的小さかったので生活できない状態ではなく、避難はしなくてよかった。

（１）お風呂

数日経ってもガスがなかなか来ず、一番困ったのがお風呂。お風呂屋さんは混んでいて、4 歳の兄と 1 歳の姉を連れて行くのは不可能だった。翌日、兄の通うスイミングスクールから「温水のシャワーで子供を洗ってあげますよ」と、電話が回ってきた。父は震災後 3 日目頃から仕事に行くようになった。一度仕事に行くと 1 週間ほど帰ってこないので、車はほとんど使えなかった。それに、ガソリンスタンドに行っても、お店にガソリンが無い状態だった。スイミングスクールへは徒歩では行けない距離なので、家の大きめな衣装ケースにポットのお湯を入れてお風呂のようにして、兄と姉を入れさせた。水を使わずに頭を洗えるシャンプーも使ってみたが、全然スッキリしなくて役に立たなかったそうだ。

（２）食料

食糧は、買いだめをしていたので 1 日 2 日は大丈夫だろうと思った。が、それ以上に長引いたらどうしようと不安だった。電気が当日に通ったので、ポットを使いインスタントの食料を食べて過ごす。数日後、普段は 10 分で着くところを渋滞のため 1 時間かけて買い物へ行った。1 時間かけて行ってもほとんど物はない状態だった。みんながみんな大変な状況の中で、食糧の販売に来てくれた行商の八百屋さんやコープさんがとても助かった。「子供たちの健康のために、売らなくては駄目になってしまうだけ

だから」と、野菜を安く売ってくれた。当時、コープの 12 本入り常温保存用牛乳を買っていた物や、ホットプレートが役に立った。寒い時期だったので食べ物が結構もった事も幸いだった。

（3） 幼かった兄弟

電気が通ってテレビが映っても、どの番組も震災関係のものばかりだったので 4 歳だった兄が退屈をして大変だった。家にいても退屈なので、外に遊びに行きたがったが、余震が怖いので家の中か玄関から見える範囲で遊ばせた。少し見えなくなるととても心配だった。姉はおしめが取れる頃だったので、それは不幸中の幸いだった。

（4） その他

テレビではコンビニ荒らしのことやボランティアがおにぎりを配っている映像が流れていて、近所の人と協力しながら食べ物に困ることなく生活できているのが幸せだと感じた。その一方で、本当に困っている人に何もしてあげられない歯がゆさを感じた。

しばらくは夜に小さな地震がくると目が覚め、「大きな地震が来るんじゃないか」と、ドキドキした。普通の生活に戻ってからも無駄に買いだめをしてしまった。

４．曽祖父母

当時、曽祖父母は東灘区に住んでいた。被災状況は深刻で、木造の家は全て全壊していた。翌日に当時豊中市で一人暮らしをしていた伯母が、友達のバイクを借りて様子を見に行った。曾祖父母の家も潰れ、二階建てが一回以下の高さになっていて絶望的だったそうだ。母はそれを祖母からの電話で知った。その翌日の晩、母は曾祖母が「助けて」と助けを求める夢を見たそうだ。その日、やっと曽祖父母の家を捜索する順番が回ってきた。一軒一軒の潰れた家を順番に見て回るため、すべての家を回るのは凄く時間がかかった。自衛隊の人は潰れた家に向かって「おばぁちゃん」と声をかけてみたそうだ。すると物音がし、「もしかしたら」と救出作業が始まった。なんと当時 83 歳だった曾祖母は生きていたのだ。怪我もろっ骨にひびが入っていただけだった。

救出されてからの第一声は「お腹が空きました」だった。二人はいつも家の一回で寝ていた。曾祖母は当日の朝、早く目が覚め、枕元の少し小さめのタンスに背中をつけて座っていた。その状態の時に地震が起こり、向かいの壁が倒れてきたのだ。だが、タンスのおかげで壁との間に三角形の空間が生まれた。曾祖母はこの中で 3 日間過ごしたそうだ。だが隣で寝ていた曽祖父は壁の下敷きになってしまった。壁は曽祖父の胸から下に倒れ落ちてきた。隣でそれを見た曾祖母は「これはもうだめだ」と思ったそうだ。救出を待っている間、声を掛けてみたりもした。だがやはり返事はなかった。寒い時期は首にスカーフを巻いて寝ていたので、それで首を絞めて死のうとも思った。でも苦しくて死ねなかったそうだ。

救出されてから行った病院には怪我人がいっぱいで、廊下や椅子にシーツを敷いて一週間ほどを過ごした。その後、知り合いの伝で須磨にある老人ホームが一つ部屋を空けてくれ、そこで生活をしていた。それから一か月程して東灘区の仮設に移ったという。仮設では「隣の部屋の人がうるさい」など、ストレスを感じていたそうだ。

母は曽祖父の死を電話で伝えられた。「曽祖父のもとへ行きたい」と言ったが「小さい子供を連れてこんなに被害の大きい所へ来ても、迷惑をかけるだけだから来るな」と言われて行けなかった。

曽祖父のことが大好きだったのに、遺体にも会えず辛かった。死者が多すぎて葬式をする場所がなく、親戚の伝を使い大阪の堺のほうで葬儀をしたそうだ。

５．地域の人々

地域の人たちがいてすごく心強かった。地域の助け合いが自然とできていた。近くに親戚がいる人はそこへ避難することも多く、家にある食べ物を分けてくれた。なかには、避難する前にパンを焼いて一斤ずつ近所に配ってくれた人もいた。私の家にはガス器具が多かったため、電子レンジでご飯が炊けるものなども貸してくれた。ほとんど知らない人も、「ガスが来てるからお風呂入り」と言ってくれたりした。

６．震災を体験して

阪神・淡路大震災が起こる前には地震は起きないと思っていたし、そんなに被害が大きくなるとは思っていなかった。震災を経験してからは、いつ何時・何が起こってもおかしくないと思うようになり、タンスの上に突っ張り棒を取り付けたり電気ストーブを買ったりした。当時の話をするのは嫌という人もいるかもしれないけど、「震災があったことを知ってほしい」という思いで今回話した。でも、やっぱりいくら話しを聞いても体験しないとわからないことではあると思う。そして「今ある環境は当たり前ではないんだ」という事をみんなに分かってほしいと言っていた。

感想

阪神・淡路大震災を知ったのは小学校での 1 月 17 日の授業で、だったと思う。低学年の頃は、「地震があった時に、神戸はこんなふうになってしまったんだよ」と倒れた家の写真を見せられたりした。それを見ても写真の中の異様な光景が怖いだけで、これが自分の住んでいる町だと理解することは難しかった。だが、学年が上がるにつれて徐々に理解できるようになっていった。そうなるには、毎年母が 1 月 17 日に震災体験を聴かせてくれていたおかげでもあると思う。

私が環境防災科に入ろうと思った大きなきっかけになったのが、その母の震災体験を聴いてだった。さっきも書いたように毎年、震災当時の話をしてくれていた。だが、震災の話をこんなに深く聞いたのは初めてだった。自分から深く聞きに行くこともなかったし、テレビや新聞などで「震災から〇〇年」という文字を目にして、成り行きで話をしてくれているものだと思っていた。だが、「母の震災体験」を書くにあたって「震災であったことを伝えたい」という思いで毎年話をしてくれていたと知った。そんなこととは知らなかったので、驚いたし嬉しかった。「伝えていきたい」という母の思いが伝わって、いま私は環境防災科で阪神・淡路大震災やその他の災害・防災について学んでいるのかなぁと感慨深い気持ちになった。それと同時に、今こうして防災を学んでいるのも震災を乗り越えて私を生んでくれたからだ。今生きていることに感謝したい。そして、母の思いをしっかり受け継ぎどんな形であれ、少しでも多くの人に阪神・淡路大震災の事や防災を広めていくことが私の使命だと思った。

母に話を聴いてもう一つ心に響いた言葉があった。それは「体験しないと分からない」だ。舞子高校に入学してから 2 年と少し。いろいろな人に震災体験を聴いた。いろいろな場所に見学に行き、断層を見たり震度 7 の揺れを体感したりもした。確かにそれで、当時の被災状況や大変さを理解することは少しできたと思う。でも、地震の揺れの怖さや大切な人がなくなる悲しみは全然わかってなかったなぁと思った。そう思ったのは、4 月 12 日に淡路島を震源に起こった地震を経験してだった。この地震は、私の人生で経験した地震の中で一番大きな揺れだった。地震が来たときは寝ており、不意の地震がこんなに怖いものかと思った。揺れの最中はとっさに動くことができなかった。他の人は、そんなに大事とは思っていなかったかもしれない。でも私は正直すごく怖くて、今まで震度 4 の揺れを舐めていたなと思った。東北に住んでいる人は、東日本大震災でこれよりももっともっと大きな地震を経験し、震度 4 レベルの揺れは余震で何度も何度も経験している。こんなに何も分かってない自分が、本当の意味での東北支援ができるのだろうか、できていたのだろうか。揺れが収まってすぐに、そのことが頭に浮かんだ。本当に私は地震の怖さを何も知らなかった。

さらに、私が生きている間にとても大きな地震が起こることが予想されている。そんな中でこのままでは駄目だと強く思った。もっと大きな地震が起こったとき、私は冷静に行動できるかと考えると、とても無理だと思う。まだまだ知らない事ばかりで経験も少なく、もっと勉強する必要性を感じた。まずは、あたりまえの事だが授業をもっと大切にしていきたいと思う。

阪神・淡路大震災のような災害の話はメディアでは「風化させてはいけない」という言葉がよく使われているように思う。確かに、私たちのように震災を体験していない人にとっては間違っていない。これは当たり前のことかもしれないが、体験した人にとっては一生忘れることのできない、一生風化することはないのだと、母の話を聞いていて感じた。そして、その話を聞いているうちに他の人の震災体験も聞きたいと思うようになった。特に身近な身内である父や祖父母の話を聞いてみたいと思った。阪神・淡路大震災で被災された方の一人一人にそれぞれの思いがあり体験がある。被災体験を聞くと毎回思うことだが、被害の数字ばかり見るのではなくその数字一つ一つに辛い思いや悲しい思いがあることを忘れてはいけない。これから生まれてくる子供は、私たち以上に震災について知らないことが増えていくだろう。そういった人たちに阪神・淡路大震災を伝えていくのは私たちだ。その時に、どう伝えるか。先ほど書いたように「どれだけの人がなくなって、どれだけの家が潰れた」そんなことも大事だけ

れど、一人一人の震災体験を伝えていくことが一番必要だと思う。自分が体験していないことを伝えるのは難しいことだ。私が次世代に伝えていく時は、この母の震災体験を語り継いでいきたい。

私は曾祖父に会ったことはない。母は私に曾祖父の話をするとき「おじいちゃんのこと大好きだったよ」と毎回言っていると思う。曾祖父は画家だった。母がお題を出すと何でも素早く上手に描いてくれたそうだ。私は曾祖父の美術館に飾られていた絵を小さかった頃に見に行ったり、六甲山にあるホテルに飾られていた絵を見に行ったりしたが正直あまり覚えていない。でも、その時とても誇らしい気持ちになったことは覚えている。曾祖父に会ってみたかった。こう思ったのは最近になってからではなく、小さい頃からだった。「素敵な人だった」と言う母の言葉を聴くといつも思っていた。あったことの無い私ですら何回もそう思ったのだから、母は最期に会えなくてどんなに辛かっただろうと思う。喪の作業ができることは当たり前だと思っていたが、できなくなるような状況になることも十分にあり得ることなのだ、と気づいた。喪の作業ができなければ一生心のどこかで「お葬式に行きたかったなぁ」や「お葬式してあげたかったなぁ」と思い続け、後悔のような気持ちを持つことになる。「あれは仕方のないことだった」と思うようにしても、やっぱり後悔の気持ちを本当に消すことはできないだろう。だから、やっぱり喪の作業は大切だ。他にも、「家が潰れないことが一番大切である」とか「地域の人との関係の重要性」を感じた。今まで勉強してきた事をもう一度考え直すことにもなったし、身近な人の話だったので分かりやすかった。防災を学ぶことは大切だと感じた。そして、あたりまえのように便利な生活ができていることに感謝しないとなぁと思った。

将来の夢のことを考えていて、気づいたことがあった。それは、日常の生活の小さなことが防災に繋がっていくという事だ。特に地域の人との関係は、毎日のありかたに深く関わってくる。災害が起こって、自衛隊や消防その他の救助が来るまでの間は、近所の人たちが一番助けになる。助け出すまでの時間も速ければ速いほどいい。復旧の最中の生活でも協力し助け合いをするのは、地域の人たちだろう。母の話を聞いても、そのありがたさを感じた。でも、そこで思ったのは「自分は近所の人といい関係を築けているのか」だった。今の私は学校に行く時や帰宅時に顔を合わせても挨拶をしなくはないが、積極的にはできていない状態だ。それは防災に関係なしにしても反省すべき点だと思う。防災以前の問題だ。これからは、身の回りの基本的なことをできるようになっていこうと思う。そして、さまざまな事を知っておくことも人とのコミュニケーションでは大切だ。これからもっと積極的にいろいろなことを経験していき、本も少しずつ読んでいきたいと思う。

この先起こるといわれている「東南海・南海地震」。その時には、阪神・淡路大震災・東日本大震災の経験を無駄にしてはいけない。日本に住んでいる人一人一人が防災について考えることが重要だ。少しでも周りの人の意識を高めていけるように私もできることを頑張りたいと思う。この前、友達と喋っているときに東南海・南海地震についての話になった。自分の命に関わることだから当たり前なのかもしれないが、真剣に津波の話や防災の話をしてくれて嬉しくなった。その時に、少し質問をされたり「環境防災科だから普通の人より災害に詳しくて安心だね」というようなことを言われたりして、少しドキッとした。聞かれたことについてしっかり答えを出せるよう、災害時にリーダーになれるよう、もっと勉強しないといけないと感じた。授業に真剣に取り組んでいきたいと思う。

語り継ぐこと

藤田 祐資

はじめに…

阪神・淡路大震災の起こった 1995 年 1 月 17 日、私はまだ生まれていない。だから、これから述べる事は親から聞いた事がほとんどだ。

１、震災が起きた当日

（1）午前 5 時 46 分

まだ私の生まれていなかった、1995 年 1 月 17 日午前 5 時 46 分。ゴーッという地面からの音とともに強烈な縦揺れの地震が起きた。トラックが突っ込んできたかのように思えたという。

（2）揺れの直後

本当なのか信じられないが、父は、まったく気づかずに寝ていたという。余震が続く中、母は父を起こした。だが、父はまだ事態を把握しておらず、まだ頭は寝ていた状態だった。

（3）揺れの後

まず、ラジオ（朝日放送）を聞いた。ラジオの情報によると、大阪では、信号が停電しているとの情報が入ってきた。これに危機感を感じた父は、やっと布団から出て TV を付けた。TV の情報によると、須磨の一の谷で電車が脱線したとの情報が入ってきた。

２、その後の我が家

（1）夜にかけて

住んでいたマンションでは揺れによる被害はほとんどなかった。だが、2 か所だけ被害という被害か分からないがでた。1 つはテレビの移動で、もう 1 つは植木鉢の土がこぼれるといったようなことだ。2 つとも少しの移動であり、近くに人間がいなかったので何の被害もなく終わった。だが、当時住んでいた家から数メートルの距離しかないといったところなのに、食器が割れ、テレビが倒れたといった少し大きな被害があったところもあったそうだ。そう思うと、私の両親は運がよかったのだなと思った。だが、このころ両親は何の防災知識もなかったため、家具の転倒防止や食器棚の扉の勝手な開閉防止などの対策を取っていなかった。それにもかかわらず、他の家屋に比べ被害が少なかったというのは本当に奇跡だと思った。だが、どれだけ助かったといっても、住む分には少し支障が出た。なぜならばライフラインが止まったからだ。これには困ったと言っていた。特に水が止まったので、それにはとても困ったと言っていた。私の両親は地震が発生した当日の晩から、私の父の実家に泊まることになった。父の実家は西区岩岡町にあるため垂水区よりはより被害が少なかった。だが、水が垂水区と同じように出なかったため、祖母は、車で加古川まで水を汲みに行っていたらしい。加古川は水が出ており、さほど被害がなかった。水が近くの場所で出るということに関してはとても助かったと言っていた。料理に使うため、トイレに使うため、風呂に使うため、生活用水として使うためとあらゆる場面において水は必要となり、とても多くの水が必要となった。この事を考えると、水は何よりも一番重要であるということを改めて気づけた。ここでは、2 日に 1 回程度風呂に入っていたらしい。ガスはプロパンガスを使っていたため、普通にお風呂に入る事が出来た。

（2）２日目

父の実家で何をしていたかと私の母に聞くと特に何もしていなかったという返答が返ってきた。強いて言うならば、洗濯、料理などの家事とテレビを見ていたということぐらいらしい。長田などの被害の大きい場所で生死をさまよう状況に陥っている人もいる中で、本当に軽く済んでよかったなと思った。
父のお父さん、私から見れば祖父はこの当時、中国で貿易関連の会社を営んでいた。それにより、中国の留学生を日本に迎え入れるといったようなことも当時はしていたそうだ。この日はその中国の留学生を車で空港まで迎えに行く日だった。西区岩岡町はそれほど被害がないということで、そのまま留学生を受け入れることにした。その迎えに行く役に選ばれたのは私の父で通行止めや一歩通行、または迂回、遠回りをさせられ普段の何倍もの時間をかけて空港まで行った。特に国道 2 号線はなかなか思うように進む事が出来ず、とても困ったらしい。また、この迎えに行く時には私の母も一緒について行ったらしい。

（3）３日目以降

当時、母のお母さんは病気を患っていたため病院で入院していた。また、入院していた病院は垂水区にある舞子台病院というところで、私の母はこの当時泊まっていた岩岡の家と舞子を行ったり来たりしていた。行ったり来たりするといっても容易にはできなかった。私の母はあまり車の運転が上手でなかったうえに道路の通行止め、遠回り等をさせられたので非常に困ったと言っていた。また、私の母のお父さんは舞子台病院の近くの家に住んでいた。私から見るところの祖父は地震によって少し大きな被害を受けた。それは、屋根瓦がすべて剥がれたことだ。このため、祖父は少しの間ブルーシートで応急処置を施していたそうだ。祖父の住む星陵台も水が出ていなかった。このため祖父は水を汲みによく出かけていたそうだ。ここで私が感じた事は、かなり大きな範囲の地域で断水しており人々を困らせたということだ。
私の両親は地震発生の日の晩から父の実家で 10 日から 2 週間程度泊まっていた。そして、その後は元のマンションに帰ってきた。垂水区千代ヶ丘は 2〜3 か月後はライフラインも通常通りに徐々になってきており、平和な日常を過ごす事が出来た。順番でいうと、2 月の初旬から電気、水、ガスの順でライフラインは復旧していった。

３、被害状況について

（1）わが家の被害状況

私の両親は当時マンション暮らしだった。幸いそのマンションが全壊・半壊するといった被害もなく、父も母もけがをするといったようなことはなかった。家のマンションには、地下に貯水タンクというものを忍ばせている。そのため、震災当日の朝は、水に困ることはなく普通に使えたという。だが、それは朝の出来事なだけで、何時間か経つと水は止まり不便な生活を強いられた。なぜ震災当日の朝にもかかわらず、水が使えたかというと貯水タンクに残っていた水が残っている分だけ各家庭に回っていたのだという。
その後、電気・ガスも止まり不自由な生活を余儀なくされた。特に水が出なかったのが不便で、水を買いに行こうということになったらしい。いざ出かけようとドアを開けて外に出て少し歩いてみると、いたるところからガスの臭いがし、これはただ事ではないなという風に感じたという。また、地球が壊れたのかというほどにまで思ったという。いざコンビニに着くと、水はなく他の物も何もなかったらしい。

（2）周辺の被害状況

私の聞いた範囲なので少ししか分からないが、実際はもっと細部のあらゆる地域で多大な被害が起きていたと思う。だが、少しでも聞いた事を知らない人に知ってもらうために語らせてもらいたい。1 つ目は私の家の近くだ。私の住んでいる家から歩いて少したったところに千代ヶ丘から星陵台に上がる坂がある。とても急な少し長い坂だ。この坂は横を見渡すと断崖絶壁のような壁になっておりとても高い。その断崖絶壁のような壁の上には普通の家が建っており、普通に生活されている。下から見ると断崖絶壁に見えるが、坂を登るとその家は普通の平たんな道に私道として家につながっている。なかなか説明が難しいが、とても今思うに危険な場所だ。この坂は地震によって崩れ落ちた。それによって道路は封

鎖され、住まれていた家の人がどうなったかという情報は聞いていないので分からない。この坂は今では元通りにされており、断崖絶壁のような壁はコンクリートで補強されている。また民家が元通り建っている。また、何年後かに地震が来るといわれているのに少し危ないような気もする。また、坂を登りきった車の走る道路ではアスファルトが地割れを起こし火が噴いていたらしい。2 つ目は朝霧のどこかの道路だ。朝霧のどこかは分からないが車の走る普通の道路のアスファルトから火が噴いていたらしい。これも当然だが通行止めになったらしい。3 つ目は神戸市営地下鉄。地下鉄は地下を走る。そのトンネルの上を通る道路が八の字に折れ曲がったらしい。そして私の知っている最大の被害を受けた場所は長田だ。長田の被害の大きさは知っている人が多いかもしれない。阪神・淡路大震災が起き被害を受けた中で最も甚大な被害を受け、私の父が行った時には民家から民家に火が燃え移り、まるで戦争のようだったと言っていた。私の父がなぜ長田に住んでいるわけでもないのに長田の被害を目の当たりにしたかというのは、もともとこの日は中国の留学生を迎えに三宮に行く日だったかららしい。自分の家も人間もそれほど被害がなかったために、予定通り迎えに行く事が出来たらしい。でも、道中では当然だが通行止めになっていたり、遠回りさせられていたりで目的地に着くまでにはなかなかの時間がかかったらしい。

４、伝えたい事

私の母は阪神・淡路大震災について色々と話してくれた最後に、学生に伝えたいこととして 3 つほど語ってくれた。1 つ目は、備えだ。母は、阪神・淡路大震災以前は地震の本当の怖さを知らなかったので、非常用持ち出し袋の準備など当然していなかった。今回の地震では、両親は最悪の事態は免れたので、それほど非常用持ち出し袋は必要ではなかった。だが、後々になって長田などの被害を見ると、非常用持ち出し袋はとても重要であることを認識した。また地震が起こった時の為に、長田のような被害を受けた時の為に、地震等が起きればすぐに逃げ、自分の命を守れるようしておける事が大事だと気付かされた。また、備えには非常用持ち出し袋の準備だけではない。家具の固定なども備えの 1 つだ。親の被災した場所から数メートル離れた所でも少しの位置の違いだけでテレビが壊れるなどの被害がでた。だが、これは家具の固定をしていれば免れたことだ。だから、もしもの時の為に家具の固定は大事だということを気付かされた。また、もしもの時の為にちょっとした缶詰などの軽食や水を常備することも大事だと分かった。現在、私の家ではポリタンク 20 リットル×12 個を置いている。これは、私の父が水にこだわりを持っているからだ。水がなくなれば休みの日に兵庫県の上のほうまで車で汲みに行っている。だから、私の家では、お茶・料理などに使われるものがすべて湧き水で作られている。たしかに、長年飲んでいると、たまに水道水のお茶などを飲んだ時には、少し違うなというのが分かってくる。塩素がないので体にいいし、結果的に万が一の時の為の備えになっている。2 つ目は、寝るときは何も家具等が落ちてこない場所で寝ろということだ。阪神・淡路大震災では家具等の下敷きになって亡くなる方が大勢いた。突然の地震で寝ぼけている中、落ちてきた家具から身をよける事は難しい。そこで、就寝時は、周りから家具等が落ちてこないか日ごろからチェックし、もし自分で危ないと思った時には家具の配置を変えるなどしてほしいということだ。また、それがたまには気分換えになってちょうどいいかもしれないと言っていた。3 つ目は、常日頃から冷静な判断が出来るようにしてほしいということだ。災害が起きれば多少のパニックに陥ってしまう事がある。また、自分の住み慣れた町が一変してしまい、冷静な判断が出来なくなってしまう事がある。そんなことにならないよう、地震などの災害が起きれば、冷静にするということを自分に言い聞かせてほしいと言っていた。その為には常日頃から冷静な判断を心がけることが大事だ。地震等の災害が起きれば、他にも大事なことはたくさんあると思うが、以上の 3 つが母の語った事柄だ。私は冷静な判断が時々出来ない事がある。だから、常日頃からそのような事は頭に置き生活をしていきたい。

５、私の思った事

私はまだ生まれていなかったので、当然阪神・淡路大震災の体験をしていない。また大きな地震の揺れを体験したこともない。本当に小さな余震程度の地震を体験した程度だ。だから、私は環境防災科で地震の種類やメカニズムであるとか、被災してから 10 数年後までの心理状態の変化、世界で起こったあらゆる災害の名前・種類、防災・減災についてなど、あらゆる事柄について学んでいるが、実際に災害が起こったとなると、どのようなものなのか実際には分かっていないので少し不安である。というのも、地震が起きた時の即座の対応であるとか、万が一に舞子高校が避難所になった際に私たちがスタッ

フとして招集され被災された方々のお手伝いをする事になった際に、慌てることなく冷静に対応できるのかといったような不安だ。環境防災科の生徒は災害が起こった際に学校を避難所として運営する事になると避難所のスタッフとして援助するという決まりになっているという事を諏訪先生が以前におっしゃられていた。もし自分がスタッフとして活動することになった時、どこかでリーダーとして動かなければならない時があるかもしれない。でも、その事を想像すると私はまだリーダーとして務まらないと思う。何故かというと 3 つの短所のようなものがあるからだ。1 つ目は、自分にはまだまだアンテナを張って過ごせていないということだ。今の自分の私生活において、「あれをやれ、これをやれ」と言われてからでないと動けない事が多々ある。もっと普段から、相手から指示をされる前に自分から積極的に行動していかなければならないと思った。避難所の運営においては、このアンテナを張るといった事が最も大事なのではないかと思った。2 つ目は、人の話を聞いて、冷静な判断をするといったことだ。私は、時折、優柔不断な状況に陥ってしまう事がある。このようなことではリーダーとしての役割を果たせないどころか、避難所のスタッフとしても務まらない。何かの指示を出すと言った時にも、このようなことでは務まらない。相手の話を聞いて、みんなの意見を聞きながら取りまとめるといった事が出来ないといけないと思った。3 つ目は、まだまだ知識が乏しいということだ。知識があってリーダーとして指示を出すのと、知識がないのにがむしゃらに指示を出してしまうのは雲泥の差だと思う。自分は、具体的に被災者の被災してからの心理状態といったものを把握できていない。これまでに習った事はあるが、いざ寄り添うとなった場合に、もっと知識がなければ相手を不快にさせてしまうかもしれない。だから、自分の足りないと思った事は積極的に調べるなり聞くなりしていかなければならないと思った。以上の 3 つを克服することが出来ればリーダーとして活動する際には、よりよい存在になれるのではないかと思った。また、これは避難所の運営のケース以外にも、あらゆる場合で指示を出すといった立場になった時に、克服しなければならないものだと思った。

私は、将来消防士になりたいと思っている。大災害が起きれば消防士はいち早く現場に訪れ救助に当たる。阪神・淡路大震災または東日本大震災がいい例だ。阪神・淡路大震災、東日本大震災では多数の消防士の方が全国から訪れ消火・救助等の任務にあたられた。そのことを踏まえ私がふと思った事は、何年か後に必ず起こるとされている東海・東南海・南海地震が発生した際に私が消防士として現場にいち早く急行するということだ。私は正直、怖いという気持ちがある。当然救い出せるのは生存している人ばかりではないはずだ。だから、自分が正直精神的に参ってしまわないかといったような不安もとてもある。でも、私は人を助けたい、役に立ちたいという気持ちが不安な面以上にある。また、人を助けたい、役に立ちたいと思ったことがきっかけで、それならば消防士が私にとってぴったりだと思って現在消防士になれるよう日々頑張っている。だから、私がふと気付いたこととして、そのような不安が多少なりともあるが、毎日の厳しい訓練を乗り越えて、その努力をしたという自信をつけて不安を少しでもカバーできるようにしたい。また、これから消防士という仕事が天職になるよう一生懸命頑張っていきたい。

私はこれまで何度か震災体験を聞いたことがあった。だから多少の事は知っていたつもりだった。でも今回これまでより長くたくさんの事を聞く機会が出来て、色々と聞く上で自分は全然知らないことだらけだなと実感させられた。また、私が話を聞く上で驚いた事は、何度か聞いていて何度も言うのが嫌なはずなのに、言うとなれば前に聞いたような事もすらすら話してくれる。僕が母親に聞く上で気づいた事は、最初はなかなか話してくれない。でも、質問をするとしぶしぶなりとも質問に答えてくれるようになり、中盤になると、たくさん喋ってくれるようになった。とても熱弁するように話しかけてくれて当時は苦労したのだなということがひしひしと伝わってきた。でも、やはり最後には極力思い出したくないと言っていた。だから、少し申し訳ない感じもした。何度も何度も昔から聞いていた機会があって、今回の語りで思い出したくないということを知ったにもかかわらず、たくさん当時のことを話してくれてとても嬉しかった。私は震災体験をしていないので阪神・淡路大震災の事について伝えなければいけない状況に立った時、全ての情報が人から聞いたもののみに限ってしまう。だから普段からあらゆる情報を聞いて様々な視野から阪神・淡路大震災について語れるようになりたい。そして、自分に子供・孫が出来た時、阪神・淡路大震災というものの出来事があったという事を教えてあげて何十年経とうとも風化させないようにしていきたい。

“経験”から“未経験”へ・・・

堀北　知秀

おそらく多くの人が思っていただろう。いつか、あの阪神・淡路大震災を経験していない子供たちが生まれてくると。そして、その時阪神・淡路大震災をどのようにして風化させずに伝えていけばいいのかと。

1995 年 1 月 17 日午前 5 時 46 分。その時、私はまだ母のおなかの中にすらいなかった。

多くの命を奪った阪神・淡路大震災から 18 年が経った今、震災を経験していない私は高校 3 年生になった。何も知らない・何も経験していない私だが、ただ知らないからと言って震災から目をそらしてはいけない。これからの世代は震災の事を他の人から聞き、それをさらに伝えていかなければならない。そんな私が最も身近な存在である母親に聞いた話を伝えたい。

はじめに

私の家は父と母と私を含め 3 人兄妹の 5 人家族で、当時はまだ父と母は新婚 1 年目で二人暮らしをしていた。母はいわゆる専業主婦で父は公務員だ。家のすぐ近くには祖父と祖母、曾祖母の家があり、朝晩は自宅で過ごし昼間は曾祖母のお世話をするために祖父の家で過ごしていた。父と母の家はまだ比較的に新しい家で、祖父の家は土壁が残るわりと古い家だった。同じ地域に木造家屋はほとんどなく、当時からすれば比較的新しい家が建ち並んでいた。

１．　あの日の前日

1 月 16 日、この日は父と母と祖父、祖母、曾祖母の 5 人で三ノ宮でショッピングや食事をしていた。また生田神社で出産祈願を願ってきたそうだ。1 日中特に変わったこともなく、いつも通りの日常を過ごしていた。母に「全く嫌な予感とかはなかった」そうだ。

２．　午前 5 時 46 分

母はいつも父が仕事場へ持っていくお弁当を朝から作っている。大体 5 時 30 分には毎日起きていたという。しかし、あの日に限って母は寝坊をした。疲れていたわけではないが、なぜか 5 時 40 分くらいに目が覚めた。母は急いでご飯やお弁当の準備に取り掛かろうとしていた。この時まだガスに火はつけず、朝ご飯用の食器を取りに食器棚のほうへ行った。その時、急にカーテンで閉じられた窓の外に雷が落ちたかのようにピカッ！！と一瞬光ったそうだ。母は何が起きたのかと思ったその時・・・急に下から突き上げられる感覚がして縦に横に揺られた。母は千葉県出身で小さいころから震度 3～4 程度の地震は何度も経験していた。地震が起きても「震度 3 くらいかな～」と思うほど、かなり地震に免疫があったそうだ。しかし、阪神淡路大震災は全く違う。あまりの揺れに立っていられずとにかくテーブルをつかんで叫んでいたそうだ。家がミシミシと鳴いていて、食器棚の食器はボロボロと崩れ落ちてきた。揺れがとても長く感じ、揺れが強い時もあれば弱い時もあった。揺れが弱まったとき、2 階で寝ていた父が「大丈夫か～！！」と叫んできた。母はそれに対し「大丈夫～」と答えた。すると父は「早く 2 階に上がってこい！！」と言ってきたそうだ。「普通助けに来るだろ！！」と思い、正直母はこの時あきれたそうだ。揺れがおさまってから急いで 2 階に上がった。2 階に上がっても揺れる感覚がまだ体に残っていて、この時心底地震が怖いと思った。2 階の状況は窓が半分開いていた。いつも鍵をかけていないため、揺れで開いたのだろう。ガラスが割れていたらと考えると怖かったそうだ。父と母は 2 階で「怖かったな～」と少し話をして、気持ちが落ち着いてから外の様子が気になり窓を開けた。すると、東のほうの空が真っ赤になっているのが見えた。この時母は間違いなく火事が起こったと思ったそうだ。すると 1 階から祖父が「大丈夫か～」と呼ぶ声が聞こえた。父と母は「大丈夫！！」と答えながら 1 階に下りて行った。すると、「大丈夫か～」とさけんでいた祖父が裸足で頭から血を流している姿を目にした。祖父は「全く分からなかった。たぶん三面鏡が倒れてきた時に割れたガラスで頭を切ったんだろ」と意外と余裕だったそうだ。新婚息子夫婦が心配で仕方がなくそれどころではなかったそうだ。そのあと 3 人で外に出で祖父の家に向かった。外では近所の人たちが「すごかったな～」とお互いにしゃべっていた。近所の人たちは神戸では地震は起こらないだろうと思い込んでいたらしくその分衝撃が大きか

った。家を出てすぐ、近くに魚屋さんがありその前を通った時母は「ガス臭い！！」と言った。もしこれで火事になったら大変だと思い急いでガスの漏れている家を探した。するとどうやら祖父の家がその原因だったようだ。幸運にもこの地域で死者は出ておらずけが人程度で済んだそうだ。祖父の家に来て家の中に入ってみると・・・。玄関右手の階段は段がすべてなくなっており滑り台状態で、階段の土壁のすべて崩れ落ちていた。当分は 2 階に上がれない状態だった。家の被害はその程度で、ひどくて祖父の頭の傷ぐらいだったそうだ。

３．　それから

この地域はライフラインである電気・ガス・水道は当然使用不可だった。もちろん電話もつながらず、母の実家ではいつまでたっても電話がつながらないのでてっきり娘は死んだとばかり思っていたそうだ。なので、電話がつながったときは本当に安心したようだ。電話がつながるとまず友達や親戚からの電話が鳴りやまなくほとんど電話をしていたそうだ。地震発生から一晩経って、まず母は早めに食べなくてはならない物から、物持ちのいいものを分けたそうだ。しかし、あまり長く持ちそうなものがなかったため近くにあるスーパーへ急いで行った。すると、そこにはすでに長蛇の列があり、結局買えたがほんの少しのパンぐらいしか買えなかったそうだ。その日は家にあるなるべく早く食べなくてはならない物を食べていた。すると、夕方の詳しい時間は忘れたが電気が回復したそうだ。この地域では電気の復旧がかなり早かったようで、母はホットプレートを使い火の通った暖かいものが食べられたそうだ。電気が通っているためホットカーペットも使えるし暖房を使える。被災しているとはいえ、この地域ではそこまで苦しい生活を強いられることはなかったと母は思っていた。食べ物も毎日スーパーに朝から並んだが、最初に来た人がほとんどまとめ買いしてしまうといった問題が発生したため、一人何個まで！と制限が設けられたおかげで食料の確保はできた。また、明石のほうに住んでいる父の同僚から水や食料を分けてくれたそうだ。しかし、貰った水だけでは当然足りないため今は公園になってしまったが昔谷だったところから湧水が湧いていたので毎日バケツ片手に何十往復と水を汲みに行った。そうして汲んできた水はすべてお風呂に貯めた。この時母が 1 番感じたのがトイレの素晴らしさだったそうだ。1 回トイレを流すのにバケツ 3 杯分の水が必要で、「わざわざ 3 回も水を汲みに行く労力を考えたらトイレなんて流したくない！！」と心底思ったそうだ。我が家はボイラーだったので、電気が通っていたおかげでお風呂にも入れた。近所でお風呂に入れるのはウチだけだったので知り合いの人たちにもお風呂に入ってもらった。入ってもらった人たちからお礼にという形で食料や水をもらい、持ちつ持たれつの関係だったそうだ。父は仕事のため母は 1 人で家にいることがほとんどだったが、地震を経験して家に 1 人でいるのが怖くなり祖父の家でほとんど過ごしていた。我が家は半壊と判断された。余震がかなり続き家の瓦がほとんど落ちていた。この地域はほとんどが瓦屋根だったため近所の人と協力して、屋根に上りブルーシートを張る作業もしたそうだ。1 週間ぐらいたってからか、電車が神戸くらいまで運行しているのをテレビで知った。それども、主な移動手段は徒歩しかない。なので、近所でも震災のせいで体重が激減した人がかなりいたそうだ。

４．　ライフラインの復旧。そして・・・

地震発生から約 2 週間後水道が復旧した。だが、水が出るには出るのだが泥を含んでいるためか茶色い水だった。我が家では水はすべてろ過し熱消毒して飲んでいた。朝は父にお弁当をつくり、食べ物を買うためスーパーに並び、ご飯を作る。このリズムで大体 1 か月間は過ごしたそうだ。初めに比べればかなり、生活感のあふれる日常に戻ってきているようにも感じられたそうだ。そうなってくると、犯罪が多発するようになった。空き巣やスリ、万引きや強盗といった略奪などご頻繁に発生するようになった。母はいつも寝るとき枕元に通帳やお財布を置いて寝ていたという。今思えばそれでは対策になっていないと母は思った。

５．　震災を経験した母は・・・

震災後、母は非常持ち出し袋を用意した。まだ私たちの住む地域は被害が少なかったが、これがもっとひどい状況だったらと思うとそれぐらいしておかなければならないと感じたからだ。今まで小さいころから地震というものを何度も経験して恐怖心を抱くことはなかったが、この阪神淡路大震災を経験して心の底から地震というものが怖いと感じた。一度は耐え抜いた我が家も次は地震に耐えられない。地

震対策をもっと力をいれて取り組まなくてはならないと感じた。

６．　感想

今回、母に初めて深いところまで阪神淡路大震災の話を聞いた。いつも、割と楽観的な母が真剣な顔をして話をしてくれたことに私は感謝している。それまでにも何度か阪神淡路大震災の話は聞いていたが、一連の流れを通して聞いたのは初めてで驚きも多かった。たまたま、私の住んでいるこの地域は被害が少なく地域住民だけでなんとかやり過ごせたが、もしこれがさらに大きな被害をもたらしていたら今の地域では少し不安が残る。そもそも、私の住んでいる地域にはご高齢の方が多く地域での防災訓練なども行われていない。これは阪神淡路大震災の教訓を活かせていないということなのかもじれない。しかし、ご高齢のかたが多いこの地域でどうやって防災訓練をすればよいのか私にはわからない。それはこれからの学校生活の中で考えていきたい。そして、卒業して地元に戻ってきたときに何かしらのアクションを起こしてみたいと考えている。

母から阪神淡路大震災の話を聞きこのような文章にする。私は簡単なことだと思っていた。ただ聞いたことをレポートのように文章で表現すればよいだけの話だと。実際はそのようなことではなかった。これから震災を知らない世代が来る。“経験した”から“経験していない”、この差はとてつもなく大きいものだ。他の人から聞いた情報だけでは震災の事を知ることは本当に難しいだろう。そのためにより多くの人から話を聞き、自分の知識・記憶に刻み、さらに未来に残していける文章を書く。“経験した”と“経験していない”の差を埋めるには、伝え・残す努力が必要だと私は考える。今回のこの《語り継ぐ》作成を通して私はそれを強く感じた。これからの世代交代の中に震災の記憶を語り継ぐことが組み込まれるように私たちが動かなくてはならない。環境防災科ができて私たちの代で 10 年目。環境防災科設置を生んだ阪神淡路大震災は歴史の流れの中で色あせて行ってはいけないものだ。そのための《語り継ぐ》だ。

ひとりひとりの阪神淡路大震災

前田　遥花

１．　父

（１） 私たち

私の家族は 4 人家族だ。お父さん、お母さん、お姉ちゃん、そして私。私たちは明石海峡海沿いの団地に住んでいた。19 年前、神戸で大きな地震があった。当時、姉は 2 歳。私はまだ母のおなかのなかだった。

（２） 1 月 16 日

1 月 16 日、午後 6 時 58 分。家族と食事中に下から突き上げる地震が二回あった。父は、震源地が明石海峡なら危ないかもしれないと思ったが、ＮＨＫのテロップでは“震源は大阪湾”と出たので特に何もしなかった。

（３） 1 月 17 日

1 月 17 日。父の起床時間は 5 時半。洗面所の電気をつけて顔を洗い、歯磨きをしていたとき、急に電気が消えた。一瞬、間をおいて下から突き上げる揺れに遭う。地震発生。「うわあぁぁぁぁ!!!!」自分の声なのかわからないが叫んだ。真っ暗で、立っているのも困難な中、玄関先に置いてある銀色のゴルフカバーがぴょんぴょん跳ねているのがすごく恐かったという。また、洗面所にある棚の上おいてあったビールの空き缶が、頭に落ちてきた。痛かったらしい。このビールの空き缶が落ちてきて頭に当たった話は聞いたことがなかったので、そのシーンを想像したら正直信じられない。あの厳しい父にしたら少々間抜けなエピソードだなと思った。

揺れが収まり、しばらくは呆然と立ち尽くしていた。だが、台所から母の父を呼ぶ声に気付き、洗面所からリビングに向かって歩いた。普段ならそこまでの道のりは 5 秒あれば十分着くが棚やキャスターが倒れ、足の踏み場がなく跨いで行ったのでだいぶ時間がかかってしまった。やっとの思いで台所に到着し、母の安全を確認。そのあと、余震があるかもしれないので掃き出し窓を開けた。だが、1 月の朝。寒すぎて思わず閉めてしまう。家から出られなくなってしまうという最悪の場合は窓を割って外に出る、という判断をし、そのまま窓を閉めておいた。余震は、そのあとあったが、幸いにも本震よりも小さく窓をかち割って出る必要はなかった。

父は、室内の状況を見て回った。この行動に私は、ちょっと父はたくましいなと見直した。部屋の状況は、物が散乱していたり、ピアノが 30 センチメートルほど動いていた。タンス類は、耐力壁に沿って置いていたので倒れることはなかった。寝室には姉が布団にいて、まだ寝ていた。姉が寝ている布団の上には、空き箱やもらったタオルに埋もれていた。姉が寝ていたそのすぐ横に、水平距離で 4 メートルほど離れたところにあったテレビが飛んできていた。テレビの大きさは 24 型で、縦 45 センチメートル、横 80 センチメートルくらいで分厚い。普段寝相の悪い姉がピクリと身動き一つもしていなかったので、父は姉の名前を呼びながら顔をたたいたりした。父がおもいっきり叩いたにもかかわらず目を開けず緊張が走る。でも結局、姉はただ寝ていただけだった。私は、阪神淡路大震災の大きな揺れで、起きない姉の図太さにとても尊敬する。今では、このエピソードは家族の中でネタになる。しかし、今は笑い合って話せることだが、この震災で家族や親族が誰一人亡くならなかったことは本当に幸いなことだなと思う。

全部屋を見て回った後、父は朝食をとった。電気、水道、ガスは、そのあと停まってしまった。「仕事に行ってくる」父はいつもどおりに出勤した。しかし、電車は動いておらず、国道 2 号線をふくむ幹線道路は渋滞で、裏道も道路陥没などで通行できず、自宅に戻った。そのあと、1 週間は出勤できなかった。自宅に戻ったあと、父はお腹の大きな母に代わって掃除を始めた。部屋の中は食器が割れて散乱し本棚の本が飛び出し足の踏み場もないくらいメチャメチャだった。地震当日は電気が地震発生後の 2 時間ほどで復旧したので、掃除機を使って部屋の片づけをした。水道は 1 か月、ガスは 2 か月使えなかった。

２．母

（１） 母　1月17日

1月17日。この日、母はめずらしくいつもより早めに目が覚めた。母は毎日5時45分くらいに起床するがこの日に限って5時半には起床し、朝食の準備に取り掛かっていた。

たまごやきを焼いていたころ、地震発生。それまではついていた電気がいきなり消え、真っ暗になった。いきなりなことだったから火を止めたかは覚えていない。ただ、たまごやきが宙にポーンと飛んで行ったことしか覚えていないらしい。台所の机に必死にしがみつきながらもおなかを庇い、揺れがおさまるのを待った。当時母は妊娠8か月。タンスや食器棚がガタガタいう音。洗面所で父がわめく声。しばらくして揺れがおさまり、辺りは真っ暗でシーンとしていた。そのとき、突然電話が鳴った。真っ暗で何も見えない中、電話の音だけが聞こえるのはものすごく恐かったと言う。電話は、伊川谷に住んでいた父（私からしたら祖父）からでお互いの安否を確認し合った。「おお、大丈夫か？こっち（伊川谷）は大丈夫やからな、心配せんでええで」この電話で電話が使えることがわかったので垂水の義父と義母にも電話をしたが、つながらなかった。あとになって安否が確認できたがその時はものすごく不安で心配したらしい。そのあと、広島にいる義妹に電話をして状況確認。テレビがつくまでは広島から情報を教えてもらっていた。そのあと、各部屋を父と一緒に見回りに行った。いつも寝ている布団の上にテレビが横たわっていて割れていた。母はいつも言う。「もし、いつも通りの時間まで寝ていたら、確実にはるか（私）とお母さんは死んでた。だって、テレビがあった位置はちょうどおなかのあたりやったし。あの日だけ、珍しく早起きして、行動していたのはきっとはるかか亡くなった母が知らせてくれたからだよね」私は、その話を聞くといつもぞっとする。もしかしたら私はこの世にいないかったかもしれないだ。朝食は結局、食べるものがなかったのでその宙を舞ったたまごやきを食べた。地震発生前、ポットいっぱいにお湯を沸かしたから暖かいものを食べることができたという。あれだけ大きな地震があったのに、団地はありえないほど静かだった。「大丈夫ですかー!!怪我などはありませんかー!!」そんな静かな中、おじさんの声が団地に響く。住民の方が見回りにまわっておられた。お年寄りや一人暮らしの方が多かったのもあるからだろう。幸いにも団地からは誰一人、けが人や死者はでなかった。当時、自宅はエレベーターなしの5階にあった。食料調達は母が5階から1階まで上り下りをした。お昼頃、何か食べ物を買いに、近くのマルシェまで行くことにした。その途中、ママ友と出会った。「今から、宝塚の実家に帰るから、よかったらこれ使って。」そう言って渡されたものは電気鍋。ガスと水道は止まっていたが電気は復旧していたので、これでお鍋や炒め物を作って温かい物を食べることができとても助かった。買い出しに出たマルシェにはほとんど食べ物がなく、残っていたビスケットを買って帰った。買い物から帰ったとき、「すいませーん」と呼ぶ声が聞こえた。「すいませーん、ドアが開かないんです。そっちから開けてもらえませんか」団地のお向かいさんが掃き出し窓から叫んでいた。母はあわてて父をよび、外から体当たりでドアを開けた。

（２） 周囲人たちの支え

震災発生からしばらくした。電気は使えるが水もガスもつかない日々。このとき困っていたことはお風呂に入れなかったことだ。姉もよほどお風呂に入りたかったのか一人遊びで「ぶくぶくぶくぶくじゃぶじゃぶじゃー」と遊んでいたらしい。そんなとき、名谷に住んでいる叔父からお風呂に入りに来ないかと誘われた。叔父は、名谷の北にあるマンションに住んでいた。当時、地下鉄線沿いは水が出たらしく、祖父母も連れて何回もお風呂に入りに行った。ただ、叔父はそのマンションの最上階に住んでいて、階段で行かなければならなかった。余震を警戒してエレベーターを停めていたからだ。おなかが大きかった母にはつらかったという。また、加古川にある健康ランドなどにも行った。震災後、被災者なら無料でお風呂に入れると聞き、足を運んだ。そのお風呂屋さんでは、妊娠している母をみて背中を洗ってくれたりなど、たくさんの人が親切にしてくれたらしい。震災のあと、だれもが他人に気をつかったり、優しくしたりすることは到底できることではないと思う。そのほかにも、母の友達で名谷に住んでいる方のお宅にお風呂を借りに行ったり、父の職場の同僚で、西神に住んでいる方のお宅に借りに行ったりした。たくさんの優しさがあふれていた。

（３） その後

父は水を調達するためにさまざまなところに出かけた。水を調達するために、円形の水色のごみバケツにごみ袋を入れて、そのスタイルで水を取りにいった。当時、水が出たとされたのが、新多聞の水道局の貯水池や、貯水池。意外なところからも出た。それは舞子墓園だ。どの蛇口からも水が出たので、最終的には父はそこから水を調達した。

感想

両親の話を聞いて、何回も聞いた話もあれば初めて聞いた話もあった。私が一番印象に残った話は、母の話でお湯をポットいっぱいに沸かしてあった話だ。母は、震災の後、ポットにたくさんのお湯があることを心強く思ったらしい。それは、寒さの中で暖かい飲み物を口にすることができると思い、大丈夫、なんとかなるという気持ちが生まれ、落ち着くことができ極度に不安になったりパニックになったりすることがなかったからだと話す。お湯を沸かすという行為は普段何気なく無意識に行っている行為だが、その無意識の行為のおかげであのときは助かったとも言う。この話をしてくれたとき、母は私に「備えあれば憂いなし」と言った。私はこの話を聞いて、無意識にしている何気ない行為でもできるだけ意識をして行い、災害が起きてもパニックにならないよう自分がしたことを覚えていたいなと思った。当時、私の家には水などを買い置きしていなかったから水が出なくなってしまってとても困ったらしい。今では水を常備していないことなど考えられないけれど、当時は神戸に地震なんて来ないものと思い込んでいたから、非常持ち出し袋などは物置の奥のほうにあるぐらいだった。どうして準備をしなかったのだろう、と不思議に思うが、地震は起こらないと思っているところに準備などの備えはしないなと私自身も思う。

もう一つ印象に残った話がある。それは、母がもし、あの日起きて行動をせず、普段通りにまだ就寝していたらと思うとぞっとしてしまう。話にあったように、母のふとんの上にはテレビが横たわっていたからだ。たまたまでも起きて行動をしてくれていた母に私が存在できていることを感謝したい。

1995 年生まれの私は、震災を知らない世代として自負している。けれども、私は生まれて震災を経験していないけれど、母のおなかの中では揺れを経験している。同じ 1995 年生まれでも、11 月以降に生まれた同級生はまだ親のおなかの中にすらいない。4 月生まれの私にとってこれはとても貴重な経験だと思う。もちろん覚えてはいないけれど、母のおなかの中で揺れを感じていたのかなと思うと不思議な気持ちになる。

私たちが住んでいた団地は被害が大きかった長田などに比べると震源地に近い。自宅から明石海峡大橋が見える場所に住んでいた。住んでいた団地はそんな近い場所にあるのにかかわらず、全壊が一つもなかった。よく調べると、団地自体が断層から少しずれた位置にあり、また建物の下が岩盤であったことがわかった。環境防災科で地盤が強い場所に建物があったほうが良いということ学んだので、過去に自分の家族が災害に強い地盤の上に住んでいたことはすごいなと思った。

阪神淡路大震災のときに、私の家族が多くの人に助けられたことには驚いた。いままで、話を聞いていたら震災で家族や親せきが亡くなったわけでもなく、自宅が全壊・半壊したわけでもなく、火事に見舞われることもなかった。主な被害は食器が割れたりタンスが倒れたりするだけだった。だから、配給や近所の人たち、知り合いの支援を受けていたことにはびっくりしている。自分が使わないからと電気鍋を貸してくれた人や、妊娠中の母を見て背中を流してくれた人。また、お風呂を貸してくれた人も多くいた。自分も被災者で生活していくことにいっぱいいっぱいな状況だったはずなのに他人に手を差し伸べられることはすごいなと思った。とくに、お風呂なんて家族やよほど仲がよい人でなければ私はあまり貸したいとは思わない。少し抵抗感があるからだ。それを、仕事の同僚や友達にお湯が出るから入りにおいでと誘えることがすごいなと思う。友達や同僚など人間関係の環境に恵まれていた父や母みたいに、私もいざという時にお互いを支えあえる友達や人間関係を築きたい。阪神淡路大震災の時に、神戸が復興できたのは、ボランティアの人たちや多くの方の協力のほかに、地震の影響を受けた人たちが協力しあって震災を乗り越えようとしていたからなのだろうなと思う。

私の家族は震災後、西神のほうに引っ越しをした。西神は阪神淡路大震災の復興住宅がたくさん建てられた場所だ。父は、新しい家を購入するときに地盤の確認を念入りにした。きり土であるのか、盛り土であるのか、またその境界線がどこにあるのかを調べて購入する住宅を選んだ。また父は、引っ越しのとき寝室にはものを置きたくないと言ったそうだ。それは阪神淡路大震災で多くの人がベッドやタンスの下敷きになり亡くなっているからだ。このことは、地震を経験した者が教訓として次に活かしていることだと思った。震災を忘れないためにも被害を受けて学んだことを活かすことは大切だと思う。ま

た、私も将来は父みたいに十分に地盤を調べてから家を買いたいなと思う。震災から学んださまざまな教訓を私もしっかりと受け継ぎたい。そして、私の子供や孫へと受け継いでいき、その教訓が消えることのないようにしていきたい。

私の家では防災対策をできるだけ行っている。それは家族全員が地震や防災に対する関心を持っているからだ。具体的には、家具の配置を考え、出入口の近くにはモノを置かないようにしたり、食器棚にはガラスが飛び散るのを防ぐシールを張っている。また、市販の耐震マットをテレビやパソコンに敷いたり、食器がずれ落ちないようにするためのシートも敷いて対策をしている。さらに、非常持ち出し用袋の中身を定期的に出し入れし、賞味期限を確認・交換をしたり内容も少しずつかえている。たとえば、乾パンをビスコに替えたり、動物ビスケットに替えたりしている。これは、少しでも災害時の時に味のおいしいものを食べられるようにするためだ。非常食は命をつなぐため空腹を満たすことも必要だが、災害時に少しでもおいしいものを口にすることで、日常的な感覚がよみがえって精神的に落ち着くことができると思う。実際、交換時に非常食を食べてみると味気がなくとても食べにくいものだった。最近では、店頭に保存期間が長くて味がよく食べやすいものが売られている。昔と比べるとニーズにあった食べ物が商品に改良され供給されるようになってきていると思う。このことは、震災の体験をきっかけに人々の関心が高まったことにより便利な商品が出てきたのだろう。食べることは生きること。次につなげる活力の源となるので工夫しながら備えをしたい。

私の家では家族でテレビを見ていて、話題が災害について特集をしているときなどに、実際に災害が起きたときに、どこに集合するかこまめに話しあいや確認をするようにしている。普段は、日常の忙しさに災害について気にかけずに生活をすることが多いが、メディアから発信される情報を見聞きした時などに思い出して気づくときがある。最近は、近い将来起こるとされている南海・東南海地震について話をすることがある。とくにテレビのテロップで地震速報が表示されたときに、震源地が和歌山県だとでたらとても不安になると母が言う。そんな時は情報を共有しあうことで不安を少しでも取り除くことができる。このようにふとした時に災害や防災のことを思い出すことが大切だ。そのためにはメディアが情報を発信し続けること、私たちがあらゆる発信源のもとから情報を選び取り関心を持ち続けることが、一つでも多くの命が助かることにつながるので重要だと思う。

私は、震災の話を聞いてひとりひとりの阪神淡路大震災があるのだなと思った。同じ家族でも地震への感じ方が違うし、行動も違う。私の父と母だけでも、同じ空間にいて同じ揺れを経験しているのに、揺れの感じ方さえも違う。夫婦でこれだけ違うのなら近所の人の阪神淡路大震災も異なるし、長田など被害が大きかった地域に住んでいた方などはまた違った話や教訓があるのだろうなと思う。震災から 19 年が経ち、震災を知らない世代が多くなってきている。震災を知らない分、耐震を行っている家に住んだり、学校で防災教育を行うところも増えてきている。日本に住んでいる限り災害や防災から離れることはできない。災害が起きたとき、命を助けるために一つでも多くの過去の教訓や体験談を知り、将来起こる災害に活かせることができたらなと思う。

震災がもたらしたもの

峯　栞路

１．　震災が起きた時

兵庫県南部地震が発生した時、僕の母親は京都にいた。その時僕は、母親のおなかの中にいたのでわからなかったけど京都のほうでもかなり揺れたと母親は話している。

母親が言うには、その日は父親のお弁当を作るため、朝早くから起きていた。そしてお弁当を作り終えて父親を起こそうとしたときに地震が起きたのである。あわてた母親は１歳になる姉の上に覆いかぶさったそうだ。震源地から決して近くないのに足がふらつくぐらい揺れたそうだ。揺れがおさまると母親は部屋を見わたした。見るとタンスや本棚などの大型家具は大きく動き、皿やコップなどの食器類は半分くらい割れていて何が起きたかわからなかったそうだ。

あとで見てみると、ガスや数道などのライフラインも止まっていた。幸いにも電気はとおっていたので、現状を確かめようとテレビをつけた。テレビを見ると変わり果てた神戸の姿が映っていたそうだ。倒れている高速道路、燃えている町、全て夢だとおもいたいぐらいだったそうだ。

母親はそれを見るなりショックを受けたといっていた。幸いにも京都はかなり揺れたそうだが被害は電車が止まる程度のものだった。

気持ちが落ち着いた母親はまず徳島の実家に連絡をいれた。徳島のほうも揺れはしたけど家具も倒れなかったし問題はなかった。兵庫に住んでいた友達には安否確認が取れなかったのでとても心配だった。しばらくたって無事に連絡をとれたときはとてもうれしくて涙がこぼれたと言っていた。

２．　阪神淡路大震災で学んだこと

母親は震災にあってからは家具の固定と、いつでも避難できるように非常持ち出し袋の用意は徹底している。

阪神淡路大震災が起きた時は家具を固定していなくて倒れたり移動したりした。震災の時は自分たちの上に倒れてこなかったからよかったけど、次大きな地震が起きたら倒れてくるかもしれないからということで家具の固定は徹底しているそうだ。実際家の中を見てみたがきっちり止められていた。

非常持ち出し袋の用意は、今回の阪神淡路大震災では大した被害は出なかったけど、次もし、大きな地震が起こり大きな被害が出た時、いつでも逃げられるようにということだ。阪神淡路大震災の時はなにも用意していなかったから少し反省したようだ。

３．　震災を経験して

母親は震災を経験してたくさんの経験をした。京都というと一見阪神淡路大震災に関係なさそうに見えるけど、電車などの交通機関が止まったりガスや水などのライフラインは遮断されたりなど、それなりに被害を受けている。

母親はこの震災を機に災害に対する意識が変わったといっていた。防災の事は必要最低限の知識を持つようにし、災害が起きても迅速な対応ができるように心がけるといっていた。また震災で経験したことを僕たち子供に伝えていきたいとも言っていた。

姉の年代は震災を経験しているが僕たちの年代はおなかの中にはいるけど実際のところは震災を経験していない。だからそういう震災を経験していない年代の人に自分が経験したこと、経験して学んだことを伝えていきたい。自分は神戸で阪神淡路大震災を経験したわけではないけれど京都で経験したことは一生心に刻んでおくと母親は決心したと言っていた。

４．　震災を語る

この話は僕の仲がいい人から聞いた話である。この方は阪神淡路大震災が起きた時は 28 歳だった。当時は神戸の市営団地の一階に住んでいた。当時はまだ子供は長男が８歳、次女が４歳だった。その団地に住んでいる人はみんな優しい人で近所付き合いが盛んだった。その中でもむかいの団地に住んでいた人とは特に仲が良く子供たちを連れてよくお互いの部屋で遊んだりごはんを食べに行ったりしたそ

うだ。
二人とも、子供が二人という共通点があった。
そしてあるとき仕事の関係でそのひとが埼玉に転勤になってしまった。転勤した後も年賀状を送ったり電話したりして頻繁に連絡をとっていたそうだ。
そして 1994 年の 12 月頃連絡が来た。正月は子供二人と自分は実家に戻るとのことだった。旦那は仕事の関係で埼玉に残ったそうだ。
その人の実家は兵庫県の長田にあった。この知らせを聞いたときはすごくうれしかったそうだ。本当は 1 月の 10 日に埼玉に戻る予定だったけど、正月明けというのもあり新幹線のチケットが取れなかった。だから埼玉に戻るのが一週間後の 17 日になったそうだ。
そしたら 17 日の帰る前にあってご飯でも食べようということになりすごく楽しみにしていた。そして時が過ぎ 1 月 17 日の朝地震が起きた。
最初は何が起きたか全くわからずとりあえず旦那と一緒に子供をかばった。そして揺れがおさまり周りをみた。すると壁のいたるところにひびが入っていた。幸いにも住んでいた場所が一階だったのでたんすなどの重いものは倒れてなかった。しかし、もう一度大きな地震が来たら完全につぶれていたそうだ。ガス、水道、電気などのライフラインは止まっていた。幸いにも、水と食料は貯蓄していたから困らなかったそうだ。
周りにある団地も同じようにライフラインは止まり、ひびだらけだった。子供たちがいるから迷惑になってはいけないからと避難所にはいかなかった。
しばらくたってから知り合いの安否確認をした。両親、親戚とは連絡はとれたけど一番仲良かった人の安否だけは確認できなかった。実家のあった場所は阪神淡路大震災の被害を強く受けた長田だったのでとにかく生きていてほしいという思いだった。
そしてそのまま連絡が取れないまましばらくたった。いつまでたっても連絡がとれないからむかいの団地の人にその仲良かった人の旦那に連絡がとれないかと尋ねたところ、とれるとのことだったからその仲良かった人の安否を確認してほしいと連絡をしてもらった。
そして連絡を頼んでから三日が過ぎた日、連絡がきたと報告が。仲良かった人は即死だった。
実家があった場所の近くに崖のようなものがあり、それが崩れてきたそうだ。一緒に寝ていた赤ちゃんも即死だった。もう一人の娘は祖母と隣の部屋で寝ていたから助かった。しかし、2 時間近く生き埋めになっていたから今でも暗いところに行くと怖くて泣いてしまうそうだ。
この知らせを聞いたときは涙が止まらなかったそうだ。その日に会う約束をしていたのに、なぜあの子が死ななければならないのか、新幹線のチケットがうまくとれたら死ななくてすんだのにと後悔ばかりでてきたそうだ。そしてその事実を受け入れるのに一か月はかかったそうだ。今では命日にはちゃんと会いに行くようにしているし、ことあることに報告をしているそうだ。

５．　震災を経験して

阪神淡路大震災を経験して、正直つらかった。一番の原因は友達を亡くしたことだ。死にたくもなった。しかし、まわりの友達や家族に励まされ何とか立ち直ることができた。
人間に一番大切なことは人を思いやることだというのを痛いほどわかった。死んだ友達とその子供の分も精一杯生きようと思った。阪神淡路大震災は友達の死や家の破壊などたくさんの被害をもたらした。しかしそれ以上にこの震災ではたくさんのことを学ばせてくれた。人間は助け合って生きていくものであるということ、人間の心は温かいということだ。
この経験したことは自分のなかだけにとどめておかず、震災を知らない年代の子供に伝えたい。そうして、いかに地震が怖いかということを知ってもらい次、大きな地震が起きた時この経験をいかしてほしいとこの方は言っていた。

６．　これらの話を聞いて

僕はこれらの話を聞いてたくさんのことを学ぶことができた。
まず、備えることの大切さである。母親は、家具の固定も、非常持ち出し袋も用意していなくて困ったといっていたので僕は備えるようにしたい。また家具の固定はこの話を聞いても正直固定しなくてもいいかなと思っていたけど、この前本当に小さな地震が起きた時僕の部屋に置いてあったたんすが移動してしまっていたので絶対に固定しないといけないなと実感した。

このように思ったのは僕だけかもしれないけど、正直話を聞いても自分は経験していないのであまり危険だという実感はわかない。だから、震災を経験した大人が率先して準備をしたほうがいいと思った。子供も一回経験すれば僕のように考えが変わると思う。

また物だけを備えるのではなく、知識も備えないといけないなと思った。

防災に関する知識がないと不安が募るばかりだし、震災が起きた時どういった対応をし、どういった行動をしたらいいかというのがわからないから防災の知識は必要だと思う。

今の日本は防災の事に関して学ぼうと頑張っていると思う。しかしニュースに取り上げたりするだけでは限界があると思う。

これはあくまでも僕の意見なのだが、小学校、中学校の授業に防災教育を取り入れたらいいと思う。1週間に1回でも、1か月に1回でも避難訓練以外のことを学ばせたほうがいいと思う。

例えば、阪神淡路大震災が起きたきっかけとか、東日本大震災と阪神淡路大震災の違いなど簡単なことからでいいから教えたほうがよい。いまどきの若い子は地震が来ると喜んでいる子や、全く気付かない子が多いので、そう言った知識を持っていると心構えがきっちりすると思う。

また、中学生はそんなにいないと思うが、小学生は授業で習った内容を親にいう傾向があるので習ったことを話すことで親の防災に関することへの関心がわくと思う。それでも親に話すことにだるいなどと抵抗を示す人もいると思う。そういう人たちの対策としては宿題にするなどいろいろある。

また、中学生は宿題にしてもやってこないひとが増えるし、どうしても親と話す機会が減る年代だと思うので中学生に関しては保護者説明会の時のように保護者にうけてもらえるような授業スタイルにしたらいいと思う。そうすれば、保護者も授業を受けられるから親子そろって防災力を磨くことができると思う。

しかしこの授業スタイルを行うには学校の先生や教育委員会の人にも合意をもらわないといけない。日本の防災に対する取り組みのはじめはこの人たちの合意を得ることからだと思う。

次に大切だと思ったのは、住んでいるところの強度を確かめておくということだ。今回話を聞いた中には書いてないが、聞いた中ではやっぱり壊れてしまった家もたくさんあったそうだ。幸いその人はひびが入っただけで、修理費などは市営住宅だったから全部市が払ってくれたけど、市営住宅ではない家に住んでいた人は自腹で新しい家を建てていたそうだ。

家が崩れる一番の原因は老朽化だと思う。老朽化が進んでいると柱がもろく壊れやすいので少しの衝撃で壊れてしまう。この老朽化は定期的に点検を行えばわかることなので点検を行うことで家が崩れる可能性を下げることができると思う。

また、僕の住んでいる地域では見たことはないが古いアパートはつくりかえたほうが良いと思う。なぜなら、古い建物は老朽化が進んでいるというのもあるが、崩れた時逃げにくいというのもある。崩れると逃げにくいというのはどのアパートでも一緒なのだが、古いアパートは崩れる確率が少し高い。対策としては古いアパートを建て替えるか筋交いなどを入れ耐震化を進めたらいいと思う。そうすれば崩れる確率は格段に下がると思う。

また最近の家にはガスを一切使わないオール電化というシステムがある。オール電化にすると電気が止まったら何もできないけれどガスがないから火災による被害は格段に減ると思うのでオール電化にしたほうがようと思う。電気が止まった時の対策としては小さいガスボンベを用意しておいたらいいと思う。

そして、僕が震災の話を聞いた中で一番大切だなと思ったことは、仲間を思いやる気持ちと協力しあう心をもつということだ。

今回、阪神淡路大震災の話を聞いたけど、正直つらい話もたくさんあった。中でも一番聞いていてつらかったのは仲が良かった友たちを亡くしたという話である。この話を聞いて僕は、一生友達は大切にしようと思った。なぜならこの話をしてくれた人が友達と過ごせる時間は限られている、その限られた時間でどれだけ笑い、どれだけ楽しんだかが重要だ、といっていたからだ。友達を実際になくした人からの意見はぼくの心にぐっとしみこんできた。

この人の意見や、今まで授業で聞いてきた話などの実際に大切な人を亡くした人の話はすごく説得力があると思う。だから僕はこういった人たちに講演会を開いてもらってそこで話してもらいたいなと思った。

最近の若い子は友達にむかって平気で死んでしまえなどと暴言を吐く。これは命の重さをまだきちんと理解していないからだと思う。

しかしこの人たちの話を聞くと命の大切さを学ぶことができるのでこういう命を軽く見ているような発言は減ると思う。実際、僕自身もその話を聞いてからは暴言を吐くことは減ったし、命は大切にし

ようと思った。
　また、友達とのつながりも大切にしようと思った。話をしてくれた人は友達を亡くしてから、正直死にたいという気持ちがあったと言っていた。しかしその沈んだ気持ちを励ましてくれたのは友達だった。もしその友達が励ましてくれていなかったら絶対立ち直れていないし、最悪の場合は死んでいたかもしれないと言っていた。
　僕はそれを聞いてとてもいい友情だなと思った。
　正直僕は人と関わることが苦手でよく友達と喧嘩をしていた。友達はいらないとも思ったこともある。しかし、そんな僕でもきちんと理解してくれる友達ができた。この友達とは一生つながっていたいと思っている。
　また、友達だけではなく困っている人を差別なく助けることも大切だと思う。実際震災が起きた時は老若男女誰でも助けないといけないと思うし、友達だけでグループを作っていると周りが見えなくなってしまうからだ。
　だから僕は、友達も大切にしながら周りの人に気を配れるようになりたい。僕みたいな考えを持つ人が増えれば震災が起きた時、迅速な対応ができるし、まとまれるから団結力が高まると思う。
　このようにして考えてみると、僕たちはまだまだ防災について学んでいかないといけないと思う。災害はいつどこでおこるかわからない。そのため、完璧に防ぐことはできない。しかし防ぐことはできないが備えることはできる。今、僕たちにできることは災害に備え少しでも被害を減らすということだ。
　避難訓練を行ったり、防災マップを作ったりするなどやることはたくさんある。これらのことはほんの些細なことかもしれない。しかしこんな些細なことを積み重ねることによって被害を減少させることはできる。
　これから起こるといわれている東南海地震に備えこのような事をして備えることが必要だなと思う。また、この聞いた話をほかの人に伝えたい。伝えることで防災の意識を強く持ってもらえるだろうし、この貴重な体験談を知ってもらいたいからである。

語り継ぐ

村上　亜莉沙

（1）はじめに

私は当時生まれていなかった。母のお腹の中にいたため震災を知らない。だから、両親の震災体験を書いていきたいと思う。
母と父は西区の枝吉の5階建てのマンションに住んでいた。家は3階だったらしい。

（2）震災前日

震災前日の夜は王塚台の母方の実家に遊びに行っていった。夜ごはんを食べていたとき震度1くらいの地震が起こった。その時は怖いと思っただけで大きな地震が起こるとは思いもしていなかった。その後母は洗い物をして家に帰ったという。そして自分の家でお風呂に入ろうといつも通りにお風呂をいれたのにはいられないくらい熱くて何かおかしいと思った。でもあんなにおおきな地震がくるとは想像もつかなかったと母はいっていた。

（3）震災直後

5時46分、激しい揺れに襲われ目が覚めた。後から考えると揺れはすごく短かったのだがその時はすごく長く感じた。突然の出来事で何が起こったのかわからなかった。揺れが収まり、寝室から出て辺りを見回すと食器棚の中のものが落ちて床は割れた食器が散乱して、棚に置いていた洗剤などはすべて落ち、こぼれていた。祖父母の家は食器が全部割れてしまい、置いてあったピアノがたおれてしまっていた。すぐに祖父母の家に電話して無事を確認した。祖父は揺れだした時に立っていたのでふすまに突っ込んでしまい少し怪我をしまった。

（3）震災後

余震が続く中、家の中は危険だと思い、外に避難した。家の前の道路は亀裂が入り、渡れない状態になっていた。しばらくして祖父母と叔母が家に来た。とても車で来れる状況ではなく、2時間かけて歩いてきた。ガス・水道・電気が使える状態ではなかったため、みんなで親戚の家に避難した。親戚の家は幸いガスも水道も電気も通っていたため普通の生活を送ることができた。母方の祖母の友人が名古屋から水やお茶など大量に送ってきてくれた。スーパーに行っても売り切れ状態が続いていたため、とてもありがたかったそうだ。又、曾祖父母の家に行ってみると、屋根がぱっくり二つに割れ、家は半壊していたそうだ。曾祖父母は近所の人に助けてもらい、怪我はなかったそうだ。もう一方の曾祖父母は曾祖母が仏壇の下敷きになり少し怪我をしてしまったが大丈夫だったそうだ。

（4）震災からしばらくたってから

自宅の電気・ガス・水道も5日後には復旧し始めたので自分の家に帰宅。でも祖父母の家は被害がひどく住める状態じゃなかったので、しばらく一緒に住んでいた。復旧したといっても、お風呂のお湯は少しずつしかでず、かなり苦労した。お風呂のお湯が出ない家も多々あり、そういった家はやかんでお湯を沸かしてバケツリレーをしてお湯をためていたそうだ。母は私がお腹にいたため手伝うことができなく、もうしわけなかったと言っていた。また、強い揺れで家の中はぐちゃぐちゃになっていたので片付けるのに時間がかかった。でもすこしずつ片づけていった。
祖父と父は仕事がはじまった。父は仕事場にいくのに毎日3時間かかっていた。とても大変だったといっていた。帰りは北区の方の道を経由して帰ってくるととてもはやかたったそうだ。父は今普通に仕事に通えることが幸せだといっていた。
祖父の仕事はダンプの運転手なので地震の後すぐに長田方面で瓦礫の撤去を行っていた。瓦礫を重機でダンプに乗せるとき、瓦礫と一緒に死体がたくさんでてきて精神的につらかったそうだ。

（５）震災から１か月

震災から１か月たったころにはもうだんだんとライフラインが復旧しほぼ普通の生活に戻っていた。王塚台は被害がすくなかったためすぐに復旧できたが、長田や淡路など被害が多かったところは普通の生活がおくれていなかったのでなんか申し訳ないといっていた。母方の実家は団地だったため１か月後には補強工事がはじまった。

また、母は友人にも再会できた。その友人は長田に住んでいてとても大きな被害を受けていた。母の友人は自分の祖父母の安否確認のため家にいった。すると家の下敷きになっていて必死にひっぱりだしたという。そしてまわりを見ると多くの全壊した家から手がでていて必死に「助けてー、助けてー」と泣き叫ぶような叫び声がいろんなところから聞こえてきたそうだ。母の友人は助けようとしたがあまりにも手が多く、また火が迫っていたため自分の命も危なくなるので泣きながら、「ごめんなさい、ごめんなさい」と謝りながらその場をはなれたそうだ。「あのとき助けていたら・・・。」と母に話してくれたが、母は泣きながらその話を聞くことしかできなかったという。

両親の震災体験を聞いて

私はこの授業がきっかけで初めてお母さんから震災体験をきいた。いままでも小中学校で防災教育はしてきたがお母さんから話を聞く機会なんてなかった。だから今回の授業はとてもいい機会になった。

当時住んでいた家は震源地から少し離れた王塚台と言う場所なので被害はすくなかっただろうと勝手に思っていた。しかし、実際にお母さんから話を聞いていると被害も思っていたよりはるかにひどくとても困っていたことがわかった。

私は阪神・淡路大震災を経験していないため、人から聞いた話や写真から伝わってくるものしか知らない。しかも、その多くは一番被害の大きかった長田のもので震源から少し離れている西区などは記録にあまり残っていない。だから私は、勝手に西区あたりは被害が少なかっただろうと思い込んでいた。いつも明るく元気な曾祖父母が家の下敷きになって近所の人に助けられた話や、祖父は瓦礫撤去を手伝っていてたくさんの死体を見つけていた話、両親が苦労した話など、今のみんなの感じからはとても想像がつかない。

今回、話を聞いて私は考えたことがある。それは助けあうことの大切さである、そして普通に暮らせる幸せ。お母さんから話を聞いていくなかで多くの助け合いが見受けられた。まず、祖母の友人の助け。祖母の友人は神戸が大変なことをテレビで知った。そしてすぐに祖母とその家族のことが気になったという。テレビをみてすぐに電話してきてくれたが通じなかったらしい。そしてつながって話しているときに祖母が「今は水道も止まっているし、スーパーも売り切れ状態が続いていて困ってるんよ。」と言った。それを友人はしっかり覚えておいてくれ、電話を切ったあとすぐにスーパーに行き大量に買ってきてくれすぐに送ってきてくれた。祖母はとてもびっくりしたがその後すぐにその友人の優しさに触れ、涙を流したそうだ。「ありがとう」では言い表しきれないほど感謝したという。

次に曾祖父母が近所の人に助けてもらった話。もしあの時助けてもらっていなかったら私は曾祖父母の顔を知らなかったかもしれない。近所づきあいの大切さも同時に感じることができた。また曾祖父母は、家は全壊したため親戚の家に避難したが、お風呂からお湯がでなかった。すると近所のひとが各自で、やかんでお湯を沸かしバケツリレーで浴槽にお湯を張ってもらったらしい。生きてきたなかで一番ありがたく思ったお風呂だったそうだ。

このように私の親戚はたくさんのひとに助けてもらい震災を乗り越えた。そして助けてもらった分、多くの人に力をかしたという。震災は悪いことばかりを残していくが、二つの温かさを残していったとお母さんはいっていた。一つは助け合うことの大切さ。

そして二つ目は家族がまとまったこと。いままではいて当たり前だった存在が震災を経験してから家族がいることの幸せさ、居てあたりまえだから今日もみんないると思えるようになったという。生きていることがこんなに幸せだと感じられるようになったとお母さんは言っていた。私は今、家族が生きていることが当たり前だと思っている。この話を聞いてもしあの震災で誰か死んでいたらと考えた。考えただけで涙が出そうになった。みんなが生きていることはすごいことだ。生きていることはすばらしいことだと思った。だから私は生きていることに感謝していきていきたいと思った。

そしてもうひとつ考えたことがある。それは普通に暮らせる幸せさ。私は今、普通に生活できることが当たり前だと正直思っている。しかし、お母さんから震災後の生活を聞いていると今がどんなに幸せかと考えさせられた。温かいご飯を食べられる幸せ。お風呂に入れる幸せ。学校に行けている幸せ。テ

レビを見れる幸せ。考えればたくさんの「幸せに」囲まれて私は生きている。このことに感謝しなくてはいけない。そしてなにより、震災の時に守ってくれたお母さんとお父さんに感謝しなくてはいけない。

私は今、環境防災科という災害と大きく関わる学校にいる。18 年前は多くの人がこの神戸を助けてくれた。多くのひとが神戸を助けてくれたからこそいま神戸は復興できて、私たちは住めている。災害ボランティアができる環境がこの学校にはある。だから私は多くのボランティアに参加して被災地を支えていきたい。私たちは震災を知らないため、両親の被災体験を語り継ぐことしかできない。でもそんな私たちにも被災地を支えていくことはできる。だから私はこれからも被災地を支えていきたい。それが両親を助けてくれた人たちへの恩返しになればいいなと思う。

１０年後への期待

山本　大樹

私の家族、親戚は当時広島県で生活していたので阪神淡路大震災を直接経験しておらず、私自身、生まれていなかったのでもちろん当時の記憶は何一つない。ということなので今回友人のご両親に当時のお話を伺った。

現在は 5 人家族であるが、地震発生当時は、夫、Kさん、娘と 3 人暮らしで、被災の 7 ヶ月後には長男が生まれる家族構成となっている。

１．発災当日

（1）発生時

1995 年 1 月 17 日午前 5 時 46 分、マグニチュード 7.3 を観測する地震が発生。

神戸市垂水区千代ヶ丘の 8 階建てのマンションの 3 階に主人、私、2 歳になった娘と 3 人で住んでいた。

いつものようにリビングで 3 人並んで寝ていて、いつものように数分後に起床する予定だった。しかし突然ゴォォォという轟音が響き、突然すぎる出来事に直感でいろいろな考えが思い浮かんだ。大型飛行機が墜落してマンションに衝突したのか、ゴジラのような大きな生物にマンションを揺すられているのではないか。だが、すぐに主人と顔を見合わせ地震だと確認し合った。娘は訳も分からずポカンとしていたが、私はすぐに娘に覆いかぶさり、その上から主人が私たち 2 人に覆いかぶさり守ってくれた。布団に潜って身を守っていたため、幸い怪我もなく全員無事だった。

（2）発生直後

部屋の状況は、リビングで寝ていたが、寝ている目の前に大きな食器棚があるという危険な状況だった。食器類はいくつか落ちてきていたが、棚自体も倒れず間一髪というところだろう。

動こうとも思ったが強い揺れのせいで全く動けなかったので逃げられず揺れが止まるまで布団を被っていたが、体感としては 1 分強と相当長く感じた。揺れは止まったが何が起こるかわからず地震なので頭を守らなくてはと、床を這って炬燵まで行った。その時、主人に会社からの連絡が入り、急いで出勤してくれとのことだったので主人は車で会社に向かった。主人はエレベーター関係の仕事なのでほかのところで止まってはいけないからという止むを得ない状態だった。職場が三宮にあったため長田地区を通っていたのだが、ひどい熱気に包まれていたという。私と娘はしばらくして炬燵から出たが、電気、ガス、水道とライフラインがすべてストップしてしまっていたため部屋はかなり冷え切っていた。

２．その日からの生活

（1）初日

服を着込み、歩いて 10 分のところにある実家へ向かった。実家ではクリーニングの仕事を手伝っていて、毎朝実家に通っていたのでその出勤と同じような感覚だった。実家は私の父と母の 2 人暮らしだが、父は 1 週間の泊まり込みの仕事で家を空けていたので、母だけの状態だったが幸い無事だった。実家は古い一軒家だったためか屋根の瓦がすべて流れ落ちていた。家の土壁は崩れていたため土足で家に上がるしかない状態だった。補償金の手続きの関係で行政の人が視察に来たときには半壊という判断だった。周辺の道路もひどい状態で 4、5 軒の民家の石垣が崩れ落ちていて道路がふさがれていた。電気が通ったのは約 1 時間後で炬燵などの使用で暖の確保はできた。実家よりもマンションの方が被害は圧倒的に少なかったので母と母の妹夫婦も含めマンションの自宅に避難しに来ていた。マンション自体は新築だったこともあり全体的な被害は少なく、食器が割れた程度の被害のみだったので、1 日あれば片付いたので生活しづらいということはなかった。

（2）翌日以降

ガスはまだ復旧しておらず、カセットコンロで料理を作っていた。スーパーは開いていたが、パンやおにぎりなどすぐに食べられるものは入荷するとすぐに品切れ状態になっていたので買うことも大変だった。ライフラインも結局復旧したのは水道が数週間後、ガスが 1 か月から 2 か月だった。飲み水などは、支給されたものを並んでもらいに行ったわけではなく、親戚や知り合いの方々から車で送ってもらっていて、それを家の中でペットボトルに分けてストックしている状態だった。被災後初めてお風呂に入ることが出来たのは、1 週間後に明石に住んでいる弟のところへ行った時だった。その後は、お風呂屋さんを転々として並びお風呂に入っていた。

日常がすべて止まってしまったような感覚もあり、日々の生活の中でも今までの生活とは一変し大変な毎日を過ごした。2 歳の娘が通っていた保育所も一時通園出来ないようになったし、約 1 ヶ月の間は食べることと、片づけることの繰り返しだった。

当時は妊婦ということに気づいたころで、本当は動いてはいけない状態だったが、お腹も大きくなっておらず比較的動ける状態だったということと、じっとしている暇もなくそれどころではないという思いだったので周りと同じように忙しく動いていた。

自分のところが震度 5 程度で最も被害を受けたのだろう、と勝手な思い込みをしていたが、ラジオから情報を入手して被害の現状が分かった。さらに、テレビから映像として情報を得た時はかなりのショックを受けた。自分がよく知っていて身近なところだったがなぜか妙な距離感があって、他人事のように思われ、遠い場所のように感じられた。

３．復興して思うこと

（１）現状から思う

阪神淡路大震災で延焼火災の被害が大きかった新長田などを車で通ることをあるが、現在では区画整理事業の実行で道路が新しく広くなり、建物がきれいになって、まちが新しくなっていることで、すごい被害が出たんだと思うこともある。さらに、東灘の阪神高速道路の真下を通ると高速道路を支える柱の数本はほかのところと比べて建て直しによりきれいになっているので、震災時、柱が倒れたことを思い出す。大きく頑丈そうな柱なのに。その時、改めて地震の恐ろしさを思い知らされる。

職場の仲間 3 人と車で、この高速道路の下を通っていて、「この柱が倒れたんだ。」とふと話が出たときに少し嬉しい気持ちが生まれた。それは「風化させたくない」という気持ちなのだろう。

（２）子供と共に

1 月 17 日に被災してから、7 ヶ月後に長男が誕生した。

子供が 1 歳になれば、1 年が経ったことを実感する。5 歳になれば、5 年が経ったことを実感する。10 歳になれば、10 年経ったことを実感する。忘れてはならないし、忘れられない事実であること。子供と共に復興していく感覚で、記憶からは決して切り離せない出来事である。震災の年に、子供が生まれた親はみんな思っていることだと思う。

（３）復興の実感

当時テレビでは 10 年後の復興完了を目処に復興していこうと言われていた。毎日のように「早く 10 年後にならないかな。」ということや、「朝起きたら 10 年後になっていないかな。」などを思っていた。そう思っていた気持ちを今でも思い出すことがある。当時新聞は、神戸新聞を取って読んでいたが、発行している新聞会館がつぶれていてしまい、新聞は発行できなくなったが、どうにか再び発行させようと奮闘していた。

最初の頃は 1、2 枚の少ない枚数だったが徐々に増やすことに成功し、だんだん分厚さが出てきて通常の新聞として発行することが出来た。

当時新聞会館があったところの前には、現在のミント神戸があるが、その建物の一番上のところには、「神戸新聞」の 4 文字があり、仕事で三宮まで通っている今では出勤する度にその大きな 4 文字を目にしているが、見ると、復興にたどり着くまでのいろいろな人の苦労、人間の底力、今こうして普通に生活出来ている喜びを感じると同時に、しっかりと復興できたと実感している。

体験を聴いて考えたこと

阪神淡路大震災のように発生時間が早朝である場合には、就寝中という状況が多い。その場合は、突然地震が起こっても寝起きではものごとをうまく考えることが出来ないので、いかに素早く理解することが出来るかが最良の対処をすることに必要なことだと思った。

私自身、先日淡路島を中心として被害が出た、震度 4 の地震を明け方に経験したが、目が覚めてからすぐには何が起こっているのかが理解できずにいた。

日頃、震度 2 や 3 の地震が起こったと感じても、「あ、揺れてるな。」や「地震やわ。」などと冷静にすぐ確認できたし、揺れが小さいため、それほど焦ることもなかった。

その地震では、揺れと同時に携帯から警報が鳴ったので余計に状況を呑み込むことが難しく、日頃から防災を学んでいる立場でありながら、かなり焦ってしまったし、その場から動くことが出来ずに何も行動を起こすことが出来なかった。阪神淡路大震災のように、非常に揺れが強く、周りからモノが落ちてきてしまう場合はそれでは怪我してしまう可能性があるのでこれではいけないと思ったし、誰もが自分の家、自分の部屋ごとに地震が起こった時の最悪の場合を想定しておく必要性があると思った。

その点で今回お話を聴いたＫさんは、比較的早く 2 人確認し合えていたのでいいことだと思った。Ｋさんはリビングで布団を敷いて寝ていたそうだがその頭を向けている方向に食器棚があったと聴いて、Ｋさんも「今考えれば危なかったなあ。」と言っていたが、私も相当驚いたし「よく怪我しなかったなあ。」と思った。

授業でも寝室には物を置かないことが最善だと、先生が言っていたことがあるがまさにその通りだろう。阪神淡路大震災のように揺れがひどく立てないようだと、布団に被っておくこと、子供を守ることの二つが重要だと思った。咄嗟の判断が出来たＫさんはすごいと思ったし、気が動転していなかったのが怪我のなかった要因の一つでもあると思う。

その人のしている職業次第では、止むを得ず出勤しなければならない場合があって、それもしっかり受け入れないと思った。Ｋさんの旦那さんのエレベーター業であれば、会社からの指示で間違いなく出勤しなければならないが、会社からの連絡を受けてすぐに会社に送り出したＫさんもすごいと思った。

災害時に仕事に行かなければならないという状況になれば家族からの反発を受けてしまうことも多いと聞く。「この大変な状況で仕事を優先し、家族を置いて行ってしまうのか。」といった具合にである。確かに、この気持ちもわかるし、多くの人が言っていることであることも事実だ。だが、その仕方ない状況で寛容な心を持てるのも家族で災害を乗り越えるうえで非常に重要なことだと思った。

災害による甚大な被害の後では、ライフラインのストップが大きな問題で冬の時期や早朝では暖の確保ができないと厳しい。ライフラインの中で、最初に復旧するのが電気で今回のお話では約 1 時間後、最悪でもその日以内には復旧できるのでそれまでＫさんのように服を着込むなどの対処をする必要がある。

ガスは、料理を作る時に必要でないと困るが、カセットコンロを準備しておけば十分補えるのだと思った。ただ、今回では 1 か月から 2 か月で復旧するなど数か月と、長い期間使えない期間が続くのでガスボンベのストックは多く常備しておくことが適切だと思った。

水道は、数週間とガスよりは長くはないが不便である。これまでの学習内では、自衛隊が給水車で被災地まで出向き、被災者がそこまで行き決まった量の水を貰うという流れしかないと、いつの間にか考えを限定させてしまっていたので新しい発見があった。今回のＫさんのように被害のなかった他地域から車で直接送ってもらうという方法は、交通面で問題がなければ最良な方法だと思う。

被災後のお風呂は最低でも一週間は入れないと覚悟している方が良いと思った。電気はすぐに回復するとしても、水道が止まってしまっているのでどうしようもない。近くのお風呂屋さんか被害のない知り合いをあてにしなければならないことになるだろう。親しく比較的近くに住んでいた弟のところへ行ったＫさんの場合でも、被災後初めてお風呂に入るまで一週間かかっているため、しばらくは入れないものと思い、代わりに体をふくためのものを非常用持ち出し袋に入れて事前に用意しておく必要があると思った。

Ｋさんの住んでいたマンションとＫさんのお母さんが住んでいた一軒家に出た被害の大きさの差は顕著であると感じた。Ｋさんのいたマンションは新築だったためか建物自体の損害がないに等しいほどしかなく、割れてしまった皿などの片づけなどをするだけだったため、時間的には地震当日の内に作業が終わっている。

一方の一軒家では、屋根の瓦がすべて流れ落ち、家の中も足の踏み場がなく、靴を履いたままで上が

らなければならないほど、被害が大きかったそうだ。ここまで被害が拡大したのも、単に築年数を重ねているからというわけではない。耐震工事は全くしていなかったそうだ。一般に古い家でも、専門家に耐震診断を行ってもらい、傷んでいる箇所があれば直してもらう必要がある。そうすることで、家の新しいと古いは関係なくなり、丈夫な家が継続できる。

建てられてから何年も経つものと、建てられてすぐのものでは被害の大きさも全く違うと改めて思ったし、耐震面で不備がなかったかどうかという問題も問う必要があると思った。新築の家が 100 パーセント安全というわけではないが、新しくはないなと感じる家に住んでいる人は、耐震診断の必要性があると思った。

Kさんのように子供を出産するまでに数か月と時間があり、お腹ものふくらみもそこまであるわけではなかったとはいえ、妊婦さんが動き回ってしまう状況は危ないなと思った。ただ、自分だけゆっくりしている暇はないと周りの人と同じように動いていたKさんはすごい。「その時に周りで原付に乗れたのは私だけだったから。」と原付に乗って出来ることをしていたそうだ。災害時などの非常事態には自分の出来ることを探し、それを実行すること、自分の持っている武器を最大限に活用し、それで周りと協力すると災害復旧時に大きな強みになると思う。

「自分がよく知っている場所が近いけど遠い場所のように感じられ、妙な距離感が合った。」と話しされていたのが、印象的だった。ラジオで聞いただけでは分からない、映像での情報。自分たちの住んでいる地域以上の大きな被害、慣れ親しんだ場所、このようなことが重なりテレビで目から情報を得た時には受け入れられなくて、否定したいという気持ちが自分も被災者でありながら他人事のように感じられたのではないかと思う。

地震の被害からこれだけの日が過ぎている今でも、被災経験した人と街を通った時に当時の話が出るのはそれほど一人一人の中で大きな記憶として残っているからだろう。当時に比べて道路が広くなった、当時に比べて柱が新しくなった、ただこれだけの事実からでも感じることが出来、思い出すきっかけとなるのだと思った。それと同時に風化させたくないという意識は個人個人の中でしっかりと持てていることも大切だと思った。

「阪神淡路大震災の年に生まれたんだ。」1995 年生まれがほとんどの私たちの学年は様々な場面でこのような言葉を耳にしてきたし、特に現在環境防災科に通っている自分としては直接被災していない自分たちが、ここからどう伝えていくべきかと考えることも多い。被災していなくても 17 年間生きてきてとても他人事には思えないような感じがしていたし、この年に生まれたというだけで変な使命感みたいなものもあった。そんな自分たちと同時に、この年に生まれた子供がいる親もまた特別な気持ちがあるんだろうと思った。私たちとは違い、子供の成長とともに元通りになっていく街を重ね合わせ、自分の子供が誕生日を迎えると「つまり震災からもこれだけ経ったんだな。」と感じる具合に。私の知り合いにも復興を願う意味で、名前を付けられた友人もいるくらいだ。それほどこのような親子には、ただ被災したという事実だけでなくまた違った特別な気持ちもあるんだろうと思った。

10 年後を目標にしていた復興。それをどれだけ望んでいたかが分かった。毎日思っていたのは、いつもとは違う不便な生活や無残に壊れてしまった街を見てそう思っていたのだろう。そこまで不便さは感じなかったとは言っても、精神的に大変だったことは間違いないと思う。

現在ある「神戸新聞」の 4 文字は決してモニュメントなどといった目的で造られたものではないが、これを見て日々感じることは多いのが事実。2011 年 3 月に起こった東日本大震災の現場でも、地震を忘れないための石碑やモニュメントを造ろうという意見に対して、嫌なことは思い出したくない気持ちやとにかく忘れたい過去だという気持ちを持っている人もいる。それならば復興が完了してから建てることが望ましいと思う。復興してから建てる利点は、地震という悲劇からしっかりと復興できたという希望の持てる事実としていつまでも感じられることだ。この神戸新聞の文字、高速道路の柱、区画整理後の道路のように本来意図していないものでも当時の状況を知っている人なら復興の証になると思った。

今回お話を聴いたKさんとは会うことも多くお話をする機会も多いのだが、このようなお話をすることは初めてだった。環境防災科に入学して以来、阪神淡路大震災をはじめ東日本大震災、関東大震災など地震の実態を勉強してきたし、阪神淡路大震災を経験した専門家のお話をお聴きする機会もたくさん頂いてきたが、身近なKさんのお話はまた違った。被災経験は十人十色で失ったものや感じたことはひとりひとり違うと改めて感じることが出来た。被災された方が話すことを拒むのであれば別だが、このような貴重なお話を自ら聴いていくことはもっともっとしていく価値があるし聴いたことを同世代や下の世代を中心に語り継ぐ義務がある。これからも、環境防災科で学べることを大切に生かし、聴いたことを教訓として災害時の強みにしていく必要があると思った。

今回当時のことを必死に思い出し、快くお話を聴かせていただいたKさんに心から感謝したい。

「マッサラからオサガリへ。」

渡邊　ふぶき

１．真っ暗になった

私の祖母（母方）から聞いたお話。
当時祖母は、学園都市のアクティ高層団地に祖父と私の母の弟と３人で暮らしていた。祖父は、夜間タクシーの運転手に勤めていてこの日もいつものように、タクシーに乗って夜中から仕事へ出勤した。
この日は、東灘区から阪神高速に乗る予定で、祖父が阪神高速に乗ろうとしていた１分前に地震が発生したのだ。そして「今やから言えるけど。わしこれ、１分でもはよ乗っとったらたぶん死んどったやろなぁ。」と祖父は言う。
そんな危機一髪の状態だった祖父は、物が倒れていたり、ひびが入っていたりと道路状況が厳しい中で家にいる祖母と母の弟の２人を心配しながら、大慌ての大急ぎで飛んできたかのように帰宅した。体の大きい祖父はいつもなら階段なんて絶対使わない人なのに、エレベーターが止まっていたので階段で、７階まであがってきた。それはもう、２人を心配しすぎてしんどいということも忘れる勢いで…。そのことを後々聞いたとき、想像するにしきれずみんなで笑った。
家の中はたんすや食器棚が動いたり、物が落ちてきたりしたがなんとか祖母も母の弟も無事だった。地震発生とともに、停電したせいで家の中も、家の外も真っ暗になり「何も見えない状態で怖かった。」と祖母と母の弟２人は言った。

２．１時間半かけて

その頃、私は母のお腹の中。母と父（私も３年生までは）は、父の実家（西脇市）の近くに、家を建て住んでいた。そして、この震災が発生した時も父と母（私も）は、西脇市にいたので「うわっ！今めっちゃ揺れたな～。」と、揺れを体感したぐらいで、大きな物が倒れてきたり停電するなどのことはなかった。そんな母に、祖母は慌てて電話をかけ無事、安否確認することができた。
しかし、神戸でライフラインが使えない状態…。兵庫区には、祖母の兄妹や親せきがいるし心配と、焦りで「どないかせなあかん！」という気持ちになり母と父、祖父、祖母（父方の）は動き出した。ドラム缶に、たくさんの水をくみ、工事用の電気（父の実家は水道屋）と、近所の方が寄付してくださったたくさんの毛布などを大きなダンプに積み、１時間半かけて神戸へと向かった。
祖母の親せき等は、家の近くである学校のグラウンドにテントをはり避難していた。寒くて、暗くて水も電気もない状態だった祖母の親せき等は、母や父、祖父、祖母（父方の）が、たくさんの水に電気や毛布を１時間半もかけて届けにきてくれたことをすごく喜んでいたそうだ。今でも、とても感謝しているとのこと。

３．豚まん

１月 17 日、ちょうどこの日西神そごうは、定休日だった。一貫楼（西神そごう店）の店長を務めていた祖母は、翌日の 18 日西神そごうへと車で向かった。
店の中や商品は、ぐちゃぐちゃで大変な状態だったが、冷蔵庫の中にある材料は無事残っていた。その材料を使って祖母たちは、すぐに豚まんを作って売ることにした。豚まんを作る最中、水の使用量の制限があり、それが１番困ったとのこと。そんな厳しい状況の中で出来上がった豚まんは、すぐに売り切れた。その次の日からは応援の方々が来てくれ手伝ってくれたそうで、「あれは、本間助かったわ。」と祖母は言う。

４．４月まで…
そしてマッサラからオサガリへ。

祖母の甥が１月 21 日、阪神・淡路大震災の４日後に生まれた。
甥が生まれるその出産のときも、ライフラインはまだ復旧しているはずもなく、赤ちゃんを洗う産湯がないため、タオルで体や、顔を拭いただけ…。甥が生まれた病院（三宮にあるパルモア病院）では、

入院されている方々（小児や妊婦さんに、出産された方）へのお弁当が配られ、そのお弁当だけで栄養を摂っていたとのこと。
　そして、甥の退院が決まってやっと帰れる！でも甥の家は、兵庫区で被害がひどかったため、とても帰れる状態ではなかった。そこで、祖母は『落ち着くまで家おいで。』と言って、甥たちは落ち着くまで祖母の家で住むことになった。私の誕生予定日が７月で、祖母はもう、ベビーベッドや、ベビー服などのベビー用品はほとんど準備をしてくれていた。そのおかげで、災害時で大変な時で手に入りにくい甥に必要なものも補うことができた。「あんなんみんな買うとって、よかったでなあ！まぁ、あんたが使うときには、全部オサガリになってもたけどな（笑）」と祖母は微笑んだ。

考えたこと

　祖母の話を聞いて、私が改めて感じたことは、「協力ってすごいな。」ということ。もし、西脇の祖父たちの協力がなかったら？電気や毛布や水がないままの生活だったら？兵庫の親せき達は、もっと苦労していただろう。それに、私のために祖母がベビー用品を準備してくれていなかったら？祖母の甥は、ベビー用品の入手に大変困ったことだろう。
　西脇の祖父も祖母も、ご近所さんとは昔から親しくしていて、「一人に伝えると三人に広がる」というように、田舎ということもあってかすぐに、たくさんの毛布などが集まったようだ。防災対策として、よく挙げられる「ご近所の方と親しくしておく」とは、このことだなと、私は実際経験していないがこの話を聞いて実感することができた。くわえて私は、今までよりも一層自分も将来一人暮らしをした時や、結婚をしたとき、いや今現在のご近所さんとももっと親しくしようと思った。
　ご近所の方といっても年齢は、高齢者の方からお父さんお母さん世代に、小さな幼児までと様々で、それぞれにあった付き合い方があると思う。そんな様々な年齢の方と親しくなることを、簡単と感じる方もいればや、難しいと感じる方もいると、感じ方にもそれぞれあるだろう。そんな時に、自分が今までに経験してきたボランティアでの交流や、授業などで学んだ寄り添い方を参考にしながら徐々に、親しくなることができたらいいなと思っている。
　例えば、私が行かせていただいたボランティアで「セラピーｄｏｇ」という活動があった。これは、老人ホームを訪問し、犬を通して高齢者の方と交流していくというものだ。「犬は、お好きですか？」という私の質問から、「私の生まれたころはなぁ～…」という会話まで辿りつくことができる。このとき、小さなきっかけをつかむだけでここまで会話がはずむものなのだと感動した。このように、何か小さなきっかけをもとにして、お互いに親しくなることができればいいなと考えている。
　また、ワークショップやグループディスカッションのときなどでは、「ご近所の方と親しくしておく」ということがなぜ大事かを説明する機会があれば、私が聞いた実際の話や、実際に身近な人から聞いて自分が感じたことも例にしながら説明しようと思う。祖母から聞いたこの話では、物資の面でご近所の方と親しくしていて助かったという話だったが、他にもさまざまにある。
　私が、聞いた淡路島北淡町の語り部さん方のお話では、町全体が親しく、消防団の方はもちろんのこと「ここのおじいちゃんは、１階の端の部屋で寝ている」や「ここの…ちゃんは、何時まで学校やから今は家にいない」ということを町のほとんどの方が知っている状態であったりするのだ。なので、北淡町の方は、阪神・淡路大震災の時にだれがいないかなどの確認はすぐにできた。そのあとの救助活動にもすぐ、向かうことができたというお話を聞かせていただいた。このような語り部さんのお話も例にさせていただこうと思っている。
　私は、こうしてたくさんの方々からの体験談を聞かせていただく機会があったり、また、障害者の方や東北の高校生に、高齢者の方と交流をさせていただいてグループディスカッションや、ワークショップをする機会もあって本当に恵まれているなと思う。こんな環境で、過ごしている３年間を自分の過去として残すのではなく、もっとたくさんの方々に、伝え広げていきたいと思っている。また、あと１年もない中でもそのような機会に自分から積極的に飛び込んでいこうと考えている。
　私は、将来の夢は「保育士」だけど防災とつながっている部分は、たくさんあると思う。保育園の中での避難訓練や、防災教育、他にもさまざまあるだろう。そんなときに、自分の経験したことをしっかりと発揮できるようにしたい。そのために、まずは、自分が今するべきことをなしとげて、余裕があればボランティアなどの活動に取り組んでいこうと思う。
　今年の夏休みに、ネパールに行きたいと考えているが、もし行くことができたら現地で自分がしたいと思っていることが実行できるように今から努力しようと思う。

語り継ぐ

渡部　佑輔

１．震災が起きるまで

震災が起きるまでは、祖父母は神戸市東灘区に住んでいた。僕は生まれてから、何回かその時の家に行ったことがあるらしいが、あまり詳しくは覚えていない。

２．震災当日とガス爆発

震災当日の地震発生前、祖母は朝ごはんの用意をしていた。コンロを使っていたらしくお年寄りの家におにぎりを持っていった。揺れが収まってすぐはまだ電話が通じていたそうで、すぐに電話で親戚同士無事を確認できた。山側に家があり、地震による直接的な被害はコーヒーカップと置物が数点落下しただけだったが、トイレの水が使えなかったという。障子も破れたらしいが、その日のうちにすぐ直すことが出来た。復旧するまでは学校内の雪の上に作られたような場所をトイレに使っていたという。ＪＲから見て山側は電気が点いていたため、無事だった。祖父は、「南北で被害の差がある」と話していた。

その日、ガス爆発が起きるかもしれないと言われ地域の住民が全員避難した。祖父は、「震災のことよりガス爆発が起きるかもしれないと言われた時の方が記憶に残っている」と話していた。18 日の夜中に解散命令が出て一安心したという。

３．震災翌日

翌日、店に並んでラーメンを買出しに行った。1 時間程度並んで買えたという。その帰りに、車の交通整理を任されていた祖父は、手伝ってほしいと言われ交通整理をしていたそうだ。しかし、交通整理をしている間に自転車が盗られてしまったらしく、仕方なく徒歩で自宅まで帰ったという。

海の方まで様子を見に家族で出たが、「国道 43 号線からの景色に驚いた」と祖母は話していた、阪神高速が根こそぎ倒され、海側はまるでゴーストタウンのような雰囲気だった。

４．自宅での炊き出しと避難者の手助け

震災から 3 日経った時に、近隣住民から「炊き出しをしてほしい」と言われた。ここで、震災当日に親戚が持ってきてくれたカセットコンロやガスボンベが役立ったという。「これが無ければ、炊き出しなども出来ておらず状況が全く変わっていたと思う」と祖父。炊き出しを人数分配れるように避難者名簿を作成して、毎日自治会の代表として物資を貰いに市役所や学校へ行ったが、避難所に物資を送っているため自治会に回すだけの物資が無いと言われ、たくさんの避難所を回ってやっとの思いで物資を集めた。

130 人ほどの避難者に、おにぎりや豚汁を提供したそうだ。毎日同じおにぎりだけでは飽きてしまうと考え、おにぎりを焼いて出すなど一工夫して、避難者を飽きさせないようにした。祖母は、「食べ物が腐らない冬だから出来たことだ。夏だとすぐに食べ物が腐ってもっと大変なことになっていただろう」と話す。自分の準備が精一杯だったため、自分たちは炊き出しには行けなかったらしい。また、炊き出しをしていたころはカセットコンロより水の方が大切だったと話していた。

また、ガソリンが 1 人 10ℓに制限された。手回しで入れるタイプの給油方法だったため、力の弱いお年寄りは入れるのに苦労していた。そんな時にも、祖父が代わりにガソリンを入れてあげるなどしていた。

1 週間以上お風呂に入れない日が続いたという、離れたところにある温泉やフラワーパークに何回か行ったが、40 分以上待って 1 人 30 分程度しか入れて貰えなかったそうだ。祖母は、自衛隊が避難所に用意した大きなお風呂に一度だけ入ることが出来たそうだ。祖父は、交通整理やパトロールに追われ、1 週間以上入れなかったが、近隣住民から温泉に誘われた際は、我慢できずに行ったという。

家屋倒壊などの被害は少なかったが、ライフラインが復旧するのが遅かった。4 月 1 日ごろに水道が復旧し、その時点で炊き出しを終了することにした。1 軒あたり 500 円を負担してもらい、お別れ会を

7～80 人で開いた。

５．結婚式

震災が起こる前、1 月 18 日前後に両親は結婚式を予定していたそうだ。しかし、震災によって結婚式は中止せざるを得なくなった。震災翌日からは、結婚式が中止になったとの連絡を友人や親戚に行うことで、大変だったそうだ。
その後は、岸和田にある家へ避難したという。

６．避難所生活

身近にも避難所生活をしている人が居たそうだが、祖父母の家は無事だったため、避難所生活はしなかったという。家の柱が少しだけ傾いただけで、それもすぐに直せたそうだ。
「長田区は火事が多かったが、東灘区は火事が少なく、北の方は全体的に見てもまだ被害が小さい方だった」と話している。
罹災者証明も、全く役に立たなかったと話している。

７．震災を乗り越えた今

震災後は東灘区を離れ、篠山市で暮らしている。あれから余震が起きると、たまに震災のことを思い出すそうだ。「強い揺れが起きると、まずはドアを開ける。逃げ道が無くなると元も子もないからね。」と祖母は話す。やはり震災後の教訓は生かされているのだと感じた。
親戚が集まる時に、少しだけこの話が話題になることもある。僕は聞いてうなずくだけしか出来ないが、それでもその話をしっかりと聞いて、心に残ったこともある。普段何気なく聞いている話でも、一字一句聞き漏らさずに聞けば、何か考えされられることがあるのではないかと思いながら。

８．環境防災科と東日本大震災

震災から約 15 年が経過して、僕は環境防災科に入学した。様々な地震についての学習をしていく一方で、祖父は、「過去にこのような震災があったということを忘れないでほしい」と話していた。環境防災科に入学が決まり、中学校の卒業式を終えたその時に、東日本大震災が発生した。当時はニュースで被害の様子を見ていたが、何も言葉が出ないような状況だった。「何かしたい」と思っても今すぐに出来る訳でもないし、どうすることも出来なかった。
環境防災科に入って 1 か月経った 5 月、東日本大震災の支援ボランティアが 1 週間かけて開催されることになった。現地に着いてみると、テレビでは見なかったような凄まじい被害があった。船が田畑に乗り上げ、川には瓦礫が流れ、海沿いの工場はめちゃくちゃになっていた。泥かきを行い、被災者の話を聞き、廃校になった学校の体育館で寝泊まりをする生活が続いた。とても耐えられるような生活ではなかったが、被災者はこれを 1 か月以上も続けていたのだと思うと、たった 1 週間程度でつらいと思った自分がとても情けなくなった。
支援ボランティアが終わってからも、募金を行ったり、東日本大震災の支援の在り方について勉強をしたりと、様々な勉強を行ってきた。また、阪神・淡路大震災に関する行事に参加したりしたこともあった。どの行事でも、やはり話を聞く機会はあった。震災ボランティア以降、より積極的に耳を傾け、メモを取り、話を聞くようになった。そして、聞いた話をまとめ発表する機会も多くなった。地域の小学生に阪神・淡路大震災の被害の状況について発表する機会もあった。その時は、小学生にもわかるような文章で語ることが難しかった。しかし、班員と協力することで、なんとか成功に終わった。

９．感想

祖父母から震災体験を聞いて、炊き出しをしていたことを初めて知った。130 人程度をまとめることも大変だったと思うし、自分の家の用事のほかに被災者のことまで考えなければいけなかったと思うと、その当時はストレスや疲れがたまっていたと思う。避難訓練などで見られる炊き出しとは違って、実際に被災した地域での炊き出しとなると、やはり違うことが分かった。

ライフライン関係が使えないのは、とても不便だったと聞いた。自分がもしそのような状況に陥ったら、とても生きていくのが辛くなると思う。そんな中でも、震災時は自治会の近隣住民との支えあいがあってこそ乗り越えられたことだと考えた。お年寄りは1人暮らしが多く、話を聞いてあげることが大切だと学んだが、炊き出しなどを行うことで地域住民同士の交流が出来たのだと思う。

今では毎日入れているお風呂でも､震災時には1日も入れない日が何日も続くということが分かった。40分以上待って30分しか入れないと聞いて、驚いた。近くの温泉などを使っても、毎日行けるわけではなく、数回しか行くことが出来ない。

当たり前だと思っていることでも、何かきっかけが起きれば一気に生活が一変することがわかる。毎日普通に起きて、ご飯を食べて、学校に行き、お風呂に入り、家族と話し、ゆっくり眠るということが、震災などをきっかけに、毎日余震が起きるか不安な夜を過ごし、家族と離れ離れになっているかもしれない生活を送り・・・という生活が続く。

また、祖母が、「この地震が夏に起こっていたら状況は変わっていたかもしれない・・・」と言っていたが、その通りだと思った。冬でもとても寒く大変な状況だということは分かっているが、夏になると、食料の腐敗が早く、満足な食事が出来なかったと思う。地震を体験した人が語る言葉にはとても重みがあって、話を聞いているときにも一言一言漏らさずに聞くようにした。

自分が勉強したことは、震災時の被災状況を数字で表したものや、水道局やガス会社、警察署の方に震災当時の話を聞いて考えることが多かったが、初めて親戚に震災の話を聞き、新たに勉強することが出来た。

東日本大震災は3月に起こったが、もしこれが仮に8月という真夏に起こっていればどうなったのだろう。食料はすぐに腐敗し、瓦礫などの臭いも充満することになり、3月とはまた違った被害が出ていたかもしれない。さらに、東北では夏になると非常に暑くなることもあるため、汗をかき、避難所での密集した生活からストレスや熱中症などの病気に罹ることが起きるかもしれないと考えた。

災害は月、時間帯によって被害は変わることを改めて実感した。また、それによって支援方法も大きく異なることが分かった。例えば冬なら、毛布やタオルケット、温かい食料などといったものが挙げられるが、夏になるとこれらはほとんど意味をなさなくなる。つまり、支援する側にも考えるべきことがたくさんあるということだ。毛布やタオルケット、衣服といったものは使い古したものだと相手も困るだろう。支援をしているとは言え、ものを考えて送らないと避難所側も困る。実際にそういった話を聞いたことがあり、注意が必要だと考えた。

今回話を聞いて思ったことは、自分で調べることだけではなく、実際に話を聞くことも大切なことだと改めて分かった。東日本大震災の支援ボランティアに行った際に、実際に被災者から聞いた話もとても印象に残っていて、1本逃げる道を間違えていれば津波に飲み込まれていたかもしれないという話など、テレビで見たようなニュースとは違った側面から災害を捉えることが出来た気がした。

30年以内に起こると言われている、東海・東南海・南海地震では、被害を軽減するために様々な対策が行われているが、政府の行う対策だけではあまり意味がないと思う。地震を予知する研究や、地震が起こった際に新幹線や高速道路をどうするかという対策がなされているが、日頃からの住民の避難訓練や、非常持ち出し袋の準備なども重要になってくるのでないか。

これからも震災についてたくさん話を聞く機会が増えると思う、そんな中でも、きちんと話を聞き、震災について考えることが大切なのではないかと思った。

それまで、震災について何も知識の無かった僕が、環境防災科に入って学んだことは、決して無駄にはならないと思う。様々な人の体験談を聞き、レポートやパワーポイントにまとめ、現地に行って様子を確認するなど、たくさんの貴重な経験を積むことが出来た。この経験は一生の宝物にもなるし、これから社会に出て行く上でも非常に役に立つことばかりだと思った。それを決して無駄にはせず、後悔しないように暮らしていきたいと思った。

また、学んだことを生かし、次に来る災害に備えるために、避難経路を確認したり、非常持ち出し品を用意したり、避難訓練に積極的に参加したりしていきたいと思った。

１０．将来の夢

まだ、明確にこれと言った就きたい職業は決まっていないが、防災のことを教える立場の仕事に就きたいと考えている。せっかく環境防災科で学んだ知識を無駄にすることはせず、大学に進学して、さらに知識を広げていきたい。また、もう一度東北に赴き、被災地の現状を知ることも大切なのではないかと考えた。2年前に行った時とは違った風景や状況、被災者の話を聞くことが出来るかもしれない。一

度行っただけでは分からなかったようなことや、知らなかったことがあるかもしれない。機会があれば、是非赴きたいと思った。

阪神・淡路大震災を体験していない世代に生まれ、親から語り継いだ震災体験を、自分なりにまとめ、さらに次の世代に伝えていきたいと考えた。